
優しい月のトリニティクロス ~ My dear elder brother ~

F/L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい月のトリニテイクロス〜My dear elder brother

【Nコード】

N2162L

【作者名】

F/L

【あらすじ】

宇宙より飛来した超常なる力に人々は魔法と名付けた。

今や魔法は生活の一部となって人々の身近なものとして側にある。

日本を代表する魔法師の家系の名を冠する二人の兄妹、記録上は実の兄妹の二人。しかし、二人は全くの他人……………

始めはぎこちなかった関係も、今ではすっかり仲の良い兄妹

というには余りに近く、その有り様はまるで恋人の様だった。

そんな二人が中学卒業となった頃、ある組織が再び動き出し、その

ことが兄たる少年に、止まった歯車が再び回り始めたことを告げる。
動き始めた運命の歯車は、やがて二人に大きな変化をもたらす……
……

『全ては大切な者のために……』

様々な思惑と想いが交差する、未来の魔法世界の誓いと願いの物語
三つの運命の交差が、新たな未来を作り出す。

諸注意あり、一話の前書きは必ず読んで下さい

〈初登校編〉 1・早起きは天敵（前書き）

諸注意、佐島勤さんの『魔法科高校の劣等生』に酷似していると指摘を受けますが、真似しているつもりは有りません。

時間軸を伏線なしに、一直線に表せば、きっとそのように言われなかった筈だと自分では思っています。

確かに、今のままだとかかなり似通っている部分はありますが、物語が進んで行けば、今までの見方が変わると思えます。

兎に角、その判断は完結してからして下さい。

もし、それが気に食わなければ読まないで下さい。僕も、無駄にパクリだ何だと言われたくありませんので。

佐島勤さんからの意見も感想に書いてあるので、そちらをご確認下さい。

この作品には、実在する声優さんの名前をキャラに使ってたりしますが、それらは作者が勝手に使っているだけなので、実在する声優さんたちとは一切関係有りません。

ストーリーを読み進めて行くと、BGMなるものを記載していきます。

もし、聴くことが出来れば、そのタイミングで聴いて頂けると、丁度シーンに合わせられるかと思えます。

本作の傾向・作家本人の好尚として、ルビを大量にいれておりますので、携帯からの説覧者の方には申し訳ありませんが、少々見づらい作品に成っているかも知れません。

それと、縦書きで読んだ方が読みやすい仕様になっている（筈？）ので、試して見て下さい。

本作の更新頻度・進行速度は亀です。完結を気長にお待ち頂けることを願います。

二章完結時点でのストーリー全体の進行状況は全体の約2/7く

らいます。

かといって、7章になるとも限りません。これは飽くまでも、ストーリーとしての進行状況です。

折角学園ものになっているので、学校行事も取り入れて楽しくしていければと思っております。

長い前書きで、申し訳ありません。

それでは、本編をどうぞ。

初登校編 1 早起きは天敵

「お兄様」

長い髪の少女が、ドアを控えめにコンッコンッコンッとプライベ
ートノックした後、控えめな声でドアの向こう側へと問い掛ける。
しかし、中からの返事はない。

先ほどと同じ様に、今度は少し強め（とは言ってもまだまだ控え
め）にノックをしてから、

「お兄様〜！ 小夜こよです！ 入りますよ？」

声を掛けてから、中からの返事を待たずに中へと入る。

「はあ〜」

そして、ベットを見て溜息を一つつく。

ベットの上には、誰も居ない。

「はあ〜、いつものこととは言え、お兄様ももう少し抜けていて下
さらないかしら。そうしたら、私わたくしが起こして差し上げられますの
に！」

つと、いつも規則正しい生活を送る真面目な兄に対して理不尽な
ことをもらす小夜。

所詮いつものこと、兄が既に起きているだろうことも、それを分
かって居ながらわざわざ起こしにくるということも、最早日課だ。

では何故、起きているであろう兄の部屋まで、毎日この妹が通い
続けるのか？ それは、一重に『寝過よごすお兄様優しくを起こした
い！』つという、偏った兄想いの発想からだった。

だが、小夜の想いも虚しく、三年以上も前から抱き続けるこの想
いは今だかつて、ただの一度も果たされたことがない。

一階に降りて台所へと立つ小夜。

台所のテーブルの上には、後は火を通すだけと言うところまで、
進められた状態の料理が並べてある。

それを確認して、又もや少々残念な気分になる。

(こちらもいつも通りですわね……)

いつものところに引つ掛けてあるエプロンを掛け、リボンで髪を結わえて早速調理にかかる。

とは言っても後は本当に火を通すだけなので、『兄を甲斐甲斐しくお世話したい!』この妹にしてみれば物足りなさを感じずにはいられない。

だが、かといって自分の我が儘のために兄の生活を掻き乱すのも本意ではないので、仕方なしに甘んじている。

因みに彼女のモットーは、『お兄様の行動に口を挟むなど、妹としては言語道断! お兄様の行いの全てを補佐することこそ、妹の本分!』つとこれまた非常に偏ったものであった。

朝食と一緒に昼食用の弁当も用意する。

勿論、その分も兄が下拵えを終えているので、加熱して詰めるだけで完了となる。

弁当を詰め終えて、朝食を食卓へと並べている間に、庭の方から人の気配を感じた。

予め準備してあるスポーツタオルとコップに水を注いで、縁側へと駆け寄る。

「おはようございます。お帰りなさいませ、お兄様」

「おはよう。小夜」

早朝ランニングから帰って、庭でクールダウンのストレッチをしている兄と挨拶を交わす。

「タオルをどうぞ。それと、お水です」

「ああ、ありがとう」

一通りストレッチを終えたタイミングで兄にタオルとコップを差し出す。

そのときに向けられる僅かな微笑みが、彼女の朝の最大の楽しみだ。

「それじゃシャワー浴びてくるよ」

「では、お着替えは制服を用意しておきますね」

「ありがとう。それじゃあ、お願いするね」

小夜は、はいつと快い返事を返す。

コップの水を一気に飲み干してから、空のコップを妹へと返し、兄は縁側から家の中へ入り直接風呂場へと向かった。

小夜は、兄から受け取ったコップの縁の唇の跡へと、自分の唇を軽く当てた。

いつものこと（兄妹でそれはどうなのか？ という考えは、この妹にはない）にも関わらず、自分の行為への恥じらいと、例え間接でも兄とキスできたという喜びで、頬を朱に染める小夜なのであった。

2・初登校は、お約束！？

今日は四月一日、高校の入学式の日。

朝食を食べ終えた二人は、仲良く登校する。

(はあく、やつぱり、いつもにも増して見られてるよな)

色々と心当たりが有り過ぎて少々滅入りながらも、ポーカーフェイスを崩さない兄・凍夜^{とつや}。

(やはり皆様こちら見てますわっ！！ お兄様が国立に入られたのですもの、それも無理からぬことです！！！)

こちらは視線の意味をかなり見当違いに解釈し、いつもなら一人で登校しなければならぬ通学路も、今日からは愛する兄と一緒に居られるとあって、傍目から見てもウキウキとした表情で登校する妹・小夜^{さよ}。

二人の登校シーンは、どこからどうみても兄妹のそれには相応しくないものだった。

凍夜の左に小夜が並び、凍夜の左腕を取り、小夜がその腕を抱きかかえるようにして絡めて、凍夜の左肩に頭を寄せて歩く様は恋人同士にしか見えない。

しかも、敢えて言うのなら、こんな白昼堂々往来の真つただ中に行くのだから、バカッブルと言っても差し支えないだろう。

しかし、始めはただ呆気にと取られていた面々も、次にその二人の顔を見比べて、驚きや懐疑的な視線に変わっていく。

始めに見るのは、やはり人間は美しいものが目に付きやすいのだろう、妹の小夜へとその視線を集中させる。

小夜に目を向けては皆見惚れてしまう。

健康的な印象を失わないのにとても白い肌、小顔で綺麗にバランスのとれた顔、その顔立ちに良く似合い、見た目で染めたものではないと分かる少し赤みがかった茶色の長い髪。

思わず同姓であっても、見惚れてしまうその容姿は紛う方無く、

美少女』と表現できるものだった。

そして、その美少女がこれほどにまで歡喜の表情を露わさせる相手はどれほどのものか？ と隣をみれば、背丈は180程度あり、体格は華奢ではなく、ガツリシともいえないまでも少女を傍らに寄せて歩いて違和感がないほどにはいい、だが、顔の方はと言えば、正直に『悪くわない』つという程度だ。

彼単品で見るとそれほど悪いという印象は受けないほどには整っている。

彼のかける眼鏡が明らかに特殊レンズで目は外からは見えないようになっている点から、少々暗い印象はあるかも知れないが、それでも、顔の善し悪しの表現するなら、下は『中の中』から上は『上の下』というくらいの表現をしていいだろう。

だが、隣に並ぶ相手が誰もが認める美少女たる小夜であるがために、彼の印象はいつも冴えないや地味というものになり、小夜への関心が強いものからは、ブ男つという扱いまで受けてしまうのだった。

（慣れているとはいっても、この視線はな……なんか、いつもよりキツイ気がするし、校舎も近くなって来たから）

ポーカーフェイスはそのままに、内心では視線に冷や汗をかきつつ思考し、

『学校が近くなって来たから、そろそろ離しなさい』

その声を出そうと横の小夜に視線を向ける。

だが、そこには歩き始めた頃よりも、更に嬉々とした表情を浮かべた小夜があり、何も言えなくなってしまった。

結局、突き刺す ような、というにはあまりにも厳しい 視線に耐える凍夜であった。

色々な状況の所為でそう言った視線に鈍感になってしまった小夜は、兄の内心も知らず、『お兄様と一緒にの登校』を満喫した。

3・裏工作は準備万端？

これから二人が通う様になるのは国立魔法師育成高等学校常盤校舎（通称：十二校）である。

現代では、就学前教育からの魔法師教育機関（以降、略して魔法学校）が確立されているため、国立以外の魔法学校も数多くあるが、国立は魔法学校の発祥であり、その第一号が、現在の国立魔法師育成高等学校斎鳳校舎（通称：一校）となっている。

国立魔法師育成高等学校は、一昔前までは国立魔法師育成第一高等学校という名称だったが、制度の変更により、現在の様な国立魔法師育成高等学校 校舎という名称に変わった。

その名残として、建てられた順番に応じて通称が付けられて、生徒間・教師間の口頭でのやり取りの場合は、主にこの通称を使われている。

国立は（学校側の）『伝統とエリート意識』が強く、かなりハードルも高い。

故に、凍夜への視線の意味は、実のところ小夜の丸っきりの勘違いというわけでもない。

しかしそうは言っても、制服や二人の歩き姿に気を取られるのは一時のことで、それ以降は先の通りだ。

因みに、国立の制服はブレザーで、国立というイメージにはそぐわない程に女子に人気があったりするくらい、いいデザインになっているので、やたらと目につきやすい。

無知な者 国立魔法科は有名なので、知らない方が今は異常と言っているレベル から見れば私立の生徒と思われることもある。何故この制服になったのかは、お金と権力の事情おとこなと言っことで、その理由を知るのはいくらかの人間だけで、それも昔の話のため、今ではその当事者もいなくなり、その真実は後を継ぐ者に資料として残っているのみらしい、が真実は定かではない。

だが、生徒にしてみればそんな事情は関係ないことで、変更当時から生徒には強い指示を受けているという。

数年毎にマイナーチェンジは繰り返してはいるが、ベースは当時のままと変わっていないものの、未だ持って生徒からの制服変更の希望がないことからその人気の程が伺える。

「着きましたねっ！」

小夜が笑顔満開で、凍夜へと顔を向ける。

「クラス見てくるから、ここで待ってて」

「はいっ！ お兄様！！」

小夜は絡めた腕をすんなり離し、新入生の群がる大型のホロウインドウへと進んでいく凍夜を見送った。

本来、小夜の性格ならば、ここで一悶着あるところなのだが、凍夜と離れた小夜の顔に変わりはなく、終始笑顔のままだ。

凍夜は、人混みの最後列のところまで来て足を止め、左腕を折り曲げて腕時計型の携帯端末の画面をホロウインドウへ向けた。

「紫司凍夜、ダウンロード」

声を発して、自動で開いた携帯のホロウインドウに、受信完了のメッセージを確認したら、踵を返して小夜のところまで戻っていく。その間で、携帯のホロウインドウを操作して落としたデータを呼び出して自分のクラスを確認する。

「何組ですか？」

「A組だ。小夜は、友達のは確認しなくていいの？」

「ええ。大丈夫です。行きましょう」

今度は、腕を組むこともなく、しかしピッタリと寄り添うようにして凍夜に並んで校舎へと入って行った。

本来、自分のクラスを確認するだけなら、携帯さえ持っていればこんなものだ。

携帯には、自分のクラスと出席番号、クラスの地図が添付されているため、このデータさえあればこと足りる。

しかし、大型のホロウインドウの前からはなかなか人だかりが消えることはない。

皆が残る理由は自分以外の確認に他ならない。

落としたデータに表示されるのは自身のものだけで、取れるのは自分のデータだけという仕組みになっていて、他人のを落とすことは出来ないため、友人やその他気になる相手のクラスはこの広いホロウインドウから探し出さなければならない。

孤立無援で一人で受験（合格）したのならば、先ほどの凍夜と同じ対応となるが、ここに受けにくるものの殆どが同じ中学出身のため、こうして人だかりができて、同じクラスになったことを喜び、別れたことを励まし合ったりと賑にぎわいを見せているというわけだ。

向こう一年を一緒に過ごせるかどうかというイベント（実際には今決まったわけではないが）なのだ、盛り上がるのは当然の反応だ。しかし、あの二人は　というより、小夜に全く動じた様子はないかった。

更に、そればかりかデータを受け取ったのは凍夜だけなのだ、本来この時点ではまだ小夜のクラスはわからないはずなのである。

勿論それには、理由があった。

小夜が動じることのない、凍夜が自分のクラスだけを確認した理由。

実はこの二人のクラスが同じになるというのは確定したことだったのだ。

世間的に言うところの家庭の事情というもののためだ。

つまりこれは、小夜が学校に乗り込み教師陣を説得した成果ではない。

小夜ならやりかねない感は否めないが、流石に今回の件は違う。

家庭の事情というよりは、（本人にしてみれば問題ないのだが）凍夜が問題を抱えているため、妹である小夜がそれを補佐できるよ
うにという、飽くまでも真正銘『学校側の配慮』というものだった。

4・嵐の少女

校内を歩くとき通常ならば外靴のままだ、しかしこの後は、軽いホムルームHRをやってから、始業式が行われる体育館へ移動となるため、下駄箱で予め室内用運動靴へと履き替えておく必要がある。

そのために二人がA組の下駄箱へと向かうと、丁度靴を履き替えた女生徒が、二人に気づき挨拶の言葉を掛けて踵を返した。

が、女生徒は数歩進んだものの、何故かその場で立ち止まった。

凍夜と小夜も挨拶を返し、学校指定の鞆の中から運動靴を取出す。二人の意識は靴の履き替えに向いているため、立ち止まった女生徒には気付いていなかった。

下駄箱は一クラス縦六列・横五列のロッカーが、隣のクラスと並べて置いてある。

列びは、左上から下に出席番号（男女混合名前の）順となっているため、二人のロッカーは上下に並ぶことになる。

余談ではあるが、革靴をロッカーに入れるときに、二人同時に入れようとして体が密着したのは、小夜が故意にタイミングをズラさなかつたためだ。

「紫司さん？」

「はい？」

靴をしまったところで、先ほどの女生徒が声を掛けてきた。

名字にさん付けでの呼び方はどちらにとっても馴染みのものであったため、二人とも自然に返事が出してしまう。

女生徒の方へと顔を向けると、凍夜にとって見覚えのある顔があった。

「ああっ！！ 中島さん！」

「ヤッホー！！ やーっぱ、シツカちゃんだったんだ。まさか、こんなところで会うなんて思ってもなかったから、危うく気づかないと

「ころだつたよ」

「シヅカちゃんは、やめて下さいよ。恥ずかしいんですから」

「まあまあ、いいじゃないの？ お互いこんな辺境の地（国立魔法学校）で、数少ない知り合いに巡り会えたんだしさあ。」

「って！ アレッ？ そういえば、なんでここにいんの？ ってか、女連れっ！！ 然もちよーカワイイし！！」

「……がつくし……ああ、あの硬派なシヅカちゃんも美少女の誘惑には勝てなかったのね。これで、あたしも恋愛負け組なのね………よよよっ」

朝からあまりにもテンションが高い中島という凍夜の知り合いの女生徒。矢継ぎ早の質問かと思いきや答える時間も与えずに、芝居がかつた台詞に嘘泣きまでを繰り出してきた。

凍夜は肩をがっくり落とし、疲れた表情を露骨に表している。

「中島さんは相変わらず、朝から元気ですね……先ほどは、随分真つ当な挨拶だつたんで分かりませんでしたよ」

シヅカちゃん呼ばわりの仕返しとばかりに凍夜も言い返す。

「何よっそれ！ もうっ！！ アンタは相変わらず、口調は丁寧なのに、言ってることは辛辣しんせつなのよ。『年上』だったら、もうちょつと年長者としての貫禄くわんりくってものを見せらんないの？」

流石にあたしだって、初対面の相手にいきなりフレンドリーにはいかないっつての」

「それなら先ず『その年長者』を敬う態度というのを示して頂かないとね」

「なにを

二人の会話が続く傍ら、こんな二人のやり取りを見ていた小夜には、色々な想いが込み上げていた。

『これほどまでに表情豊かなお兄様を知らない

これほどまでに饒舌なお兄様を知らない

学友と語らうお兄様を知らない

学校でのお兄様を知らない

知らない

知らない

知らない

知らない

知らない……

ここには、私の知らないお兄様がいる……

違う！

お兄様のことを私が知らないだけだ

私を知るのは、家の中のお兄様だけ

私を知るのは、『兄』としてのお兄様だけ

それ以外でのお兄様を想像したことがない

家にいる以外

自分の隣にいる以外のお兄様を私は全く想像し

たことがない

お兄様には、お兄様の生活があるという、こんな当たり前のこと
さえ、私は失念していた？

それは、つまり 』

ある結論が頭をよぎり旋律する。

『お兄様』と呼び慕っている自分、でもそれがもし『ある考え』
を前提においてのものだったならっと。

それはつまり“あの人たち”同じということだ。

『違う違う違う違う……』

私は違う。私はちゃんと想ってる！

あの人たちとは違う、私は 』

私は 』

何気ないはずの光景だった。

兄が友達と話しをしている。

ただそれだけのはずの光景。

それなのに、小夜にはその光景を何の気なしに見届けることが出
来なかった。そんなことも出来ない自分に落胆した。下唇を噛みし

め思わず涙すら零しそうになる。

しかし、そんな情けない自分に怒りが込み上げてきた。

『何をしているの私は？』

泣こうとしている？　こんなくだらないことで？

いくらなんでも甘すぎる！！

泣きたいのは私じゃない！！　辛いのは私じゃない！！

辛いのはいつもあの人、それでも笑い続けているのもあの人
そんな人の前で泣いていい程、私は傷ついてなんかいやしない』

怒りが決心へと変わる。

今まで自分のが兄をどう捉えていたか、そんなことに対する後悔
や懺悔なんてものは何の意味もなさない、ただ自分が満足したいだ
けだ。そんな自己満足に費やしている時間などない。

ならどうするのか？

簡単だ。

歩み寄ればいい。今度こそ間違わないように。

嘗てあの人がかうかうしてくれたように。

(今度こそ、私は“お兄様の妹”になるんだ！！)

「お・に・い・さ・ま。私のことはお忘れですか？」

小夜はわざと猫なで声を出して二人の会話に割り込む。先ほどの
葛藤を微塵も感じさせない自然な笑顔がそこにはあった。

「わっ！！？　何？　あんたっ！！　そういう趣味？」

やだ、ちょっとそれ引くんですけど……」

そう言っつて、凍夜に軽蔑の視線を送り、後ずさる中島。

「違いますよっ！！！！　妹ですよ！！　妹！！

はあ……小夜、こついうときにそういう悪ふざけはよしなさい」

「はい。ごめんなさい。でも、お兄様も悪いのですよ。

いつまで経つても、紹介して下さらないのですから」

小夜に追い打ちを掛けられどつと疲れた凍夜、小夜はクスクスと笑いながら悪びれた様子なく言葉を返す。

「ごめんね、それは反省するよ」

ここで漸く凍夜から紹介が入った。

名前は、中島沙樹^{なかしまさき}。中学3年時のクラスメイトの一人で、凍夜を含む幾人かのグループで固まったときの真面目なこと以外での中心人物という紹介だった。

「っで、こっちはいも」

「ああ、いいわよ知ってるから」

沙樹はこともなげにさらっと言つてのけた。

「紫司小夜さん。近隣中高じゃ知らない方がおかしいわよ。」

成績優秀・容姿端麗の美少女が団体競技のキューブで、一人の力だけで全国大会にまで出場を果たしたつてだけでも十分なのに、その上あの『紫司家』のご令嬢でしょ？ そんなの常識よ、常識」

そんなことも知らないの〜っという視線を凍夜に向ける。

「そんなっ、アレはチームのみんなの協力があってこそです。私人の力じゃ、とても全国までには行けませんわ」

「そんなことありませんよ。私も幾度か試合を拝見させて頂いたことがありますがよく分かります。それに、何度見ても貴女の動きに魅入られてしまいました」

凍夜のと看とは打つて変わつてとても礼儀正しい態度になつていゝる沙樹。

一応、こちらが通常状態の彼女だといふのを知つていたので、わざわざそのことに突つ込んだりはしないが、

「はあ、わざわざ知つて僕をからかっていたわけですか？」

流石に小言の一つも言つて置かねば気が済まない。

「ええ、もちろん！！」

沙樹はにこやかに笑つて応えた。

この先もこの沙樹と同じ学校生活を送るのかと思うと、ちょっと(かなり)大変そうだとも思ひ、それでも退屈はしないどころつとい

う確信があった。

「そろそろ立ち話もなんですから、教室へ向かいませんか？」
小夜の意見に同意して、三人は教室へと向かって行った。

5・トークタイム1

普通学科棟は三階建ての校舎で、一年生の教室はその三階にあり、二年生は二階で三年生は一階という極普通の区分がしかれている。

三階の教室に着いた三人は、探すことなく自分の机へとつき鞆をおろす。机の並びが下駄箱と同じ並びのためだ。

下駄箱の上側を教卓側として、それぞれ席に着く。

窓側から二列目の前から二番目の席に小夜、その後ろに凍夜と当然並び、そして沙樹は小夜の左隣と随分近い席だった。

現時刻は7:50分、始業時間（シフトホームルーム）（SHR）が8:15分からの
でそれほど早い時間という訳ではない筈なのだが、教室の中にはあまり人がいない状態だった。

今いるのは、二人以上で固まっている組が三組だけで、一人でいる者はいなかった。

大半の生徒は、この始まるまでの時間をギリギリまで、外で仲のいい友人たちと過ごしている。

今のうちに教室にいるのは、はっきり言って友達のいない単独の者か、運良く親しい者と一緒になれた者たちか、という極めて二分する勢力しかない。

「小夜さん。席隣ですね。宜しくお願ひします」

「はい。こちらこそ宜しくお願ひいたしますわ。沙樹さん」

席に着いて改めて挨拶を交わす二人。

教室に入るまでの間で、名前の呼び方についての恒例行事（？）を済ませて、二人はお互いを名前で呼んでいる。

小夜のさん付けは一見してまだまだ堅い関係ようにも思えるが、小夜を知るものに実はそうでもない、というよりは驚愕に値する。

小夜は基本的に相手を呼ぶときは、家族以外は様付けなのだ。初見で相手をさん付けするというのは、本来ではあり得ない。

沙樹は、凍夜の友人ということ（が、大部分の理由）と当人（は、

呼び捨てでも構わないと言っていたが)の希望でいきなりそう呼ぶようになった。

小夜の通常に置ける呼び方の変化は、”名字に様”づけに始まり、良く一緒にいる”相手なら名前”に様づけになり、かなり親しくなつて初めて”名前にさん”づけとなる。

本来そこまでに至るのに掛かる時間はかなりのものとなるはずなのだが、それをなくしてしまう当たり、全幅の信頼を寄せる凍夜が友人と呼ぶほどの相手なら、という小夜の凍夜に対する信用の程を覗^{つかが}わせる。

今のところ小夜がさんづけで呼ぶような相手は数える程しかない。

そして、呼び捨てにするような相手はいない。小夜としては、もし呼び捨てにするならそれは“敵対するもの”だけだろうと思っ

ている。
因みに、これは女子が相手の場合の話で、男子の場合は、”名字に様”から”名字にさん”づけとなりはするが、名前で呼ぶ場合は(そのときは”さん”や”様”だったりする)、特殊な状況のときではないため、それ以外の場合は名前で呼ぶことすらない。

沙樹に至つても、小夜ほどではないにしろ似たり寄つたりである。
『中島』という家も、紫司とは比べるべくもないし、有名という程知れ渡っているわけではないが、魔法界では無名の家系という訳ではないので、それなりの教育は受けて育つた。

凍夜に対する態度は、彼女の交友関係でも特殊な部類に入り、”無意識的に素になつてしまふ”のだった。

そして、そのことを当人は自覚している上に、凍夜もそのことに気づいている。だろう、と言う予測ではなく確定で。こともわかつているが、出会ってから今までなんの変化もないところを顧^{かえり}みるに脈なしなのだろうと思つている。

下駄箱のときの沙樹の言葉は、あときは完全に”冗談”ではあるが、強^{あなが}ち”嘘”というわけではないのだった。

席に着いたとてべつにやることはないので、沙樹は椅子の向きを変えずに座る向きを小夜の方へと向けて、凍夜へと会話を振る。

「ねえ、紫司さん。マジな話、どうしてここにいるの？」

沙樹が凍夜と呼ぶときには三つのパターンがある。

一つは「シツカちゃん」、これは完全にカラカウとき専用の呼び方で、これが入った場合は沙樹がイジル気満々のときだ。

次に「アント」、凍夜に対しては主に突っ込み用で、咄嗟のときに良く出る。仲のいい友達には、これで呼ぶ場合もある。

最後に「紫司さん」、これが彼女の凍夜に対する基本的な呼び方。彼女の根幹が“良家の息女”のため、どれだけ親しくとも年上に対するこの呼び方は、普通に会話するとき（無意識でも）崩さないのだった。

下での（自分で振って、自分で）流した話題をもう一度上げてきた。

凍夜は、力ない感じで自嘲気味に嗤う。

「あははは……はあ、なんと言えはいいのか、そうですね……」

凍夜は歯切れが悪い口ぶりで言葉を濁し、少ししてから答えた。

「敢えて言うなら、『家庭の事情』といますか……なんと言うか、まあそんな感じですよ。それに、それを言うなら中島さんも同じですよっ？」

「っ！……！家庭の事情ね……まあ、そうよだね……」

力なく答えた凍夜の言葉に、沙樹は一瞬ハツとした表情を浮かべて、少し重い表情を残しつつ言葉を綴った。

沙樹が凍夜がここにいることを疑問に思うのと同様に、その逆もあって然るべきなのだが沙樹は完全に失念していた。

下駄箱で挨拶を交わしたときの沙樹は“ある懸念”に捕らわれていた。でなければ本来の彼女ならいくら凍夜の存在を全く意識しない場所にしようと、凍夜にあれほど素っ気ない挨拶をするわけはないのだ。

気に病むところへいきなりの（嬉しい）ハプニングだ、思考の二・

三個に抜けがあつても仕方ないと言える。

そして、凍夜に返された言葉で先ほどまで忘れていた懸念が蘇ってきた。

「はあ〜……お互い、家柄には苦勞させられるわね（苦笑）

まあ、うち見たいなところと“紫司”さんのところを比べちゃ、比べるだけ失礼だろうけどさ」

「そんなことありませんよ。それに、僕は“紫司”の家に取つてただの『お飾り』でしかな」

『いですから』と続く筈の言葉が遮られた。

「お兄様っ！！！」

二人の会話を椅子ごと凍夜の方へ向けて聞いていた小夜が、凍夜の言葉が言い終わる間もなく大声を上げたのだ。

その表情は今にも泣き出してしまいそうなほどの憂い顔^{うれ}だった。

凍夜は優しく微笑みながら左手を伸ばして小夜の頬にそつと手を当てる。

「大丈夫だよ。僕は大丈夫だから、落ち着いて」

頬へと当てていた手を今度は頭へと持つて行き優しく撫でた。

「ごめんね、変なこと言つて」

暫しの時間が経つて、その間ゆっくり何度も頭を撫でられた小夜はどうにか落ち着きを取り戻した。

「申し訳ございません。いきなり取り乱してしまいました」

と言つて強い反省の意を表した。

それを見ていた周囲の反応が騒がしくなる。

大声に驚いて振り向いた先には、今にも泣きそうな美少女。

そして、それを宥める男子生徒という構図に男女でそれぞれ反応していた。

男子

『今のあの娘の表情、目茶苦茶かわいくねえ！！！！？　なんかもうあの表情見たら、命掛けで守ってやりたくなるよ』

『さっきのもいいけど、俺は今のほんのり照れてる顔がいいな』

e t c .

女子

『きゃ〜！　いいな〜私もあんな彼氏は欲しいな〜』

『ホント、女の娘が取り乱したときに、ちゃんとフォローできるつてのはポイント高いわよね』

『こつからじゃ顔見えないから、こつち向いてくんないかなあ』

e t c .

一応声は潜められてはいるのだが、人数が少ないだけに丸聞こえだった。

小夜は周囲の視線に恥ずかしくなり、ほんのり顔を赤らめて俯き加減で凍夜の机の上に視線を泳がせている。因みに、小夜が恥ずかしいのは、大声を出して注目を浴びてしまったことであり、凍夜に宥められたことには嬉しさを感じても、恥ずかしさは微塵も感じていなかった。

そして、それを横から見ていた沙樹は面食らっていた。

それはそうだろう、何しろいきなり目の前なので、恋人もかくやとういうような睦み合いが繰り広げられ、それが意中の相手とその妹だというのだ。平静を保っていられようはずもない。

三人は暫し会話もなく沈黙していた。

「中島さん？」

「はっひいっ！？」

呆気に取られすぎてキョトンとして表情で固まっているところへ、声を掛けられ思わずに裏返ってしまい恥ずかしくて俯く。

「ところで、中島さんは魔法の勉強はどうしてたんですか？」

唐突な話題の振り方だ。

凍夜も傍目からは分からないが、かなり動揺していて、そのために出た何の脈絡のない必死の話題むちやふり転換だった。

流石に今の行動を他人に見られて、そのことを囁かれているのだから恥ずかしくないわけではないのだ。

普段から”こういう視線”への耐性があるというのと、あまり顔には出ない(というよりも、こういうときこそ凍夜はポーカーフェイスになる)ため、周囲から毅然としているという印象を受けるのだが、内心では真っ赤である。

沙樹もこういうときの凍夜を中学時代には見たことがなかったのだ。(内心はどうあれ表面上は)落ち着いている凍夜に関心する。

そして、凍夜にしてみれば無茶振りだった質問も、この場の雰囲気を変えるための話題の提供をしてくれたっという都合のいい解釈になり、知らず凍夜の株は沙樹の中でまたひとつ上がったのだった。

6・トークタイム2

(表面上は冷静な)凍夜につられるようにして沙樹も少し冷静さを取り戻し、少し間は空いたもののきちんと返答することが出来た。

「あたしは、家庭教師に指導して貰ってたわ。演術を偶に^{えんじゆつ}だけど、家族が見てくれたりしながらね」

「家庭教師ですか。学校はずっと普通化に？」

「ええ。魔力は幼少から足りてたけど、どのみち高校入るまでは論理学と制御力の鍛錬しかしないからって、父がね。」

そのしたらさ、まだ魔式機動しか出来ないけど、あたしは振音法術に向いてるってことが分かって、それならここ行くより、高専行った方がいいだろうってことで、^{はす}頑張ってただけどね……

本来なら今頃そっちに行ってる筈だったんだけどな〜」

そう言いながら、ぐったりと後ろの机へとしな垂れかかる沙樹。

彼女の言う高専とは、国立振音法術高等専門学校のこと。

今のご時世だと国立といえば、(この場合、魔法界が前提の話)通常『魔法師育成高等学校』のことをさすことが殆どだが、国立も別にそこだけではない。

育成高等学校は規模がもっとも大きく、現時点では十六校舎が建てられていて、将来どの道に進むか分からない前途ある生徒のために、総合課程になっているが、魔術が中心の教育体系になっている。対して、各種専門科はそれぞれ一校づつしかなく、一般教科と各専門科の中身になっていて、五年制を取っている。

「振音法術ですか。珍しいですね。魔式に比べて、法式機動はかなり精密な演術が必要ですから、確かに“普通なら”そういうところに行かないと、なかなか実になる代物じゃありませんからね」

「分かるの？」

ムクツと起き上がって問いかけた。

まさか、この話が分かる人がいるとは思っていなかった沙樹は、

先ほどまでとは打って変わって、はしゃいだ表情になった。

「ええ、まあ“少し”は」

「少しって言っても分かるだけいいって。法術って全然知られてないから色々大変なんだ」

「そうですね。同じ魔法ではあっても、一般の人には魔術に比べて法術は殆ど知られていない上に、今じゃ魔術師であつてもそれほど気に掛ける様な人はいない時代になっちゃいましたからね」

凍夜は仕方ないというような苦笑いを浮かべて返した。

「そうなのよ！！　って、かく言うあたしもそうだったんだけど。それまでは、一応知識だけっていうか名前だけは知ってたけど、中身なんて全然知らなかったからな。自分で使わなきゃ、多分今も知らなかっただろうから、あんま他人のことは言えないかな……」

沙樹も自嘲混じりに凍夜と同じ様な苦笑の表情を表す。

そして、そんな今では殆どのものが知ることのないものを、どうして凍夜が知っているのかが気になり、深く考えもせず聞いた。「ところで、紫司さんはどうして法術を？」

「僕は今じゃ、“魔術を使えない体”^みなので、必然的にね。僕もこういう境遇でもなければ、知らなかったかもしれない」

凍夜はサラツと言つてのけたが、沙樹としては二重の失敗に苦虫を噛みつぶしたような表情になる。

先ほどもやってしまったばかりなのに、今度は話を共有できる稀少な仲間を得て興奮してしまい、またしても失念していた。

本来彼女はここまで、元いあまりミスをする人物ではない。立て続けに失念はしたが、それぞれに理由が異なり、更にはそれらは彼女の中でも大きなことだったために起きてしまったことであり、“普段の彼女”ならばそうそう失言はしない。

「ああっ……そうだよ。『だから』、紫司さん普通科の中学に通ってたんだよ……」

「気にしないで下さいよ。そういう風にされる方が迷惑ですから」
凍夜に“優しさが人を傷つける”という概念はない。

優しさはあくまでも人を重んじて包み込むものであり、傷つけることはありえない。故に凍夜は、“人を傷つける場合”にはその“意志をもって傷つける”。ときにはそれが相手のためならばこそ、ときにはそれが自分自身のためにも。

それ故のこの言葉だ。

だが、凍夜自身はそうは思っていても周りがそうとは思わない。

凍夜のその『あり方』こそが真の優しさだと周囲の人間は受け止めていない。

「うん、そうだよな。ごめん、ごめん。でも、そっか、紫司さんでも、そうなんだ」

「まあ、ある程度のことには知識に入れておいたでしょうけど、おそらく“ここまで理解”はしてなっただと思いますね」

凍夜の意志を正しくくみ取った沙樹はいつもの彼女に戻っていた。

7・トークタイム3

「あつ！ でもそれって、思えばかなり卑怯じゃないですか？」

今度は何かを思い出したらしい凍夜が、明らかに含みのあるような声色で沙樹に問う。今のこの空気を流すにはちょうどいいネタだった。

ほんの数刻前に出会ったばかりで、沙樹のことを深く知る由もない小夜が疑問の表情を浮かべるのは当然として、問われた本人たる沙樹も何のことかと首を傾げる。

「卑怯って何が？」

「振音を使うギタリスト」

小夜は、いきなりここでギタリストという単語が出てきたことに、更に困惑した。

ドンッ！

机を叩く大きな音が響き、沙樹は怒りを無理矢理笑顔にして引き攣った、まさにアニメや漫画のお馴染みの顔を作り、お約束の言葉を発する。

「それはどういう意味かな、シヅカちゃん？」

「そのままの意味ですよ。何時いつぞやの文化祭とか」

凍夜はしたり顔でしれっと答える。

「そんなことするわけないでしょうっ！！」

ちよつと、小夜さん。貴女のお兄さん、どうにかして下さいませんか？！？ ホントにもう失礼しちゃうわね」

凍夜に言っても、のらりくらりといなされるのが分かっている沙樹は、小夜に助けを求めた。

しかし、小夜同様に沙樹もまた小夜を知らないのだった。

「まあまあ沙樹さん、取り敢えず少し落ち着き下さいまし」

そう言っただけは沙樹を宥める小夜。そして

「お兄様、いったいどういふこののですか？ 流石に、状況も分

からないのでは、私とて庇い様がありませんわ」

という小夜の言葉に沙樹の頭がガクツと頂垂れる。

これを見ていた凍夜は、流石にこれは可哀想だなとは思うものの楽しいものは仕方がないと、微かに笑った。

何せ、よもや助けを求めた相手が、攻めるべき相手を擁護することを前提にして話を切り出すとは、思いにも寄らないではないか。その裏切られた感溢るる落胆ぶりは他人からは実に見たら愉快だった。

しかし、沙樹に限らず凍夜もまさか小夜がこのような切り返しをするとは思っていなかったもので、これには多少の驚きはある。

「フフツツ、ごめんなさい。お兄様がこれほど楽しそうにしていらっしゃるのを見たのは初めてでしたので、つい悪のりしてしまいました」

つと、一応沙樹には謝っておく。が、企みが功を奏し、兄が楽しんでくれていたことが嬉しかった小夜の表情に、悪びれた様子はないのだった。

「彼女は趣味でギターをやってるんだよ。それで、中三の文化祭のときにバンドやっててね。かなり好評だったんだ。それが、振音（法術）使ったんじゃないかって言ったわけだ。まあ、違うのは分かってるんだけどね」

小夜に状況を説明する凍夜。実のところ小夜は、こうして中学の頃の話聴くのは初めてだった。

「そのときの中島さんは、本当にもの凄く格好良かつたんだよ。衣装は可愛いやつで良く似合ってたから、格好そのものはすごく可愛かつたんだけどさ（笑）」

この言葉に沙樹は激しく反応していた。

「なるほど、そういうことがあったのですか。確かに、自身の成果を魔法の所為にされては、頭にくるのも無理からぬことですわね。お兄様も少し御自重下さいませね」

一応でしかない、形式だけの言葉で凍夜を咎めて置く。

「ああ、わかつてる。済みません、中島さん」

凍夜も形式的な謝罪を述べておくのだが、今の沙樹にそんな謝罪の言葉は耳に入っていないのだった。

沙樹は下げた頭を上げられずにいる。両の手が朱く染まった頬に当てられて、凍夜の言葉が頭にリフレインしている。

凍夜は女性への贅辞を素直に口にする人間だ。だが、沙樹は中学のときに直接それを言われたことがなかった。先の文化祭のときも確か似合ってるという表現しか貰っていなかった筈だ。

それなのに、いきなりここで初めて”可愛い”と言われたのだ、嬉しくない筈がないのだった。

「中島さん？」

中々頭を上げない沙樹を不審に思い声を掛ける。

「うん？ ああ、大丈夫……（大丈夫）」

何とか顔の火照りが治まった沙樹は起き上がって返事を返す。後半の言葉は自分以外の人間には聞き取れないほどに小さく呟いた。自分は大丈夫と言い聞かせるために発した言葉だ。

“ここに来ることになった理由”に関して、自分としてはいい気はしないのだが、何の偶然でもここに凍夜がいるというのは、沙樹としてはそれを押しても幸運だと感じずにはいられなかった。

「いいよ、もうそんなこと。冗談だってわかってるからさ。それにしても、こうしてまたシヅカちゃんと話が出るなんて、わざわざ二回目の試験を受けた甲斐もあるってことかなあ？」

つと、照れ隠しに軽く言っただけ。

「そう思っただけなら幸いです……けど、二度目の試験というのは？」

「えっ？ だって、受けたでしょ？ この試験。入るのは決定事項だけど、今後の参考につて？」

「いえ。僕はなにも……僕は、頼んでいた制服が届いたと思ったら、これ」

つと凍夜は自分の着ている制服を摘んで見せ、

「が入っていて今日ここに来るようになると言われて、後は妹の入学案内の通りだからと、それだけしか……」

「『紫司家』の特権てやつ？ いや、でも…… (“あの人”が受けてて、凍夜くんが受けないのはおかしいか)」

「どうでしょうね…… どうかしました？」

「いえっ！！ なんでもないわ」

キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン

ちょうどそのとき、8：10分予鈴の鐘が鳴った。しかし、周りには人があまりにもいない。

自分たちの後には、生徒が一人入っただけでそれ以外はまだ誰も教室に入って来ていなかったのだ。

「おい、誰か入れよっ！！！」

「お前が行けよっ！！！」

「もう、予鈴なっちまったぞ！！！」

「どうすんだよ」

「もうすぐ、先生来ちゃうよ〜！！！」

「こつというのは男子から行くもんでしょ？」

「なんでだよ？ そう言うならお前行けよな！！！」

しかし、教室の外ではガヤガヤと他の生徒が騒いでいる。

早く入ればいいのに、何をやっているのか？ と、三人以外にも教室中にいる生徒は不思議がっていた。

8・渦中の『三人』

校舎の外、クラス分けの発表画面の前の人ばかりは、友人のクラス状況を一頻り確認し終わると、一樣にある話題へとうつり始めていた。

『なあ？ A組のあの『三人』って、マジでおかしくねえ？』

『なんでこんなとこいんのって感じだよな？』

『偽物つか？』

『そりゃねえくだろ』

『だよな………』

『いーじゃん、いーじゃん！ 若しかしたらお近づきに成れっかもよ？』

『まあ、確かに成れたらスゲくよな。芸能人よりもよっぽどレアだしな』

『でも、成れると思うか？』

………

大概の生徒は気になる相手の名前しか確認しないものだ、そういうときの人間には例え視界に入っても意味をなさないものがある。関係ない赤の他人の名前なんというのはその最たるものだろう。

実際に、今教室の中に居て状況を分かっているわけではない者達がそれだ。別に彼ら彼女らが抜けているわけではない。どちらかと言えばこの状況で気づけた、という者の方が余程だとも言える。

そして、この騒ぎはその者が気づいたが故に起こったことだ。

自分の名前の直ぐ下に、どこかで見たことのある気がする文字を見つけて、なんだったかと思いついて見た。そして、思い出したのは思い出したのだが、どうにも自分の解答に自身が持てなかったた

め、隣の友人に問いかけて見た。

「ねえ、淳司^{じゅんじ}。何か、僕の名前の下に……何か、凄い名前がある気がするんだけど……どっ……どっ……どう思う？」

「なんだ、なんだ？ チョー美少女でも連想させる雅な名前でもあったか？ ドレドレ」

呼んで問いかけて来た割に、ホロウインドウの方から目を反らさず固ま^{くたん}っている友人に、飄々^{ひょうひょう}とした調子に答え、意気揚々と画面から件の名前を探していく。

「紫司小夜ねえ。うん、確かにいい感じっぽい名・ま……えっ？ つい、素っ頓狂な声を出してしまった。

淳司と呼ばれた少年も固まった。しかし、復帰は早かった。

「おいおいおいおい……！ ちょっ、マジかよ……！！！！！！ 最高の大当たりじゃねえかつ……！！！！」

更に気分は一気に最高潮のようだ。

「違うでしょっ……！！！！ ねえっ？ 紫司だよ……？ 紫司っ……！！ ！ しかも、二つ並んでるだよっ……！！！！」

小夜は近隣中高では有名だ、それは紫司というだけに捕らわれず、スポーツや容姿でもその名を馳せている。故に、淳司の反応も分かんなくもないものだが、まず『紫司』っというビツクネームに反応しろと大声で返した。

そして、その声にて漸^{やっ}く周囲の生徒にも『紫司』の名に意識が向いた。

誰かが気づくと早いもので、話は一気に広がった。

先ず始めに皆一応に何故？ と疑問の声を上げる。しかし、その様なことは当人たちにしか知る由もないことだ。

次にバラバラな憶測や対応の仕方など 特に同じクラスになるA組の者はどう接するかというのは切実な問題と言えた。

そして、色々な話題が飛び交う中で最も多いのは、やはりいべきか小夜のことだ。

中学時代、一年生の頃からヘックスボールの公式戦に参加し、そのプレイに誰もが魅了され、後に誰が付けたのか騎士妖精ナイトラフェアリーという二つ名まで付けられた。

初戦のときに撮られた動画や写真が瞬く間に広がり、次の試合からは地区大会ながらに会場の客席が生徒たちで殆どが埋められていた。地区大会は平日にやるので、彼らは当然学校を自主欠席して来たということになる。

殆ど男子が締めているため、最初相手校の選手や応援の女生徒からは当然厭がられたが、試合をして納得するとともに彼女らもまた虜にされた。

この調子でこの年のこの大会（全国中学総合体育大会・通称：総体）を全国にまで進み、更にその年の他二大会：新人戦（普通なら一年生はここからがスタートとなる）・球技会でも“同等の成績”を残し、三年間を通してそれを“貫いた”ことも周知の事実だ。

ただ、悔やまれるのはやはり優勝出来なかったことだと、当人は気にしていないことなのだが周りにはそう思わずにはいられない。しかし、優勝は経験していないものの、彼女の個人で獲得した賞の数などは過去最多のものとなり、他の追隨を許さなかった上に、得点記録など様々な記録で彼女の名前が載っている。

沙樹ルが言っていたキューブとは、この正式競技名称：Hexbaヘックスボllの1のことを差している。

Hex：魔法を掛けるという意味と、Hexahedron：六面体という単語のことを表している。フィールドは、直方体の形をしており、その中でスティックとボールを使い点を取り合う競技だ。別称として、3Dラクロスやスティックバトル、キューブなどがあり、競技人口は圧倒的に女子が多く、（女子）選手たちの間で『競技名が可愛くない』ということ、主に女子はキューブと呼ぶ傾向がある。また同一の競技ではあるが、女子部がキューブで、男子部がスティックバトルと呼ぶ場合が多い。

フィールドは直方体なので、Cube^{キューブ}：立方体は正しくないのだが、これはフィールドの形からくるものではなく、3Dと称されるように立方体のフィールド内を縦横無尽に駆け回ることから、三次元というCubic^{キュービック}という言葉が当てられ、略してキューブと呼ばれる様になった。

自分たちで意味さえ通じればいいという、日本人ならではの発想からくるものだ。

そんな彼女が何故か十二校じふにがうにいるのだ、その他に色々気に掛かることがあっても先ず彼女の話を経ずにははいられないのは当然だろう。

凍夜が来たのはちょうどこの当たりの話をしているところだったのだが、周囲の話には気づいていなかった。

そして、小夜の話で盛り上がっている中、先ほど『紫司』に気づいた少年から、またも別の（嵐の）ネタが投下された。彼もまた、小夜の話に乗っていたため、暫し落ち着くまで『最後の人物』を失念していたのだ。

時刻は7：55分頃、その名前が出たことにより、騒ぎは更に激化し、A組の者達は一様に教室への歩みを重くした。

そんな話題が渦巻く中、一人の生徒が凍夜と同じ様に群衆へと近づき、データを落としてはそそくさと教室へと向かった。

ただ凍夜と違ったのは、周囲の話をしっかりと聴いていたというところだ……

「清水先輩、会場の方はオツケーです」

体育館にある放送準備室、パイプ椅子に腰掛けて、手元の紙を読んでいる女生徒に、ドアを開けて顔だけ覗き込ませて来た後輩と覺しき女生徒が報告を受けた。

「そう。分かったわ。じゃあ、貴女ももう席に戻って」

「はい、分かりました」

後輩の女生徒は快い返事をして踵を返した。だが、

「つと、そうだ。清水先輩は『あの噂』って本当だと思いますか？

副会長なら、何か聞いてます？」

一旦は振り向いたものの、気になることを思い出し、それを先輩に問いかけた。

「『あの噂』ってというのは、『どの噂』かしら？」

「ええ〜つと、全部と言えば全部なんですけど、やっぱり『無能者』ってやつが……」

「確かに気になる話題ではあるわね。でも、残念ながら私の方には何も」

副会長たる女生徒は首を横に振った。

「それにしても、今年はどうなってるのかしらね？ いくら何でも

『特例』が多すぎるわ」

「そつちも何も？」

「ええ、『誰が』来るかってだけ。理由まではさっぱりね」

「そうですね……じゃあ、今度こそ私は戻りますね。清水先輩、会長”挨拶頑張って下さいね」

「ええ。戻ったら念のため、もう一度静にするように放送入れて頂戴」

「リョーカイ!!!」

つと、後輩の女生徒は最もらしく敬礼してその場を立ち去った。

後輩の女生徒が出ていった後で、もう一度挨拶文の書かれた用紙を見て確認に入るが、先の後輩との会話の所為で集中できなくなっていました。

「全く。今年はどうなってるのかしら？」

つぶやいてから、ため息を一つ吐いて、今度こそ集中し始めた。

今年の十二校の入学式は、いつになく“表面上は穏やかで、その実混乱の極み”だった。

一つ、去年より噂に上がっていた、能力向上教育プログラムという、よくは分からないが取り敢えず、『外部の講師』を招いて、より生徒の能力を引きだそうというものらしい計画で、その外部講師が今日から赴任するという事。

二つ、紫司小夜が入学してくるということ。

三つ、『特例』として入学する者がいるということ。然もそれが『四人』いるということと、その『顔ぶれ』が異常だということ。

四つ、これは大方何かのデマだろうと思ってはいるのだが、どうやら『無能者』がその『特例組』にいるのだということ。

これらが、春休みの間に生徒全体に広がっていた。

他にも、これらの噂に関する詳細が付けられた噂がいくつもあり、生徒はこの話題で持ちきりなのだが、内容が内容なだけに、口に出している時点でどうかというものなのだが、小声でなら みんな言っただけからというなんとも無意味ない訳と的外れの安心感から、結局この噂^{はばか}られる筈の内容の噂を各々口にするのはいいのだ。

皆が話している時点でもうわざわざ小声で話す意味もない筈なのだが、後々も^{のちのち}目を付けられたらという脅迫観念から、これらの噂をするときは一様に声を潜めて、態度だけは取り繕っている。

中には真実そのことに興味のない生徒もいて、その者からしてみれば滑稽でしかない。目を付けられなくては、端からこんな話を出さなければいいのだと。

「ウイゝス！！ 会長“代理”」

清水の元へ今度は男子生徒がやってきた。

「おかえりなさい、草尾副会長くん。どうだった？ 『あの娘』の様子」

「どうもごうもないぜ。いやっ、もう完璧！！ こっちはもう気疲れでヘトヘトだよ」

そういつて、清水の前の席につき、背もたれに両手を垂らし反り返る。

「ふふっ、それはお疲れ様。でも、貴方でも女の子に気疲れなんてことすることあるの？」

「ありますよ。失礼だなッもつ。久方ぶりにテンパっちゃいましたよ。お陰で、上手いこと付き合告白ってくれと言えなくて、間違ッって結婚ロボースをッつて言ッつたんですから」

「それホント？」

「ホントもホント、マジですよ」

清水はこの草尾という、自分と同じ生徒会の副会長たる少年を、ただ黙ッって半眼で睨ッんだ。

この草尾という男のどこをどう真面目に取ればいいのか、真剣に悩み始めた清水だったが、諦めることにして、本題に戻ることにした。

「それで、彼女はとうだったの？」

「どうつて、そりゃ決まッつてるでしょ？」

流石の僕も初対面にプロポーズが成功するとは思ッつてないですよ。結果は予想通りです。『貴方に興味がない』ッて言われちゃいましたよ。

ふっ……（嗤）流石に傷ッつくな……」

清水としては、彼女にやッつて貰ッうことになる新入生挨拶のことだつたのだが、草尾としてはもう少し引ッ張ッりたいらしく、分ッかッつて話を続けてきた。

「はあ……」

ため息をついて、草尾から話を聞くのを諦めた。

こんなのではあるが、最初に完璧だと言っていたのだ、それは信頼して間違い筈だ。

恐らく今は何の話を振っても、そこに行き着くようにするに決まっているので、もう切り上げることにした。

「それじゃあ、そろそろ私たちも行きましょう？」

「おうっ」

そろそろ式が始まる。生徒会役員たる二人が、遅れる訳にはいかないのです、余裕をもって移動を開始した。

10・謎の麗人登場!?

教室の前で入るのを躊躇ためらっている生徒たち。教室の中に『彼ら』がいるのかと思うとやはりどうにも萎縮してしまつ。

そろそろ、本鈴が鳴ろうというところに横手から凜として張りのある女性の声が掛けられた。

「君たち、いつまでそうしているつもりかね？ 時間までに教室に入っていない者に、私は欠席や遅刻と記さねば成らんのだが、まさか入学式当日からそうさせるわけではあるまいね？」

声を掛けられた一群はその方向に振り返り目を見張る。

そこには、夕焼けがあつた。

夕焼けの如き紅い髪、触れれば焼けてしまいそうなほどその髪は灼熱の炎の様に煌きらびやかだった。

その髪に見とれていると女性からまた言葉が発される。

「ほらほら、はやく動きたまえ!!! でなければ、本当に遅刻になるぞ!!!」

女性の髪に見とれ惚けて生徒たちが、その言葉で我に返り、発破を掛けられて生徒たちは漸く教室へと入っていく。そして、元々教室の中

中にいた生徒も先ほどと同じように驚いていた。

女性にしては少し高めの身長に、黒のパンツスーツ、目つきは鋭く、おろせば肩より長いだろう煌髪を、頭の後ろで一本に縛っている。その容貌は正に凜々しき麗人だった。

煌髪の女性が低めのヒールを鳴らしながら教卓に向かう、そして本鈴が鳴り始めた。

彼女の髪は通常・ラピス・活性魔粒子性変異霊障害・通称：霊障と言われ
るもので、魔導機関（もしくは霊器）の活性魔粒子抗毒耐性の耐性
値を超えたラピスが、人体に与える影響として発症した症状を指す。
本来ならば、これは疾病の一種ではあるのだが、多くの場合顕現

現象（体の部位に目に見てとれる状態）がある場合は、これそのものが疾患の症状であり、特に異変を来すことがない場合が多い、しかし飽くまで多くの場合はの話ではある。

彼女の場合は、多分に漏れず顕現現象のみの発症だ。つまり、簡単な話が地毛で髪が紅いということになる。

そして、彼女たちの様に靈障でありながら、人体に悪影響がない状態で尚かつ、それが視覚的に良好と捉えられる場合には、美象と言われる。この麗人や小夜の髪はこの部類に入るものだ。

女性なら大概の者がこの美象に憧れをもつものだ。

しかし、それは意図して手に入れることは出来ない正に天恵と言つていい代物である。

それをやるうとするものはいないが、人工的に靈障を引き起こすことは可能だ。

だが忘れてはならない、飽くまでも靈障は疾病なのだ。いくら美象とその呼び名を変えようともその本質は変わらない。

無害な顕現だけで済めばいいが、体に異常を来し、一生を病院の中で過ごす可能性もある。例え無害でも、言い方は悪いが醜い姿になることもある、靈障そのもは美象の部類でも、当人の容姿を相容れない場合もあり得る。

そして何よりもやらない理由は、靈障（顕現現象）は治らないとされている。全てがではないが、殆どの場合が治らない。

故に、美しく”なるため”ならいざ知らず、かなり少ない”なる可能性”のためにやるものはいないのである。

教室に入って来た美象の煌髪を讚える、その麗人を見た一同のその中でも、特に驚いている者がいた。しかし、それは他の生徒とは異質な驚きだった。

他の者が彼女の容姿（主に髪）に意識を奪われる中、彼女だけはその存在に、彼女がここの事実に、心底驚いていた。

驚いていたのは、小夜だ。小夜は他者に感情を向ける娘ではない、

例え自分がどのような扱いであろうとそれを甘んずることができるといふよりそもそも気に掛けることすらしない、今の小夜にはそれができる心の支えがあるからだ。しかし、その小夜をもってしても許し難い者たちもいる。

その一人がこの目の前の女性だ。

そして、始めは驚いていただけの小夜も、次第に怒りが込み上げてくる。この者がただここに存る、ということだけでも小夜には許し難かった。

その女性が教卓の前に着く。

小夜は怒りのあまり激昂げっこうしようとしてした、何故ここにいるのか？ それを問いただすために……

腕が机の上にまで持ち上がり、机に強く叩き付けられようとしていた。

しかし、それは起こらなかった。

小夜のことを分からない凍夜ではない。

小夜が『何を想い』『何を思った』のか、分からぬ凍夜ではない。故に止めた。

小夜の左肩には、凍夜の左手が添えられている。

怒りがおさまったわけではない、『彼女たち』に対する想いは“あのとき”から、一切の揺らぎを持たぬ程に燃えている。

しかし、小夜にこの手を払いのけることは出来ない。絶対をもつて出来ない。

行き場のない想いを抱える小夜、その想いは消せなくても（もつとも小夜自身に消すつもりはない）、せめて愛しき兄のぬくもりを感じるように、肩に掛けられた手を右手で握る。自身を抱くように……

その様子に気づく者は『二人』だけだった。

皆教卓の麗人に魅入られて、その二人の様子など気に掛かるわけもなかった。

教卓から二人を見る煌髪くわんぱつの麗人と、顔を教卓の方に向けながら、

視線のみを二人の方に向ける男子の制服を着た生徒のみだ。

「おはよう、諸君。先ずは、入学おめでとう。全員、無事にこの日を迎えられてなによりだ」

教卓の前に着いた麗人は、よく通る声で語り始める。

「私が今日から君たちの『担当になる者』だ。以後宜しく頼む。

さて、本来ならここで私の自己紹介となるのだろうが、生憎と今は伏せさせて貰うよ。君たちにも、式の後で全校生徒と一緒に、驚いて貰いたいからね。私が名乗るとき、ここにいる『殆ど』の者が驚くことを約束しよう（笑）」

つと、麗人は自分の名を明かさずに、悪巧みしているというあからさまな顔をしている。

当然、生徒たちはついていけない。一様に呆けるばかりだった。

「あの……」

一人の女生徒がおずおずと手を挙げる。

「何かね？ 丹下桜くん」

どうやら麗人は、既にクラスの生徒の名前の把握しているらしい。間髪入れずに、自分の名前を呼ばれた女生徒は少々驚いた。

「はいっ、あの……その……さつき、全員って言っていましたけど、私の前の席空いています」

「ああ。彼女なら大丈夫だよ。今年の主席入学者だ。今は、一足先に体育館で君たちの代表として、挨拶の練習としているところだろう。他に何か気になることがある者はいないか？」

見回して見るが、手を挙げているものはいない。

「結構！！ では、時間になったら二年生が迎えに来るので、それまで君たちは待機だ。私は席を外すので、あまり騒ぎ過ぎないように話でもしながら、リラックスしていてくれ。では、これでホームルーム終了だ」

終了が告げられて、生徒たちの気が少しゆるんだ。

本当に名乗らなかつた麗人は、教室の出入り口の前まで移動して、ドアを開いたところで、一人の生徒の名前を呼ぶ。

「ああそつだ。紫司凍夜！ ちょっとこいつ！！」
教室にまた緊張が走った。

先ほどまで、麗人に飲まれて、『紫司』のことを忘れていた。
「はい」

呼ばれた本人たる凍夜は、何事もない様子だが、小夜がびくつと反応した。

立ち上がった凍夜は、そんな小夜を宥めるために、机の右側に抜けて、左手を小夜の頭に載せて、腰を折って耳元で『大丈夫だよ』と優しく囁いてから、何事も無かったかの様に教室の外へと歩みを進めた。

麗人と凍夜が教室を出ると、生徒たちはまた少し緊張をとき、話を始めた。

小夜は辛そうな顔で俯いている。

沙樹は、何故呼ばれたのか？ と思いを馳せながら、凍夜が出て行った後を暫く眺め、その小夜の様子に気づき、声を掛ける。

「どうしたの？」

「すみません。何でも、有りませんわ」

何でもないと言う小夜ではあるが、その笑みに力はない。

何でもないわけではないのは明白だが、こうなっている人間に他人が口を出すのは返って無粋というものだ。

暫しの時間が経って、小夜が沙樹に話しかけてきた。

小夜は、今まで先ほどと同じように伏せていた。沙樹は、そんな小夜を放って誰かを話す気にもなれるわけもなく、隣で携帯をいじったりしながら時間つぶしていた。

「沙樹さん」

「もう、平気？」

「ええ、済みません。気を遣わせてしまって」
席に座ったままではあるが、礼をする小夜。

「いいのよ、これくらい。それに、紫司さんならこうゆうとき、」

気にされる方が迷惑だ』って言うと思うわよ。さっき見たいにつ
！」

「そうですね（笑）」
完全にとはいかないが、幾ばかりかは戻っている小夜に安心する
沙樹。

「あの……実は、迷惑ついでに、一つお願いがあるのですが宜しい
でしょうか？」

少し言いにくそうに、少し躊躇ったが意を決して口にした。

「何かしら？」

「実は

彼女たちは、凍夜が戻って来るまで、話を続けた。

そして、凍夜が戻って来たときに、二人の随分親しくなった様に
見えた。

体育館では入学式が行われている最中で、今は丁度、新入生の代表が呼ばれたところだ。

新入生の代表が中央通路に移動すると、周囲に響めきが起こり始めた。通路を進み壇上に行くとその騒ぎは更に大きくなる。

壇上に立つ代表の女生徒、彼女の腰よりもある長い髪は、靈障を帯びており、美の象徴というに相応しいほど幻想的な色合いを帯びていた。

透き通る様な蒼白い髪。誰もが彼女の後ろ姿に魅入られた。

1-Aの生徒は、先ほども別の美象を見ていた。アレほどの美象は早々お目に掛かることの出来ない本当に稀少なものだ。

飽くまでも髪の美しさの優劣での話ではあるが、先の灼熱の煌髪と比べるならば、小夜の赤みがかった茶髪というのが、色褪せて見えてしまう程だ。がしかし、その煌髪を知る1-Aの生徒からしても、彼女の『蒼髪』は目を奪われる程に美しいものだった。

壇上の上で文を読み上げる女生徒の声は、まだ高校生になつたばかりの十五歳の少女とは思えない程に艶やかなでいて、決意表明に相応しい凛々しさを感ぜさせる声をしていった。

「新入生代表、一年A組・『蒼縁神禁』」

挨拶を読み終え自分のクラスと『名前』を告げたときに、また響めきが起きた。

先ほど登場したときには、美しい髪に感嘆するものであったが、今度のは驚愕によるものだ。

生徒たちにも少しは起きたが、事前にその名を知っていたために、生徒たちの動揺は小さい。しかし、何の前情報もないままにその名を聞いた父兄たちの動揺は、入学式という場に明らかに相応しくないレベルにまで達してしまった。

マイクで『静粛に』と声を掛けるが中々に納まる気配はない。

神堊はその騒ぎに一切の気を払うこともなく、読み終えた文を折りたたみ、制服の胸元に仕舞い込み、振り返った。

そして、今度は先ほどは気づくことの無かった生徒たちや今も騒ぐ父兄までも、神堊の顔を見て先ほどまでとは別種の響めきを起す。

神堊の右目を眼帯が覆っていた。ものもらいになったからといってする様な、そういう程度の眼帯ではない。

その眼帯は黒く、凡そ少女には似つかわしくない様な、存在感のある質感を醸し出しているのに、神堊の右目にあるそれは、顔を隠すことで返って神堊の神秘性を引き立てているように見えた。

入学式が終了した。

本来なら、新入生が退場した後閉会となるのだが、今回は別件の用があるために新入生もそのまま残り、閉会后父兄の退場を待つて終了となった。

この後、父兄は子供たちの教室へ行き、担任教師から諸処説明を受けることとなる。

壇上の上に件の麗人が姿を現した。1 - Aの生徒は、驚きはしないが、やはり他のクラスの者はそうもいかない。

「おはよう、諸君。新入生の皆は入学おめでとう。」

私は能力向上教育プログラムという、国の政策のために派遣されてきた、日本軍士官再教育部門所属にしている中将だ」

中将という階級に皆が、疑問の念を抱く。当然だろう、見た目からするにまだ三十にもなっていないであろう、女性軍人が中将というのはどう考えてもありえない階級だ。

それに加え、彼女の所属も妙な部門だ。下士官や士官候補生というなら分かるが、士官を再教育するというのだから、なんとも訝しさを感じざるを得ない。

「二・三年生は、噂くらいは聞いていると思う。これは、魔法師育成高校が近年弱体化していることを懸念されて、発足させられた政

策で、対校戦のランキングが常に下位に来ている六校を対象として、試験的に行われることになったものだ。よって、私は十二校じふにこういるわけだが、これは飽くまで偶然であること、場合によれば、違う校舎に行っていた可能性や、そもそも派遣されなかった可能性がある、ということを先ず念頭に置いて貰いたい。

さて、先ほどここに来て、君たちがしている『噂』をいくつか耳にしたわけだが、それについて誤解があるようなので私の知る範囲で、先ずその誤解を訂正して置こうと思う。紫司凍夜、上がってこい」

多少のざわめきはあったものの、麗人の他を圧倒する雰囲気に乗られていた生徒は直ぐに静まった。

そして、凍夜が壇上の上上がった。

「さて、渦中の一人がこの紫司凍夜なわけだ。彼は諸君らのいうところの特例組に当たる存在だ。そして、その彼を特例としてここに招いたのが、『この私』だ。そして、『コレ』は“便宜的に生徒という扱いにはなっていない”が、実際のところは“アシスタント”をやって貰うことになる」

流石にこの話には騒がしくなったものの、麗人の言葉で一蹴され、押し黙った。

「話を聞けつ！！！！」

他の特例入学者に関して、私は関知していない。もし、そちらに興味があるのならば、後で学校に問い合わせてくれ、今は私の話を聞いて貰う。

私が『コレ』をここに招き入れたのは、君たちに益があると判断したからだ。私には、今政策こんせいさくに携たずさわるに当たり、様々な権限が与えられている。勿論その権限は、今政策のためになるものに限る。よって、『コレ』の抜擢はつてきは君たちのためにを想つてのことだと、そう理解して欲しい」

凍夜を『コレ』呼ばわりするこの麗人に対して、『二人』の生徒が怒りを覚え、壇上の麗人を睨み付ける。

周囲のものは壇上に集中しているため気づいてはいないが、その者たちの今の顔を見たら嘸かし恐怖していたことだろう。

「さて、次に特例組の中に『無能者』がいるというのもあったが、断言する。それは、『間違い』だ」

これには、皆がやはりと思った。しかし、以外なことに言葉は続く。

「『ここにいる紫司凍夜は、“無能力者”ではあるが、“無能”ではない。“無能力”ではあるが極めて“有能”な存在だ。魔力判定にて“無能力判定”を受けているが故に、“魔術は施行できない”が、コレには凡そ我々の及びもつかない程“魔法の才はある”。そして、無能力判定とコレの有能性に関しては“無関係”だ。』故に、呼んだ」

静だった。誰も騒ぐことなく皆黙ったままだ。

『ある二人』以外の全生徒、そしてここにまだ残っている教師陣にも、この麗人の言っている事の意味が全く分からなかった。全く持て理解出来ない、出来なすぎるが故に静だった。

この言葉の意味を全て正しく理解出来たのは、小夜だけだ。そして、もう一人の生徒は、言葉の意味は理解はしていないが、凍夜が有能であるということとただ当然として受け入れていた。

「恐らく諸君らは、この言葉の意味を理解出来ないことだろう。これは、私からの問いだと思い、考えていってくれ。」

これは私自身の言葉ではないが、この言葉を諸君らにも刻んで貰いたいので、聴いてくれ、

『考える、思考を止めるな、脳は使えば必ず答えてくれる器官だ。考えることに無意味なことなどない』とね。

参考までに言っておけば、コレが魔術を使えないのは、魔粒子活性化が出来ないためであり、それ以外の機能は全て通常通りである。これを切り口にすれば、見えるものもあるかも知れん。

諸君らの思考に期待するよ。

そして、私は断言しよう!!! 来年、三年生が卒業するそのと

きまでに、ここにいる全ての者が、私の言葉の意味を理解している
と」

ここまで言つて、麗人は厳しい顔つきを辞めた。

そして、先ほど教室で見せたような、人を驚かせるのが仕方な
いっといった様な顔つきになった。

「さて、ここまで、長話済まないね。これで、最後だ。自己紹介と
挨拶を最後にした無礼をまず詫びよう。私の名は、紫司しつかえいか詠歌、紫司
の長女だ。以後、宜しく頼む」

12・恋敵（ライバル）？ 参上！？

現在の日本は四つの家柄によって支えられている。

それが、『蒼縁』・『紫司』・『緋捺璃』・『羽月』の四家であり、この四家を四大柱と呼ぶ。

この日本という国が『魔粒子遭遇危機』以降、再び国家としての機能を取り戻し、安定した生活を送れるようになったのは、この四大柱の力に他ならない。

『血晶結界』により安全な生活環境を作りだしている蒼縁を筆頭とし、紫司が武力・緋捺璃が政治・羽月が法をそれぞれ納めることにより、日本という国を今現在も守り続けている。

四大柱は各々が、己の権力を乱用しない様に常監視しあっている関係ではあるが、家同士が不仲というわけではないし、況して敵対しているわけでもない。

どちらかと言えば、交流を図りより潤滑に、事を成せるようにと意図している。

即ち、この四大柱の「一柱を敵にすること」は、四大柱全部を、つまりは日本を敵にするに等しいとも言えるのである。

勿論、ある個人が敵対してきたとて、そこまでことを荒立てることを四大柱はしないし、その相手もそんなことをするとは思っていない。

しかし、その周囲はと言えば四大柱の意志とは無関係に動くものだ。

四大柱は、それぞれがそれぞれに大きな財閥企業を有しているが故に、経済界にも多大な影響力を持っている。ともなれば、その一挙手一投足・僅かな言動一つに気を配る者も居て然りだ。そういう者に、敵対する者がいるということが伝われば、どうなるかは明白なことだろう。

こっついう背景があるために、どれほどの疑念を持っていようとも四大柱に意見する者というのはまずもっていない。

だが、意見しないというだけで、抱えた疑念は消えるわけではないのだから、それは当然不自然な態度でにじみ出るものだ。

壇上から満足げな顔をしながら詠歌が降りた後、解散となった。

凍夜も元の場所に帰り、クラスの者たちと一緒に教室へ戻る。

予想はしていたが、やはり皆ぎこちない感じた。普通ならおしゃべりしながら、騒がしく移動するものなのだが、列は異様な程に静だった。

1-Aの教室に着いたが事態は変わらない。普段なら騒がしく話し込んでいるような時間なのだが、教室に会話はなく、皆押し黙っている。

沙樹は、二人にどう切り出せばいいのか分からず、凍夜と小夜とで視線を彷徨さまよわせながら会話のネタを探してはいるのだが、結局は黙り状態だった。

小夜は小夜とて、体を沙樹の方に顔は凍夜の方に向け、いつでもどちらとでも会話が出来る体勢をとってはいるが、思考を巡らせているであろう凍夜に、この状況で何と声を掛ければよいものかと思いい悩みやはり、言葉が出ない。

単なる自己紹介ではあるが、詠歌のそれは中々に爆弾発言だった。詠歌のみならず、紫司が三人も一つ処ところにいるというのだから、仕方ないと言えは仕方のないことかも知れない。

いくら詠歌が、偶然だと主張したとて、現に凍夜は詠歌に呼ばれてここにいるのだし、更に言えば、小夜が何故ここ（十二校）にいるのかということも疑問なのだから、勘ぐりたくもなるというものだ。

小夜は、私立壬筑紫魔法学園中等部に在籍していた。

この壬筑紫は、幼稚園から大学までの一貫の所謂いわゆるエスカレーター式になっているので、本来ならば小夜はその高等部にあがっていた筈で、わざわざ受験してまで、こっちに来る理由はない筈なのだ。

確かに国立は一般的に私立よりもレベルが高いという認識になるが、それでも『四柱校』つとなると話はべつだ。

四柱校というのは、生徒たちが主に使う俗称であり正式名称はない。そして、名から察するものもあるだろう、即ち四柱とは四大柱を指している。

つまりは、四大柱が創設した学校ということだ。正確には、四大柱のそれぞれの関連機関によるものではあるが、どちらにしろ四大柱にしてみれば庭みたいなものだ。

そして、当然王筑紫は紫司の関連に当たる。となれば、わざわざ自分の箱庭から出て来るほどののだ、疑いを持つなということの方にこそ無理があるというものだろう。

凍夜は詠歌に呼び出されたときに、『自分がここに呼ばれた理由』を聞かされていたので、こうなることはそのときから予想していた。何か対策としていい手立てはないかと模索してみたが、自己弁護は苦手な部類に入るため、ここに至るまで結局いい案は思い浮かばなかった。

しかし、このままではいつまでも空気が重いままなので、取り敢えず自分から小夜や沙樹に話題を振って会話しようという考えに至る。それを気に周囲に少しずつでも、会話が始めれば空気も和らぐ筈だと。

と、そう思い会話の口火を切ろうとしたそのときだった。

凍夜が思案している間に、皆に少し遅れて神埜が教室に入ってきた。自分の机に座ると思い気やそのまま凍夜の方へと歩みを進めた。

「久しぶりね、凍夜」

神埜が凍夜に声を掛けてきたが、凍夜は小夜たちに話をしようとした瞬間だったため、一瞬言葉につまってしまった。

「っえ、はい。ん？ ついこの間お会いしたばかりだと思いきすけど……？」

「顔を合わせるだけならね。でも、こうして直接言葉を交わすのは

「二年ぶりよ」

「そうですね。確かに、それ以降も幾度か会う機会はあっても、会話はありませんでしたね」

そう言えばそうだったなと思い、苦笑いを浮辺ながら返答する。

「では、改めましてお久しぶりです。蒼縁さん」

「この場合、”神埜って呼んで”って言った方がいいかしら？」

確かにものによってはパターンかも知れないが、わざわざそれを言うか？　と思わざるを得ない。

「それを僕に尋ねられても困るのですが……」

そして、それを正直に苦笑と共に言葉にした。

「そう。じゃあ、神埜って呼んで」

しかし、神埜は全く意に返した風もなく　と言うより、もとから何かしらの意味を込めての言葉かすら危ぶまれる程に、素っ気なく言つてのけた。

「それは、無理です」

凍夜は逡巡することもなく答えた。

「拒否するわけ、然も即答。ちょっと、女に対する礼が欠けてるんじゃない？」

不機嫌さすら感じない抑揚に乏しい口調で叱責する。

「無礼は承知ですよ。ですが、無闇に相手に気を持たせることの方が失礼でしょう」

対して凍夜は軽口のように答える。

「クスツ、いいわね。貴方のそういうところ。いい訳も取り繕いのない真っ直ぐなところ」

ここに来て初めて神埜に感情というものが現れた。

神埜と凍夜の会話のその傍らで、沙樹は内心驚愕きょくごに打ち震えていた。

沙樹は蒼縁そうじゆんの衆家しゆけと呼ばれる家柄の出自だ。

この衆家しゆけというのは、血縁関係ではない親戚筋や蒼縁傘下の財閥

家系を指す。その衆家とはいっても、所詮は組織の末端、その程度
の人間が宗家の人間に会う機会などそうそうあるものではない。

故に沙樹が直接会ったのは、丁度中学へ上がった辺りのときに一
度会った切りで、そのときは碌ろくに話も出来なかった。というより、
話に成らなかったのだ。

神埜は他者を寄せ付けないことで有名だった。それは正に、近づ
く者を皆を斬り捨てるが如き有様だ。

しかし、今はどうだろうか、斬り捨てるどころか自分から歩み寄
って話をしているではないか。

然もかなり親しげに、明らかな好意すらも示しているのだから、
以前の彼女を知るものとして驚くなという方が無理な話だ。

小夜は、話し始めた二人を眺めていた。

小夜自身は蒼縁と関わりももったことは無いが、家の交流はある
のだし、何より凍夜は普段蒼縁ゆかりの縁の施設に世話になっているのだ
から、この二人が知り合いだとして驚くことは無かった。だが

「だから、私は“そんな貴方だからずつと側にいたい”」

流石にこの言葉には心中穏やかにはいらなかった。

13・敵対（ライバル）宣言？

その言葉に小夜は恐怖を感じずはいられない。
不安ではない。それは紛れもない恐怖だった。

小夜は沙樹が凍夜のことを好きだと言うことに気づいている。凍夜に対する他人の感情に小夜は敏感なのだ、気づかぬわけがない。しかし、そのことに関しては不安すら感じることもない。もし、凍夜が沙樹と付き合うことに成るならそれでも構わないとさえ思っている。

でも、ダメだった。この神埜という存在にだけは決して凍夜を渡したくない小夜だった。

小夜は今でこそ他人の言動に左右されないだけの強い心があるが、昔はそうでは無かった。

直接的に言われることは無かったが、周囲の視線や態度を敏感に感じ取っては辛い想いをしていた。そして、その度に兄の元に駆け寄ってはただ黙って俯いていたのだった。

そんな彼女を兄は一切を問わずに、ただ優しく抱き留めてくれた。幼き小夜はただ兄という存在に依存しながら生きてきたのだ。今でこそ　そもそも今の小夜を誹謗中傷する様な存在がいないのだが　仮に激しい罵倒を直接受けたとて、それを意にも介さない小夜ではあるが、それは一重に凍夜という心より所があるからに過ぎない。

始めは偽りからだった。

始めは哀れみからだった。

始めは贖罪こいひぐせのためだった。

だが、今は違う。小夜は凍夜を愛している。凍夜を一人の男性として、自分が一人の女性として

だが、どれほどの想いがあったとしても、凍夜がそれを受け止めてくれることはない。

今の時代、二親等内の傍系血族の婚姻は認められている。

所定の手順を守り、生まれ来ることもに劣性遺伝子排除処置を施ささえすれば、これは合法的なことなのだ。

これは、一部の固有魔法保有血統一族・通称：魔族の保護、他の血統の混入による一族の血の濃度低下を防止するということを、建前に合法化したものだ。しかし、これは後付である。

元々魔族の家系はそうやって　とは言っても、殆どの場合は三親等の傍系血族との配合で、どうしてもという場合に限りではある代を重ねてきたが、親近相姦への嫌悪は生物の本能だ。それがあらかぎり、彼らは自分の出自を明るみに出来ない。

それを、公に認めさせるために合法化させた。何を隠そう、蒼縁や紫司などは正に魔族の象徴といえる家系なのだ。

つまり、本来ならば小夜のために認められたものだと言ってもいいほどだ（勿論、コレは例えである。何せ合法化されたのは、遙か数百年前の話だ）

だが、小夜と凍夜の関係には約束があった。それは、誓いであり契約。

もし、それが破られることがあれば、凍夜は恐らく自分の前から消えてしまうと小夜はそう思っている。

故に小夜は踏み込めない、例えどれほどの恋慕に心を焼かれようとも、凍夜を失うことは絶望以上の苦しみでしかないのだから。

時々思っことがある。もし、昔にあの約束をしていなかったならば、と……

だが、それは本末転倒なのだ。もし、その約束がなければそもそも凍夜といることすら叶わなかったのだから、それだけは嫌だ、どれほど苦しい想いをするようになるうとも、凍夜といたくない自分というものは、絶対に嫌だった。

故に小夜はもしも凍夜が誰かを愛するならば、それを受け入れるだけの自信があった。

例え、凍夜が誰を愛そうとも、自分には約束がある。それは、自分を縛る鎖であると同時に、凍夜と自分を繋ぐ絆でもあるのだから。だから、平気だと思っていた。凍夜が誰を想っても、その傍らには常に自分もいる筈なのだからと。

更に言えば、二親等内の傍系血族の婚姻以外にも、一夫多妻制が今の日本には認められている。

現在の日本の総人口が約1800万人、男女比が約4：6と若干ながら女性が多く出生せれることが起因する。

この制度が出来てから久しいが故に、男女間の恋愛感も、結婚を前提に皆を平等に愛するなら、と言う条件なら大概の女性は、愛する男性が複数の女性と付き合っても構わない、という風土になっている。勿論、遊びの男は敬遠されるのはいつの世も変わらない。こういう時代だ。本来ならば小夜は誰の目を憚ることなく、凍夜との愛を育めた筈だったのだ。そう本来ならば……

それが出来ないにしても、凍夜が他の女性と付き合ったとして、凍夜は自分をその傍らに置いてくれるであろうし、その女性も余程の独占欲の持ち主でもなければ、そのことを咎めもしないだろう、という打算が小夜にはあった。

だが、神埜だけは例外だ。

彼女は知っている。『この凍夜』という存在を。

その彼女であれば小夜から凍夜の全てを奪うことが出来てしまう。故に怖かった。小夜はこの神埜という存在に凍夜が取られるかも知れないと、心底恐怖する。

小夜は神埜と直接会うのことが初めてだが、その存在は知っていた。同じ四大柱だからというわけではない。ただ名前を知っているだけではない。小夜は、神埜がどういう存在かということを知っている。

自分と似た存在として、似た境遇を持つ者として、同じ悲しみを知る者として、自分の憧れとして。

神埜の言葉を聞いた小夜はいろいろな思考が巡り、一瞬にしてパニック状態になっていた。

しかし、それを沈めたのも神埜の言葉だった。

「大丈夫、安心して。別に約束を反故にしようというわけじゃないから。その上で、決めたの。そのときが来るまで、私は貴方の友として側に在りたいと思うの、それなら問題ないでしょ？」

自分の考えが杞憂に終わったことを心の底から安堵した。

そして、凍夜は真っ直ぐに神埜の目を見る。彼女の決意を確かめるように。

「貴女自身がそれを受け入れられるというのなら、僕からは言うことはありませんよ」

「そう。それじゃ、改めて宜しくね。凍夜」

神埜はそう言っで左手を差し出して、凍夜はそれに握手で答えた。

「ええ、こちらこそ」

その光景を見ていた沙樹も、小夜ほどではないにしろ危機感を感じていた。今も完全には拭いきれては居ない。

当然だろう、あの神埜がここまで親しげにしているのだ。

沙樹と会って以降、三年近くの間神埜が変わったという話は聞いていない。もし、その態度に変化があれば必ず耳にはいる筈だ。

だとすれば、これは凍夜だけの対応だと考えるのが普通だし、そして実際にそれは合っている。

なら、何故ここまで親しげにして、最初に意味深なことまで言うておいて、わざわざ今更『お友達に成りましょう』という話なのか？
分からないことだらけだ。

これが、もし別の相手なら沙樹は疑問を浮かべるだけで済んだ。しかし、その相手が凍夜だけに気が気ではないのだった。

そしてこのとき沙樹は、今握手を交わす二人を見て何か違和感を感じるが、それが何かは分からなかった。

小夜も沙樹と同様の思いに駆られていた。そして、同様には言っても、警戒のレベルは遙かに高い。一度は安堵したものの、結局

のところ凍夜の側にいるという意志に変わりはないのだ。

ならば、どういう意志をもってここにいるのかが分からなければ安心は出来ない。また、小夜の場合分かったところで、決していいことでない可能性も大いにあり得るのだから尚のこと質が悪い。

「小夜」

そんな不安に駆られる小夜が分からぬ凍夜ではない。

「はい？」

凍夜に呼ばれて、神埜に向いていた視線を凍夜に向けなおす。

完全に神埜に意識が向いていたため、凍夜の動きに気づかなかつた。

コツンツ

「大丈夫だよ。僕はどこにも行かないから」

目の前には凍夜の顔があった。

振り向いた頭に軽く手を添えて、額をつけて優しく囁かれた。

小夜は、神埜の発言に対して表情を変えたのは一瞬だけのことで、それ以外は表情は崩してはいない。

端から見れば、ただ目の前で行われた告白（じみた発言）に驚いただけにしか見えない筈だが、凍夜にはそんな表面上の取り繕いなど無意味だった。

いつもは人目も憚らずにじゃれつく小夜をやんわりと宥めるのが凍夜ではあるが、無論、小夜が平常ならすることもないがときどきこうして不意打ちをしてくることがある。

流石の小夜も凍夜からこういったアクションをされると弱い。凍夜が顔を離し、すわり直す間に、顔はみるみる内に真っ赤染まり、先ほどまでの懸念などどこかに行ってしまった。

「貴方がシスコンってのは、ホントなのね……」

それを見ていた神埜は、呆れながらではあるが、若干の怒気も感じられる言葉を発し、凍夜は苦笑いを返すしか出来なかった。

「 ああ、そうだ。紹介しますよ。確か二人は顔を合わせるの初めてですよね? 」

自分でやっておいて、大いに照れている凍夜が、早々の話題変換をはかった。

「 こっちは、妹の小夜です 」

先ずは神埜に小夜を紹介し、小夜は神埜に会釈をした。

「 つで、こちらが蒼縁神埜さん。まあ、ある意味今更って感じでちよっと、微妙かな? 」

少し苦笑い気味の凍夜。それを小夜が否定する。

「 いえっ!! そのようなことはありませんわ。お兄様 」

そして、改めて神埜へと挨拶をする。

「 蒼縁様、凍夜の妹の小夜です。よろ 」

「 宜しくしないでいいわ。私、貴女のことは嫌いだから 」

一蹴されてしまった。踵を返して、平然と自分の席（凍夜の後ろ）についてしまった。

凍夜のお陰で完全に立ち直っていた小夜だが、この神埜の態度に流石に呆けてとってしまう。

それは、小夜だけに留まらず、教室にいる全員に言えることだ。

沙樹は兎も角、その他の皆は蒼縁神埜という人物を知らない。

最初の切り出しが凍夜との会話となると、第一印象は普通に映るだろうが、実際は凍夜が特別で小夜への態度が 普通は嫌いではなく、興味ないというので、小夜への態度はキツイ方に当たるがどちらかと言えば、神埜の普通に当たる。

困ったものだな、と凍夜は苦笑いするしかなかった。

苦笑の先の小夜は、同じような顔になり、自分は大丈夫だと答えた。

「 ねえ? 凍夜 」

後ろから、神埜が声を掛けてきた。

「 はい? 」

自分の席に座り、改めて気になった事があったのだ。

「貴方、あの娘に『お兄様』って呼ばせてるのね」

「ええ、まあ……」

改めて言われると、やはり気恥ずかしい。

「ふふっ、いいわね。実に面白いわ。それ」

小夜はもちろんのこと、沙樹も振り返って神埜を見ていた。

確かに一般家庭でこんな呼び方をする様な兄妹は、かなり珍しいだろう、だが彼らは日本における最高クラスの上流階級なのだ、茶飯事とまではいかないまでも、それほど好奇とも言えない筈だが、神埜は本当に楽しそうにしている。

そして、思いにも寄らないことを発した。

「ごめんなさいね。さっきのは訂正するわ。どうやら、貴女には好感が持てそうよ」

訳が分からないが、神埜の中で小夜に認識が変わったらしい。

だが、尚も言葉は続く。

「貴女が、その言葉の本当の意味を知るときが、実に楽しみだわ」
と、小夜に意味深なことを言っただけだ。

発した本人は、実に楽しそうではあるが、とてもそんな雰囲気でないことは、誰にでも分かった。

悪意を込めて発せられた、そういう言葉だった。

小夜が神埜を知るように、神埜も小夜を知っていた。

自分と似た存在として、似た境遇を持つ者として、同じ悲しみを
知る者として、許すことの出来ない相手として。

14・沙樹の覚悟

教室の中には気まずい雰囲気か漂っていた。始めは、紫司への疑念だったのだが、今では神埜の態度にだ。

そして、その中であつて実は一番気を重しているのは沙樹だった。彼女は、被害者（？）たる小夜を覗き見て、一応表面的にでも落ち着いているのを確認して安堵する。

もし万が一にでも心に何か引つかかるものがあつたとしても、先ほどまでのことを鑑^{かん}みるに、凍夜がいればそれも大丈夫だろう、ということも見て取れたので、小夜に関しては問題ない。

だが、クラスの雰囲気はと言えば実に如何ともし難いがたい感じだ。

沙樹がここに来た　こされられた理由、それは正に今の様な状況のためなのだ。

神埜は六年前から学校という組織に関与していない。

これは非登校という意味ではなく、その必要性がなくなったという事に他ならない。

魔法家系は、基本的に家業をつくことが多い。四大柱となれば尚のこと、それ以外の選択肢というものがないのは当然の話である。

学校という組織は基本的には、就職のための組織と言つてもいい。そこで学ぶ知識は、前途ある若人たちに、より多くの選択肢を用意するためにあるものだ。

従つて、もう既に決まつていたのであれば、わざわざ余計な知識など覚える必要も、余計な時間を費やすことなどない。その様な時間があるなら、家業を継ぐのにより相応しい者へと育てた方が効率がいいのだから。

神埜もそう言つた理由から、次期蒼縁の頭首たらんとするために、小学部の三年生夏休み以降から学校へは通つていなかった。

故に、長年同世代との交流もなく、更に性格がキツイ神埜を補佐

する様にと沙樹が呼ばれたのだった。

しかし、実際のところ沙樹にはどうすることも出来ない。

いくら沙樹が社交性に優れている部類の人間とて、クラスの殆ど凍夜が居なければ、知り合いは皆無だった。初対面の中で、この凍結姫とうけつひの異名を誇る神埜を養護出来るほど、沙樹の精神は強くない。いや、寧ろ沙樹は人一倍に繊細なほうだ。

幼き頃には両親の教えのもと、衆家という自分の家系を誇って公言していた沙樹だが、大きくなるにつれそれは次第に重荷になっていった。

四大柱の存在とは、いろいろな面に置いて絶大だ。例え、末端の家柄で宗家との関わり合いなど皆無だとしても、蒼縁の衆家という肩書きは実に強力な力を発揮する。

子供を使つて取り入ろうとする大人たち、大人の道具として使われる子供たち、これらは沙樹を苦しめることしかしなかった。

幼き頃は、友達はたくさんいると思つていた。でも、実際のところ本当の友達と呼べる存在はいなかったらしく、長い付き合いのものには誰もいなかった。

小学部の高学年のときに、自分ではそれなりに仲の良かったと思つていた友達が言つていた言葉は、今でも沙樹にとってはトラウマだった。

良くある話だ、偶々忘れ物をしてそれを取りに返つた教室で、その友達が誰かと話しているのを聴いてしまったと言うものだった。

『沙樹ちゃんは、良い子だけど一緒にいると疲れるから、ホントはちょっと嫌なんだよね〜』

『なら、なんで一緒にいんの？ お前らいつも一緒じゃね？』

『だって、お母さんが『あの娘とはずっと仲良くしてなさい』って、五月蠅おんじいんだもん！』

『うわー、それヒデー。オレ、そういう付き合いだけはしたくねえーなー』

分かってはいた。自分がずっとそういう対象だということは分かっていた筈だったが、やはり実際に言われると傷つくものだ。

高学年とは言え、まだ小学生の少女だ。辛くないわけがない。

それ依頼、沙樹には自分が友達だと思っ様な相手はいなくなってしまう。

しかし、この年頃の女の子が教室で一人きりというのも耐えられるわけもなく、表面上の付き合いの友達と小学校を卒業した。

中学は、指定学区とは別の中学校に通うことにし、もう自分が蒼縁の衆家であるということを言わないと決めた。

中学校では、普通の友達が出来た。最初こそ、良家の息女としての振るまいで、多少は敬遠された感はあるが、それでも沙樹の人柄と馴れた相手なら、徐々に砕ける態度に皆自然と馴染んでいった。

衆家ということを隠すことで漸く手に入れた本当の交友関係、それを沙樹が大事にするのに、特別な訳なんてものは必要ないだろう。だが、高校入学前の春休み唐突に告げられた十二校への転校。そして、その理由

それを聞かされた沙樹は、話が終わった後自分の部屋で、泣き崩れてしまった。

もう、高校生にもなるというのに、泣いてしまう自分が恥ずかしいという思いはあったが、だからといって涙を止めることはどうしても出来なかった。

然も、今度は蒼縁の令嬢の補佐をしるというのだ。

今まで、肩書きだけで友達が出来なくなったというのに、今度はその比ではない。

多分今度は自分に私語を持ちかけるものすらいなくなるのでは？
っという思いもあった。

そして、それを思うとまた泣いてしまい、結局春休みは泣いて過ごしたも同然になってしまった。

そんな彼女だ。おいそれと、わざわざ自分を窮地きふちに追い込むよう

なマネは出来ないでいた。

神埜の所為でクラスの雰囲気が悪されたのならば、それを修復せねば成らない。それが、沙樹に与えられた仕事だ。

だが、沙樹は動けずにいた。動けるわけがなかった。

ガツガツガツと、椅子を引く音が、静まり返った教室に鳴り響いた。

その者は、クラスの全生徒の視線を集めて、教卓に立つ。

「皆さん、初めまして。先ほど全校生徒の前で紹介されましたが、改めて自己紹介させていただきます。紫司凍夜です。宜しく願いします」

そういつて、凍夜は一礼した。

「本来この時間は、担任教師の方がいらしてからの、HRの筈ですが、なかなかいらつしやらない様ですし、少々教室の中の雰囲気も重いものがあるので、その責任の一端に、間違いなく僕という存在があると思いますので、僭越ながらこの場を仕切らせて頂きます」

一応、教室を見回すが、特段なんの反応を見せる者もないのを確認して、言葉を続ける。

「とはいっても、無責任ながら何か良い案があるわけではありませんせん」

自身の事ながら、流石に自嘲混じりの苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ですので、取り敢えず僕に対する質問でも受け付けようかと思えます。ですが、先ほど体育館でありました、能力向上教育プログラムという政策については、残念ながら、僕も先ほどSHRの後のときに聴かされたばかりですので、詳しいことはわかりません。なので、僕個人に関する事、家のこと、僕に分かる範囲でなら、魔法のこと等も答えますので、何か質問がある方はいますか？」

正直ないだとうと思っていた。実際に訊きたいことはいろいろあるだろう、だがそれをいざ本人に言えるか？ と言えば、普通は無

理だ。

だが、一人の女性徒が高らかに手を挙げていた。

凍夜は、どうぞと促した。

「あたしは、森川麻里奈もりかわ まりな。森川は、前の席の（双子の）弟と同じ名字だから、麻里奈と呼んで。

それで、質問はなんでもいいの？」

取り敢えずは、質問する内容を確認するための質問が来た。

「ええ、大概のことなら」

「じゃあ、貴方たちって付き合っているの？」

「おいっ！！ 馬鹿よせっ！！」

先ほど紹介された弟の方が、『何言ってやがる！』と言った表情で、姉の方に勢いよく向き直り、座らせようとした。

「何すんのよっ！！（怒） いいじゃない、本人が何でもいって言ってるんだから！！」

「そういう問題じゃないだろ！！ 常識的に考えろっ！！」

と、双子が口論を始めてしまった。

「森川くん、大丈夫ですよ」

苦笑い気味の表情で、弟の方を宥めた。

「お姉さんの質問にお答えします。念のため、確認して起きますけど、その貴方たちというのは、僕と彼方あつちの女生徒のことであってますか？」

凍夜は小夜の方を手でかざした。

森川弟は申し訳なさそうに、凍夜に一礼してから席についた。

「ええそう、その茶髪の可愛い娘」

「わかりました。僕と彼女は付き合ってはいません。彼女は僕の妹です」

それは知っている。

麻里奈は先ほどの雰囲気からするに、（ゴシップ大好きな）今時の女子高生と言った感じだ。そんな娘が、近隣中高で有名な小夜（の顔）を知らぬ訳がない。

「仲はいいと思いますけど、そういった関係ではありません」

事実ではある。そうではあるのだが、小夜としてはやはりもう少しくらいは色気のある答え方をして欲しかった、という思いが拭いきれない。

「貴方たちって、双子にしては似てないと思うけど？」

「だから、お前は直ぐそうやって、人のプライバシーに！！ 済みません、もう姉は黙らせませす、答えなくてもいいですから」

「たしなまたも、弟に窺められる麻里奈。

だが、これまた凍夜はあっさり、答えた。

「大丈夫ですよ。仲のいいご姉弟ですね（笑）」

僕たちは双子ではありません。僕は数年前に事故にあってしまったので、そのせいでこうして学年を落としているわけです。今年で二十歳はたちになります」

凍夜が年齢を言った時には、流石の麻里奈もばつを悪くし、そしてクラスの生徒が響めきたった。

「すみません、タメ口いきちゃって」

「構いませんよ。皆さんも僕の年齢は気にしないで下さい。中学のときも、クラスの大半はタメ口でしたから」

そうは言ってもこいこのは、なかなか上手くはいかないものだと凍夜は苦笑する。

「それでは、他に何かありますか？」

凍夜が次の質問を受け付けたときだった。

いつの間にか、教室の後ろのドアのところには、詠歌ともう一人の女性が立っていた。

「凍夜、もういい。場つなぎご苦労だったな。皆も済まない。少々遅れた」

詠歌は言い放ち二人は、教卓の方へと向かって行き、凍夜も自分の席へと戻る。

横を通り過ぎた凍夜に沙樹は声には出せなかったものの、感謝した。

凍夜自身にそのつもりはないであろうが、沙樹は助けられたと思っ
ている。

今のことだけではない。下駄箱で再会出来たときから思っていた。
高校三年間は友達が出来ないものと覚悟していたつもりだった。
彼はそんな自分を救ってくれたと、沙樹は勝手に分かっててもそ
う思わずにはいらなかった。

沙樹は自分の家柄を凍夜にも話してはない。

凍夜なら他の者とは違う反応をするのはわかっている。何せ凍夜
自身が四大柱なのだから。だが、それが吉とでるか凶とでるか沙
樹には分からない。だから、まだ打ち明けることが出来てはいな
かった。

勿論、凍夜は信用している。そんなことで、態度を変えるような
人ではないと思っている。

だがもし……でももしかしたら……、そのことが頭から離れない
トラウマというのは簡単には取り除けないものだ。

もし、打ち明けて、衆家の者だと知れたら……宗家にとって衆家
など使用人に等しい、自分の家と同格の家の使用人など気にとめる
ような相手でもない筈だ、それで凍夜の態度が変わってしまったら
……その思いが、どうしても抜けきれないが故に今まで言えな
かった。

だが、決めた。今日はこそは言おうと。

このまま黙っているのは、凍夜への裏切りだ、何と取り繕おうと
結局信じてないだけだ。

自分は凍夜が好きだ。だから、例え恋人なんていう間柄にはなれ
なくても、少しでも自分を知って貰いたい。沙樹は強くそう思った。
教卓の前には、初めて見る女性が立ち、その斜め後方に詠歌が立
った。

「皆さん、初めまして。来るのが遅くなって、済みませんでした。
先ほど詠歌さんからもありましたが、凍夜くんありがとうございました。
私がこのクラスの担任の田中理恵たなか りえです。宜しく願います。」

15・妹想い

誰も声には出さなかったが、皆疑問は抱えた。担任は詠歌ではないのか？と。

詠歌は飽くまでも外部講師だけであり、教員免許は持っていないのでクラス担任になることはない、今朝は凍夜に用事があったために、赴いただけだと理恵は説明した。

担任は旧時代はいろいろ苦労するものであったが、今の時代は何かあった場合以外にはあまり深く関わることもなくなった。

こうして直接教室に来るのは、行事のときだけで、後は机の端末からの連絡が殆どだ。

今の時代担任というのは、生徒が問題を起こしたときに対処する担当の教師というもので、生徒さえ問題を起こさなければ、担任より教科担当の方が会う機会が多い、という単なる肩書きのようになった。裏を返せば、そうでなければ問題の多いクラスということなので、いい事ではない。

国立に入る様な者たちだ、基本的に担任の手を煩わせる様な者も殆どいないので、偶に会話をしたことがない生徒がいたりもする。スラスラと必要事項のみを連絡して、理恵の話は終わった。

雑談の一つもないあたり、本当に顔見せ程度の感覚でしかない。「それでは、以上です。では、紫司先生後はお願ひします。生徒たちは話が終わった後は自由にさせて貰って構いませんので、チャイムが鳴るまでは教室にさせて下さい。私はこれにて失礼します」

理恵はそれを詠歌に伝えると、今度は生徒たちの方へと向き直った。

「皆さん、明日から頑張つて下さいね」

理恵は言い終えると教室から出て行ってしまった。

余談ではあるが、実のところ彼女はかなり緊張していた。本来ならもう少し柔らかい態度で話せたのだが、詠歌が後ろに控えていた

ために機械の如き態度しか取れないでいたのだ。

「では、改めて紫司詠歌だ。君たちとは、取り敢えずは一年、一緒にいろいろやって行くことになるので宜しくたのむよ。

一応私はこの学校全体の立て直しを目的として来てはいるが、最初の一年は君たちをテストケースにさせてもらうことになるので、君たちの魔法教科は私が担当することになっている」

理恵から引き継いだ詠歌はいつものペースで話しを進めていく。

詠歌が直接魔法教科を担当すると聴いて、生徒たちは今日何度目になるか分からぬ驚きを示した。当然だ、詠歌は日本でも十指に入る魔導師として知れ渡っている。その詠歌が直接指導するのだから、これ以上の機会はない。

「明日から早速、実技実習をやるので、体育着を忘れぬ様に。私からの連絡は以上だ。これで、今日は君たちは終了だ。チャイムまで後少しだから、寛いでいたまえ」

詠歌が話を終わらせると、生徒たちは今まで会話出来なかった分、一気に空気を緩ませて友人たちの元へと足を運ぶ。

詠歌は出て行くかと思われたが、窓側へと歩みを進めていく。向かった先は、小夜だった。

「久しぶりだな、小夜」

「お久しぶりです、姉上……」

詠歌は、年長の姉らしく妹を労るように優しく声を掛けが、小夜は顔すら合わせることもなく俯いたまま声を返した。

生徒たちは話をしようと足を運んだものの、詠歌と小夜のことが気になりそちらに注目しはじめた。

「あれからもう四年以上にもなるな……父上には会っているのか？」

「はい、月に一度は必ず宗家へ行く様にとお兄様から、いつつけられてますから」

「小夜、あの家はお前の家だ。行くではなく、帰るだろう？ それに、まだそんなこともみたいに、それを呼んでいるのか……いい加減、もうこともじゃないんだから、兄上と呼びなさい」

小夜はキツと目をつり上げ、詠歌を睨むために顔を上げる。

自分の、更には当人の目の前で、凍夜をそれ呼ばわりする姉。そんな姉を小夜は嫌悪している。

「お兄様は、お兄様ですっ!!! 兄上では有りませんっ!!!」
ガンつと机を思い切りたたき、立ち上がると同時に詠歌に向かって叫んだ。

聴いている教室の生徒には、たかだか言い回しの違いでしかない二つの兄を指す言葉、いったに何なんだと誰もが懐疑的な視線を向けている。確かにこの二つの言葉は同じ意味を持っている。だがしかし、世界でただ一人小夜にとっては、とても重要で、絶対の違いをもっていた。

「お手洗いに行きますので、失礼しますっ!」

小夜は、立ち上がった勢いをそのままに、駆けるよに教室を後にした。

「お優しいですね、姉上は」

小夜が出て行った教室で、凍夜が困ったものだという顔でもって、穏やかな声で詠歌に話しかける。

「嫌みか? どこをもつてそ

凍夜が、詠歌の言葉を遮る。

「優しいですよ」

眼鏡で凍夜の目を見ることは出来ないが、恐らく真剣な眼差しであることに間違いはない筈だ。詠歌はそう感じとった。

「でも、その優しさを分かり易く出してやらないと、本当に嫌われさせていただきますよ?」

「残念ながら、もう嫌われている。ならいっそ、そのまま貫きとうさねば、返ってあの娘が苦しむというものだろう?」

二人とも、苦い表情しか出てこない。

小夜としては好ましくない思いはあるが、詠歌と凍夜の仲は別段悪いということはない 寧ろ良好だと言った方があっていいるほど

だ。しかし、返って今はそれが小夜をより詠歌から遠ざける要因にもなってしまうていた。

始めは、勘違いや行き違い程度の些細なものだった小夜と詠歌の溝は、いつしか小夜を頑なにしていまい、結果加速度的に二人の溝を広げてしまい、今にいたる。

「話してしまった方が、お互い楽になる部分もあると思いますよ？」
「かも知れん。でも、あの娘には最後の最後まで、思うままに好きにさせてやりたいんだ」

暫しの沈黙が流れて、凍夜が感情の読み取れない抑揚のない声で、つぶやく様に、しかし詠歌の顔をしっかりと見据えた状態で尋ねた。

「貴女は僕を恨んでくれますか？」

最後の言葉は、隣の席の生徒でさえ聞こえない程小さいものだったが、詠歌には聞こえていた。しかし、詠歌は答ええない。答えることが出来なかった……

教室内で交わされる二人の会話は、当然の他の生徒には意味の分からないものだったが、小夜と険悪であると思われた詠歌が、実は小夜を思っていることだというのだけは、知ることができた。そしてこれは、他人が口だしすることの出来る話ではないのだと。

小夜が戻って来たのは、チャイムがなってからだった。とは言っても、ほんの数分しか時間は経っていない。

そして、教室の中にもう詠歌はいない。

一応、教室を見回してそれを確認した小夜は、迷わず凍夜のところへ来て、深々と頭を下げて謝ってきた。

「お兄様。お見苦しいところをお見せして、申し訳ありませんでした」

あの後直ぐ詠歌は教室を出て行き、教室の中はこのときやっと雑談を興じる生徒で賑わうことになった。

話始めれば話題は山の様にある、堰を切ったように皆雑談に夢中で、もう放課後なのだから、帰ってもいいのだが、そんなことは眼

中になかった。そんな中、小夜に気づいたのは、ほんの数名だけだ。凍夜はそんな小夜の頭をあげさせると、立ち上がって自分の胸で抱き留めた。

そして、それを見ていた一人である沙樹は、最早これがこの兄妹のデフォルトなのだと理解し、半分呆れ果ててしまっていた。

16・お花見の誘い1

「落ち着いた？」

まだ、胸の内に在る小夜に優しく問いかける凍夜。

「ええ、もう大丈夫です。またお手を煩わせてしまって申し訳ありませんでした、お兄様」

そういつて小夜は凍夜との距離を少し空けた。

時間にして僅か数十秒の抱擁だったが、凍夜にとっては小夜を持ち直させるに十分な時間だった。

「よしっ！ それじゃ、そろそろ行こうか？」

「はいっ！！」

ポンツと、左手を小夜の頭にのせて、少し声の調子を上げて行動を促す。そう、もう放課後なのだから、いつまでも教室にいることの方こそおかしいのだ。

先ほどまでは、詠歌のことで失念していた小夜は、凍夜の言葉でこれからの予定のことを思い出し、待っていましたと言わんばかりの、正に天真爛漫というに相応しい実に晴れやかな笑顔をもって返した。

二人の帰る素振りを見た沙樹もハツとする。

このままでは、凍夜が帰ってしまう。だが、何と声を掛ければいいのかまだ考えてはいなかった。

言う覚悟は決まった。今のこの思いは、絶対に今日伝えたい。

自分の中でのタイミングを逃して時間が空けば、その後はきつと言えなくなってしまうから。しかし、それをどうという状況で言いかとなるとそれはそれで難しい。

今帰ろうとしている二人を引き留めて時間を取らせてしまうのは憚られるし、かと言って沙樹にとっては忙せわしくなく話せるような話題でもない。

ファミレスにでも誘って見るかとも思うが、もしもの場合、自分

が大衆の真っ只中であとうと毅然^{きぜん}とした態度をとれる自信が持てない。

もしものことを考えているあたり、本当は信用してないのでは？
　　と周囲からは思われるかも知れないが、トラウマとはそういうものだ。そう簡単に割り切れるものではないし、もしそう出来ていたらならば、そもそもトラウマなんぞにはなっていない。

だが、もしものことを考える余りに明日からの対応をどうするかという思いに至るほどには達していないので、そのくらいには凍夜への信用はあると見て取れる。

「中島さんは、これから用事つてありますか？」

「えっ？」

秒数にして5分^ぶという程度の時間ではあるが思考していた沙樹は、凍夜の言葉の意味を脳がまだ正しく処理出来ておらず、反射をもつて返した。

「これから、お花見に行くところなんですけど、一緒にどうですか？」

願っても無い機会だ。

花見というなら間違いない場所は外だ。ならば、万が一にも自分が取り乱しても、即座に駆け抜けてしまえば、凍夜に惨めな姿を晒さなくても済む。

そんなネガティブな思考も逡巡駆け巡ったが、単純に凍夜からの誘いというものに嬉しさが込み上げてくる。

「お花見ね。ええ、喜んでっ！！」

勿論、了承するに決まっている。そして、ここで改めて　まだ愛のではないが　告白するのだと、決意を改にした。

小夜としては、当初の予定としては二人きりでということだった　誰かを誘うという発想すら無かった　ため、凍夜と二人きり

での花見ではなくなってしまうことに残念な気持ちが無いと言えば嘘になるが、沙樹であるならば、今朝の話の続きを聴けるであろうと、それはそれで楽しみでもあった。

すると、そこへ思いも寄らぬところから、声が掛けられた。

「はいハイ！　それっ！！　あたしたちも一緒に行きたいっ！！」

麻里奈だった。

例によつて弟の方は、姉の突然の申し出に茫然自失といった状態に陥っている。

凍夜たちの席が、教室の外の窓側から二列目（沙樹が三列目）で、麻里奈たちの席は廊下側の一列目と、間に机を二列挟んでいるため少し距離が離れているし、教室の中は今や雑談で賑わっていて、偶然でも凍夜たちの会話が聞こえる様なことはまず無い筈だ。

だが、故意に聴こうとすれば聞こえないわけではない、そう飽くまで故意になら。

始めは　物理的にも心情的にも　距離があつたので、こちらへの話の介入なのが分からなかったが、麻里奈が席を立ち凍夜たちの元へと寄つて来ては、

「どう？　あたしたちも一緒に行っちゃダメ？」

つと、改めて参加の希望を申し出てきたのだった。

『たち』ということなので、当然弟も同伴ということだろうが、その弟の方とは言え、今漸く意識を取り戻したようで、姉の急な申し出の事態について行けていない様子だ。

「僕は構いませんよ。小夜と中島さんは？」

「私も構いませんわ」

「私もいいわよ」

二人も賛同する。

小夜にしてみれば、二人きりでないのなら最早関係ない。だが例え沙樹のことがなかったにせよ、凍夜が了承しているのに、自分が反対するという選択肢がそもそも小夜には存在しなかった。

「ということ、こちらは問題ありませんけど、森川くんは鳩が豆鉄砲を食つたような状態になってますけど、大丈夫ですか？」

凍夜の対応は冷静だ、小夜と沙樹の意志も確認して、麻里奈へ返

答した。

森川弟の状態に関しては流石に、哀れみの苦笑が浮かぶ。

「いいのよ。あいつはあたしが行くって言えば、付いてくるから。もし、付いてこなくても、置いてくだけよ」

今の会話の間に、森川弟はこちらの席まで（麻里奈の分も）鞆を持って移動してきた。

「ああ、行くよ。行くに決まってるだろ。これ以上、我が家の恥を暴走させられるわけないだろうがっ！」

「ちよっと！！ 誰が恥じよ！！！ アンタお姉様に対して何その口の利き方はっ？」

「誰が『お姉様』だ？ ホンの数分早く生まれたくらいで、そこまですべき態度される謂われはないっての。もし、そう呼んで欲しけりゃ、それこそ凍夜さん見たいな大人の対応つてもものをして見せるよ？ つと、そうだ」

「（そこで紫司さんを引き合いに

森川弟は自分で言った言葉で気づいて、凍夜たちの方へと向き直り、（麻里奈の言葉を無視しながら）礼儀正しい挨拶を始めた。

「（出すのは、卑怯なんじゃない？）先ほどから姉が重ね重ね失礼しました。（あたしと紫司さんじゃそもそも、）名乗りが遅れましたが、僕は麻里奈の弟の智之としゆきです。（歳が違うでしょうが？）姉が申しました通り、森川では分かりづらいので、下の名前で構いません。（つて、あんたはっ！！！！）宜しく願います」

これに対して、麻里奈は聴けつと、自分の背よりも高い弟の耳を引っ張りながら、抗議をするが、智之はそれでも尚完全無視だった。「僕の方も、いきなり馴れ馴れしく『凍夜さん』などとお呼びしてしまいました。宜しかったですか？」

そう凍夜を呼んだときの呼び方に伺いを立てる。

「ええ、構いませんよ。この教室には、紫司も二人いますから」
凍夜は小夜の方に視線を流す。智之も小夜の方に顔を向けた。

小夜は、智之へ会釈をして、智之もそれを返し、無言ながら挨拶

を済ませた。

「それに、呼び捨てでも構いませんし、敬語でなくても大丈夫というよりは、どちらかと言えば普通に話して頂けた方が、僕は楽ですね。ただ、相手方にこう言っただけ置いて失礼ながら、僕はこの話し方が標準になっているので、直すというわけにもいかないのです、そこは了承して下さい」

「分かりました。言葉遣いは、いきなりとは行きませんが、善処します」

「では、宜しく願います」

凍夜が智之に右手で握手を求め、智之を握り返した。

その間、智之は麻里奈にいろいろ横やりを入れられていたのだが、見事な無関心振りだった。

双子というだけあって顔たちは似ているのだが、結構な身長差や振る舞いを見るに、どちらが上か下かが分からないと言った感じだった。

凍夜と智之の挨拶のあとは、皆順々に挨拶をしていき、簡単な自己紹介が終わった。

それぞれの呼び方として、

凍夜は、森川姉弟の呼び方を名字に、姉の方をさん、弟の方をくん

小夜は、姉を麻里奈様、弟を森川様。

沙樹は、凍夜同様に森川さん、森川くん。と呼び、

麻里奈は、凍夜を紫司さん、小夜を小夜さん、沙樹を中島。

智之は、凍夜さん、紫司さん、中島さん。

つと、なんとも 実際になんか初対面の人間丸出しと
いった感じだ。

麻里奈あたりは、沙樹を名前で呼ぶのかと思っていたが、以外

最初の印象に比べればの話 とかたく、名字で呼んでいた。(それでもいきなり呼び捨てなので、別にかしこまってもいい)

自己紹介も終わり、そろそろ行くのかと思いきや、凍夜が以外なことを申し出た。

「後二人お誘いしたいんですけど、いいですか？」

二人とは誰なのか、皆が疑問に思う。

一人は、神埜だろうということとは考えられる。しかし、もう一人は誰なのかは、全く検討もつかない。

「お兄様が、お誘いになるのであれば、私は構いません」

「私も。別に」

「あたしも」

「オレも」

小夜、沙樹、麻里奈、そして最後に出てくるところから口調を直し始めた智之が同意の意思を示した。

皆一人は神埜だろうという予測がある。

沙樹は、神埜には出来れば近づきたくないという思いがあるが、今はそんなことを言える。元々嫌と言える性格でもないが、場面ではない。

他の三人は、神埜にいい印象はないが、凍夜が誘うならそれも致し方なしといったところだ。そして、それよりも凍夜があと一人誰を誘おうというのが気になっていた。

17・お花見の誘い2　く脱線・破面・破顔く

予想通りに、一人目は神埜だった。

神埜は自分の席に座り、右手で頬杖をつきながらその隻眼ですつと凍夜たち（ほぼ凍夜のみ）を見ていた。

そんな神埜へ、凍夜が声を掛ける。

「蒼縁さんも一緒に、お花見に行きませんか？」

「私はいいけど、ホントにいいわけ？　他の連中はきつと私を煙たがってるわよ？　特に、貴方の大事な大事な妹さんとかね」

わざと聞こえるように、そして棘のある言い方をする。

凍夜も神埜のこの態度には参ったと苦笑いするしかないが、だからと言ってこのままにもしておけない。

「僕との約束は守って頂けるということだったと思いますけど？」

「あら？　約束を違えた覚えはないわ。その娘のことは、単純に嫌いなだけ。まさか、万人を好きになれなんてことまでは言わないわよね？」

「勿論ですよ、その思いにまで干渉する気はありませんから」

「では何かしら？」

神埜は凍夜との約束を思い出す。

しかし、思い当たるものがない、強いて言うなら一つそれに当たるかも知れないが、それは凍夜が最初に認めている。だからこうして会話しているのだから……………

「なんのことが分からないわね。もしかして、最初の話しかけた時点でホントは怒ってるわけ？」

「まさか、そんなことはありませんよ。そんなこと出来るわけないじゃないですか。僕が言いたいのは、自分を傷つけるのに、他人を使わないで欲しいってことですよ。言っている意味、分かりますよね？」

意味は分かった。分かっていた。この存在ならそういうことを言う

と思っていた。

しかし、出来ないものは出来ない。意志や理性の問題ではない、感情の問題だ。

神埜は自身の感情を制御出来るほどに大人ではない。故に、それを言われたところで神埜自身にはどうすることも出来なかった。

凍夜の言葉を受けて、神埜は俯いていた。神埜の蒼髪が前に垂れ下がり、その表情は全く見えない。

更にそんな神埜に、凍夜は腰を折り身を屈めて、耳元で神埜以外には聞こえない様に囁いた。

それを聴いた神埜は、更に頭を低く落とし、手は強く握り締めていた。まるで、何かに耐える様に。

そして神埜は俯いたまま、低く重い声で凍夜に問う。

「一つ訊かせて？」

「何ですか？」

「そんなに妹が大事？」

「ええ、とても大事ですよ。なにせ、僕はシスコンってことで通ってるくらいですからね」

「つと、最後は戯けた調子に言っただけだ。」

「フフフフ……」

神埜は俯いたまま、小さく笑っている。凍夜にどう映っているかは分からないが、それ以外の者にははつきりいって（神埜が感情的になって、何かするのではないかという不安から）不気味でしかない。

「頻り笑い終わると、顔を上げた神埜が凍夜に質問する。そして、その顔からは、今までの凍り付いた険しさが抜けていた。」

「それと同時に、言葉遣いまでもが変わっていた。」

「なあ？ それって、さっきあたしが言ったことへの仕返しなのもり？」

「さあ？ どうでしょう」

「そうか。まさか、アンタから正面切って言われるとは思って無か

ったな。こいつは驚きだ。分かったよ、妹想いな『お兄様』に免じて、今までの態度は改めることにするさ」

声も今までよりもワントーン高くなり、抑揚をも伴っている。

それは、まるで今までののが感情を押し込めて発される演技の様に思える程（というよりは、事実演技だった）に、とても自然な声と表情だった。

それを、見ていた（沙樹を含む）周りの反応は、『何か、キャラが変わってるんですけど……』というものだった。

神堃は、立ち上がり小夜の前へと立つ。

「紫司、さつきは悪かったな。悪意があつてやったことだから、許してくれなくて良い。それに、あたしがお前を嫌いなのは、本当だ。でも、もうあんな真似はしねーよ、そいつは約束する」

神堃は小夜に謝罪し、小夜もそれを受け入れた。

「大丈夫です。私も気にしてませんから」

これで、今後の関係も少しは良くなるだろうかと誰もが思っていたが、

「そうか、ならいい。あつ、そうそう。凍夜はいずれ貰うから、そのつもりでなっ！！」

という、神堃のあまりにもあつさりとした発言に小夜は凍り付いた。

始めに感じた恐怖ではない。兄を失うかもという恐れではない。

これは単純なる嫉妬だった。小夜の表情が、張り付いた笑顔のままではあるが、怒気が含まれていた。

「蒼縁様？ お兄様は確かに私のお兄様ですけど、だからと言って私の所有物ではありませんので、貰うなどと言うことを私に宣言されても困りますわ」

顔には出ていないが、内心では激昂に近い。

「そうか、じゃあ、アンタに一々お伺いを立てなくても、凍夜はフリーってことで、自由に誑たらし込んでいいってことだよな？ 最大の難関はアンタって小姑だと思ってたけど、そいつは僥倖ウラウラってもんだ。

なるほど、自分の分を弁^わえたいいい妹だな」

これには、流石の小夜もその顔に感情を露わにして、反論する。

「っ そういうことを言っているではありませんっ！！ 私はお兄様に誰かが触れることなど、毛頭許すつまりなどありませんっ！！」

つとここまで言い切つて、小夜は自分の墓穴に気づいた。

これは紛う事なき愛の告白だ。

小夜は態度でこそ傍目からでも分かる程凍夜への心酔振りを表してはいるが、実は言葉ではとなると話は異なってくる。

小夜はこれまで、恋愛感情を込めて凍夜に好きの一言すら言つたことがないのだ。

これは、言葉にすれば想いに歯止めが効かなくなるだろうことを恐れて、今まで意図的に飲み込んできた言葉だった。

いくら心中では、愛していると想つても口にしたことなど一度もなかった。それに、今まで凍夜に誰か好意の女性がいてもいいとさえ想っていた筈なのに、実際口に出てきたのは独占欲丸出しの言葉だったことに、小夜は自分自身に愕然とした。

小夜の顔は刹那にて真つ赤に染まった。両手で顔を覆い俯き、泣きそうになる自分を抑えるのに必死で、凍夜の顔などとても覗くことが出来る状態ではなくなっていた。

その事態に今度は周りが混乱する。それはそうだ。小夜が凍夜のこと好きなのは、今日この場いれば否が応にも知れようというもの。

それを、改めて宣言したとて、誰も不思議に思うこともないのだが、それとは逆にそれを言った本人がいきなり羞恥心に苛まれていたというのだから、理解に苦しむ。

そんな小夜の正面に凍夜が立つと、小夜は顔も上げぬままにその胸へと飛び込んだ。そして、凍夜はまた優しく抱き留める。

しかし、今度は右手は腰に回しより強く小夜の華奢な身体を引き寄せ、左手は小夜の腰まである長い髪を、頭から背中にかけてゆっ

くり撫でてゆく。

「言ってるそばから、小夜を泣かせないで下さいよ」

「今のは、そいつの自爆だろ!? あたしは何にもしてないだろうが!!」

「ハハ、そうですね」

凍夜がこの場の雰囲気をかきかしてみせた。

そして、流石に今度のは少々時間がかかると凍夜は思った。

小夜は、凍夜の胸の中で自分の半端差に嫌気が差していた。

本来、こういうことでは凍夜に頼っては行けない、でなければ、自分はいつか凍夜との約束を違えてしまいかも知れないのだから、しかし飛び込んでしまった。

凍夜の胸に、愛してはいけない愛する者のその胸に。

だが、どう思っても抗えるものでは無かった。その温もりを、その優しさを……

18・お花見の誘い3

小夜は凍夜の腕の中で、凍夜の鼓動を聴きながら、なんとか自分の想いを押さえつけるために、凍夜の身体へと両の手を回し、本来なら苦しみを感じてしまう程にきつく抱きしめ、凍夜の胸へと自身の顔を押しつける。

泣いては居なかった、自分でも何かは分からないが、ここで泣いてしまつては自分の中で決定的になつてしまふ気がしたから。

そして、今朝からのことを思う。

朝はいつも通りだった、登校は初めて凍夜と一緒に登校して凄く楽しかった。ここまでは、いつも通りの自分だった。

しかし、校舎に入つてから沙樹と凍夜のやり取りと見たときからずっと調子が狂いつぱなしな気がする（別に、沙樹を悪く思つてゐるわけではない）。

確かに、凍夜と二人で誰かに会う機会というものがそもそも無かつたのだから、若しかしたら、今までの生活の方が異常だったということはありえる。でも、たった数時間の間に自分がどれだけ取り乱したかを考えれば、今日はやはりおかしい。

日が悪かつた、偶々自分が感化される事態が重なつてしまつた、その程度であつてくれればいい。

だが、もし今後ずっとこの様な事態が続いたら……、果たして自分はこのままの凍夜との距離を保つことが出来るのだろうか？　つと、不安がよぎる。

普段から感情の起伏が激しいわけではないだけに、今日の今までの間での度重なる躁鬱により不安を抱いていた。

凍夜と二人きりのときはずっと躁状態（それはそれで問題ありなのだが……）なので、鬱になる機会は限定される。加えてそれは、前もつての覚悟を決めてから望むことが殆どだったので、ここまで

落ちることはなかっただけに、尚更といえた。

今は取り敢えずでもなんでも、構わなかった。兎に角、一時的にでも自分のところが落ち着いて欲しかった。

小夜の内心など知らぬクラスのものたちは、『またか』っという思いに嘆息する。

そして、今度の抱擁は先ほどまではホンの一時いっときであったのに、既に2分も経っている。周囲としては、いつまで続くのかと呆れるしかなかった。

そして、クラスのものたちだけならいざ知らず、A組の廊下にはいつの間にか、人集りが出来ていて、そこからは、凍夜に対して（主に男子からの）キツイ視線が注がれていた。

就業のチャイムがなってから、即人集りになっていたのだが、皆外に出ることもせず、興味は教室内に集中していたため気づいたいなかった。

勿論狙いは、四大柱の三人　元い、見目麗しき二人の美少女の小夜と神埜である。

故に、その内の一人である小夜を独占しているのだから、いくら兄たる凍夜といえど許せる所行ではなかった。

そこへ、大声で人を掻き分けて教室へと入ってくる二人組がいた。

「はいは〜い！！　皆さ〜ん、生徒会長代理様のお通りです！

！！　道を空けてくださ〜いっ！！」

草尾副会長の声だった。

「ちよつと、草尾くんっ！！　わざわざ私をダシにしないでよねっ

！！！！」

「いいじゃないですか、細かいことは気にな〜い、気にしな〜い」

清水としては、こんな（性格の）人間が、総合主席　全教科にて主席なので、正に真正正銘の学年主席であり、それも入学時からそして（国立魔法学校）全校でも六位というのだから、納得がいかない。

国立生の目標の一つたるソフトアップを蹴つてのけるあたり、ど

ういう神経をしているのはが、本当に理解出来なかった。

そんなやりとりをしながら、草尾が飄々と、清水がこめかみをおさえいかにも悩ましげなポーズを取り、教室に入ってきた。

そして、二人は凍夜と小夜の状態に絶句する。

暫し惚けてからやっと言葉が出てきた。

「流石のオレも驚きだな」

「ホントね」

「まさか、こんな白昼堂々こんなことするバカップルが、お前ら以外にもいたなんて……」

二人の驚きの観点は別のところにあつた。

「つて、お前らつて誰のことよ!!!?」

反応してる時点で自覚してるじゃないかと、からかいながら返す草尾。

清水にして見れば、ここまで酷くないとのことだが、どうにしろ端迷惑なことに変わりはないと、草尾は今度は思うだけにして、言葉にはしなかった。

「しかし、まあ……これは、やりにくいな……」

「そうね。どう声をかけたものかしら」

そうはいいつつも、二人へ歩み寄っていく生徒会員の二人。

だが、丁度そのとき小夜が凍夜から離れた。別に二人に気づいたわけではなく、単にタイミングが良かっただけだ。

二人（草尾）は、今が好奇と話を切り出す。

「ちよつと、宜し……いかし……」

「僕と付き合つて下さいっ!!!」

清水が、凍夜（たちの集団へ）と話をしようとしたその横で、草尾が小夜に交際を申し込んでいた。

お前は今何を見ていたのか？ という思いやいつもの病気が……など、いろいろ思うところはある清水だったが、今は何より、こいつと知り合いだという自分が何よりも恥ずかしく思えて来た。

開口一番交際を申し込んできた草尾に対して、小夜は誰なのかと

取り敢えず身元の確認を計った。

「失礼、貴女があまりにも愛らしかったので、つい心からの言葉を素直に出してしまいました。」

僕は、三年魔術実習専攻Bクラスの草尾毅たけしと申します。

慈善活動で本校の副生徒会長をやっておりますので、以後お見知りおきを」

つと、如何にもな自己紹介をやったのけた。

「草尾様、申し出はありがたいのですが、私は殿方との交際はまだ考えられませんので、縁が無かったものとお引き取り下さい」

小夜は、言葉遣いは丁寧だが不機嫌に、言い返す。

普段は、他人に不機嫌な態度をとることなどあり得ない話だが、タイミングがあまりにも悪かった。

単純にじゃれついていた後なら、面白い人だと笑って返していた筈であり、単に話掛けただけなら、普通の対応が取れた、がしかし、草尾のこのタイミングでの『告白』という行動が、小夜を不快にさせてしまい、今の小夜にそれを押し隠せるほどの余裕はなかった。

仕方ない状況ではあった、がだからといって、他人にそんな態度を取るような人間を凍夜は好まない、それを知っている小夜は自分の取った態度に嫌悪感を抱かずにはいられなかった。

凍夜はそんな小夜の頭にポンツと左手をのせて、軽く髪をかき乱すようになてた。

ガックシつと自分で効果音を発しながら項垂れて見せるが、別に小夜の返答や不機嫌な態度は関係がない。

草尾を知るものならば、ここまでが一連の挨拶ということになっている程に、茶飯事のことだった。

「紫司小夜さん。私は同じく副生徒会長で三年、魔術総合Bクラスの清水香里かおりです。」

不機嫌にさせてしまった様で、申し訳ないわね（苦笑）

彼の事は気にしないで、アレが彼の挨拶みたいな病気だから」

草尾の所為で、いきなり話の腰を折られてしまったが、気を取り

直して改めて話しを持ちかける。

「それでは皆さん、改めまして、副生徒会長であり今は不在の生徒会長の代理を務めている清水です。」

この度は、入学おめでとうございます。

入学そうそうではありますが、私たち生徒会は、紫司凍夜さん・小夜さん・蒼縁神埜さん、貴方たち三名を生徒会に勧誘に参りました。お時間宜しいかしら？」

「それは、校内でということになりますか？」

「あら？ 何か予定がお有りかしら？ 用があるのであれば、そちらを優先して頂戴、こちらはいつでも構わないわ。」

でももし、私たちが同行してもいいのなら、こっちは別にどこでも誰に聴いて貰っても構わない話だから、同行させて貰えらとありがたいわね。出来るだけ早い段階で決めてしまった方が、誰もためにもいいことだと思うから」

「ということですけど、皆さんはどうですか？」

凍夜は、皆に確認を取る。皆は、首を縦に振ることで了承の意を表した。

「では、皆さんの同意も得られたので、お話は道中や着いた先でということ、お願いします。行き先は、三谷美岡みやみおかの桜の園です」

「あら、お花見！ いいわね。分かったは、私たちは鞆を取ってくるから、後で正門前に集合しましょう。時間は10分後でいいかしら？」

「ええ、わかりました」

「それでは、また後で。行くわよ！！ 草尾くん」

おうよつと答えて、毅も香里の後に続いて教室を後にした。

「いきなり、生徒会に勧誘とは、流石は紫司と蒼縁ね」

つと、麻里奈は感心を露わにした言葉を発するが、智之がそれを窘めたたしな。麻里奈にそのつもりはないが、要は家柄で引き込まれたと言っている様なものだ。

そんなやり取り見た凍夜は、やはり良くできた弟だなと智之に感心する。

「なんか、事ある毎というか、何もなくても、どんどん人が増えてくわね。」

沙樹が楽しそうに凍夜に語り掛けた。

「中学のときもそうだったけど、シヅカちゃんってホントは人集めの呪いでも、使ってるんじゃないの？ 然も、絶対に魅惑系よね。」

「中島さん、それホントに洒落にならないんで、やめて下さい。」

沙樹は、中学のときのことを思い出す。凍夜の周りには常に人がいた。

しかしそれは、紫司という名に集まったのではなく、皆『紫司凍夜』という人物と共にあるうと集ったものたちだった。

最初沙樹は、そのことに嫉妬していたのだ。自分は、衆家という立場ですら友達を得ることが出来なかったのに、宗家の人間がこうも人を自分自身に惹き付けていることに。

しかし、気がつけば自分もその中にいた。そして、いつの間にか恋心まで抱いてしまっていたのだから。これは、本当に何かしているのではないかと思ってしまう。

凍夜も凍夜で、中学時代を思い出しているらしい、ここにいる沙樹以外が知らないエピソードをいくつか思い出しているのだろ。

凍夜は頂垂れ、沙樹は笑っている。

「さて、時間もありませんし、最後の方を誘ってしましましょう。」

凍夜は時間のことを気にて、早々に次の行動へと移った。

（そのときはまだ誘われて無かった神埜までを含めた）皆が、そう言えばっと思ひ出す。

神埜と凍夜のこと、神埜と小夜のこと、更には三人と生徒会のことですっかり忘れていた。

誰を誘うのだろうと誰もが思う。

凍夜は、沙樹の机の前を抜ける道で移動し始め、その動きを見て、神埜だけはその相手に見当を付けることができた。凍夜の止まった

のは、廊下側から二列目の一番前の席の前。

その席の男子の制服を着た生徒は、誰とも話しをしていない上に、端末をいじるなど何かをしていたわけでもなかった。

就業のチャイムが鳴ってから今は約20分ほど経っている、その間この生徒は帰る素振りすら見せずにそこに座っていたことになる。

凍夜が前にくると、訝しげに顔を上げた。

そんな生徒に、凍夜は迷わず声を掛けた。

「檜山さん、一緒にお花見に行きませんか？」

クラスの生徒の名前は机の端末で調べられる（が、普通誰もそれを見ない）、凍夜は最初にこの生徒が一人で教室に入ってきて席についた段階で、既に名前を調べていた。

「オレが？」

「ええ。無理にとはいいませんけど」

「何故だ？ あんたとは初対面だと思うが？」

「ええ、初見ですよ。理由は、僕側の至極個人的なことです。それも含めて、出来ればあなたとはお話がしたいと思いついてね。どうですか？」

「メンツはさっきの連中だけか？」

「ええ。もし、あなたの方で誰か誘いたければ、増えても問題ありませんよ？」

檜山はチラツと小夜たちの方に視線だけを流し、数秒の時間を思考に費やした後、

「迷惑じゃないのか？」

「つと、同行を前提とした質問を返してきた。」

「大丈夫ですよ。迷惑なら始めから誘いませんし、そう感じたら斬り捨てますから」

凍夜は、初対面の人間に対して普通は言えない様なことをサラツと言つてのけた。

これに、対して檜山は逆に快くしたようだった。

「クツ……ハツハツハツハ」

豪快ではないが、含みのない笑いだった。

「いいな、おまえ。気に入った。檜山修之^{のぶゆき}だ、宜しく」

「こちらこそ。紫司凍夜です」

修之が立ち上がり、二人は握手を交わした。

19・道なき道を行く

一同は、香里と毅との待ち合わせの場所へと向かおうとするが、まず教室からどうやって出るかが問題になった。

行く手には人集りが出来ている。それをいかにして突破するか？ というのが問題だった。

集まっているのは男子生徒が殆どなので、可能性としてはあまり高くないだろうが、不埒な真似をする輩もいないとも限らない。

失礼ながら顔が並の程度の女子ならそこまで警戒することもないのだが、何せメンバーがメンバーなのだ、警戒しなければならぬ。小夜と神埜は言うに及ばず、沙樹も十分に可愛いと言われる部類に入るし、麻里奈は双子ということとどちらかと言えば、可愛いよりは格好いいや凛々しいという表現が似合うが、十分異性を惹き付ける魅力的な顔だちをしている。ということ凍夜が表現したことにより女子二人は大いに舞い上がっていた。

始め麻里奈は、何かされる前に突っ切ってしまうればいいと言っていたが、それほど容易く抜けられるほど、密度も薄くはないし距離も短くない、無理矢理突破しようとすれば、野次馬側に怪我人が出る可能性もあるっと、智之に指摘された。

それでも、それは道を空けない野次馬が悪いのであって、自分たちに否は無いとして、反論する麻里奈。

幾つかの問答はあったものの、良い案が出ぬまま約束の時間をもっと少し過ぎてしまった。やはり無理矢理押し切るしかないのでは？と、麻里奈のみならず、皆が思い始めた。

だが、ここで『女の子に危害が及ぶようなことは、可能性のある時点で却下だ』と、凍夜が断固拒否した。

確かに女の子ではあるのだが、普通普段からそんな『女の子』扱いを受けることなどまずない、それを何の臆面もなく言い放つ凍夜に、（神埜以外の）女子たちは流石に気恥ずかしさを覚え、頬をほ

んのり朱に染めている者もいた。

余談ではあるが、小夜は常日頃そんな凍夜から女の子扱いを受けている。然も、なかり甘々に。しかし、だからと言って凍夜からの好意に狎なれることなど、小夜にはあり得える筈もなく、皆と同じ様な反応を示していた。

「じゃあ、さつきの生徒会の人みたいに、『どいたどいた四大柱のお通りだー！』ってのは？ これなら、安全じゃない？」

「馬鹿！ そんな真似できるかつ！！」

麻里奈の意見に智之が即座に反論する。

「なんでよっ！！ これならみんな退どけるわよ、何がいけないのよ！？」

「ならお前、自分の名前を誰かに叫ばせて、道を空けさせながら、その後ろを歩けるのか？」

「つつ……それは……」

智之の意見に麻里奈は絶句するしかない。

「無理だろ？ だから却下だ。済みません、皆さん。うちの姉がまた変なこと言って」

麻里奈の意見を智之が却下し、皆に頭を下げる。

森川姉弟と過ごした時間はまだほんの僅かな時間だが、最早このやり取りはもう既に見慣れたものと成っていた。

だが、悠長なことを言っていていられる時間はない。約束のたる十分という時間を更に十分ほど過ぎている。

「仕方ありませんね。では、空いてるところから出るとしましょう」
皆が懐疑的な表情を浮かべる。

廊下が空いてる隙間などない程に人で埋め尽くされているから問題になっているのだ。それを、空いているところとはいったいどういうことなのか？

「皆さんは、空間系・引力系・衝撃緩衝のどれか使えますか？ できれば、衝撃緩衝よりは他の二つの方が好ましいのですが……」
流石にこれを言われて分からぬものはこの場にはいなかった。

確かにそこなら空いていた。

しかし、問題がある。

「私は、どれも無理かな……一応、緩衝は使えるけど、今回は耐えられるかどうかは、流石にわかんないから……」

沙樹だった。

「わかりました。他の方は？」

他とは言っても、凍夜は端から小夜と神堃のことは気にはしていない。

「あたしらは平気。引力操作はよくやってるから、ね？」

「ええ、姉のキューブの練習によく付き合わされてますから」

「オレは衝撃緩衝でいける」

「わかりました。では、行きましようか」

そういうって、凍夜たちは外側の窓の方へと進んでいく。

そして、ベランダ出た時点で真っ先に修之が何の躊躇いも見せず
に、ガードレールを乗り越える様なのりで飛び降りた。

時間にして約1.5秒。その間に緩衝魔法を発動し、着地の体勢
を取り、無事にアスファルトの上に降り立った。

降りた先を見て見ればものが落ちた痕跡がない、きっちり衝撃を
相殺した証拠だ、大した演術力えんじゆつりよくである。

それに、なかなかの度胸だ、と凍夜は感心する。

いくら衝撃緩衝魔法を使うとはいえっても、（魔法科に通う）普通
の高一なら、高さと自己の重さから衝撃の計算を行い、チャージ（
魔粒子を活性化して待機した状態）し、発動させてから飛び降りる
ものだ。

それに、いざ飛ぶとなるとこの高さだ、魔法の施行が無ければ大
怪我・死傷にもなりうるのだから、躊躇われて当然の高さである。
沙樹のように、少量の不安でもあればまず出来るものではない。

自己の怪我を恐れて必要以上に力んで、地面に跡を残すのが、普
通の高一レベルだ。

そして、普通とはいっても、これは塾 といっても、どちら

かと言えば道場のイメージ　　やかなり有力な私立校に通っていた者の場合だ。

基本的に、中学までの魔法科は『魔法を使わない方法を学ぶ』ところであり、本格的に『使う方法を学ぶ』のは高校からということになる。つまり、今のこの入学式当日という時点で、これほどのことを平然とやってのけている修之は、かなり高いレベルといえるのだ。

続いて森川姉弟、まずは弟の智之がベランダの壁の脇の手摺りに立った。

そして、そのまま前に踏み出し、直角に回転してベランダの壁に垂直に立った。

そこから、ベランダ横の壁へと移動してから、姉の麻里奈を呼び手を差し出した。

麻里奈は修之の手を掴むと、足に力（極々微弱な強化魔術）を込めて、ベランダから飛び出し、智之がそれを引っ張って壁に垂直に立たせた。

「じゃ、あたしらも先降りるね」

と、壁を地面に向かって垂直に降りていく。

彼らが使っているのは、どうやら自概制御式じがいせいしきの引力系魔術のようだ。と、凍夜は看破する。

自概制御というのは自己中心性概念制御のことで、自分を（含む含まないは任意）中心に捉えて、周囲の概念的事象を制御することを差す。

つまりは、今彼らの中での世界では、彼らの足の着いた方向が地面という認識になる。

ただ引力で足を壁につけた場合には、身体は重力の働く方向に加重がかかるため、それを制御するのに、何通りかの方法があるが、結局どれも複数の魔法を使う必要があるのだが、自概制御はそれを意識することで、それらを複合した魔法を最適化した状態で、つまり一つの魔法として発動することが出来るというのだ。

もつとも、これは意識しなくても基本的に人間は自分を中心にもの事を捉えているので、当たり前ということにはなる。

実は魔法というのは、これらのように無意識的に様々な作用を用いて施行されることが多いのだ。だが、その原理を知ると知らないのとは、天と地程の差がある。

そして、彼ら（1・Aの生徒たち）は今後その事を凍夜から見せつけられることになる。

「お兄様、では一緒に」

小夜は当然とばかりに凍夜へと手を差し出し、一緒に降りることを促した。

勿論、沙樹も一緒にだ。本来別に手を繋ぐ意味はないのだが、そこは気分の問題である。

しかし、

「いや。僕は中島さんと二人で降りるから、小夜は先に降りてなさい」

「えっ？」

沙樹が素っ頓狂な声を上げてしまった。

「……分かりました。では、沙樹さんお兄様をお願いしますわ」

凍夜の言葉に、沙樹は驚き、小夜は内心かなり渋々ではあるが、凍夜の命に反する小夜ではないので、それを了承して、沙樹に凍夜を頼んだ。

「じゃ、あたしも降りてるわ」

「えっ！！」

小夜と神埜までがいなくなってはいい自分たちはどうやって降りるのか？ っと、沙樹は慌てた。

そして、その間にも二人は宙に浮き、下の方へと離れてしまった。「ちよつと紫司さん、どうするのよ？ 私、さっき無理っていったじゃない！！」

凍夜が魔術を使えないのは知っている、ならこの場合自分がやるしかない。まさか、土壇場で出来るようになれ、というわけじゃない

いだろうなつと不安に駆られる沙樹。

「大丈夫です、落ち着いて下さいよ」

「でも、いったいどうするのよ？」

「では、取り敢えず、お手を宜しいですか？」

つと、自らの左手を差し出してきた。

その様は、中世貴族の貴公子よろしいもので、そこに手を置いたら、手の甲に口づけをされる（して貰える）のではないかと、おずおずと手を差し出す沙樹。

先ほどまでは不安が駆け巡っていたが、今は身体が心臓になったかの様に、全身を血液が駆け巡っているのがわかる。

凍夜がそういうことをしないのはわかっている筈なのだが、どうにも凍夜といると理性的ではいられなくなる。

凍夜といるときのこういうところが、実は何かしているのではないか？ と疑いたくなる理由だった。

「では、チャージだけお願いしてもいいですか？」

凍夜の手に沙樹の手が置かれ、凍夜がその手を親指で挟むように軽く握り、沙樹に指示を出した。

何も無い、当然だった。

そのことに、安心したような、残念なような沙樹は取り敢えず落ち着きを取り戻した。

そして、凍夜の指示に怪訝な表情になる。

「チャージだけ？」

「ええ、あとはこちらでやりますから」

こちらでやる？ どういうことなのかは分からない。しかし、今は素直に凍夜の言うことを聴く沙樹。

取り敢えず、チャージしようと魔粒子ヒズを活性化ライズさせたら、その瞬間から自分の中に魔術の使用感が湧いてきた。

あり得ない、自分は今何もしていない。だが、これは間違いなく魔法の発動する感覚。

然も、今まで感じたことのない感覚のもの、つまり今まで自分が

使ったこのとのない魔法ということだ。

そう思っている間にも、いつの間にか体が、先ほどの小夜や神埜の様に浮いていた。

「えっ？ うそっ！！？」

いろいろなことに頭が混乱する。

そんな、慌てる沙樹に凍夜は、自分の指示に従うように言った。

「大丈夫ですから。兎に角、今は何もしようとししないで下さい。あとは、ゆっくり降りるだけですから」

体は、ベランダを完全に抜けて、何も無い宙に浮き。ゆっくりと、地面へ向かって降下していく。

凍夜と沙樹がアスファルトの上に足を着いた。

これで、皆無事に降りられたことになるが、今や問題はそれだけではない。

「さて、もう随分待たせてる筈ですから、急いで靴に履き替えて、正門へ向かいましょう」

っと凍夜は、皆を次の行動へと促した。

沙樹はまださっきのことに呆けている。

「中島さん！！ 詳しいことはあとで説明しますから。今は急ぎましょう」

「えっ？ ええ……」

沙樹としては一刻も早く知りたいところではあったが、今は人を待たせている。取り敢えず、自分の疑問のことはおいやって、何とか体を動かす。

「取り敢えず、今のこと今のところは他の人には内緒をお願いしますね」

沙樹の耳元で凍夜が悪戯な笑みを浮かべて囁いた。

20・錯覚？

人を待たせているため、昇降口まで軽く走る一同。

その最後の沙樹は、前に行く凍夜の背を見ながら走り、あることに思考を巡らせる。

今のことも勿論そうだが、それだけではない。

教室での神埜の件、アレも相当信じ難い光景だった。

神埜と普通に話をしていただけでもかなりの驚きだったのに、何を言ったのか、心まで凍こてついているとさえ囁ささかれていたあの神埜が、表情を表すようになったのだ。然も、今までとはまるで別人のような態度（人格？）にさえなっている。

これまでもずっと思っていた。凍夜は何者なのだろうと。

凍夜の飾らぬ態度、親しみやすい性格の所為もあって、つい普段は忘れがちになってしまいが、確かに凍夜は四柱なのだ。本来なら、自分たちの様な庶民（とは言え、沙樹は周囲からすれば十分な良家だが）とは住む世界が違う筈の存在だ。

それこそ自分たちには計り知ることの出来ない世界で生きて来ているのだから、自分たちのような小さな人間が凍夜という存在を看破しようなどというのは、それこそ烏滸おしがましいというものだ。

そんなことは分かっている。

だが、それを押して尚、この疑問を抱かずにはいられない。

四大柱世間的な肩書きなんてものは関係ない、この紫司凍夜という一人はいつたいたいという存在なのか？ と……………

別に正体というものを求めているわけではない。

ドラマではないのだ、謎の多い同級生が実は四大柱だったという様なあからさまな答えがある等とは思っていない。

何しろ始めから何を隠すこともなく四大柱として在り、凡そ秘密と言える様な過去でさえ彼は自ら公言してしまう様な人物だ。

そんな凍夜だ、本来何を疑問に感じる必要があるというのか？

それは自分でも分からなかった、ただ気になってしまふ。

普通、人間同士付き合い始めれば相手がいくばかりかは見えてくるもので、良くも悪くも自己の中にその者の人物像を形成していくものだ。

だが凍夜の場合は不思議と知れば知る程に、まだその奥がある様ないつまでたつても謎を秘めた様な、そんな感覚が拭え切れない。普通なら、『つかみ所のない人間』という人物像を築きあげるだろうが、何故だかそれも違う気がしてしまう。

単純な恋心からの興味ではない、それは紫司凍夜という人物と交流を持つ者の誰しもが思う、人間として根源的な疑問だ、とそう思う。

それを思っているのが、自分だけならそれで良かった。ただそれは自分が凍夜へ好意をもっているが故のものだと錯覚していただろうから。

しかし、そうではなかった。別に陰口というわけではないが、凍夜がいないときに、こういう話になったことがあった。

そうしたら、この疑問はグループ内の誰一人として余すことなく抱いていたものだということが知れた。

女子だけならまた違う錯覚に陥っていたかも知れない。だが、女子だけではない男子までもが思っていたのだ。

凍夜はいつたい何者なのか？ と……

別に誰も凍夜が嫌いなわけではない、当たり前だ。別に誰も凍夜が謀たくはかっているとは思わない、当然だ。別に誰も凍夜を畏れているわけではない、無論だ。

それでも尚思わずにはいられない、正にこのことこそが疑問でもあった。

昇降口に付き、急ぎ靴に履き替える。

基から皆より少し遅れていたのと、考えながら走っていた所為もあって沙樹は一人遅れてしまっていた。

皆先に行ったものと思っていたが、靴を履き替える間も凍夜だけ

は待ってくれていた。

別にこの疑問は凍夜に対する負の意思によるものではないので、別段後ろめたさを感じるようなことはないので、沙樹はいつもと変わらぬ調子で話し掛けようと思えばそれも出来た筈だった。

しかし、それは出来なかった。

「ねえ？ 紫司さん」

「はい？ なんですか？」

「紫司さんって何者？」

意図せずして先ほどまで思考していたその疑問を口にしてしまっていた。

教室から降りたときにこそパニックになり、兎に角皆を追ってきた形でここまで来たが、その間で十分に頭も冷え今はパニックは納まっている。だが、高揚感は抜け切れてはいなかった。

興奮状態にある精神と凍夜と二人きり（関係ない者たちは周囲にいる）という状況に、意図せず沙樹の疑問を口に出させてしまっていた。

それ程に気になっていることではある。だが、今はそのことを問うている場合ではない状況だ。

つい言ってしまったが、余りにも配慮が欠けていた。自分の物言いにも、先輩方に対しても。

口に出てしまった言葉に自分でハツとなり、忘れてくれと謝罪の言葉と共に述べようと思ったが、それよりもはやく凍夜が答えた。

「さあ、何者なんでしょうね？」

凍夜の顔はいつもの眼鏡でその表情の全てを窺^{うかが}い知ることが出来ない。

だが、笑って見せる凍夜の顔に力はないのは明らかだ。

そして、全てが見えぬが故にその表情は見る者に、今にも泣いてしまうのではないか？ という思いに至らせるほどに、憂いを帯びている様にも見えた。

錯覚かも知れないだが、傷づけたかも知れない。

だがもし、そうだったなら 　自分の放った何気ない一言で
凍夜を傷つけてしまったなら、そんな嫌なことはない。

自分が加害者の筈なのに、自分が泣きそうになりながら、凍夜への謝罪を述べようとしたが、またもや凍夜に先んじられてしまった。「でも、強いていうなら、ヒ・ミ・ツです」

つと、右人差し指を一本たてて、自身の唇に当てた。

「実は僕はこう見えて、他人に話せばおよそ万人の涙をさそうだけの過去をもつ、影のある少年なんですよ。いくつもの秘密を隠し持つ、謎に包まれ少年！！ どうです？ こういうのって結構格好いいでしょう？」

そういつて戯けてみせる凍夜。

その表情はいつもの悪戯なものだった。

先ほど垣間見た表情は本当にただの錯覚なのだと言わんばかりの
笑みだった。

いつもなら、呆れながら適当にあしらうか馬鹿にされたと怒って返すところだろう。だが、どちらも出来なかった。

質問の後に見せたあの表情が沙樹の頭の中から離れなかった。

凍夜の言ったことの真意は分からない。それが本当なのか嘘なのか沙樹には分かる筈もない。

しかし、今の沙樹にその言葉の真意などどうでも良かった。

アレが、あの表情が本当にそうだったのかすらどうか分からない。

だが、このとき沙樹の頭中には、先ほどの凍夜の憂いを帯びた表情以外の何も頭には入ってこなかった。

21・特例組

「それでは、行きましようか」

凍夜が歩みを促し、沙樹もそれに応じる。いつまでも、浸っている場合ではない。

だが、今沙樹の頭の中に彼らへの配慮というものはなかった。先輩方には申し訳なく思うが、今沙樹が想うのは凍夜のことだけだ。

凍夜にこれ以上の迷惑を掛けたくはないという思いから、表面上だけでも普通を装い凍夜の後に続いた。

「済みません、遅くなりました」

凍夜と沙樹が遅れて到着し、凍夜が開口一番謝罪の言葉を発する。

「大丈夫ですよ、気にしてませんから。さきほど他の子たちにも謝られたばかりですから、そう重ね重ね言われてしまうと、返ってこちらが申し訳なく思ってしまう。それに、大変だったのはそちらですから」

そう言って、香里は朗らかに笑って返した。

「それにしても、いきなり今年の『特例組』がそろい踏みだなんて、正直驚きです。まさか、皆さん知り合いだったんですか？」

香里はこともなげに言つてのけるが、特例組という言葉に、新入生一同（この場合は凍夜たちだけ）は馴染みが薄い。

その名称は、凍夜を始めとする特例によって入学したものをたちを差すわけだが、それは飽くまで在校生たちの噂話をする際の呼称であるため、新入生の彼らがそれを耳にしたのは詠歌の発言があつてからだ。故に彼ら自身は特例組というものが、実際何なのかを知る由もない。

当然、当人にしてみれば、自分はそれに当たるのだらうという思いはあるが、凍夜は詠歌に大々的に知らしめられたため論外だとしても、それ以外の人間に心当たりがあるわけではない。

新入生の一般生徒にしてみれば、凍夜・小夜・神堃のこの三名がそんなのだらうという思いこみがあるが、実はその顔ぶれも理由も大きく異なっていた。

凍夜がそう（特例）なのだから、小夜もそんなのだらうと思って
いる者もいるが、それは間違いだ。

小夜は真正正銘、普通に受験（とは言っても、推薦）をしてここに合格している。本来ならば、凍夜と一緒にというわけではなかったのだ。

よって、このときにはまだ新入生が知る由もないとのだが、小夜は特例組ではない。

神堃も四柱ということで、小夜と同等の理由により、新入生からはそういう印象を持たれている。

しかし、確かに神堃は特例組ではあるのだが、その目的は凍夜の件（詠歌に呼ばれた理由）とは別の理由である。

そして、皆は知らないが、沙樹はその特例組に当たる。

凍夜はお互いに（ここにいることに）疑問を感じあっていたし、小夜はそんな二人の会話を聞いている、神堃も自分の補佐に人を付けるという話しは聴いていたので、新入生の中でそれを知っているのは、当人たる沙樹も含めて四人だけということになる。

「なんて、冗談です（笑）」

紫司さんと蒼縁さん、お二人が家の繋がりで知り合いなのはわかりますし、紫司さんと中島さんは、同じ中学校の出ですから、知り合いでも不思議じゃないでしょうけど、まさか四区からの転入生の方と知り合いだなんてことはあり得ませんよね？」

現在の日本は、本州の中心位置に蒼縁の屋敷を据え、それを中心とした結界の中での生活を余儀なくされている。

とは言っても、その生活圏は本州全域は確保しているので、別段問題があるわけではない。

因みに昔の区分でいうところの、四国や北海道南部、そしてその

他幾つかの小島も結界の安全圏内には入っているが、そちらは政府により、生活圈からは除外されている。

そして、その本州の区分を現在では四等分にして、上から一から順に番号で区切ってあり、それぞれを四大柱が統括することにより納めている。一区：緋捺璃・二区：紫司・三区：蒼縁・四区：羽月というかたちだ。ここ常磐は二区の中にあり、つまりは紫司の統括地区だ。

統括といっても、普段は何かするわけでもない。

これは、有事の際の指揮系統の最終決定者の明確化を計ったもので、彼らがその地区の政策を直接行うことはない。

香里にしてみれば、一応疑問系で問うてはいるが、これは付加疑問文だ。

よつて、あり得ないだろうということの確認を計っているに過ぎないのだが、一同はここに来て、それぞれ違う疑問に捕らわれた。

凍夜・小夜・神埜は他にもいるのか？（然もこの中に）と思い、森川姉弟はそれに加えて沙樹が特例だったのかという驚きも含んんだのだ。

沙樹は、先ほどのことで頭がいっぱいの状態なので、香里の話などは聴いてはいなかったため、無反応だった。

そして、凍夜らは森川姉弟の反応から、彼らは違うと判断し、姉弟は沙樹ともう一人を交互に見ていた。

「つて、アレ？ もしかして、貴方たち知らなかったの？」

その新入生の反応を見て、驚きと共に質問をする。

香里からしてみれば、特例組という共通点で集ったものと思っていたので、彼らの反応の方が驚きだった。

「会長代理〜」

草尾が呆れた様に香里を呼ぶ。

「なに？」

「特例入学者の詳細を知ってるのは俺らだけでしょうが……それに、

わざわざ自分からハブられる様なことする奴はいないっしょ？」

あつ！ つと、香里はパツの悪い反応を示した。

詳細といつても、その理由まではしらされてはいないし、毅は『俺ら』と言ったが、実際にその資料を渡されたのは、会長代理たる香里であつて毅は、香里から同じ生徒会の副会長だからということで見せて貰つただけに過ぎない。

なので、本来彼らのことを知るのは、当人と生徒会長だけの筈だつたのだ。

本来、自分から暴露しなければ、そのまま一般生徒として過ごすことが出来ていた筈なのだ。

そして、わざわざ自分から悪目立ちしようとする者は少ない。理由はどうあれ、一般生徒からしてみれば、特例入学者を快く思わないのは当然だからだ。

故に、当人が言わないのは当然であり、学校側もそれを配慮して会長以外には教えていないのだった。

「ごめんなさいっ！！！」

最上級生であり生徒会長代理でもある香里が、下校時刻を程ほどに過ぎ、人の往来（最も今は帰宅のみだが）が少なくなっていると見え、下校中の生徒の目がある中で、下級生へ人目も憚らずに頭を下げた。

香里としては当然の謝罪なのだろうが、こんなところで上級生の然も生徒会副会長（会長代理）に深々と頭を下げられる、下級生側にしてみればたまつたものではないだろうと思ひ、毅が両者を氣遣つて、そして一応は香里へのある意味に置いての罰としての言葉を掛ける。

「はあく、最近は大分板についてきたと思つたけど、やっぱり『雅くん』がいないとダメか？」

香里はパツと起き上がり、毅に詰め寄る。

「ちよつ！！ 誰が雅くんよっ！！？」

「松風に決まつてるっしょ」

「べつ、別に私は……（そんな呼び方なんて）」
勢いよく詰めかけたが、後半は段々と尻すぼみになり、一人ごとになってしまった。

これで、香里の方は問題ないので、毅は下級生の方へと向き直った。

「済まないね、君たち。清水も悪気があるわけじゃないんだ。だからって、なんでも許せるとは思わないけど、許して貰えるかな？」

「俺は別に。元々どうでもいい」

特例組の最後の一人たる修之が答える。そして、自分はいいがそつちが問題なんじゃないか？ つと、沙樹の方へと視線を促した。

「そのようだね」

実のところ沙樹は別に気になどしていない。先ほどのことで、今はそんなことなど全く頭に入っていない。

しかし、周囲がその様な事情を知るわけもなく、先ほどから不審な反応の沙樹の態度を勘違いしている。

修之は（凍夜が）少し話しをしたただけだが無口な感じた。だが、そんな沙樹を気遣えるあたりは冷たい人間ではないのだろう。

「お詫びというわけではないんだけど、どうだろう？ ここは、僕が責任をもってお付き合いをするということで、貴女の心を癒させてくれませんか？」

本日二度目、神塾にしてみれば三度目の毅の告白シーンが繰り広げられた。

毅は手を差し出しているが、沙樹は無反応だった。

「中島？」

麻里奈が沙樹を気遣わしげに呼ぶ。

自分の名を呼ばれて漸く頭が外に向いた。

「えっ？ 何かしら、森川さん？」

「あんた大丈夫？ さっきから変だよ？」

「大丈夫よ。ちょっと考えごとしてただけだから、気にしないで」

「そう？ ならいいんだけど」

今の沙樹の態度に不審な点は感じはない、どうやら本当に考え事をしていただけなのだろうと思ひ、麻里奈は気を取り直して、皆の足を促す。

「さて、こんなところでいつまでも、立ち話つても何だし、取り敢えずは移動しちやいましょ？ 細かいことは、向こうでね？ いこいこ」

毅は最早無視の方向らしい。

彼は返答の言葉もないまま、その手を下ろすことになり、両肩を深々と下げた。

そんな彼に誰も（香里も）気を払うことなく一同は、駅を目指して歩き始める。

そして、小夜は当然とばかりに凍夜の左に立ち、その左腕を絡め取り、登校時の再現をする。それに対して、神埜は面白くない顔をするが、何も言わずに後に続いた。

だが次の瞬間、空いていた凍夜の右腕を小夜と対になるような状態で取られ、凍夜を始め五人が驚きの表情を表した。

一番顕著な反応を示したのは勿論小夜だ。

だが、これ以上凍夜の前で失態を晒したくない小夜は、傍目からは驚いた以上の反応をしめていない。しかしその実、今までよりも強く凍夜の腕をきつく抱きしめていたのだった。

「えっ？」

「嫌？」

つと、（身長差から言つて自然となる）上目遣いで訊いてくる麻里奈。

「いえ、別に嫌じゃあないですけど……」

流石の凍夜も歯切れの悪い答え方しかできない。

「じゃ、いいよね（嬉）」

そして、始めは驚きだったその他の者たちの視線は、今や嫉妬とつかたたちに変わり、後方から三人（主に麻里奈）を突き刺していたが、その視線を感じて気を揉むのは凍夜だけだった。

「皆さん、お昼はどうしますか？」

駅に向かう道すがら、凍夜が後方に続く皆に問いかけた。

「僕と小夜はそのつもりでいたので、弁当を持っていていのですが、どうしますか？」

「折角のお花見なんだから、桜の下で食べるに決まってるっしょ！！
駅に着く前にコンビニ寄ってきてましよう？」

「皆さんはどうですか？」

麻里奈が凍夜の隣で、大声で答える。

無難な案に皆反対の意思はない。

コンビニの前につき、麻里奈は凍夜から離れて、何を買おうかと嬉々として入っていた。

次々と後に続く中、香里と毅も外に残った。

「お二人は行かれないんですか？」

「私たちは、生徒会のこともありますから、念のため昼食は用意して来てるんです」

「こちらに合わせて、外にして頂きましたけど、本当にご迷惑では有りませんでしたか？」

弁当まで用意しているのならば、若しかしたら本来なら学校でやらなければならぬ仕事もあったのではないかと、気に掛ける。

「ええ、大丈夫ですよ。本当に、念のため持ってきているだけですから。ねっ、草尾くん？」

「ええ、その通りです。どんな状況でも、ターゲットに合わせて行動出来るように、念のため用意してただけです」

「ちよつと、草尾くん！？」

なるほど、彼らの言う念のためはそういう意味かと、納得する。

準備万端整えてきたということは、断る場合は相当しつこくされることを覚悟しなければならぬようだ。

買い物を済ませて、駅へ移動した。

駅とは言っても、旧時代に線路や路面を走らせた乗り物などでの移動手段の起点ではない。

駅とは即ち国営の大型転送施設のことを指している。

国の公共機関の殆どが無料で利用できるようになってきている今の時代、転送装置：ゲートの利用も無料で使用できるので、人々には欠かせない移動手段だ。

小夜と二人きりなら、現地まで直接二人で（瞬間移動で）飛べばいいがけだが、この人数となると小夜一人の力（技量）では難しい。神埜なら可能かも知れないが、神埜の場合は力（威力・破壊力）は強いが、こういった技能系には向いていない。自己単体なら造作もないが、人が増えるというのはそれなりにやっかいな点があるのだ。

どちらにしても、先ほどの沙樹の様に凍夜が手伝えれば事は済むのだが、それはまだこれほどの大人数の前で見せるものではないので、ここまで歩いてきた。

最も他の者たちにしてみれば、転移系の魔法は自己単体で行う場合、それ自体がともじやないが高校生レベルではないので、そんなこと出来るなど考えてすらいない。彼らにしてみればそれは至極当然のことだった。

着いた駅の構内にはあまり人がいない。

駅は禁止区域以外は好きなどころに行けるが、逆に戻ってくるという機能はない。

故に、わざわざ駅から駅にということをやらない上に、入ったら承認をすれば直ぐに飛んで行けるので、人が溜まることがないのだ。ゲートには赤と青の色分けされたものがあり、設備自体は同じなのだが、利用者によって使用するゲートが分けられる。

駅の床面にはそれぞれのゲートへの案内に赤と青のラインが引かれているので、自分の利用するゲートのラインを辿って進む。

だが、凍夜が左の赤いラインにそって歩き、麻里奈が右の青いラインに向かったため、二人は引つ張り合う様な形になった（コンビ二から出てから、また麻里奈は凍夜の腕をとっていた）。

「つと……なつ、つてそうか……あたしらもそつちになつたのか」

「これ最初忘れるわよね（笑）」

香里が麻里奈の失敗に自己の経験を思い出す。

「そうだった。俺も危うく青に行くことだった」

つと、珍しく（とは言っても、付き合いが長いわけではないので、本当にそうなのかはわからないが）智之も麻里奈と同じ様に、青いラインに向かっていた。

この区別は、利用者の資格によって分けられる。

基本的な分け方は、赤が魔法の使用免状所有者用で、青が否所持者用という扱いだ。

別にどちらを使っても、罰則があるわけではなく、これはマナー（努力義務）の問題だ。

本来魔法は、魔法の機動方式により魔術と法術に大きく分類される。

そして、魔術による魔法施行の（下級帯魔法の）認可・承認あるいは（上級帯魔法の）許可を得た者を魔術師と呼び、法術の場合を法術師と呼ぶ。

魔法師とは、本来その両方を施行するものを指すのだが、現在はその両立を試みる者が殆どいない。故に、今はその総称というかたちになっており、引いては魔法師＝魔術師という認識のものになっている。

そして、この場合のライセンス所有者というのは、その機動方式の違いから魔術師のみを差し法術師は対象外という扱いになる。

青のゲートには、ナビゲーター：ゲーターがついており、利用者が自身の魔力を使わずに、場所の指定が済めばゲーターの魔術師が魔力をそそぎこんで機動させてくれる。魔法使用が制限されている

中学生までの子どもや、ライセンスを持っていない（魔力の保有量の少ない）者のためにある。

赤のゲートは、単にそのゲーターがいなかっただけだ。

つまり、使用する際は自分の魔力で機動させてくれということである。

ゲーターは常に複数待機してはいるが、利用者全てをカバーできる程の人数がいるわけではない。

故に、ゲーターの消耗を軽減させるために、このような対策が取られている。

魔力というのは、保有（または使用）魔粒子量・活性力・放出力の総称であり、全部ときにはその中の一つ・二つをさして呼ぶ。

主に保有（非活性状態：ヒス）または使用（活性状態：ラピス）する魔粒子のことを差すことが多い。

中学までの魔法使用に制限が掛けられているのは、個人差はあるが早期の過度の魔術施行が、成長著しい時期の人体に悪影響を与える可能性があるからだ。

但し、塾・公認家庭教師・一部の私立のように、個人に合わせた適切な指導が行えるのであれば、この限りではない。

しかし、通常の学校では、個々人に合わせた指導が出来ないため、危険防止の対策として、禁止になっているのだ。

高校生くらいになれば、体の作りも出来上がっているというのと、魔力の基礎値が安全な域にまで延びている、また基礎的（常識的）知識をつけているということから、その制限が解除される。

因みに、魔法級位の最下層Gランクは、その対象外程度の極微量な消費のため自由に施行できる。

そして、国立のエリートたる所以の一つとして、魔力の基礎値が一定以上であることがあげられる。

その最低基準がFランクと同等のため、国立全校（及び一部指定私立校）は生徒手帳・学生証がFランクの仮免という扱いになる。

普通に卒業すれば、それを本免許に差し替えとなるが、基本的に

Fクラス程度なら在学中に承認を受ける。

中には、下級帯魔法（D・E・F）の中で、上級（D・E）の承認を受けるものもある。

よって、国立生の彼らが赤のゲートを使用するのは義務だ。

但しこれは飽くまでも努力義務の範囲であって先ほども言ったように罰則はない。

更に言えば、凍夜は魔術施行が出来ないので、それに合わせて皆で青を使っても何ら問題ないのだ。

一同は赤のラインを辿り、ゲート（個室）の中に入った。

ゲートの操作は備え付けの端末の直接操作か、それに携帯をリンクさせるリモート操作かのどちらかでその行き先を指定する。

「リンク」

凍夜は、一団の代表としてその役をかってでた。とはいっても、何をするわけでもない。

単に、携帯をゲートに繋いで、行き先を決めるだけだ。

現在の携帯は思考脳波制御式（brain wave control system：BCS）になっており、初期設定時に自分の脳波を登録することにより、その脳波を読み取り、思考のみで制御（操作）できる。

脳波は、人間それぞれに全て個人差があり、これを真似ることは不可能のため、簡単な操作が可能になっただけでなく、他人の携帯を勝手にいじるようなことも出来なくなり、セキュリティの面でも飛躍的に向上した上に、脳波という個人を識別するものがあるためその使用者が特定できるという利点を生かし、身分証明が可能になったため、現在における殆どの場合が、携帯を使用したセキュリティを採用している。

今朝の学校でのデータのダウンロードが良い例だ。当人以外にデータを落とせないのは、携帯のこの個人識別機能があるためだ。

そして、このBCSとmulti link system：MLSを併せ持つことにより、携帯は単なる情報端末の末端という位

置づけから、正に生活必需品というものに変わったのだ。

思考制御は絶大な効力を発揮する。

搭載当時の機体こそレスポンスに問題を抱えていたものの、現在の機体ならば思考と同時の動作をしてくれるので、正に思うがままの操作ができる。

凍夜は『三谷美岡の桜の園』の地図情報をイメージするだけで、後はネットからその必要な情報を検索してくれる。

座標が確定したら、周辺情報（一定範囲内の生命反応など）の確認を取る。

「確認」

リンクと確認の言葉は連続で発されている。その間僅か二秒足らず、その時間で、転送先の確定を行えるのだから、科学の力は侮れない。

『転送先の情報確認、終了。問題ありません。転送可能です。中央の白い球体または壁面の白い帯に、ラピスを送って下さい』

機械の（かなり人に近い）合成音声で、確認の終了と次の指示を出す。

白い球体・帯というのは、MCDという装置でそこから魔力を供給することにより、ゲートの転送魔法を発動させる。

ゲートは、それ自体が大きな儀式陣（儀式型の魔法陣）となっているため、後は魔力さえ注ぎ込めば転送魔法が発動するようになっている。

本来、既に構成された魔法陣があれば、魔力を注ぐだけで使用は可能だが、転送の用に行き先が必要な場合は、術者はそれをイメージする必要はある。

それだけなら、本来ここまでの装置にする必要はない。ゲートの最大の利点は、先ほど行っていた。転送先の状況確認にある。

本来、個人レベルで転移出来る者なら、転送先を数メートルほど高い空中に設定してやれば、他人を巻き込むことはまずない（転移

魔法が使えれば、まず間違いない飛行魔法はつかえるため。

しかし、今のようには複数人いる場合は、全員が飛行魔法を使えるとは限らないので、転送先は地表となり、その場の状況確認が必要となるのだ。

ゲートはこの確認を機械（転送先のマーカー）で行っているが、それを人でやるうとすると、実はかなり苦労する。

それ故、大掛かりな作戦行動を取る際には、如何優秀な魔術師といえど、基本的にはゲートを使うことになる。

魔力の消費量は、一人頭の転送距離によって算出される。

つまり、距離が離れば離れる程に増え、人数が増えた分だけ倍化するということだ。

誰がどれだけ魔力を注いだかはモニターにより表示される。

そして、皆が魔力を注ぎ始めた瞬間には、既に必要な魔力が供給されていた。

その者は、一人で全員分の魔力を供給していた。やったのは、神ヒスだ。

魔力の供給がなされたことにより、儀式陣が機動し、皆は一瞬という時間を持って、目的地に到着した。

桜吹雪の舞う公園の中で、先ほどことに驚いた者たちが、神ヒスに驚愕の眼差しを向けていた。

神ヒスにしてみれば、ホンの欠片ほどの量でしかないが、常人にしてみれば、これほどの魔力を一瞬で平然と放出できる神ヒスに驚くしかない。

「では、行きましようか」

凍夜にとっても別に驚くことではないので、呆然と立ち尽くす皆に声を掛けて行動を促した。

眼の前には、美しい桜の木々が風に吹かれて花片を散らし、その花片はハラハラと舞い踊り風と戯れていた。

〜お花見編〜 23・乙女の想い（前書き）

今回の話から、BGMを入れて行きます。
といっても、タイトルいれるだけなんですけど……

今回は一つしか出してませんが、BGMにはいくつか種類があります。

イメージBGM（IBGM） 意味より曲の雰囲気重視したもの
シーンBGM（SBGM） 歌詞の意味も含めてそのシーンに合わせたもの
キャラクターサイドBGM（**BGM） **はキャラ名、各シーンにおけるそのキャラクターよりの曲

劇中歌（**IS） **はキャラ名、一部のキャラクターは歌う設定になっております、歌は既存のオリジナルの音声のままに歌うことになっていきますので、キャラソンという感じではないかな？

くお花見編く 23・乙女の想い

《IBGM: RADICAL DREAMERS く盗めない宝石
く/みとせのりこ》

花片の舞う桜並木を、特に（神埜以外の）女性陣は嬉々として表情をほころばせて眺めながら、ゆっくりと歩く。

普段は強い風など（特に女子には）迷惑でしかないだろうが、今は時折吹く風が木々を揺らし、花片を巻き上げとても美しい光景を作り出すため、言葉には出さないが皆それを待ち遠しく思う。

桜の園と名付けられただけあって、三谷美岡の桜は二区の中でもかなり有名だ。

蒼時雨あおいしぐれという品種改良された、名の通りに薄い青色の色づいた花片をつける桜で、その桜吹雪は正に幻想的といえる。

昼間も美しいが、やはり夜のライトアップされた桜はその比ではないと言える程に、また見事に美しい。

しかし、今日はその時間までいるつもりはないので、残念ながらそれはまたの機会ということになる。

因みに、この蒼時雨は人が管理してやらねば直ぐ枯れてしまう程に弱く、その管理もとても手間のかかるもののため、二区の中で見られるのはここだけに限られる。

四区域にはそれぞれにこういつた場所が一カ所つつ設けられて、国の管理の下で維持されて、人々の憩いの場として親しまれている。決まった目的地はない。みんなでゆっくり出来そうな場所を探しているだけだ。

それなりに人はいるが、春休みではないので埋め尽くされているわけではない。

「ホントにきれー」

麻里奈がここに来て何度目になるか分からない、感嘆の声を上げ

る。

そんな麻里奈に、凍夜は気懸かりに思っていることを告げる。

「森川さん」

「何？」

「いいんですか？ 僕なんかとこうしていて。本当は彼とこうしたいんでしょう？」

《IBGM: belovedの彼方へ／Spanky》

『こうして』のところで、右腕を振り上げる。

麻里奈は、一瞬ハツとして、後方を……智之を確認する。

先ほどまでの声とは違い、小声で凍夜に語り掛ける。

「分かる？」

「何となくでしたけど」

凍夜は鈍い男ではない。どちらかと言えば、ことごとくいった感情には鋭い方だ。

とはいっても、気づいたのは麻里奈が腕を組んできてからだ。

そのときから向けられている智之の視線が、教室で接していたときのような大人びた少年のものとはほど遠い、鋭い嫉妬に満ちているものだったので、見当を付けることが出来た。

「ごめんね。勝手に巻き込んで……」

そう、麻里奈が凍夜に接触してきたのは智之を焚き付けるためだ。小夜と凍夜のやり取りを見ていた麻里奈は、凍夜は（いい意味で）女性の扱いになれていると思ひ、その凍夜に接触することで、智之を煽り立てていたというわけだ。

決して褒められたことではないので、心から謝罪する。

事が済んだら事情を話して謝ろうと思っただけだが、流石にこの段階で気づかれるとは思って居なかった。

「それは構いませんけど、このままだと彼、ただこっちを睨むだけで、何も言っただけだと思いませんか？」

「はあ、そうだよな……ねえ？ あたしらのことどう思う？」
どう思うか？とは、二人の関係についてだ。

確かに、法的に言えば姉弟きょうだいの結婚には何ら問題はない。しかし、だからと言って人の倫理観というものはそれほど容易く変わるものではない。

魔族というのは、特別だ。

彼らの血統が絶えるということは国力の低下、引いては日本という国の存続にも関わってくる。

故に、人々は魔族の親近婚は当然のものとして受け止めることが出来る。

しかし、そうでない場合というのは実は以前と変わっていない。

法的には認められていようとも、倫理観が今まで培ってきた道徳が生物としての本能が……未だ持ってそれを許しはしない。

魔族は、全部ではないがその殆ど唯家ゆいけだ。唯家でなくとも、魔族の家名くらいは、常識的に知っている。

故に、人々は直ぐにそれと分かる。従って、それ以外の家の者が、姉弟きょうだいで交際していると世間の風当たりはきつい。

唯家というのは、唯一家名またはそういう体制を取る家柄のこと
で、その家の者以外に他で同じ家名（名字）が存在しない家を指す。
日本に一つきりの名字を持つ一族だ。

余談であるが、魔族の家系では蒼縁・紫司の他に、辺ほとり・月友つきとも・氷ひ志し・井吹多いふたなどがある。

森川というのは、どこにでもありふれた名字だ。勿論、魔族ではない。

更に、彼女らは双子だ。世間からすれば異常だと思ってしまう。

「お似合いだと思いますよ、本当に。とは言っても、僕の言葉じゃ説得力が在りませんね（苦笑）」

僕らは付き合うという関係じゃあないですけど、それでも普通の兄妹よりは大分仲がいいですから」

「んーうん、理解してくれる人がいるって言うのは、それだ

けで凄く……本当に、凄く嬉しい……世間もそれくらいの目で見てください、あいつだって……」

凍夜自身が言っていた様に、凍夜と小夜は誰から見てもいい仲だ。麻里奈が凍夜に近づいた決め手は、小夜との関係だ。

自分たちと近い者たち、故に同族意識という親近感を一方的に持っていた。

だが、ここに来て改めて……きちんと自分たちの関係を知った上で、認めて貰えたことへの喜びは大きかった。

「詳しいことは分かりませんし、お二人とは今日会ったばかりですから、あまり知ったようなことを言うのは、良くないでしょうけど。それでも、今日見た限りでの森川くんはかなり、良識的な方見たいですからね。きっと、貴女のことをおもんばかったのことだと思えますよ?」

「そう……なんだよね。分かってるの。あいつ優しいから、でも……」

「心中お察ししますわ。麻里奈様!」

幾ら声を小さくしているとは言っても、流石に小夜との距離で聞こえないわけがない。

小夜には、聴かれてもいいと思ってるからこそ話していた麻里奈ではあるが、小夜のいきなりの介入に少々驚いていた。

「麻里奈様からしてみれば嫌みに聞こえるかも知れませんが、私も似たような想いを抱えていますから」

凍夜越しに顔を出し、麻里奈へと語りかける小夜の顔には演技ではあり得ない憂いが見て取れた。

智之は麻里奈を大切に思うが故に、世間体を気にして人目のあるところでは男としての自分をさらけ出さない。

だが麻里奈は、それに対して寂しさを感じ得ない。自分はどう言われようとも、二人でいることの方が何よりも大切なのだと思うから。

小夜と凍夜の関係は外から見ただけならば、何を気に病むことが

あろうか？ という程に良好に見える。確かに二人の仲に問題は無い。

ただ、二人の感覚には大いなるズレがあった。

小夜は麻里奈に『似ている』と言った。がしかし、それは想い慕うという思いに同じく、想い返されるとい意味に置いて絶対的な違いがあった。

小夜と凍夜の間にあるのは愛情の相違 愛という意味にし

て同じく、その種類にして大いなることなる感覚差が二人にはあった。

小夜の想いは、恋慕。恋愛感情という恐らくは人間の持つ中で最も御しがたく、最も大いなる活力たる感情だろう。

しかし、凍夜の想いは好意。それ以上でもそれ以下でもない、数多ある愛情の中に合つて尚、最も根幹にして初歩の感情。

なんとという皮肉だろうか……………

どれほどの愛を説こうとも、それを好意を持ってして、いや好意のみでしか返されることがないのだ。

小夜は確かに愛の言葉を口にしない。しかし、その想いは全てをその胸の内に隠しきれぬほどに小さいものではない。

体を迫るような直接的な行動も勿論しない。だが、自分に許される限り、妹という立場で表現出来るだけの、あらん限りの愛を、小夜は常日頃から凍夜に捧げているのだ。

それが、自分の望むかたちでは決して報われることはないと知つていても……………

小夜と麻里奈、二人の抱える問題は恋愛感情という同じ類の悩みでなりながら、その性質はあまりにも違う、しかしそれでも同じ『女』として、同じ『女』として男を愛する者』として、その想いは理解できうるものだった。

麻里奈には小夜のその抱える想いを知ることには出来ない。

しかし、先ほど見たあの顔は、見間違ひなどではまずあり得ない、自分に対するたかが同情などという感情では作り得ない、そしてどれ程秘められたか計り知れない悲しみに暮れていた。

故に麻里奈は思う、きつとこの二人にも（悩みという意味で）自分と同じ思いを抱えているのだと。

「どうでしょうか？ 折角こうしてお兄様に頼って下さっているのですから、ここはお兄様に全て任せてしまつては如何ですか？」

麻里奈は驚くしかない何しろ『頼つて』というのは正確ではない、本来ならば『利用』していたのだ。

彼女にしてみればいい迷惑でしかない筈の自分たちのことを、こうまで気遣つてくれるこの少女に、いや小夜だけではない、凍夜にもだ、この二人の兄妹に麻里奈は感激で泣きそうになつてしまつた。今まで自分たちの関係を知つて異常だと言つる者はいても、応援してくれる者はいなかつたのだから。

そして、ここに来て、自分の行いを恥じた。

確かに仕方なかつたはと思う、何せこの二人のことを知らなかつたのだ。

しかし彼らを知つた今、一方的に利用しようとした自分の行いが、どれ程恥ずかしいものかと思ひ知らされたのだ。

だがそれだけではない、この二人に知つて貰えたことに喜び、そして、矛盾するようだが、恥ずべき筈の自分の行いも、この二人と本当の意味で知り合えたことを顧みると、それも何だか誇らしいことのようにも思えた。

「私風情が、お兄様の意思も確認せず、差し出がましいことを言っているのは、重々承知です。ですが、お兄様っ！！ 麻里奈様のお力になつて差し上げてはk

凍夜の右手の人差し指で小夜の台詞は遮られた。

最後まで言わなくても分かつている、小夜は凍夜の行いとその表情からそう読み取る。

「そう自分を卑下する言い方は、僕は嫌いだな。前にも言つただろ？ 駄目じゃないか、チャンと覚えておかなきゃ」

今は左手は小夜が抱きしめていて動かせないの、代わりに右手で小夜の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「はい。申し訳ありません、お兄様っ！！」

謝ってはいてもその顔はとても満足そうな、満面の笑みだった。

「それに、僕が手伝ったからってどうにかなるとは限らないし、何より」

小夜に向けていた顔を麻里奈に向けてた。

「森川さんの意思が第一だ。どうしますか、森川さん？ 貴女が許可して下さるのなら、僕らは貴女に協力しますよ。本当に力になれるかは、残念ながら保証はありませんけど、それでも宜しければ、僕らはお手伝いしますよ」

この言葉で限界に達してしまった。

麻里奈は涙を堪えることが出来ずに、嬉し涙に頬を濡らした。

24・歌に込められたオモイ（前書き）

便宜的に**編とつけてますが、これはおもいの他一章が長くなつてしまったから、付けてるだけです。

お花見編は短いです。

それが終われば、二章に入ります。

24 歌に込められたオモイ

ドアの前に立ち、ノックしようと腕を振り上げては見てみるものの、またしてもその手がドアを打つことはなかった。

「はあ〜」

そうして、この数分間で何度目になるか分からないため息をつき、そしてまた深呼吸をする小夜。

彼女は今、凍夜の部屋の前で先ほどと同じ行動をかれこれ十分程繰り返していた。

しかし、その手はいつこうにドアを打つことはなく、そしてとうとうその手がドアを打つこともなかった。

ガチャツツと、ドアの開閉と共に凍夜が部屋から出てきた。しかしそれは、今小夜が立つ目の前の部屋、凍夜の寝室からではない。

凍夜が出てきたのは『凍夜の二室（第一の部屋）』だ。

小夜ですらその立ち入りを禁じられた凍夜の真の部屋　しかし、最近この部屋を利用することは無かった。

そのことが、何だか今日の自分の不安を確かなものにするようであらう怖くなった。

「んっ？」

部屋から出てきた凍夜が、自分の二室の前に立つ小夜を捉えた。

その格好は寝間着用の浴衣だ。青地に色とりどりの帯（リボン）の柄をあしらった小夜に良く似合ったとても愛らしいものだ。

小夜は、『えとっ』『あの……』とそわそわもじもじとするばかりでいつこうに話しが出てこない。

こうしている時点でその意味が丸わかりなので、見ていてとても微笑ましく、浴衣姿も相まってとても愛らしい。

その小夜の側まで歩みより、自分の寝室のドアを開け、

「いいよ、お入り」

っと、優しく微笑む凍夜。そして、その言葉を受けて満面の笑みを浮かべて、『はいっ』と勢いよく返事を返し、凍夜の部屋の中へと入る小夜。

そして、その勢いのままに、部屋の左手にあるベッドへとスルリと入っていった。

小夜がこういう風に寝間着姿で言い淀むときの原因はこれだ。

まだ小学校に通っていたころは素直に口にも出来るのだが、中学に上がったころから気恥ずかしさや凍夜に迷惑がかかることを懸念して（主に後者から）、口にすることはおろかこうして態度に示すことすら少なくなった。

一時はその素振りすら見せないのようになったのだが、凍夜から『女の娘は我が儘なくらいな方が可愛いんだよ』っと言われ、月に一度か二度程はこうして（かなり慎ましい）我が儘として添い寝をお願いしにくるのだった。

凍夜のベッドの向きは入り口側に足を向ける様におかれている。

しかし、何故か枕は足下の方へと置かれていた。

自分がここに来てからずっとそうしてあることに、その顛末を思い出すと共にそれだけで喜びが広がっていく。

最初に一緒に寝ようとしたときに、凍夜は小夜を壁側に寝かせようとしたのだが、（今の小夜ならできないかもしれないが）小夜は拒み、凍夜の左側で寝ることを要求したのだ。

『嫌です、私わたしはお兄様と……お兄様を直接感じていたいです』

っと、今にして思えば相当大胆だったと思い、昔の自分の浅はかさに呆れる想いと憧れる想いが交ぜになって浮かび上がってきた。

そしてそのとき、凍夜もそれを譲ることがなかった。

しかし、小夜の強い想いを感じて即座に対応策を講じたのだ。それが、これだ。

頭の向きを反転させることで、小夜を自分の左側かつ壁際に寝かせる様にしたのだった。

凍夜はTシャツにハーフパンツという出で立ちだが、特定の寝間着というものをもっていないので、そのままベッドに入る。

すると直ぐにその左腕を小夜に取られた。

今日家に帰って来てからはいつもよりも積極的だ。

今日起きたことがいろいろ有りすぎて不安になっているのだろうと思う。そして、多分その（積極的な行動の）後押しをしているのは、花見のときの自分なのだろうと。

《凍夜IS：太陽の花／奥井雅美》

桜の園に凍夜の歌声が響き渡る。

その声は女性のものへと変えられている。

別に変ではない、今時歌に合わせてボイスチェンジャー変声器を使うことなどは素人なら珍しいことではないのだから。

しかし、先ず持って誰もそんなことなどは気にもとめなてなどい
ない。

余興だといって、携帯のアプリケーションの一つたるホロキーボード（センセサイザー）を音を奏で、歌い始めた凍夜に誰も彼もが意識を奪われる。

そして、その紡がれる歌詞に酔いしれていた。

凍夜が歌い終わって、たっぷりと余韻に浸った後、一行のみならず周囲に集まっていた皆から喝采が起きた。

先ずは麻里奈が智之にアプローチを掛けるためのお膳立てで歌った唄で、想いを伝えることの大切さを歌った曲だ。

先ほどまでは自分が本気であるの歌を歌うのかと、狼狽えていた麻里奈ではあったが、凍夜の言っていた通り、彼の歌を聴いた今はこ

の想いを伝えるんだという決意に満ちたものに変わっていた。

「では、次に森川さんお願いしますね」

凍夜が麻里奈を呼ぶ。その時に、一緒に智之も反応していた。

『森川』で間違えたのかと思っただが、そうでもないらしく、凍夜が智之に声を掛けた。

「森川くんはこの後でお願いします。済みません、僕の後にと言ったので、勘違いさせてしまいましたね」

智之にも何かやらせるつもりなのか？ と麻里奈は訝しんだが、今は自分の事だと気を取り直して集中する。

先ほど曲を貰ったばかりだ、声を出して歌うのは初めてな上に、凍夜の影響で知り合い以外にも数多くのギャラリーがいる。

何より、凍夜のあの歌の後だ。直接心に響くという表現がピツタリ当てはまるあの歌の後に歌うというのは、正直かなりやりにくい。

だが、それでも辞める気にはならなかった。

「ふー、始めて！」

麻里奈の合図で凍夜が曲を弾き始めた。

《麻里奈ISS：予報のない嵐／藤谷美里》

それは、麻里奈の心情を如実に表した歌だった。

元から用意されてた曲だ、別に麻里奈のために凍夜が即座に作ったというのではない。

だが、それでも麻里奈のために作られたように、今の麻里奈の状況を想いがありありと語っていた。

麻里奈自身も歌いながらに不思議な感覚に捕らわれていた。

信じられない程に歌に想いが込められている、そんな気がした。

別に自分は歌に斗出した才や想いがあるわけではないので、単なる

(自意識過剰による) 思い込みかもしれない。

それでも今はその想いのままに歌った。智之に想いが伝わるように。

麻里奈はずっと智之だけを見つめながら歌っていたので、自分が歌い終わったときに拍手が起きたことに驚いた。

そして、急に恥ずかしくなりシートの上に座り身を小さくした。

そんな麻里奈を見て、智之も我に返った。

「おいっ！ マジか？ マジなのか？ あの歌の後に俺が、これ歌うのか？」

智之はいっぱいいっぱい焦っていた。

「では、次は森川くんお願いします」

っと、凍夜が涼しい顔で言ってきたので、それに（負のではない）怒りを覚えた。

（この野郎、さっきのも絶対わざとだなっ！！ こいつ、とんだ曲者じゃねーかっ！）

凍夜と一緒にということに承じてしまったが、既にそれこそが罠だった。

然も、先ほど麻里奈が呼ばれたときに反応してしまった手前、もう逃げられない。

そして、何より、麻里奈のあの歌の後だ。ここでこれを自分が歌わなかったらどうなるか……

そんなことはあつてはならない。

智之も腹をくくった。だが、このままでは気が治まらない。

「おいっ！ 凍夜」

最早、この相手に敬語を使う必要はないと、口調を普段の（どちらかと言えば親しい相手に遣う）ものに変えていた。

「なんですか？」

「後で死ぬほど謝るし感謝もするから、今は思いつきり殴らせる！」

「嫌ですよ（笑）」

「ちよっ！？ 何言ってるのよっ！！」

智之の意味不明ではあるが、物騒なもの言いに、麻里奈が飛び上がった。

「こいつはそれ程のことをした……いや、させようとしてんだよ！」

「はあ？ 意味わかんない」

「いいよ。直ぐわかるから」

智之は麻里奈から視線を外し、（麻里奈の視点からして）珍しく照れたように朱くなっていた。

そのことにより、先ほどの勢いを削がれたため、殴るところはもうどうでも良くなった。

「始めてくれ」

凍夜が伴奏を開始する。

そして、智之の言った意味は程なくして知れた。歌詞はそのままずばり、先ほどの麻里奈の歌への返歌だ。

それも、そのものずばりこれ以上はないというくらいに彼の心を謳^{うた}っている。つまりは肯定の意思表示に他ならない。

《智之IS：君が好きだと叫びたい／B A A D》

そして、ある英語のワンフレーズを唄うときに智之は右手の親指と人差し指とを立てし字をつくり、それを麻里奈へ向けたのだ。

これは智之のアドリブによるパフォーマンス、明確に『麻里奈^{おまえ}に向けたもつだ』と示したのだ。

彼らの歌い終わったあとで、再度凍夜が二人に向けて一曲送る。

愛し合うということは、けして楽なことばかりではない。しかし、それでも愛は素晴らしいものであると、そう謳った歌だった。

《凍夜IS：時に愛は／奥井雅美》

あの歌には凍夜により呪い^{まじな}（念）が込められていた。

実は今日の花見の目的がコレだった。

最初は小夜に歌わせる予定でいたのだが、正直小夜では確証が得られるか不安なところがあつたのだ。

というのも、小夜の場合その容姿のみで十二分に人を惹き付ける魅力がある。

そのため、それが自身の求めた結果によるものなのか、それとも小夜を目当てにしているのかが判断し辛いところがあつたからだ。

結果としては概ね期待通りのものを得られた。

だが、誤算というべきか、そもそも本当に効果に掛かったのか怪しいものではあるのだが、帰って来てからの小夜がいつもよりも随分を積極性を増していた。

普段の小夜は出来るだけ凍夜に迷惑をかけないように、思ってもためこんでしまい、表には出さない。そしてそれは、決して他人には判別できるものではない。

当人としては、一番凍夜に隠して起きたいのだろうが、凍夜にはそれはあまり意味がなくいつも暴かれてしまっていた。

しかし、今日の小夜は少し違う。

確かに、直接的に要求するようなことはないのだが、誰から見ても分かるような態度になっていたのだ。

これが、小夜の精一杯の積極性の表れであるということがわかるだけに、どうにも愛らしくてしょうがない。

もし、別の女の娘がこんなことをしていたのなら、それを見た女子達からは、何をブリッ子しているのかと反感を買うつころだろうが、恐らく今の小夜を見たならば、その彼女らですら、庇護欲に駆られているに違いないと思う凍夜だった。

いつもなら、ただ腕を抱いて寝るに留める小夜であつたが、今は凍夜の腕の内にまで入り込み、その胸に頬摺りまでしている。

本当に可愛いと思う……

出来ることなら、ずっとこうしてあげていたいと……

25・その言葉は誰のために……

《小夜BGM：素敵だね／RIKKI》

小夜は凍夜の心臓へと耳をあてがいその音を聴く。

凍夜に残る数少ない確かなその身の証明。

そうして、凍夜の鼓動に耳を傾けながら今日のことを思う。
いろいろ不安なことがある。

その最たるものはやはり詠歌と神埜の存在だ。

だが、そのこと（小夜が不安に思っていること）に凍夜が気づかぬ訳がない筈だ。そして、それでも尚、何も言っていないということは、自分には言えぬことなのだろうと小夜は胸を痛める。

凍夜には秘密が多い。それは、小夜に対しても同じことだった。恐らく凍夜の全てを知るのは、詠歌や父、そして四柱を中心とする一部の関係者だけだろう……

その中に自分は含まれていない。

そのことに心底悔しいという思いがある反面、ある種の安堵があった。

だからこそまだこのままの関係を続けられる。小夜はそう思っていた。実際のところはどうだかは分からないにしても、それは確信に近い。

小夜と凍夜の関係は約束　契約と言い換えた方が正確なのかも知れない。

始めから終わりのある関係だった。それがいつまでなのかは分からない。

だがもし、凍夜の目的というものが何なのか、それを自分が知れば、きつとそれは別れを早めることになる、それは間違いない筈だ。出来るだけ一緒にいたい、どれ程思いが叶わないとしても、凍夜の言うように、最後には絶望に暮れるとしても……

だが、今は……今だけはそんなことが、どうしてもよくなってしま
うほどに、この胸は温かった。

今日小夜がはしゃいでいたのには、確固たる理由がある。

それこそ今日一日の憂いを全て帳消しにして余りある程の理由が。
確かに凍夜自身の歌った歌には心から酔いしれていた。だが、麻
里奈が歌ったときにはきちんと防壁を張っていた。

流石に、麻里奈の想いに感化されるわけにはいかない。そうなれ
ば、もう自分を抑えることなど出来なくなってしまおうから……

それを聴いたのは本当に偶然だった。

修之と二人で席を外した凍夜が、修之との密談を終えても帰って
来なかったときのことだ。

いくら修之から凍夜からの伝言として、待っているようにと告げ
られても、もう20分以上も帰って来なかったのだ、小夜としては
当然凍夜を探しに行く。

そして、暫く周辺を探しているときに、偶然沙樹と神埜の話も聴
いてしまったのだ。

今日、神埜が態度を一変させられた凍夜からの一言を……

『僕は、妹を傷つける存在を、例えなんであろうと許しはしません
から』

それからのことは夢見心地である場でのことはよく覚えていない。
何せ万人に優しいあの凍夜が、自分を擁護するために他人を傷つ
けることを厭わなかったのだ。

それほどに想われていることに、嬉しさを隠しきれぬわけがなか
った。

「おかえりなさいませ、神埜お嬢様」

そういつて出迎えたのは、幼少の頃より神埜の世話をしてきた乳
母の様な使用人、池田昌子だ。

「ただいま」

神埜はいつもと変わらぬそっけない挨拶を返しただけで自分の部屋へと入って、直ぐに着替え始めた。

蒼縁の家は日本屋敷で、神埜の部屋も障子と襖で囲われた部屋だ。「おめでとございます」

《神埜BGM：you/癒月》

縁側に控えた昌子が着替えを行う神埜に、突然祝辞を述べた。

「なんだ、突然？」

神埜は昌子の意図が全く分からなかった。

「あの方と何かいいことが、お有りになったのでしょうか？」

一瞬驚き、動きを止めた。だが、それもホンの一時だ。

神埜は再び着替えを再会する。

全く、何故分かるのか？ と神埜はつくづく疑問に思う。

「何故そう思う？」

「お嬢様のお顔がいつもよりお優しゅう御座いました。お嬢様にその様な変化をもたらせられるのは、あの方を置いて他にはおりませんから」

玄関からここまで顔を合わせたのは、僅かな時間だけだ。

ただでさえいつもと変わらぬ筈（和らげてるつもりはない）の自分のどこを見てそれが読み取れるのか、神埜は不思議で仕方がない。恐らくは……いや間違はなく、実の両親でさえ気づくことはない。自分の変化を読み取れる人間たにんなど、昌子とあの人だけだ。

「参ったな……」

そう言って、左手で左目の上を押さえる。左目からは涙が溢れていた。

今はまだ不味かった。まだ心が落ち着いていない。

自分のことを心から想って、掛けられた昌子の祝辞が、彼の言葉を思い出させ、そしてそれを祝ってくれる存在というのが、とても

嬉しかった。

教室でその言葉を掛けられてから、ずっと嬉しくて……とても嬉しくて……でも、その喜びを表してはいけなことが辛くて……、神埜はその想いに教室ではグツと堪えていた。

思わず幼少の頃の『本当の自分』というものに戻りそうになってしまった程に……

その思いを押さえつけながら、なんとか花見まで同行した。

だが、これ以上はきつとボロが出る。そう思い、今はそれ以上に近づかない様にして、ずっと何事にも無関心を装っていた。

いつそ、花見に同行しない方が本来はいいのだろう……だが、それはどうしても出来なかった。

それは、神埜に取ってとても重要なことだったから……

神埜は耐えていた。誰にも気づかれることなく……

きつと皆には目障りな存在としてあり、神埜の想いの片鱗も見いだすことは出来なかった筈だ。

それでいい。そうでなくてはいけない。そうでなくてはならなかった。

結局同行しても、一言も話さなかった。

なるべく視界に入れないようにした。そのお陰で大分落ち着いたころだった。

（あのバカ余計なことしやがって……あんな歌……歌うなよな……）

そう思いながら、立っても居られなくなり、畳にへたり込む。

（なんだよ、畜生っ！ どんだけ凄すぎる（バカな）んだよ。あのバカはっ！）

凍夜の掛けた呪いまじなの効果に当てられたわけではない。

だが、その止められた想いは理解できる。

そして、凍夜がやっていたことが、それがどれ程のことなのか、それが分かっていった。

あの中でそれを真実理解出来たのは神埜だけだ。

小夜は凍夜から話を聴いて、自分には出来なくてもその原理だけは理解……いや、知っていた。

凄いいことだというのはわかる。しかし、それがどれ程のものなのかまでは理解していない。いや、出来ない。

神埜程の魔術師だからこそ分かる。

そして、小夜ですら知らぬ彼を知るが故に、彼を想わずにはいられない。

それが、どれ程の苦悩の上に成り立つものなのか。

それが、どれ程のことをして手にすることが出来るようになったものなのか。

それは、誰にも想像すら出来ぬほどに過酷であつただらうことを想う。

耐えられそうに無かつたから、感情の線を一旦切つた。

今度は、自分を傷つけるためではなく、自分を守るために……

家まで戻つて来て、玄関に入る前にまた繫げ直したばかりだ。

そんな状態で、優しくされて涙を堪えきれぬ程、神埜は本来無感動な人間ではないし、その感情ごと消し去ってしまう程に冷淡でもなかつた。

「お嬢様、入りますよ？」

そういつて、昌子は神埜の返事も聴かずに部屋へと入つて来た。

そして、先ず神埜に声を掛けるのでは無く、鑑やらなにやらを用意し始めた。

「さあ、お立ち下さい。髪を結わえますから」

神埜は昌子のなすがままにされ、その蒼髪に櫛を通された。

「今はお泣きなさい。今までの分を、ウンとお泣きなさい。そして、明日からはあの方に、今の貴女をお見せになつて差し上げなさい。きつとあの方もそれを望んでおられる筈ですよ」

きつと、母ですら言えぬ様な言葉を昌子は、優しく神埜に掛けた。

「あの方にとつて、貴女こそが真の姫君なのですから」

昌子は小夜を直接は知らない。だからと言つて小夜に対して何か

しら含むところはない。

ただ純粹に、神堊が愛おしいだけだ。

その神堊に、本来の神堊に戻って欲しいそう思っている。それだ
けだった……

26 ・決意、次のステージへ

先刻まで子猫の様にじゃれついていた小夜だが、いつの間にかスヤスヤと寝ていた。

少し乱れた髪を直してやり、その健やかな寝顔をとても愛おしく見つめる凍夜。

小夜の寝顔を眺めながら凍夜も今日という日のことを振り返っていた。

詠歌こと・実験のこと・修之こと・沙樹こと……神埜のこと、小夜のこと……そして……

殊更詠歌からの話は、ついにそのときが来たかと思わずにはいられない。

あのとときからずっと待ち望んでいた筈のこと……

凍夜を個室へと招き入れ、椅子には座らず壁に寄りかかりながら、香煙草たばこを一本取り出し、ため息のように大きく一服してから詠歌が話を切り出した。

「奴らが動きだした……」

それだけで十分だった。それだけで十二分に理解出来た。

元々そうだろうという予想はあった。でなければ、わざわざ詠歌が自分を（この学校に）呼び出す様なことをするわけがない。

小夜の安寧を崩すわけがない。

「そしてその中に、奴らしい輩やからの情報があった。二十前後の男で、赤褐色せきかくしむくの長髪を後ろで一本に縛り、日本刀を繰る日本人だそうだった……」

詠歌は苦虫を噛みつぶした様な表情になる。先ほど付けたばかりの香煙草は無残にも灰も残らず、その手の中で焼き尽くされ、青り

ンゴの爽やかな香りだけが、その存在があったことを主張するかのように残った。

「おまけに、君と同じように不透過の眼鏡で、仲間から『ヒューガ』と呼ばれていたらしい。」

これはもう間違いようがないっ!!」

右手を顔を隠すようにして宛がい、頭を手で壁に押しつけるようにゴンツとぶつけた。

「別に君の話信じていないわけじゃなかったんだ……でもな……実際、こうして改めて外部から情報を得るとな……」

詠歌の言葉にはいつもの覇気がない。いや、覇気どころの問題ではない。

恐らくその眼は、溢れるギリギリのところまで涙が満ちているに違いなかった。

彼の存在は詠歌にとって いや、自分たちにとっても、とても大きい存在だ。

それでも、誰の前でもその涙はおるか悲しみの表情すら許されぬ立場にある詠歌は、必死にそれを押し殺そうとしていた。

凍夜としては、自分の前だけでは泣いても構わないと声を掛けたところだが、それは返って逆効果だということぐらいは理解しているので、敢えてその言葉は口にしない。

「一つ訊いてもいいか……?」

今だに顔を覆い隠したまま、詠歌が質問する。

「どうぞ」

「お前はあいつが」

《凍夜BGM：Stories / Hitomi》

そしてこの後、詠歌から能力向上教育プログラムの建前と本来の

目的を聴かされた。ということを感じだしながら、凍夜は一人で桜並木を歩いていった。

あのときの凍夜の頭の中は、詠歌の話はさして驚くようなことでもなく、ただそうかとそう思うだけでおわり、そして、いつも『奴』や『彼』と言っていた存在に『ヒューガ』という名称がついた、ということの方に大きく締められていた。

詠歌から聴いた直後は何故だかあまり思うこともなかったが、多分これは逆だろう。

刺激が強すぎて麻痺していた。今思えばそういう状態だったという事に気づくことが出来る。

花見に行くのは元からの予定だった。

実験のこともあるが、小夜を連れて行ってあげたいという思いも多分にあった。

それ以外の目的は無かった……無い筈だった……

しかし、詠歌の話を知っていたせい、気づけば凍夜は一人群れを離れて、ある桜の木へと足を運んでいた。

三谷美岡の桜の園は三つの区画に別れている。色で分けるなら赤・白・青の三つだ。

この三つの中ではやはり断トツで青の区画、蒼時雨の人気が高く、桜が咲いている時期は平日でも時間帯によってはかなり人気ひんが多い。休日はそのところも人が溢れかえるのだが、今は平日の昼間という事で、青の区画以外には人は殆どいない状態だ。

凍夜は今白い桜の花片の舞う桜並木をゆっくりとただ一本の桜の木を目指して歩く。

そして、道から外れてなんの変哲もない、ともすればふと目を離しはたその隙にどの木であったか分からなくなってしまっそうな、そんな桜の木の前で凍夜は立ち止まった。

凍夜にとっての原風景。

ここに来ること自体が七年ぶりだというのに いや、そもそも過去の記憶すら曖昧であるのに、何故だかこの記憶だけは自分のも

のとしてありありと、そしてはつきりと思い出せるのだ。

ここで交わした自分たちの約束を……

そうして、受け継がれた眼に手を当てる。

七年前の誓いを思い出しながら、詠歌の話を桜に語り掛ける。

その桜にその亡骸があるわけではない。

これは感傷だ。

この七年歩んで来た凍夜の人生の……

これから始めまることへの……

誰も彼をも騙し続け、誰も彼をも傷つける自分にそんな資格はないと分かっている筈なのに……

そして同時に、決意を示した。

誰が聴いているわけでもない。

ただ、これから皆を傷つけることを躊躇わぬために……

「これからは、僕たちの『セカンドステージ』だ！」

《凍夜IS：2nd Stage/kids alive》

『その子は……？』

『ああ……もう死んでるよ……お前も、もう直ぐ死ぬんだろ？』

『ああ……もう、どうやっても助からない……その子を助けた

いか？』

『っ、出来るのかっ！？』

『……分からない。でも、可能性はある』

『可能性でも構わないっ！！ 何でもするっ！！ 俺の全てをくれてやるっ！！！ だから、だからこの子を助けてくれっ！！』

『二つ……二つ条件がある。そして、これは飽くまでも可能性……
確実な保証はない……それに、叶えるのは僕ではなく、君自身だ……

…僕の身は、見た通りもう……もたない……』

『なんでもする、この子のためなら』

『……では、一つは

「二つ目は、」

『分かった、必ず守って見せるよ』

『そうか……じゃあ、後は……お願いします……うつとを……ど

うか、頼……みます、どうか……い……』

27 氷下の乱流

ここはQ、Gのとある港の倉庫街。クイーンガーデン

まだ昼間ではあるのだが、船舶の往来は無く、正に何らかの地下組織が隠れ蓑みのにしていそうな場所だ。

そして、それは多分に漏れずここにも当てはまっていた。

その倉庫街にある一つの倉庫の扉が開かれ、その中に一人の男が入っていた。

「ワリー、遅くなった」

男は言葉では詫びているが、はっきり言って全く気になど留めていない様子だった。

そして、彼を待っていた他のメンバーもそのことを気に掛けていない。

だが、遅れて来たことは構わないがその理由は気に掛けて置かなければならない。彼らは、そういうことを気にしなければならぬ集団だった。

「何かあったの？」

メンバーの内の一人の女性が、遅れて来た男に問いかける。

しかし、これも飽くまで確認程度でしかない。何故なら、何かあった場合には彼はそもそもここには来ていない筈なのだ。

「いや、途中で子猫がいてさ。あんまりじゃれつくんで、宿めるのに時間食っちゃった」

「そう」

女性が倉庫の中央にまで歩み出て姿を現す。

現れたのはその女性だけでなく、倉庫に集まっていた全員だった。今倉庫に入ってきた男を含めて総勢六名、内女性は二人という構成だ。

彼らは倉庫の中央のテーブルに集まり、全員揃ったところで話を始めた。

「コウモリからの連絡が入ったわ。やはり、ターゲット：T1はヒューガの情報通り偽物ね」

この中で最も若いであろう、まだ少年とも呼べるくらいの青年が片手を挙げた答えた。

次いで、最も年上であろう、男性が言葉を発する。

「これで、ターゲットはあと二人か。一国を相手にこの人数だ。どちらが本命なのか、はつきりするまではコウモリには引き続き監視させておけ」

「分かってるわ」

「しかし、まあ……こちらには好都合とは言え、このT1は可哀想だね」

テーブルの上に並べられた写真を手に取り、可哀想と言ってお気ながら嘲笑いを浮かべながら写真を眺めていた。

「折角、困になるためにいろいろ弄いじられちゃってるのに、ヒューガの所為で全部パーだよ」

「おいおい。俺を極悪人見たいに言うなよ。それに、そいつが望んだかどうかは兎も角、そいつが成り代わっているのは俺の親友だったんだ。その親友の死を冒ぼう流りゅうしている輩には罰があつて当然だろ？」
それを聴いて、全員が嗤わらう。

「クツ、つくづく極悪人だろうがよ。その親友を手に掛けて置いてよく言うぜ」

「仕方ないさ。あいつは、そうでもしないと俺の邪魔をするからな」
その話に、年長者の男性が確認を取る。

万が一にも、彼の話に食い違いがあつた場合には、自分たちは終わりだ。

一国を相手に、たった六人で戦争している様なものなのだ、どれ程慎重になつたとて確実なことはないのだから、せめて一つでも多くの確定事項がある方がいいに決まっている。

「ヒューガ、念のために確認だ。奴は間違いなく、死んだんだな？」

「ああ、間違いのないよツアクア。俺がこの眼で見てるんだ。あの状

態で、生きていられるわけがない。なんなら、あいつのあのときの状態を誰かで再現してやるうか？」

「いや、いい。それに、お前は下手に動くなよ。お前の存在が知れたらことだ。この間のことだっつてわざわざお前が出張ることはなかったんだからな」

「大丈夫だよ。俺もあいつが死んだときに一緒に死んでることになつてるから、俺の得意（特異）魔法でも使わなきゃ奴らに気づかれることはない」

「念のためさ。何せ向こうにはあの女狐がいる。

以前の作戦のときは、二十そこそこの小娘はたちにしてやられたからな、アレから大分華々しい話も聴いてるんだ。警戒するにこしたことはないさ」

ヒューガは当時を思い出す。自分たちに与えられていた任務。

ある物の護送任務だった。

そして、いつくかの囀エコーを混ぜた部隊の中で、自分たちの部隊が本物を運ぶ筈だった……しかし、自分の部隊の誰もそれを持つては居なかった。

そして、そのときの作戦指揮を執っていたのが詠歌だった。

「確かに、あのヒトはとんだ曲者だ。俺にすら、本物の在処を教えなかったんだからな。まあ、それはいい。もう終わったことだ。それで？ これからは？」

まだターゲットはしぼり切れてはいない。

七年掛かりで漸くここまで漕こぎ着けたのだ。今更失敗は出来ない。先ずはターゲットを絞り込むそれはいい、だがコウモリに観察させてるだけでは埒があかない。

「『花火』はどうかしら？」

今まで黙っていた、最初に口を開いた方ではない、彼女より少し背丈の小さい女性が案を出してきた。

「フアナちゃん、そんなの在り来たりじゃねえ？」

「ちゃんは辞めなさいニツド。私は貴方より年上よ。

「いいのよ、在り来たりでもなんでも、効率がいいのだから」

「確かに、あのときもよく使っていたから、俺たちだと言うことは直ぐ分かるだろうが、それは今更だ。でなけりゃ、わざわざターゲットを一カ所に纏めたりはしないだろうからな。どうせ誘っているなら、俺たちらしいやり方で、歓迎を受けてやるうじゃないか？」

ツアクアが皆を見回して意見を確認する。

「確かに、（自分たちの）安全面を考えれば一番効率的ではあるが、材料調達の手間を考えるとそうとも言えないだろう？」

ツアクアの次に歳であとう男性が意見をだした。

「デフォイド、手間などいくらかけても構わないではないでしょう。今更しくじる方が大問題です」

「その気持ちは分かるがな、リユード。今から用意するとなると、半年近くはかかることになるぞ？ それ程の期間があれば奴らとて何かしらの対策を打ってくるだろう。流石に君のコウモリでは、今以上のことは出来まい？」

「元々コウモリにはこれ以上は望んでないわ。でなければ、バレルのが落ちよ」

そうして、皆の間で幾つかの意見が出され、結局のところ花火は使われることになり、その準備期間にもコウモリ以外の手段でターゲットを絞り込むべく、幾つかのアプローチをかけるということでは決まった。

「それじゃ、俺はこれで失礼させて貰うよ」

主要な話が纏まると、ヒューガは一人で先に倉庫を出て行った。残るメンバーは、その他にも詰めて置く必要がある案件を話していた。

「器の詮索状況は？」

ツアクアがフアナに問いかける。

「駄目ね、いったいどこにいったのか……」

実のところ、ヒューガとこの組織では最終的な目的が全く違う。

単に、必要とする手段が同じであるだけだ。

そして、その目的も手段も別段争う必要がないために、行動を共にしているに過ぎない。

故に彼らの間に仲間意識というものは存在しない。

「まあ、いざとなったら奴を使うんでしょ？　らな、良いんじゃないの？」

ニッドはこともなげに言っているが、デフォイドが口を慎めと窘める。

確かに、彼らとの関係に仲間意識はないだが、

「彼は我々の数少ない理解者だ。出来うることなら、彼にも未来を託したい」

人として最低限の意識はあるようにも取れる。

だが、花火がなんであるかを知るニッドにしてみれば、何を今更としか思えない。

そうして、今出来うる限りの話を終え、解散となるときにツアクアが言い放った。

『百年後の正常なる世界のために、偽りの平穩を破壊する！！』

28・嵐の前の静けさ

席に着くなり机に突っ伏し、大きく溜息をつく凍夜。

今日の登校はかなりの疲労を強いられた。よもや毎日こうなのかと思うと流石の凍夜も疲れを感じずにはいられない。

若干本気でこれからは小夜と一緒に教室まで空間転移してしまおうかと思ひ、

(今の小夜じゃ一人でこの狭い空間は無理だから、僕が手を貸して……慣れてきたら、一人でやらせれば良い練習に……)

なんてところまで、具体的に考えてしまっていた。

しかし、流石にそんなことはしない(させない)。

凍夜は自身で出来ることは出来るだけ体を使った方がいいと考えている。

昨日の花見も小夜と二人だけだったなら、歩くのも一つの手だと思っていた程だ。

ここからだ桜の園まで歩いて三時間程掛かるが、小夜ならデート気分で喜んだに違いない　などと考えていると、ふと改め

て自身の考えていることが小夜のことばかりであることに気づく。

(シスコンと言われるのはこれか?)

はつきり言って、今更だ。

だが、今まで凍夜は家と学校とではその思考分野がまるで違っていた。

誰だってそうだろう、家族といるときの自分・友達といるときの自分・恋人といるときの自分　皆誰しもそれぞれの状況に応じて見せる面、考えることは違う筈だ。

別にこれは自己を偽っているわけでも、作っているわけでもない。これは人として当然のことだ。人のあり方は絵の様な一面だけではないのだから。

人間とはもつと複雑で多角的な　例えるならサイコロの様なも

のだと凍夜は思っている。

故に、小夜と家で二人きりできるときに小夜のことを考えるのは当然のことであり、学校ではその他のことを考えることも同然なのだ。

昨日小夜は、自分といるとき以外の凍夜のことを自分が想像したことがないことにシヨックを受けていたが、それも凍夜に言わせれば当然のことなのだ。

しかし、今はその二つが一緒の状態で在る。
となれば当然、

(シスコンって言われるわけだな……)

っと自分で納得してしまう。

最も、それを教室で言ったのは神埜だけであり、その神埜は詠歌から聴いた情報であるということ踏まえると、姉から見た視点からさえもそう見えるということなので……

「……あまり考えないことにしよう」

そう結論(?)を出した 人はそれを逃避という 凍夜だが、それが声に出ていた。

「何を？」

横合いから思わぬ相づちを受けて、驚いてしまった。

「えっ？」

そして、振り向いた視線の先に沙樹がいた。

「もう、シヅカちゃんってば!!! さっき声かけたのに、聞こえてなかったの？」

「すみません。ちょっと考えごとしてました。おはようございます、中島さん」

「おはよう、凍夜くん」

《沙樹BGM：ミネラル／七緒香》

『凍夜くん』今まで、沙樹がずっと呼びたくても呼べなかった凍

夜への呼称。しかし、昨日は二つの告白をし、更には凍夜の更なる秘密の一端に触れてたことにより、踏み込むことを決意して、そう呼ぶことにしたのだった。

凍夜は、驚いていた。まさか昨日の今日でまた普通に話せるとは思っていなかったからだ。

昨日はあのあとも最後まで一緒にいた。だが、その場では気を張っていられただろうが、家に帰れば落ち込むだろうと思っていた。自分はそれだけのことをした、その自覚はある。

一夜明けた今でも　　いや、今にしてこうして接してられる沙樹という少女を、凍夜は今まで見くびっていたと自身の考えを改めることにした。

「凄いですね。まさか、もうこうして話しかけて頂けるとは正直思っ
てませんでしたから」

思っていたことを正直に言葉にした。

「当たり前よ。確かに家に帰ったら落ち込んだけど……よくよく考えて見たら、あたしってべつにフラれたわけじゃないのよね
」

「はいっ？」

この発言には更に驚くしかない。何しろ自分にはつきりと彼女の告白を、『好きだ』という告白を断っているのだから。

「だって、そもそも凍夜くんの中で、あたしって性別は女でも、女という対象ですらないわけでしょ？　でもそれは、別に除外されたってわけでもなくて、単純にそういう情緒がないってことなのよね？　だつたは話は簡単じゃない？」

もう……要はシツカちゃんってば、背も高いしもういい年なのに、精神年齢が小学生おしちやま低学年並ってことなのよ。昨日は悔しさとか、泣かないって反骨精神で言っちゃったようなものだったけど、今度こそ本気で言っわよ。私は貴方を惚れさせてみせるわ。どう？　あたしっていい女でしょ？」

凍夜はあっけに取られていた。

まさかこんな切り返しがあるとは思っても見なかった。

だから凍夜も茶化さずにきちんと答えた。

「ええ、そうですね。本当……いつか思わず、惚れてしますかも知れませんか」

だが、残念なことに沙樹には本気ととって貰えなかったようで、沙樹はピイツと顔を背けて自分の席についてしまった。

しかし、実のところそうではない。

（全くこの天然ジゴロめ〜、自分にその気がない癖に、女をその気にさせるのが上手すぎるのよ）

沙樹の言う通り、凍夜の全く意図しない効果が見事に沙樹に現れていた。

凍夜に言われた瞬間に、顔に熱を感じて凍夜の顔を見ていられなくなつたのだ。

「おはようございます、沙樹さん」

「おはようございます、小夜さん」

まるでタイミングを計っていたかのように小夜が教室の中に入ってきた。

鞆の手には持っていないし、凍夜が既にここにいるので、恐らく一旦教室には来ていたのだらう。どこに行っていたのか？ という無粋なことは訊かない。

「お兄様とは何をお話になっていたのですか？」

「えっ！！？ え〜と……」

沙樹が狼狽える。流石に、全て話すのは恥ずかしい上に、小夜の場合若しかしたら、話すと危険な気もする……

小夜は本当に何も聴いてはいなかったのだが、最後の沙樹の態度だけは見た。そこで、会話の内容が気になったのだ。

「ちよつと昨日のことをね」

沙樹の態度を見て、凍夜が小夜を自分の方に惹き付けた。

そこらへんのさり気ない気遣いをしてくれるところが、凍夜の良いところではあるのだが、逆にそのあまりの無自覚さが罪なところ

であると沙樹は思っている。が、取り敢えず助かったので今はただ感謝するだけだった。

「それより、ありがとう。嫌な用事させてしまって悪かったね」
どうやら、小夜は凍夜に何か用事を任されていたらしい。

だが凍夜が、小夜が嫌がる様な用事をやらせるとは思えない、今度は沙樹が気になった。

「いえ、私は別に……それより、私の方こそお兄様のお気を煩わせてしまって、申し訳ありません。もう姉上のことは、学校にいる間だけでも割り切りますから……」

凍夜は何も言わずに、小夜の頭を撫でる。掛ける言葉は無い。

双方の想いを理解出来るだけに、知るが故に何も声を掛けないことを選んだ。

すると小夜の顔が、少し沈んでいた表情からみるうちに嬉々としたものへと変わっていく。小夜にとって凍夜の手はそれこそ魔法だった。その手に勝る魔法などないと小夜は本当にそう想っている。

たった一日しか知らない筈なのだが、何故かもうこの二人のこの光景を随分見慣れた様に感じる沙樹。ではあるが、半眼になって凍夜を睨む。

当然だろう、先ほどまでは自分といい雰囲気　とまでは行かなくても、あんな話をした後なのだ。少しは気に掛けさせてやらなければ立場がない。

そんなやり取りをしながら、場が和み始めたときに凍夜が沙樹に今朝の事態を話始めた。凍夜が悩まされたある事態を……

その話をしている間に、森川姉弟も教室に入ってきては話に混ざり。その後は、適当に話をしてSHR（とはいっても、教師が直接来ることはないので、画面を眺めているだけ）となった。

神埜や修之は挨拶だけして話に加わることはなかった。この二人ならその方が自然なので、無理に話を振ったりはしなかった。

そして、皆はこのSHRが終わるのを今や遅しと待っていた。

この後に入っている授業は、実習？（二限まで）。早速、詠歌が担当する魔法科授業だった。

高校生になりやっと始まる本格的な魔法の実技授業というのは勿論であるが、何より詠歌に指導して貰えるということへの期待と喜びは、魔法師を目指す少年少女たちにとっては計り知れないものがある。

本当の意味で始まる高校生活、その第一歩がいよいよ始まるうと
していた。

29 決闘の狼煙（のろし）

「景品なんてものはいらねえよ！！ その代わり、一発と言わず
てめえをブチのめすっ！！」

彼との会話をしている間、凍夜の頭の中では、昨日の香里の生徒
会への勧誘ことや、今朝の騒動なんかを過ぎつていた。

特に、今朝の騒動は強ち悪いことばかりではなかったのかも知れ
ない、と思えてくるから不思議だ いや、勿論いいことなど何も
ないのではあるが………だがもし、今朝のことが無ければ、この
クラスメイト小野大輔は、凍夜が止める間もなく小夜おのだいすけによって八つ
裂きにされていた可能性がある。

冗談の様で実に冗談ではないことが分かってしまうだけに実に恐
ろしい。何せ、現に今小夜が凄いい形相で大輔を睨んでいるのだ。凍
夜としては冷や汗ものである。

だが、凍夜にとっての不幸が大輔にとって幸いし、彼の命は散ら
されずに済んだ。取り敢えずこのことには素直に喜んでおこうと思
う凍夜であった。

何はともあれ、これで本気で相手をしてくれる相手が見つかった。
今の彼を見て本気でないと思う者はまずいない筈だ。

そうでなくては意味がない。でなければ、皆には分からない。

「ええ、その粹でお願いしますね」

「上等っ！！ ぶっ殺すっ！！」

先刻よりも度が上がっていた。

S H R の連絡事項で急遽時間割の変更があった。一限目の実習？
と三限目の国語が入れ替えになるというものだった。

これには流石に皆気を削がれてしまった。

そして、一限目が終了し、二限目からはいよいよかと思いきや、
またも肩すかしを食らってしまう。確かに詠歌は来たのだが、最初
ということと自己紹介から始めるということだったからだ。

考えてみれば当たり前のことではあるのだが、皆の意識は完全に
詠歌の魔法実習に向いていたため、なんとも焦れつたさを感じず
はいられなくなってしまった。

「では、次の授業はいよいよお待ちかねの実習だ。皆着替えて校庭
に集合」

この言葉で漸く実習に入るといふ安堵、それと共に緊張感が湧い
てきた。

「凍夜。お前は昨日の部屋を使え。ほれ力ギだ」

そういういつて詠歌は左腕を振って見せただけで、実際に力ギは投
げていない。だが、凍夜の携帯がポップアップした。

合い鍵は物理的ではなくこうして使用権限を与え、携帯を使用
することにより、その利用者特定・限定出来ることができる。

腕を振ったのは気分　　というのもあるだろうが、あれは動作制
限だ。

思考制御は思考のみで操作出来る反面、思考のみで動いてしまう
というデメリットもある。故に、外部との通信などに音声や動作な
どの制限ブロックがかかる様に推奨されている。

「ありがとうございます。使わせて貰いますよ」

通常更衣室は男女共にそれぞれ用意されているので、他の生徒か
らしてみれば疑問を抱かざるを得ないが、相手が（特別な立場にあ
る人間という意味で）凍夜なのでそれほど気に留めるようなことも
無かった。

「檜山さん、いきましようか」

「ああ。だが、いいのか？ 俺は一般生徒だぞ？」

そういつて、凍夜が修之を誘う。確かに昨日協力するという約束
はしたが、まさかここまであからさまなことをされるとは思ってい
なかった。修之としては少々困惑気味だ。

「大丈夫ですよ。単に、個室で着替えるだけで、別にシャワーが専用で用意してあるわけじゃないんですから。他の方より利点があるわけじゃありませんし」

「確かにな……まあ、いいか」

シャワーが使えないというのはそれはそれで気分がいいものではないが、それでも凍夜の申し出の方が随分とありがたい。その件とは違った意味で人の目はあるだろうが、そんなものは気にする程度のことではない。などと考え、凍夜の申し出を受け、後に続いて歩を進めたときだった。

「ちよつと待ちな凍夜ー！」

修之に話しかけるあたりから見ていた神埜が凍夜を呼び止めた。

その形相はかなり不機嫌なものだった。

「なんですか、蒼縁さん？」

「そいつと”一緒に”着替えるのか？」

「ええ、そうですよ」

凍夜は何と言うこともないという風に答えるが、神埜は更に不機嫌さを増した。最早、殺気と言えるレベルの視線を修之に向ける。

「大丈夫ですよ。僕にそういう趣味はないですから」

そう言っつて、凍夜はこれ以上は話すことはないと言わんばかりに歩き始めてしまった。

修之を後に続き、廊下に出たときに凍夜へと問いかけた。

「彼女のあの右眼の眼帯はアレか？」

「ええ、そうです」

「そうか……こりゃ、とんでもないところに来たな……ここは魔窟まぐつか？」

修之は肩を竦めて参ったなと弱音を吐いてみた。

「そうですね。まあ、それも昨日からですけど」

つと、凍夜もそれに合わせてみる。

すると、修之は大きな声で笑いだした。

「……ハハハ、傑作だな。自分で言っつて置いてなんだが、魔窟

実にいい表現だ」

魔族が四人に、内一人は覚醒者である。ラフェストこれを魔の巢窟と言わずしてなんと見えようか？ 何の気無しにいった言葉だったがよくよく考えて見れば実にしっくり来る言葉だと、面白さを堪えることが出来なかった。

着替えを済ませて、皆が校庭に集まると凍夜の指示でウォームアップを始めた。

このときは皆凍夜は詠歌のアシスタントなのだからと何の疑いもなくその指示に従ったのだが、この後落胆の知らせを受けることとなる。

詠歌が軍からの要請で急遽出勤したというのだ。これには流石に皆不快の意を隠しきれない。

一限目の変更からずっとフラストレーションが溜まっていく一方なので無理もない。

「取り敢えず、姉上から好きにする様に言われているので、今日のところは先ず『魔法』について考えながら少し体を動かしましょうか」

皆呆れた様な懐疑的な視線を凍夜へと向ける。

魔法とは何かここににいる者全てがもう十二分に知っている、故にここにいるのだ。従って、その意図が見えてこない。

自分たちはそれを『知った』上でその『使い方』を学びに来たのだ。何故今更そんなことをする必要があるのか誰にも分からなかった。

すると当然分からぬが故に気分を害する者もいる。

そして、今までのことも相まって相当にストレスの溜まった者がついに爆発した。

「お前何様？」

ある男子生徒がボソリと、しかししっかり聞こえる様に呟いた。

「そりゃ、四大柱様、紫司様だろうかもしないけどな、要はそれ

「つてのは力があつて初めて意味があるんじゃないのか？」

「周囲の者が凍夜と彼との間を空ける。」

「魔法カのないが使えない様な奴がここにいるんじゃないやねえよ!!!」

「何しろ凍夜は魔術が使えないと、そう昨日公言しているのだ。」

「その凍夜が自分たちにそんな基本的なことを
が指示を出すということが癪しゃくに障さわつたようだ。いや、その凍夜

流石に彼の言い方に危うさを感じた友人らしき人物が、彼を宿なだめに入つたのだが効果は無かつた。」

「そうですね。先ず力の証明は必要ですよね」

「凍夜は彼の意見に賛同する様な姿勢を見せた。」

「ほ、魔法まじゆなしでやるうってか？」

「僕は使えませんけど、貴方はどうぞ小野くん」

「彼の怒りのボルテージが更に上がっていく。」

「なめてんのか？」

「まさか、先ほども言ったでしょう？ 魔法について考えながら体を動かして貰うって。その意味をお教えしますよ。その為には貴方に全力でやって頂かないといけませんからね。なんなら、一撃入れられたら何か景品でも差し上げますよ」

「景品なんてものはいらねえよ!!!その代わり、一発と言わずにめえをブチのめすつ!!!」

「ええ、その粹でお願いしますね」

「上等っ!!!ぶっ殺すつ!!!」

大輔は苛立っていた。自分の愚かしさに。

(わりーなユージ、俺はお前が思っているほどいい人間じゃねーよ)
中学時代の友人のことを思い浮かべ、自分を信頼する友人へと謝罪した。

彼がこれからしようとしていることは、人助けでもなんでもない。ただの暴力、八つ当たりだ。

自分でも最低だと言うことは分かっている、しかし人間感情の全てを制御することなど出来よう筈もない。故に今はただその衝動に従う、例えこのあと自分の処遇がどうなるうとも……

「ルールはっ！！！？」

「シンプルに、相手にヒットさせて地面に倒れるまで。というのはどうでしょう？」

勿論、足場が悪くて転倒というのはノーカウントで。
使用する魔法に制限なしです」

「O・K・」

そう応えて大輔は集中し始める。

凍夜はポケットから何かのケースを取り出し、口に含んだ。その出し入れの際に、魔導波を微弱ながらに感じた。

「こちら準備は完了です。では、始めましょうか」

カリッ！ つと、凍夜が先ほど含んだ薬をかみ砕く音が微かに聞こえた瞬間に大輔は仕掛けた。

全身を強化している大輔の動きは速い。15m程離れていた筈の距離が一秒に満たない時間で詰められた。

始めに先制の右ストレート、大輔の予想に反して凍夜の動きは緩慢だった。始めの一撃は牽制のつもりでしかし本気で掛かった。

『力の証明をする』と言ったのだ、まさか一撃目から入れられるとは思っても見なかった。そして、凍夜のことか頭を過ぎる。凍夜

は魔法が使えない、ならばここまま自分が本気で打ち込めばどうなるか……それを考えて動きを鈍らせる。だが、それだけで拳が止まることはない。

ほんの少し威力が弱まっただけの大輔の拳が、凍夜目掛けて振り抜かれた。

拳は振り抜かれた。空を。

今まで目の前で止まっていた様な凍夜だが、実際のところは動いている。そのお陰でギリギリのところで大輔の拳は当たっていない。大輔はバックステップで一旦後ろに下がった。

「ふざけてんのかっ！！ てめえ〜！！!?」

生身の相手に対して、魔法で強化された拳は最早暴力というよりも兵器に近い。もしも、先ほどの一撃が当たっていたのなら、凍夜は病院送りだった筈だと大輔は憤慨する。

確かに、始めからフェアな闘いではない。しかし、大輔とてそこまでするつもりは毛頭無い。

「まさか。いつでも真剣ですよ、僕は。小野くんも仮にも殺すと言ったのなら、その半端さはやめて下さい。大丈夫ですよ、本気でやっつて。」

もし万が一不安があるというのなら、こうしましょう」

凍夜が提案する。もし、凍夜が致命傷を受けそうになった時点で、小夜が止めに入るといふものだ。そして、小夜が止めに入った時点で凍夜は負けとなる。

大輔としては小夜の実力が分からない故に不安がある。だが、凍夜がそれを一蹴する。

『君たちにどうこ出来る程“紫司”は甘くないですよ』 っというものの口調でやんわりと言っているのだが、大輔を始め生徒たちは気圧された。まるで、重力を幾ばかりか重くされた様な感覚。

そして、皆は改めて思う。目の前にいる人物が誰なのかということ。

「では、再開しましょう」

凍夜は掛かってこいと大輔を挑発する仕草をとる。

大輔は凍夜の言葉で先ほどまでであった怒りが吹き飛ばされた。だが、闘争心は更に燃え上がり、今度そこ本気で病院送りにするつもりで動き始める。

仕切り直しの意味を込めて、先刻動揺の右ストレート。

しかし、やはり今度も凍夜の動きは緩慢だ。そして、小夜が止めに入ることもない。

大輔は、捉えたと思うも先ほどの様に拳を鈍らせることはない。

正に、渾身の一撃を放った。だが、今度も正に紙一重というところで凍夜が躲かわした。

透かさず振り抜いた右腕で裏拳を放ち、今度こそ躲しきれぬ筈の攻撃。

しかし、それも当たらない。

確実に当たる筈だった位置が、ホンの僅かに凍夜が下がっただけでまた紙一重で躲された。

幾度攻撃を仕掛けても、凍夜にそれを悉く躲くわされる。

凍夜の動きは間違いなく常人がゆっくり動くもののそれと変わらない筈なほどに遅い。しかし、単純な身体能力ならプロの格闘家を遙かに凌ぐほどに強化した大輔の拳が、蹴りが凍夜を捉えることがない。

まるで幻影まぼろしを相手にしているかのような感覚に、一応熱源感知による知覚魔法を使ってみたほどだ。

しかし、やはり目の前にいる凍夜は当然幻影などではない。

だが、その実在する筈の凍夜が大輔には捉えることが出来なかった。

状況だけで言えば防戦一方の凍夜だが、この場を支配しているのは間違いなく凍夜だった。

そして、その状態が5分程続いたころ、凍夜が動いた。

大輔が凍夜を見失った。

さっきまで目の前にいた凍夜が、忽然こっぜんと姿を消したのだ。

あまりの出来事に周囲の確認も出来ぬまま、呆然としてしまった。そして、後ろから声が掛けられる。

「さて、そろそろいいでしょう？」

大輔は驚いて振り返る。

「君のその攻撃が僕に通用しないのは、これで分かかって頂けたと思いますので、そろそろ本当に本気を出して頂けますか？」

大輔の頭の中では凍夜の動きがデタラメ過ぎて理解出来なかった。魔法を使えば、必ず魔導波が生じる。

それは常識であり、そしてそれは例えばBアムズを使つたとしても同じ事。

先ほど凍夜はポケットから薬を出し入れしていた。その時に魔導波は感じられた。

あれは別にポケットの中に入っているわけではなく、ポケットに手を入れたときに 恐らくは普通のより少し大きい腕時計型の携帯端末がそれなのだろうと思う それを使つて格納していたものを取り出した筈だ。

だが、今は何も感じなかった。

これが、凍夜の言っていた力なのかと大輔は感嘆する。確かに凄
いことだ。

どれ程卓越した魔法師エンチャンターといえど、魔法を使えば魔導波が生じる。それが無いということは、それだけで十二分に驚異となり得るからだ。

凍夜は言っていた、魔法について考えて貰うと。なら、これは自分たちにも習得出来ることなのか？ っと、戦闘のことを忘れて思考に耽ひけっていた。

「思考することいいことです。ですが、今はまだそのときではありませんよ。」

取り敢えず、そのイヤークフを外して貰いましょうか。それ、サイレンサーですよ？」

「っ……なるほど、気づいたか」

普通、魔術士が呪具：エフェクターを付けるとしたら増幅具：アンプだ。しかし、大輔は魔消具：サイレンサーを付けていた。

魔力を押さえつけたり、演術を限定させたりする効果を持つ魔消具。そんなものを付けていては確かに本気も何もあつたものではない。

「安心しろよ。俺も本気だ。こいつは飛弾型を抑えてるだけで、魔力（効力）を抑えてるわけじゃないから

「僕はその飛弾を出して欲しいと言ってるんですよ」

大輔の言葉を遮って凍夜が話し出す。

実のところ、大輔の接近戦は凍夜にしてみれば誤算でしかない。

確かに、魔法強化型の近接戦闘様式自体は珍しいことなどないが、やはりこの時期の高校生は先ず放出系の派手な魔法を好む傾向にある。

凍夜としては本来それを狙っていたのだが、残念ながら大輔は喧嘩スタイルが好みらしい。

先ほど凍夜が見せたものは、確かにそのうち教えるものではあるのだが、今は先ずもつと別に考えて貰わなければならないことがある。

その為には、飛弾型を出して貰うのが分かり易いのだが、大輔にそのつもりがない様なのが痛いところだ。

「僕は確かに自身では異常があつて、魔力の生成は出来ませんけど

」

凍夜は仕方なしに、如何にもやれやれと言った態度でポケットから大輔の見立て通り、凍夜の（かなり）特殊仕様の携帯に搭載されているCシステムにより空間転移の魔法を使って 黒い扇子を一本取り出した。

「魔法器を使えば、それには戦えるんですよ」

その言葉が終わると同時に、閉じたままの扇子を軽く縦に一振り 雑いだ。

そして、先刻感じた様な微弱なものではない、魔導波を感じた。

ドンッ！！

大輔が後ろを向いて確認してみると、人間一人くらいなら裕に埋められる程の穴が空いていた。

「これで、僕も放出系魔法とじゅうけいあります。小野くんも使って頂けますよね？」

そういう凍夜は笑顔ではあるし、声の調子も普通な筈なのだが、目が見えないことと先ほどの一撃も相まって、とてもそうは見えない。

「あつ……ああ……」

これは暗に命令に等しい。大輔はそう感じた。

凍夜が取り出したのは、魔法器と言われる魔法具ブイスターの一種だ。

活性魔粒子ラヒスを特殊なカートリッジカートリッジに詰めて、それを使い魔法を発動させるシステム。Cシステムが組み込まれた魔導具タクトが即ち魔法器ブイスターであり、時に魔法兵器という呼び方もする。

凍夜としては今はまだこの時期の高校生に、こういった法具ブイスターに頼ったやり方というのをあまり見せたくはないのだが、導具も使い方次第であるということを見せる良い機会だと思いついて大輔との模倣戦に意識を向ける。

「では、ここからが本番ということで、宜しく願いますよ」

「ああ、いいぜ。見せてやるよっ！！ 正真正銘本気って奴をよ」
耳に詰められていたカフスを取り、さっきは気圧された様な感じで応えたが、今の凍夜は大いに湧いて、嬉々として応えた。

初めての全力全開の魔法戦、高校生男子が心躍らぬわけがなかった。

31・模擬戦2

全力での魔法使用による戦闘というのは、一般人には本来あり得ない。

理由は単純にして明快、死傷者が出る可能性が高いからだ。

(この場合は軍以外という意味で)一般高校は飽くまでも、前途ある若者の心身健やかなる成長を基盤とした教育が目的なのだ。故に、その様な危険なことをさせる訳にはいかない。

確かに世の中には魔法格闘技というものは存在する。しかし、それは戦闘ではなく試合に他ならない。どれ程本気でもそこにはルールが存在し、禁じ手があるのだ。

だが、年頃の若者、特に少年たちが自身の力の全てを費やすことが出来ないというのは、なんとも酷なことである。

しかし、全く存在しないというわけではないのだ。そう例外が存在する。

それが魔法科高校の武闘祭。だが、この武闘祭の参加枠は選手五名に補欠が二名と実に狭き門なのである。

故に、本来ならば全力での魔法戦というのは数多の敵・見方・先輩たちなどライバルたちを退けて初めて手に入れられる権利なのだ。それが、不意に目の前に転がってきたのだ。喜ばねば嘘というもののだ。

それも、相手が魔法が使えないとは言え“紫司”であり、理解不能な技まで使うのだ。真実持って手加減 いや、己の限界をぶつけられるのだから、これ以上はない。

《バトルイメージBIGGM: brave heart / 宮崎歩》

《ぶっ飛べっ!!》

また戦闘が再開され大輔は砲口と共に右の拳を繰り出した。しか

し、今度は数メートル離れた地点から。

右手からは恍弾こうたんが飛び、真つ直ぐに凍夜へと飛んでいく。

凍夜は魔弾に向かって扇子を一振りし先刻と同様の斬撃（？）を飛ばしそれを相殺爆発させた。

爆風が起こり校庭の表面の乾いた土や砂が巻き上げられて、視界を遮さえぎられた。しかし、正面から魔導波を感じる。

そして、土煙を散らしてまた恍弾が迫ってきた。その恍弾は扇子で直接殴りつけて上方に弾いた。

その動作により出来た隙を突きに横から大輔が直接飛び込んでくる。

本日三度目の全力による右ストレート、だが今度の拳には魔法が込められていた。先刻までの様に紙一重で躲しただけならばその効果範囲内に巻き込める。

これで決着だとは思わないまでも今度こそは決まる。その確信が大輔の中にはあった。

しかし、凍夜とて先ほどもまでとは違う。手には武器を持っているのだ。

確かに今は、先の恍弾を弾くのにその腕を高らかに掲げてはいる。だがその武器はただの武器ではない。魔法が使えぬ者にも仮にも魔法の力を与えることの出来る武器、Bアムズがある。

大輔は凍夜（正確には手のBアムズ）から魔導波を感じている。しかし、

（無駄だっ！！）

と構わずに突っ込む。

Bアムズは確かに魔法を使えるようにする。しかし、万能ではないというより、制限が多い。故に、魔法師エンチャンターは先ず使わない。これを使用するのは、ライセンスを取るつもりのない（低級の）魔法士マジシャンマジシャンは元々は魔術師を差す言葉だが、現在は無資格の者をそう呼ぶ傾向にある。　　くらいのものだ。

先ほど見た限りでは出来るのは斬撃か衝撃波か、そういった類の

ものを飛ばすだけの筈だ。

ならば、躊躇う理由はない。恐らく、凍夜は次の反撃のためにチャージしている。と大輔はそう判断した。

それに、大輔は既に次の手を打ってある。ここは引く理由がなかった。

バシンツッ!!!

大輔の右手に痛みが走る。凍夜に触れる寸前で、右腕が扇子で弾かれた。

弾いたのは扇子の柄尻の部分、そして先端には太い光がジェット噴射の様に吹き出し、大輔の手を退けさせた。

大輔は凍夜に軌道とそらされた右腕に引つ張られるかのような体勢で倒れ込む。だが、その拳を地面を抉る様に叩き付け、その爆圧で自身の体を後方の飛ばし、地面に着地するまでに体勢を立て直した。元からそうするつもりであつたかのようなバツクステップ(?)の動きに凍夜は感心する。そして、大輔は凍夜の方を確認する。

凍夜はその場に留まつたまま大輔の動きを追ってこちらを見ていた。

(なるほどな……そういう使い方もできるわけか。だがっ!!!)
最初に土煙が上がったときに出した慌弾は一つだけではない。

大輔が講じていた次の手が凍夜の後ろから迫ってきていた。大輔の本命の一撃。土煙の中で凍夜に気付かれぬように、一度明後日の方向に放っていたものだ。

今までののはこれを当てるための布石だ。

凍夜は依然として大輔の方を見ているし、恐らく自分から仕掛けてくることもない筈だ。

大輔からしてみれば戦闘であり、凍夜にしてみればただの模擬戦であるこの闘いに置いて、凍夜は明らかにこちらの動きを見てから動いていた。

従って、凍夜があの場合を動くとしたら自分が何かしらの接触を試みたときだけの筈だ。それにもう避けられる距離ではない。

今度こそ決まっ

「何っ!!!?」

た筈の恍弾は凍夜の真横を過ぎて、自分に一直線に向かってきた。

通常飛弾型の魔法は、手元も離れてからでも自身の意思で制御出来る。しかし、何故か今飛来してくる自分で放った筈の恍弾はその制御を受け付けない。

相手からの攻撃だというのなら冷静な対処もできるのだが、自分の意思に反する自分の魔法という未知の現象に頭が回らなかったがために、回避行動も取れずに着弾した。

「畜生っ!!! どうなってやがる」

着弾はしても、元々全身を強化して有ったためにダメージは小さい。

特殊な繊維で出来ているだけあって体育着も無事だ。こんなときであるが、そういつたことも考えてしまう。初日から体育着をボロボロにしていたのでは洒落にならない。何しろ、彼らはまだ高校生なのだ。親という存在を怒らせていいことなど何もありはしない。

などということも、少し頭を過ぎり、少しは冷静さを取り戻した。そして、一応確認を取る。

「今のはお前の仕業か?」

「ええ、その通りです」

やはり、凍夜の仕業らしい。先刻の消えた動き、それ以前に回避の動きからだが、何をしたかは全く理解出来ない。だが先刻凍夜が言っていた『今はそのときではない』と、故に頭を切り換えて目の前のことに集中する。

最初にあった苛立ちの想いは完全に消えていた。が、それとは違う意味で今はどうしても一撃入れたくなっていた。

大輔は走り始めた。

しかし、今度は一直線に凍夜に向かうのではなく、周りを円を描く様な軌道でだ。

《己が力を知れ

大輔は円を描く軌道を走りながら、呪言をゆっくりと詠唱をする。そしてその間にも、左右の手で凍夜に二種類の魔弾を繰り出していく。

一つは氷弾を。

そして、放たれた氷弾は、凍夜の折りたたまれた扇子の先端から延びる剣の形状の魔恍に砕かれた。

己の限界を知れ

次に雷弾を。

それを、凍夜は広げた扇子を一薙ぎして魔恍の障壁にて阻んだ。

この雷弾はその障壁に接触した祭に、押し込まれた蛇が飛び出すが如く幾筋かの紫電を進らせ、先ほど凍夜に砕かれた氷弾の欠片を更に砕いていく。

凍夜は違和感を感じる。

この雷弾は、電気ではない。雷電の形状性質を伴った魔恍の攻撃に……

より強き力を望め

次にたま氷弾をと、詠唱が終わるまでにこれを数回繰り返していった。

立ちほだかる限界を超えろ》

動きに制動を掛けて立ち止まる。彼の走ったあとには綺麗な円が描かれていた。

大輔のその踏んだ跡はくつきり残り、両の足は器用にステップを踏んで、走っている間に足跡を線にしていた。

詠唱の時間はゆっくりと時間を掛けたために約十秒程、その間に大輔は五周をまわりながら魔弾を放ち、凍夜はその悉くを防いだ。

凍夜のその様は扇子やそこから放たれる魔恍の光が衣のようにも見え、あたかも舞を踊っているかの様な光景だった。ただ惜しむなら、着ているものが、体育着というのが頂けない。と、対戦中の相手である大輔にすら思わせてしまう程に。

そして、大輔は両の手を胸の前に、バレーボールより一回り大きいくらいの空間を空けて合わせる。

その手の間には雷光が迸っていた。今度のは先ほどまでの雷弾とは違う。

大輔の詠唱はこれのためのものだった。

この様に詠唱して行う魔術形式を詠唱魔術をいう。呪言を詠唱することは精神統一、要は自己暗示だ。

よって、言葉そのものに意味はない、自分がより集中できる言葉ならなんでも構わない。長さは己の力量と扱う魔法のによって千差万別だ。

この詠唱魔術だがこれが高校生くらいの年頃だとある種かなり難しい。

言葉を発するというのはそれだけで実に効率良く集中力を高めることができるのだが、その実どういふことを言うのかというのは悩みどころだ。

あまりにも使い古しの様な定型句では自分の中に安易感があり、威力を削ぐ場合がある。だが、あまりにも自己陶醉ごうたいに過ぎる呪言では、周囲の目が厳しい。

『あいつ自分によつてるな、これからあだ名はナルシーに決定！』というノリになりかねないのだ。

大輔の呪言はオリジナルだ。

大抵の状況では言うこともない。だが、今は恥もなにも忘れて渾身しんの一撃を凍夜に加えたかった。

《くらえー！！》

大輔の手の中で十分な威力の雷光が作られ、それが凍夜へと放たれた。

『アイス・エクスプロージョン
氷片爆発』

32・悪魔の所業

大輔の目の前には光の柱が出来た。

雷光を放つと同時に、足跡で作った円に沿って円筒形の内障壁が大輔によって張られていた。

その障壁の中で、大輔の放った雷光が強い光を放ち輝いている。同じく校庭で二人の模擬戦を見ていたクラスメイトは勿論、教室にて授業を受けていた者たちもその光に目を眩ませた。

しかし、その発光はそう長くは続くことは無かった。数秒という時間で光りは消え、障壁はただの白い柱となった。

中の氷が水蒸気となり内部に霧として充滿しているのだ。そのため、まだ中の様子は分からない。

だが、間違いなく当たった。障壁は破られてはいない、凍夜は間違いなく障壁の中に入っていた。故に攻撃自体は当たったと大輔は確信している。

そして、水蒸気が風に流され中の様子が露わになるうとしている。大輔の魔力が切れたことにより、障壁が消失したのだ。先の発光も本来ならば、もう少し長い時間を持続しなければならなかったのだが、大輔の魔力が枯渇してしまったために、早々に消えてしまった。

風は穏やか　というよりも、今はほぼ無風に近い程なので、なかなか晴れてはいかない。その中からゆつくりと、テンポの良い音が聞こえてくる。

拍手だ。

漸く霧が晴れ始めたその中に、皆は異様なものを見た。

「　なんだ……コレ？」

誰とも無く呟く声が聞こえてきた。大輔では無かった……大輔は完全に呆気に取りられていて、最早声を出すどころですら無くなっていたのだ。

またしても凍夜による理解不能の所業
だ真つ黒な箱があった。

皆の目の前にはた

そして、その中から拍手は聞こえてくる。つまりは凍夜はこの中にいるということだ。

中には冷静に自体を把握しようとしている者もいる。この箱について自分なりの考察をしているのだ。

考えられることとして、先刻から使用しているBアムズ、アレで魔法を使ったというのが一つ。だが、それはない筈だ。

Bアムズに多種の魔法は使えないというデメリットがある。凍夜の使い方は確かに色々やつてのけた様にも見えるが、その実やつていたのは魔恍の放出のみで、あとはそれを形状変化させていたに過ぎない。故にこれは除外される。

自分たちの知らない新開発されたタイプという可能性もあるかも知れないが、それを考えると切りがない上に現実的ではないので、そこは考慮しない。

次に現実的にあり得る中で高い可能性としては、新たに別のBアムズを出したという当たりだろうと、推測する。

だが、次の瞬間にはその考えも間違いであると思ひ知らされ、完全に見当の糸口をも無くされてしまった。

「素晴らしい魔法まほうですね。魔法の技法たる『性質形状变化技法』と光の反射を利用した実に巧妙な技でした。僕は少々 失礼ですけど、貴方を大分見くびっていましたよ」

黒い箱が消え、中から凍夜の姿が現れた。そして、その手には何も無かった。

先刻まで使用していたBアムズせんすすら持っていないのだ。

だが考えて見れば分かることだった。凍夜は拍手していたのだ。故に手には何も持っていないということになる。

Bアムズの最大のデメリット それは使用者が常にその手にしていなければならぬ、ということろにある。勿論、トリガー式の様な物理的な発動や、地雷・機雷の様にセンサーによる発動方式の

ものであるならば話は別だ。だが、その手のタイプは瞬間的な発動で尚かつ、先の使い方の様に形状変化ということすらも出来ない、完全に固定発動のみの代物だ。

よって、Bアムズということですらない。

ならば、あの箱は一体なのなのか？ と考えれば、思いつく先に一つしか心当たりがないことになる。

即ち、『魔法』だと……

凍夜は大輔から視線を外し皆の方を向いた。

「始めに言っておきます。今の僕の使ったのは魔法ではありませんよ」

そして、凍夜はその考えすらも否定する。

「その答えは既に皆さんの中にあるものです。ゆくゆくは答え合わせをしますが、今はこの現象の正体を存分に考えていてくださいね」
「そういう言われても、魔法以外であるようなことが起こせるものに心当たりはない。凍夜の言葉は皆に混乱を与えるだけだった。」

しかし、そんな困惑する皆には目もくれず、凍夜は大輔へ先ほどの連携式複合魔法の賞賛を述べた。

「本当に見事な魔法でしたよ。よって、その全力の貴方に報いるべく、僕も避けるのではなく。先ほどの技を使わせて貰いました」

つまりは、暗に『避けようと思えば避けられた』と言っているに等しいのではるが、凍夜にその意図はない。

真実持つて感心したがために敢えて受け、本来ならば出す必要の無かった技まで披露したのだった。そう、小夜すらも驚かせる程の代物を

そして、凍夜は大輔の魔法についての考察を述べ始めた。

「まず始めに放った氷弾、アレは僕に防がれることを前提とした布石。そして、次の雷弾、アレはその氷弾を更に粉々に砕くためのもので、プリズムを利用した雷を模した実質的な物理攻撃。それにより、氷塊は氷片へと砕かれ、そしてとして空气中に散布される。そこに、最後の雷光。アレもプリズムにより光に雷の属性を付与した

『雷の光り』ではなく、『光りの雷』と言ったところでしょうか。それを氷片へと当てることで、光の乱反射を利用して不可避の全包围攻撃により全身を焼き尽くす大技ですね」

たった一度、それだけでそこまで見切られた。大輔は最早感嘆を理由に呆気に取られていた。

しかし、それだけでは終わらなかった。

「ただ惜しむなら、その魔法は最初に出すべきでしたね。貴方の魔力　この場合は、魔粒子の保有量若しくは活性力の高さのどちらかを差す　では、まだアレは全快の状態でない最後まで発動仕切れないのでしょうか？」

本当にこの紫司凍夜という人物には驚かされるばかりでしかない。あの魔法が、あの段階ではまだ完全ではないということろまで看破されてしまったのだ。

「本来ならば、あの雷光は標的を焼くだけではなく、更に水蒸気を電気分解させて、酸素と水素を作り出し、密閉された障壁内をその名に相応しく爆発させる魔法だと思つのですが、どうでしょう？」

「　　クツ、ハツハツハツハツ……ご名答っ！！」

そこまで見切られては驚きを通り越して、愉快でしかない。これが格の違いというものと心底思い知らされた気分だったが、不快ではない。寧ろストレスの原因がなくなってスッキリした程だ。

そうなつてくると、一限目の国語の小テストのこと方が今は疑わしく思えてくる。

「アンタ若しかして、一限目のアレはわざとか？」

凍夜はその質問には苦笑するしかない。

「まさか、違いますよ。後で説明しますけど、『アレはアレ、コレはコレ』です」

大輔はそうかと呟き、これで終わりと思った。

最早、自分の魔力は空っぽ状態で、急激な消費により体も怠い。

魔力の回復はそれ程早い方ではないので、この時間はこれ以上もう何も出来ない　と、そう思っていたときだ。

凍夜が、先ほどとは打って変わって抑揚のない少し低い声を発した。

「では、決着を付けましょう」
「まだやるのかと誰もが驚く。」

「ルールは『地面に倒れるまで』というものです。そして、僕は『力を証明する』ともいいました。ですが、大変失礼ながら僕はまだ皆さんにその証明をしていません」

今度は『力を証明していない』という言葉に驚く。

何しろ散々不可思議な現象を見せつけられたのだ。誰もがそれで十分だと納得していた。しかし

「そして、それでも十分に皆さんを納得させられると、そう思っていました」

そう言つて、凍夜が右腕を軽く振り上げた。

その行為に小夜は先ほどの黒い箱を見たとき以上の驚きを露わにした。

「ですが、やはりきちんと『目に見える形』で表さなければなりませんよね、力を」

その右手の一差し指を軽く天へと立てる。

小夜は二人の頭上を探す。あるものがある筈だと……そして、やはりそれはあった。

「本気で相手をしてくれた者に、それでは余りに失礼だ。なのでこは一つ、滅多に見ることの出来ない程の、『悪魔の所業』をお見せしますよ。小野くんの上を見て下さい」

皆は凍夜の言葉に従い、大輔の頭上を仰ぎ見る。

そこには恍弾が一つ浮いていた。そう、これは凍夜が扇子で上に弾いた大輔の恍弾だ。

皆は、ある光景が頭を過ぎりハツとする。先刻の大輔の自爆模様、その後の凍夜とのやり取り　それを聴けば誰でも分かるだろう、アレは大輔のたんなる自爆ではなく、凍夜が何かをしたのだと

……

そして、今は大輔の放った魔弾が彼自身の上であり、凍夜が腕を振り上げている。

だが、先ほどのときは絶対的な違いがある。大輔の魔力は尽きている。即ち、強化はもう掛かっていない……

一言と共に、凍夜の腕が振り下ろされた。

その瞬間、大輔の頭上の魔弾が放った本人に向かって落ちていった。

その光景は正に『悪魔の所業』というべき驚愕に価するもので、『力の証明』というものに十分過ぎるものだった

33・凍夜の技術（ちから）

それを、正に 強化や防御が一切ないという意味で 直撃した大輔はその場に大の字に倒れた。

最早、指一本すら動かせる状態ではない。

魔法の直撃を見ていた友人たちは彼に掛けより状態を確かめる。

「やめろ、てめ〜らっ！！ さわんじゃね〜」

大輔は助けに来た友人たちに声を張り上げて抗議する。そして、誰かがさわる度に、やめると苦しそうになる。

次第に友人たちは、そんな大輔が面白くなり、余計にツンツンとアチコチを突き始めた。

「ちつくしよ〜、てめ〜ら覚えてやがれ。治ったら、ぶっ飛ばしてやるからな〜」

大輔には、凍夜よりこの悪友たちの方が余程悪魔の様に思えてならない。

そうしている内に体の痺れが漸く動ける程度まで、納まってきた。そして、周りに集る悪魔共をどうにか蹴散らした。

だが、まだ完全ではない。正座で痺れた足に感覚が戻るまでのあのいたたまれない感覚。今はそれが大輔の全身を駆け巡っていて、色んな意味で正気でいられない。

くそ〜と唸りながら、地面の上を汚れるのも構わずにのたうちまわっていた。

大輔が回復するのを待つて、凍夜の号令で皆が最初と同じ状態に集まった。

そして凍夜は、今から模擬戦で見せたことを語り始めるのだろう、と皆は思っていたのだが、解答は寄越さなかった。

凍夜は言う、『今からが思考の時間』だと。

生徒たちは凍夜がやってのけた四つのことを思い返す。

一つ、特殊な動き。

二つ、相手の魔法を操る。

三つ、魔法ではないという黒い箱を出した。（攻撃を防いだ）

そして、四つ目。あれは、今まで見た中でも目にはつきりと見え
て、そして最も驚くべき現象だった。

そして、その四つの内二つ目と三つ目にやってのけたもの、アレ
らはもう既に自分たちの普段の魔法の中に 魔法を使う行程の中、
即ち魔導の要素に答えがあるのだという。

それらは段階を分けて説明をするので、今は自分たちの魔法をも
う一度良く見直しながら魔法を使う様にとして、その後は軽くヒッ
トボールをやるようにと指示しただけだった。

そして、授業の終わりに凍夜は二つのことを告げた。

一つが、実のところ詠歌は、実技授業は元から凍夜に担当させる
つもりでいたこと。

もしこれを、授業の最初に言っていたならば、いろいろ騒ぎも起
きていただろうが、先刻凍夜の不可思議な技を見せつけられた後で
あったがために、誰も異論を唱えるものはいなかった。

凍夜の狙いは、紆余曲折して余計なことも多々やらねばならな
かったが、これで、今後の授業はスムーズに出来る筈なので、概ね成
功したと言っている。

もう一つが、明日の最後の授業で二つ目のことを説明するので、
それまではネットなども利用し、兎に角自分なりに考えて見るよう
にというもの。

そのヒントとして携帯・魔導波というものであったが、これだけ
は分かるものは流石にこの場にはいなかった。

そして、一つだけ禁止事項も言い渡された。
それが、ネットを利用する際『アップルツリー』というサイトに
はアクセスしてはいけないというものだった。

現在の世の中に置いてこのアップルツリーというサイトは、個人
サーバーのサイトでありながら『神の知識』と称され、魔法のあり

とあらゆる知識がそこにあるとされる程のサイトで、魔学生は勿論のこと、数多くの科学者までもが利用しているとされている。

この中にも当然受験のためやそれ以外のことでも、普通に利用している者がいてもおかしくはない。しかし、今の時期に安易な方法で答えへと辿り着く様な事をしていては、後々自身のためにならないからと、念を押しして制したのだった。

帰宅してから、凍夜にしては珍しく部屋に向かうより先に居間のソファで、大きく息をはき出して腰を下ろした。

肉体的な疲労というものは当然ないのだが、神経を酷使したことにより、流石の凍夜も精神的な疲れを感じずにはいられない。

凍夜がああいった立ち回りをするときには、常の数倍の集中力を必要とする。

勿論、誰でも戦いともなれば神経を研ぎ澄ませるものだが、凍夜のそれは他の者たちと一線を画す。

大輔との模擬戦で圧倒していた凍夜ではあるが、その実余裕というものは無かった。

確かに大輔は高一にしては随分な芸当をやっていたが、そのことはあまり関係が無い。凍夜の場合、相手が誰であろうとも魔法戦に置いては気を抜くことは出来ない。

考えて見れば当然の話なのではあるが、魔法を使えない者が使える者に挑むのだ。それは全くの素人が、プロボクサー相手にボクシング勝負を仕掛けている様なものだ。普通に考えたら、勝負以前の問題なのである。

更に言えば、凍夜がやってのけていたものは、どれも尋常在らざる集中力を必要とする。

『まともな者』はそんなことをするくらいなら、魔法を使う。

これも当然の話だが、ただでさえ神経を使う戦闘なのだ。その上

更に魔法以上に神経を使っていたのでは身も心も持つわけがない。集中力は無限ではないし、戦争ともなれば集中力が切れるということとは、それは即ち死を意味する。故に凍夜のやっていた技法は廃れたしまった。いや、先ず持つて実践されることすらなかった。そんなことをやってのけていたのだから、凍夜の疲労は尋常ではない。

そこへ、小夜は紅茶を淹れて持ってきた。

「お兄様、どうぞ」

それに、感謝を述べて紅茶を受け取り、カップを引き寄せて深く呼吸し、その香りを肺に満たす。

この紅茶には香料が混ぜられている。今回は精神疲労の回復のために、リラククス効果の強いものを小夜に入れさせた。

本来なら紅茶そのものの香りを楽しむのが筋なのであるが、生憎と凍夜は紅茶には詳しくない。故に、紅茶への冒流であると思いつつ、それでも申し訳ないという思いから、常に一番安いパツクのものを買ひ、その紅茶へと特製の香料を混ぜて飲むのだ。

小夜も凍夜と同様に香りを楽しんでから、紅茶を口に含む。

「私は紅茶に詳しくはありませんけど、やはり何度飲んでもこの『お兄様』の紅茶に叶うものはないと思います」

自分で淹れた紅茶をそう表現する小夜。

紅茶に混ぜている特製の香料というのは、何を隠そう凍夜が調合している物なのだ。

そして、それだけではない。大輔との戦闘時に口にした薬、アレも凍夜が作った能力強化の薬で、あのときは視力　主に動体視力　を飛躍的に向上させるものだった。

「うーん……、そう言っただけで貰えるのは嬉しい限りだけど、やっぱり愛好家の人には絶対言えない行為だけに、ちよつと複雑かな？」

「ふふつ、確かにそうですね。ですが、この香りと味を知れば、その方々のお見も変わると、私は確信しておりますわ。それに、安い紅茶をこれほど美味しく頂けるのですから、経済的です」

最後の台詞は他人からしてみれば、紫司カネ七が何言つてやがるというところだが、二人の生活は至極庶民的なもので、普段から儉約生活を送っているため、それはそれで意味のあることだった。

小夜は終始笑顔で紅茶を飲み干した。

いつもの様に食事を済ませて、今はまた居間で雑談を交わしながら寛くわんいでいた。

制服を着替えた後、二人で夕食を作った。朝は凍夜が殆ど調理の行程を片付けてしまうが、夜はこうして二人で作ることが日課であり、小夜の至福の時間でもある。

もし、自分がここに来るのがもう少し遅かったなら、そういうことも無かった筈なのだと考えると、あのときここまで来たのは本当に正解だったと、小夜はそう思う。

その料理にも紅茶と同様に、但し料理に合わせた香料を使い、凍夜の回復を促した。

そして、今は雑談を興じている。

小夜は大輔との模擬戦からずっと気懸かりだったことを、それとなくタイムリングを計り凍夜に訊いた。

「お兄様、どうしてわざわざ『ミステリオン』と『マジック・リストラクション』をお見せになったのですか？」

大輔との模擬戦で見せた技、アレらをわざわざ使う必要など本来どこにも無かった筈だと、凍夜に問う。アレらを使わなければ、凍夜の疲労はもつと軽微だったのだ。

いくら誤算があつたとは言え、凍夜なら大輔をあしらう程度は容易だ。

最初に見せることになった動き 恐らく皆は体術だと思っ
てい
るだろうが、実は違う。アレは、『ジャイル』と言う技で、ある魔法技術の応用派生技の一つであり、動きそのものに何かあるわけはなかった。そのジャイルだけでも、十二分に大輔をルール通りに倒すことは出来た。

「彼にも言ったように、アレは彼への礼儀だよ。あれ程までに本気で挑んでくる相手に、手抜きでは申し訳ないだろ？」

凍夜はそう言うが、やはり小夜には納得出来ない。

確かに、二つ目に見せた技能　最早技とすら言えぬ程の名も無きその技能が、今後のことに必要だと言うのは分かる。だが、三つ目四つ目の技となると話は変わってくる。大輔は巧妙な技術を見せたが、だからと言って、こう言うてはなんだが、はつきり言って釣り合いが取れるものではない。

「それに、いずれは……まあ、マジック・リストラクションは無理だろうけど、『ミストライズ』くらいは、教えておくべき技術だと思っていたからね」

特に最後の技、アレは魔法が使えぬ凍夜が行き着いた究極の一つだと言っている。それを、簡単に他人に見せてしまった。小夜にはそれが口惜しかった。

誰だって自身の苦労した成果を簡単には披露しないものだ。見えるなら公の場だと思うのは当然の思いだと小夜は思うのだが、凍夜にはそれが無いと言う。

しかし、それが本心なのかどうか、小夜には分からない。そして、凍夜の真意を理解仕切れない自分を恨めしく思う。

だが、何より恨めしいのは、紫司という家だ。『凍夜はその存在を証明しなければならぬ、しかし公の場　彼らの言うのは世界的にと言う意味　には出てはならない』と言う、二律背反の命を紫司の家から厳命されているのだった。

小夜が凍夜の真意を測り兼ねる理由はこれにある。本当にそうなのか、将又紫司の命故なのかと……

だが、これは『紫司凍夜』という人物の存在そのものに関わるもの故に、自分が簡単に口を挟むことを許されぬ領域にある。

だから、悔しい。本来ならもつと評価を　いや、その存在を、『自分自身という存在』を証明出来る技術ちからを持ちながら、それをしない或いは出来ないこの兄という存在が、それをただ檻の中

でしか使わぬということが。そうさせる『紫司』という家が……
そのことを思ってたのだ。

《マジック・リストラクション》

その一言と共に、凍夜の腕が振り下ろされた。

その瞬間、大輔の頭上の魔弾が放った本人に向かって落ちていった。

そして、皆はその落ちる間の一瞬に、初めて見るあり得ない現象を見た。

大輔の放ったのは紛れもなく単なる魔恍の弾であった。しかし、大輔に直撃したそれは魔弾ではなく。一筋の雷だった。

単なる輝く球体が、彼に落ちるまでの間に雷へと変化　作り替えられたのだ。

『マジック・リストラクション』
『魔法再構成』それは、正に魔法が使えぬ凍夜が行き着いた究極の一つだった。

魔術師マジシャンにとってこれ程の驚異は存在しない。何しろ、自分の魔法が相手の意思に従うのみならず、その魔法そのものまでをも作り替えられてしまうのだ。

それこそ正に魔術師にとって『悪魔の所業』というべき信じ難いものだった。

34・荒ぶる心

実習の授業が始まる前の着替えの時間、凍夜が着替えを終えて、部屋の前で修之の着替えが終わるのを待っている時に、携帯が鳴り始めた。

ポップアップ画面には詠歌が表示されている。それを確認してからこちらの回線を繋げた。

「どうしたんですか？」

対面電話 のこ『面』は画面のこと の場合、お互いの姿が見えているので、『もしもし』という確認から入ることは先ずない。「ああ、実はな」

詠歌の話は要約すれば、急遽出勤になったから授業はお前がやれ、というものだった。

だが、話を聞く限り、わざわざ詠歌が出向く程のこの様には思えなかった凍夜は、それを問いかけてみた。

「分かりました。それは構わないんですけど、それ程の用件ですか？」

詠歌はあっけらかんと答える。

「いや、全く。ただ個人的につてのと……実は、実習は元々お前にやって貰おうと思ってたからな、私がいなきゃ連中も素直に従うしがあるまい」

「はあ、、だろうと思ってましたよ」

凍夜はそれに苦笑をもって返した。

「と言うわけだ。後は、頼んだぞ」

そういつて、切ろうとしたが、ああそうだ！ と、何かを思い出した詠歌が言葉を続けた。

「まあ、釈迦に説法というものだろうが、アレ（１）とアレ（２）はやるなよ。下手な癖でもつけられたらかなわんからな」

アレという指示語だけで話してしまうのは詠歌の癖に近い。

軍の業務で暗号会話を常用しているためか、或いはただ他の人間にネタバレさせたくないだけなのか……それは判断出来兼ねるが、前者のことは恐らく大いに関わっている筈で、それが日常会話でも暗号ではないにしろ、当事者たちにしか理解出来ない会話の仕方をする。

「まあだが、お前がアレ（2）でクラスの女子を侍らせたいというのなら、止めはせんがな（笑）」

それこそ止める！　と思いい心の中では突っ込みを入れ、実際には普通に返すだけに留めた。

「姉上……婚約しているとは言え、まだ嫁入り前なんですから、少しはそう言う話は自嘲して下さい」

それに詠歌は笑って気にするなと言うだけだった。

このアレという指示語だけの会話で、それがなんなのか凍夜と的確に分かり合っているあたりが、小夜にしてみれば、通じ合っている様で羨ましくもあり、秘密にされていて悔しくもある。そして、これが詠歌を疎ましいと思う原因の一つになっているのだが、流石にそこまでは詠歌が知る由もなかった。

詠歌は現場に到着するなり挨拶もなく、単刀直入に本題に入った。「状況は？」

先ほど凍夜と話していたときのような柔らかな表情は一切無い。

軍務だから或いは現場だからという訳ではない。詠歌の基本はあの調子だ。

故に、今のこの詠歌こそ異常があるということの証明でもある。

「ハッ！　恐らく、元は犬・猫・鼬いたりと思われる『魔獣』が、計五体内訳は先の順で一・二・二です。現在部隊の若手の演習も兼ねて、一体に尽き四名編成のユニットで迎撃させております」

そんな詠歌を迎えたのは、堀川仁中尉ほりかわじん、今回の任務の作戦指揮官

たる人間だ。

「そうか……それは、すまないな……」

詠歌は堀川中尉の説明を聞いて小さな声で呟いた。

「はっ？ 何か仰いましたか？」

何を言ったかまでは聞き取れなかったが、何かを言ったことは間違いない。聞き取れたので、堀川中尉が聞き返してきた。

「否、なんでもない。部隊を下がらせる。私が行く！！」

これには驚くしかない堀川。

「中将自ら行かれるのですかっ！！？」

「ああ、そうだ」

間髪入れずに即答する詠歌。

堀川としては いや、ここには堀川しかないが、もし他の者がいたのならば、その者たちも思った筈だ。普通佐官以上が『国内の事件』程度のことに、介入してくること自体がない筈なのに、急遽そこに割って入ってきただけでなく、出撃までと言っているのだから尋常ではないと。

「ですがっ！！」

詠歌の命ならば従うのが普通ではあっても、急なことについて言葉が出てしまった。

「何か問題でも？」

「いえ」

しかし、詠歌の命に中尉風情が意見できる筈もない。

それに元々、彼が声を出してしまったのは、縄張り意識からではない。

「では、行く。即座に全員下がらせるっ！！」

詠歌はいつも縛っている髪を解き、轟音響く音の発信源へと歩を進め始めた。

「ハッ！！ 全ユニットに継ぐ、即座に帰投しろ。繰り返す、即座に帰投しろ。反論・意見は一切認めない。これは『紫司』閣下からの命だ！！」

携帯　とは言っても、軍用のである。そして、この時代の携帯とはマルチデバイスなので、携帯電話という扱いではない　へと声を発して、全軍へと命を下した。

一瞬の驚きであろうと思われる躊躇いの後、少しのばらつきはあったが、全軍から『了解』の返答があった。

詠歌の目の前には多少の手傷は負っているものの、魔獣特有の再生能力によりみるみる内に回復していく、ほぼ無傷と言っている五体の魔獣の姿があった。

元の発生場所は民家の真っ只中であったが、堀川の部隊のお陰で今は未再建地区にまで誘導されていた。

魔獣たちは先刻まで自分たちを攻撃してきていた者たちがいなくなっただけにより、その矛先を辺りへと向けてただ暴れ回っていた。それらの暴れる様子は見る者に哀れみを彷彿させる。ただのたうつ様に体をぶつけ、仲間　ただ群れとして在るだけで、仲間意識は存在しない　は愚か自らが傷つくのも構わずに、魔法による攻撃をまき散らしていた。

霊障の成れの果て　^{アストラル}精神をもその魔性に犯された、自我は愚か衝動や本能すらも失ったその存在は、最早生き物という区分ですらなくなり、それは現象という区分にされる。

霊障により、肉体は犯され魔象とかし、やがで精神をも飲み込み怪魔となり、いずれ^{キテル}霊体を変異させて^{ヘルズ・ディザスター}魔性現象へとなる。それは、この世にある最悪の災厄の一つだ。

「済まないな……お前たち……」

詠歌はその姿を捉え詫びの言葉を、心底済まなさそうに告げた。今は最早滅するしかなかった哀れなるその存在に、哀れみを込めて……

「私は、君たちが救われるかも知れない可能性を知っている……」
だが、その思いはそれだけではなかった。

魔獣へと歩み行く詠歌の紅い煌髪は、その輝きを失っていった。

「だが、今の私はそれを“しない”」
その代わりに、髪は朱の色が益々強くなる。

「今の私がしようとしているのは、軍務でも使命でもない」
だが、次第にそれは鮮血が乾くが如く

「ただの私情だっ!!」
黒く染まっていた。そして、その言葉と共に触れられた一体が一条の雷砲により消し飛んだ。

普段は見目麗しき詠歌の煌髪ではあるが、詠歌が体内で大量の魔力を作り出すとあの様に、その朱を増していく。そして、やがて朱の限界を迎えた髪は、この様に黒く染まるのだった。

「お前たちっ、良く見ておけよっ!! 滅多に見られるものじゃないからなっ!!」

堀川が部下たちを引き連れて、詠歌の後方からその様を見て、部下たちへとそう告げた。

普段、彼女の髪がここまで黒く染まることはない。
そして、本来あつてはならない筈だった。

「アレが、Bランクの魔術師の力だ!!」

この日本に 魔法師人工が国民の約半数、その数凡そ900万人であるこの国に置いて尚、たった100人未満しか存在しない稀代の魔術の使い手、それがBランクという魔法師階級の者たちだ。そして、そのBランクである詠歌が、その髪を黒く染め上げるといふのはそれ程までに力を込めている、ということに他ならない。

これは本来で言えば、戦争か同等の相手との本気の戦闘以外では見られるものではない。今の世であるならば滅多なことでも無い限りは、あり得ない筈なのだから。

だが、詠歌はその本気をぶつけている。例え、相手が魔獣と云えど、それ程の力を振るう必要はないというのに……

それは圧倒的だった。

一体目を消し飛ばした後、同様にして次々に雷砲を放ち、その場

の魔獣が正に瞬く間に消え失せた。

若手と言えど、堀川の部隊は選りすぐりの選抜部隊だ。その部隊の者たちですら、一体に四人以上で当たる事で初めて上回るというのに、それを五体も相手にたった一人で相手に……いや、相手にすらなっていない。

彼らは、目の前で起きた現象に呆けるしかなかった。

ただ、堀川中尉だけは始めから分かっていただけに、冷静だった。だが、その彼にしてもまさか本気でやるとは思いにも寄りなかった。彼が始めに口を挟んだのは、詠歌の実力を知るが故に、わざわざ彼女が出向く必要がどこにも感じられなかったからだ、故に驚いた。自分の部隊でも相手になる魔獣に、Bランクの詠歌が　中将という肩書きには気を払っていない　自ら相手をすることに。

しかし、これは堀川にしても良い機会であった。何しろあの『紫司』の（全力ではないにしろ）本気を、軍を束ねるその者の在りし姿を、部下たちに見せることが出来たのだから。

「お前たち、これで分かっただろう。アレが『紫司』だ。この日本に置いて、『最強の魔法』の有する最強の一族、死を司る故に『しづか』。その名を、本当の意味で」

知識としては誰でも知っていることだった。四大柱のその名の重み。

小学校の教科書も、四大柱のことは印されているのだから同然であるし、それ以前にも親・兄弟などからそれとなく伝わってくるもので、その存在は当たり前だった。

しかし、それを実際に目の当たりにするのではわけが違った。彼らは思う、この存在が敵でなくて良かったと、何しろ“詠歌ですら”これほどの芸当をいとも容易くやってのけたのだ。これが、『紫司』の“真実の名も持つ頭首”ならばどれ程であるのだろうか？と。

堀川の狙い目はそこだ。紫司　四大柱に対して、敵対するといふ恐怖。それを上手いかたちで御することが出来れば、この部隊が

日本という国が、より強固に纏まり、安寧を手にすることが出来る、とそう考えているからだ。当の詠歌の真意は分ならずとも……

詠歌は紫司宗家の自室にて香を焚いていた。勿論、この香も凍夜によるもので、その効果は沈静である。

凍夜の作り出すものはいずれも効果的だ。戦闘後に、事後処理を堀川に任せ、早々に自室に籠もってこの香の効果により落ち着きを取り戻していた。

本来ならば、ああなる前に使用して置くべきであった。

軍務でもなく使命感からでもない、単なる私情による魔獣の全滅。ただの八つ当たりだった。

若者たちの訓練には良き対象であった筈で、自分ではなく彼を乗り越えていたなら、若しかしたら元に戻せたかも知れない魔獣たち。それを自身の私情のために、職権乱用までして力任せにぶち壊した自分。

気分は最低だった。香の効果で落ち着いているだけに、逆にその冷静さが自己嫌悪を起こさせていた。だが、それが詠歌の狙いだ。

こんなことをして、何になるとも思っていない。そんなことで贖あがないになるとも思っていない。しかし、まともではいたくなかった。彼だけに全てを押しつけて、のうのうと生きる自分が許せなかった。

きっかけは凍夜の言葉だ。昨日自分にだけ聞こえる様に、彼が呟いた言葉『恨んでくれますか?』という、あの言葉に……

別に凍夜が悪い訳ではない。そう凍夜に悪いところなど存在しない。

自分たちは彼に感謝こそすれ、恨むことなど有りはしない筈なのだ。彼がいなければ、小夜はきつと生きてはいなかった。ただ命があるだけで、死んでいないというだけの存在になっていた筈だ。

そうはならなかったのは、間違いなく凍夜のお陰だ。彼がその全てを捧げてくれからに他ならない。

そう……その彼に感謝はすれど、恨むなどということはない……あつてはならない。

「その筈なのに……」

呟いた後、クツと強く唇を噛みしめた。

そう思っている筈なのに、即答出来なかった。それが、詠歌には悔しかった。そして、そう出来なかった自分が恨めしかった。

きつと自分はそのときが来たら、彼を恨んでしまふのだろうから……

己の全てを犠牲にして、他人のために偽りに生きる彼を……そうまでしてくれている彼を……

彼の真実、詠歌と現紫司家頭首たる父：康嗣（こしじ）だけが知る、彼の最後の真実を知るが故に……後の小夜を思うが故に……

35・妃依里のお兄様のいない休日1

これは、夢……幾度となく見てきた夢。

普段の私は夢を見る方ではないけれど、時折こつとして夢を見ることがある。そして、それはいつも夢だとわかる……

それは、夢ではあつても現実。過去という現実、私がまだ幼かつた頃の、忌まわしき記憶。

使用人の姉様方が話しているのを聞いてしまった私は、激情に任せて走り出した。

紫司の宗家は作法にもかなり五月蠅い、廊下を駆ける私をはしたないと咎める声が聞こえたが、今の私にそんなことに構つて余裕はない、というよりもその声の意味すらも理解出来ていなかった。で、勢いをそのままに疾走を続けた。

やがて離れへの渡り廊下へとさしかかり、目的の部屋が見えてきた。

私を騙し続けたアレの元へと……

スタンツ！！ 疾走の勢いをも殺さぬままに、障子を乱暴に開けた私は、その中に横たわるソレを睨め付けた。

『やめてっ！！！』

いつも鮮血を垂れ流すソレの所為で、最早布団は元の純白を失い、洗つてもくすんだ赤色になってしまふ。そして今ソレがくるまってるのはその赤い布団で、そのくすんだ赤色の筈の布団は、今も尚ソレの垂れ流す鮮血の所為で、今度は表面が乾いて真っ黒な固まりになっていた。

その黒い固まりと化した布団の中には、最早人の貌すら保てないでいる***がある。

始めの頃は、まだマシだった。しかし、今のソレはもう人と呼ぶにすら値しない貌の***だ。その右腕と両足は、末端から徐々に朽ち行き今では、右腕はその付け根までを、足は付け根までと太ももの辺りまでをそれぞれ失っていた。そして、今は掛け布団でその有様は分からないが、ソレのその歪な貌を、布団と同様に黒い包帯が覆っている。

つい昨日までは、いやつい先ほどまでは**であると思っていた筈のソレは、今の私にとっては単なるモノでしか無くなっていた。

『お願い……もう……やめて……』

幾ら私が叫んでも、夢の中の私は過去の私はやめようとはしてくれない。

お願いだから、もう醒めて欲しい……これ以上先はもう……見たくないのに……

そんな状態にまでなってもまだ生きているそれは、障子を乱暴に開け放った私に向かって、右半分を包帯で覆われた顔を向けて微笑みを持って迎えた。しかし、今の私にはソレの表情など、もうただのおぞましい***のそれにしか見えない。

「そんなに急いで、どうしたんだい？」

その有様とは裏腹に、ソレの声はしっかりとしている。その声を聞いて更に怒りが込み上げて来た。

（何故今まで疑問に思わなかった？ 確かに、姉上や父上から言われたかも知れない。でも……でも……***の声が、こんなものになってしまうわけじゃないかっ！！）

「妃依里？」

ソレが私の名を呼ぶ。

その瞬間、全身を寒気が襲った。

「呼ぶなっ！！！！ 私の名前を、お前みたいな***が呼ぶなっ！！！！」

咄嗟にその言葉が出ていた。そして、一瞬だけ自分の言った言葉にハツとしてしまう。

だが、悪いのは私じゃない。偽ったソレが悪いのだ。*****
*を騙ったコレが……と、心の内でいい訳して、再び睨み付けた。
その言葉を聞いたソレは、私とは違った意味で一瞬表情を強張らせた。

しかし、それはホンの一時だけで、その後はその顔の向きを天井へと変えて、目を閉じて、とても穏やかな口調で、少しだけ語り始めた。

「そうか……知られてしまったんだね。ごめんね。そう、僕は君のお兄さんじゃないよ。僕とあねう……君のお姉さんとで、利害が一致したんだ。だから、僕は君のお兄さんに成り代わったんだ。君には、酷なことをしたね。本当にごめん」

『お願い！ お願い！ お願い！！ これ以上先は、駄目……ダメなの……だから、もう……お願いだから、もうやめて……』
今の私がどれ程必死になっても、もう過去は変えられない。起きた事實は変わらない。罪は消えない。

「……して……」
私の小さすぎる言葉を聞き取れ無かったソレは、もう一度言ってくれと言ってきた。

私はそれに、有りつ丈の想いを込めて叫んだ。

「謝るくらいなら、私の本当のお兄ちゃんを帰してっ！！ お兄ちゃんじゃなくて、お前が……お前が*****良かったんだ！」

『やめて……っ……っ……っ……っ……っ……』

「この*****めっ……っ……っ……っ……っ……っ……」

「いやー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

自分の叫び声で飛び起きた。いつもここまで来て、同じようにして目を覚ます。

私は自分を抱きしめる様に、腕を交差させて両肩を掴んだ。

息は上がっている、脈もはやい、汗も全身から、寝間着の浴衣が濡れる程にかいている。だが、酷く寒い。

自分の体がそうではない様に、体から熱を感じられない。

「助けて……」

『***』しかし、この言葉は出て来なかった。出せる訳がない。そもそも、加害者は誰だ？ 被害者は誰だ？ 加害者の分際で被害者面して、助けを欲する何て……都合の良いときだけ、いつもいつもあの人に頼ってばかりで、最低過ぎるにも程がある。

本来、こんな私にあの人の近くに在る資格なんてないのに……それだけでも十分過ぎる程に救いだと言うのに、それがどうしてこれ以上頼ることが出来るというのだろうか？

もし、叶うなら私は私自身を八つ裂きにしてしまいたい。

これ程までに愚かで、強欲で醜い存在を、あの人にこれ以上近づけたくない。

姉上たちを恨むなど本来は単なる八つ当たりでしかない。本当は私は私自身が一番憎い。本当はこんな私を一番あの人に近づけたくない……

「そう思ってるのに、どうして出来ないのー！」

静かに、けど強く自分を叱責した。

情けない……本当に、どうしようもない程に……結局私は自分がかわいいのだ。あの人に守って貰えるという自分という存在が……

いつの間にか涙を流しながら、そんなことを考えていた私の意識

に、目覚ましの音が割って入ってきた。

くだらない。ただ自分が不幸だと思っただけで、矮小にも程がありすぎる。

そんなことを嘆いてる暇があるなら、少しでもあの人の役に立てる存在になれる様に努力しろ！ そう自分に活をいれた。

今日は土曜日で、学校は休みの日。でも、お兄様にそのことは関係なく、平日と変わらぬ規則正しい生活を送る習慣がある。

平時なら兎も角、今の気分の私が一人だったなら、きっとだらしのない一日を過ごしたに違いない。

この間から朝の習慣であったランニングは必要がなくなったという事で、今の時間お兄様は朝食を準備している頃だ。

本当なら、今すぐにも駆けつけてお手伝いしたいところだけれど、こんな汗の酷い状態でお兄様の前に出られる訳がない。まだ、臭いはしていないとは思えけれど、こういうものは自分では気付きづらいものだから、安心は出来ない。急いでシャワーを浴びてしまおう。

汗も気になるが、今はお兄様に顔を合わせたくないという思いもある。きっと、今の私を見られたら気付かれますから。

しかし、その思いも虚しく着替えを持って階段を下りた先で、あろう事かお兄様に出くわしてしまった。

ドクンッ！ っと、心臓が強く高鳴る。そうコレは高鳴

り、出会ってしまったというバツの悪さからではない。全く持って本当に情けないにも程がある。先刻までの思いなどこへやら、お兄様に出会えた瞬間には、もうそのことだけで胸がときめいてしまっただけだから。

私は、いつもの様にあいさつをして、お兄様の横を通り抜けようとした。

バサツ 横を抜けきる前に片腕をお兄様に取られて、抱えていた着替えを落としてしまった。

こういうときのお兄様は少し強引だ。とは言っても、痛いほど強く握る様なことはしないので、女の力わたしでも振り払おうとすれば簡単にできる程度でしかない。

お兄様はそのまま自分の胸へと抱き留めた。いつもならここで左手で頭を軽く撫でてくれるところのだが、こういうときには少し苦しいくらいに、ギュツとその両手で私をきつく抱きしめる。

（ダメっ！ 私はそんなこととして貰っちゃダメなの！）

私はささやかな抵抗を試みるが、所詮私にお兄様を振り払えるだけの覚悟などあるう筈のない。本当にささやかな、ただのかたちだけの微かな抵抗。

だが、それだつて長続きなどしない。そして、駄目だと分かっている、結局自分からも手を伸ばし、お兄様にすが縋り付く様に抱き返してしまった。

いつもこうだ……あの夢を見た後は、何故だかお兄様はそれが分かる様で、こうして強引に私を抱き留めるのだ。

因みに、夢のことだけに捕らわれず、私がお兄様に隠して置きたいことで、バレなかったことはない。具体的な内容までは流石に把握していないけれど、隠し事自体的中率は百パーセントだ。私はそれ程分かり易いのだろうか？

そして、問題はここからだ。そこまでなら、まだ（真面目な状態の）自分を許容することが出来る。しかし

抱き留められた私は、いてもたってもいられずにお兄様のその胸に頬摺りを始めてしまう。今までの葛藤など何のその、その顔には憂いなど微塵も感じ取ることなど出来はしない。

そして、こうなった状態の私を確認して、漸くお兄様は私を解放して、仕切り直しとばかりに朝の挨拶をする。

「おはよう。僕は、そういう（表情の）小夜が好きだよ」

そのお兄様の微笑みに私は頬を朱く染めることしか出来なかった。

「お風呂入るんだよね？ ごめんね、邪魔しちゃって。はい」
お兄様は私の落とした着替えの洋服　普段は和服だけど、外への用向きがあるため　を、ポンポンと軽く叩きながら差し出す。
私はそれを受け取って、足取りはしっかりしているものの、すっかり出来上がった酔っぱらいの如き浮かれ気分で、お風呂場へと向かった。

36・妃依里のお兄様のない休日2

酔いとは醒めるものだ。良い意味でも、悪い意味でも……
私の浮ついた^{わたし}思いも、シャワーを終えた頃にはすっかり冷めてしまっていた。

そして、冷静になり先刻までの自分の状態を振り返り、自分の半端差加減に改めて落胆してしまう。落差が激しい分、悪酔い(?)する前よりも酷いかもしれない。

お兄様がその気になれば、きっと私はこの現実世界を、永遠に醒めることのない夢の世界を生きるかの様に、何の憂いもなく生きることが出来る筈だ。けど、お兄様はそんなことはしない。

別に私が鬱になることを罰としているわけじゃない。お兄様はそんなことを望んではいない。

お兄様がそうしないのは、私のため。私がちゃんと人間らしくあれる様にするため。

もし仮にそういう状態にして貰ったとしても、それはただの人形でしかない。

ただ、お兄様に使えるだけの人形……私はそれで満足だろう、何せ他にもないお兄様に、一生を捧げられるのだから。でも、人という存在を愛するお兄様が、そんな状態の私を快く思う筈もない。そして、そのお兄様を真つ当な神経をしている(今の状態の)私が望めるわけも当然ない……逆に言えば、もしお兄様がそんな私を欲してくれるなら、いくらでも……

そんなことをつい考えてしまう……やはり、あの夢の後というのは、いつもながら鬱の度合いが強い。

“あのお兄様”が、私を特別に意識して優しくしてくれるのは、コレが原因でもあるだけに心中はなんとも複雑だ。あの出来事がある故に、私を感じている罪悪感。実のところ、お兄様が私に向けてくれる好意は、それを払拭しようとしているに過ぎないのだと、私

はそう感じている。

勿論、お兄様の好意は本物　私がそう感じている　だけれど、お兄様の真意は分からない。

そう……分からない。お兄様に私の全ては見透かせても、私にお兄様のことは分からない。

表面的なことなら誰よりも知っている。それは、姉上や父上よりもだ。それは断言出来る。でも、お兄様には、それ以外の部分がある。

私には見せてはくれない……もう一人のお兄様。ひつじ　サイコロ

あることは隠さないのに、その全貌は　いや、その一端すらも私は知らない。

それが私には狂おしいほどに悔しい……でも、これはきつと……そうこれはきつと

「お兄様」が最初に言っていた“約束”……なのかな？　ねえ、「お兄ちゃん」

私は目の前の仏壇の写真へと、涙を堪えて作った精一杯の笑顔を向けた。

ここは、私の部屋の『裏側』、空間概念操作魔法によって作られた、擬似的な概念的な空間。従って、魔法以外では進入は不可能な部屋。

そして、この空間は（私を介して）お兄様が作ったもので、世界最高の不可知の　知るすべすらも存在しない　皆でもある。紫司の最高機密にして日本の最高機密でもある、ある事実を内包した空間。いんべい

だが、それは単なる名目でしかない。

この空間は本来、お兄様が私のために作ってくれた部屋フライングベートルームでしかないのだから。

その空間とは仏間だ。“ある人”を祀るまつためだけに用意して貰った単なる仏間。そう、その者の“死”を祀った仏壇のある部屋……

決して他に知られてはならない、絶対の秘密。

仏壇に置いてあるのは一人の少年の写真。その写真に写る少年には、他者の視線を一点に集中させる特徴がある。

写真の少年の右眼、その色は紫色をしている。

ただ色がついている訳ではない。魔なるものの象徴故に、美象に対して魔象とも言われる魔性の証。

特異魔法霊障、霊障にして魔法であるそれは、多くは突然変異の霊障であるが、一部の血統に置いては、それを一族の証として保有している。

そして、少年のその魔象の眼の名を紫眼むらぎんと言う。これは“ある一族”の固有のもの。

紫眼或いは“死眼”や“死銃”と書いて同じ読みをさせることもあるそれは、その一族の名の一部に含まれる程であり、その瞳から放たれる視線まほうは、死線や紫線ともあだ名させる“日本最強の魔法”

その魔法の名を“凍夜”という。

そう、この写真の人物こそ私の血の繋がった実の兄、七年前の任務で返らぬ人となった本物の『紫司凍夜』。

凍夜という名は、紫眼を宿したものにみに付けられる名で、兄上は紫司の歴史の中で、四代目よんたいめの凍夜にあたる。

『凍夜』 その名は、日本で最強の名であるが故に非常に大きな意味を持つ。

故に隠さねばならない、その死を……この国を守るために。

ボタンツと玄関のドアが閉まり、その後にはカチツという施錠の音も聞こえた。

私は立ち尽くしてお兄様を見送ることとして出来なかった。

暫くして、膝から崩れる様に玄関マットの上でへたり込んでしまった。

きつとお兄様の最後の言葉は本心だ。

でも、今の私にはそれを受け止めることが出来ない。

あんなことをしておいて、そんなことが出来よう筈もない……

今日お兄様は“病院”へと出かける。

今まで同行したことはなかった、今回はどうしても気になって同行の願いをしたのだけれど、やはり断られてしまった。

きつと断られるとは思っていたけど、まさかあんなことを言われるとは、思いにも寄らなかつたから、流石にシヨックが隠しきれずに私は呆けてしまい、お兄様はその間に出て行ってしまった。

『連れて行ってあげてもいいけど、それには条件が必要だね』

困り顔で考えたあげく、渋々ながらにこの条件が飲めるならとお兄様が提案してくれたこと、それは

『自分を好きになつて、妃依里ちゃん』

お兄様のあのときの表情は、とても悲しそうだった。

私が自分を許せないでいるのを憂いている、そういう表情だった。

妃依里　それは、私の幼少の頃の名前……

私はまだ、比糸司ひしつかの姓だった頃の、お母さんとお兄ちゃんと三人で一緒に暮らしていて、たまにお父さんがやってきては可愛がってくれていた頃の、一番幸せな　いや、その表現は適切じゃない、一番憂いのない、そう……一番なんの悩みもないときの名前。

あの頃は幸せだったけれど、今とどちらが幸せかどうか比較するのは難しい……確かに今は、色々悩み事や心配事は尽きない日々だけれど、それでもお兄様がいる……お兄様に出会えたことは、私の人生の中で最大の幸運であると確信しているし、もしという話でも出会えなかった場合などは考えられない、考えたくない。だから、どちらが幸福だとは一概には言い難い。

（そんな私の過去と今の価値観の比較はさておき）今の小夜という名前だつて本名ではあるし、小夜という名前になつてから

紫司の家、父上に引き取られてからの方が、今では少し長いくらいだけれど、やっぱり幼少の頃にそう呼ばれていたから、妃依里の方が本名だと思ふ気持ちは抜けきれない。

私が自分が小夜という名前であると思ひ始めたのも、結局ここに来てからの、逃げの意識からにしか過ぎないのだと改めて痛感してしまつた。

あんなことをしたのは妃依里ではつて小夜ではないのだと……きつと、そう思ひ込もうとしていたんだ。お兄様との約束に託けて…

…

37・妃依里のお兄様のいない休日3

落ちた気分を落ち着かせるために、私は隠し部屋までやってきた。
結局私は兄たち　お兄様とお兄ちゃん　に頼らなければ生きていけないらしい……

お母さんが生きているときは、まだお兄ちゃんにそこまで頼り切りではなかった。けど、お母さんが亡くなって、正式に『紫司』に引き取られてからはずっとこうだ。私は弱い、どうしようもない程に……

私たちは本来『紫司』の姓を名乗ることは許されぬ身分にある。
立場というだけの話ではなく、その血筋として明確に。

四大柱の家系には、柱塔ちゅうたつという階級制度がある。そもそもは、階級ではなく、単純な区別だったという話だけど、今ではそれを意図的に強く意識させることで、結束力しはうりょくを高めているということだ。

大柱おほはしら　四柱よしちゆうの各家、又は頭首かみづそのものを指す　を筆頭として、その下に縁えにしという家があり、次に縁衆えんしゆう、そして最後に衆家しゆうけという構図くあうになっている。

縁えにしというのは、一族の血縁濃度が生粋である大柱ではないの家系。つまりは、現頭首げんづつえの康嗣ちやうすいの実の兄弟たちや従兄弟たちなどを指している。

そして、大柱の直系たちは頭首となる者が決まった時点で、縁の姓へと改名する。紫司の家系で言えば、紫司むらさきから岸きしじか？や紫塵むらさきといった姓となる。

また、次期頭首は基本は直系から選抜されるが、力の強弱によって縁から大柱になることも珍しいことではない。ただし、それは“魔術師としての才”を指して比べる場合が多く、“紫司の才”が発

現した場合には、強制的に頭首となる。

縁衆は、混血の家系。私と兄は本来この縁衆に当たる。

私たちの母は、一般家系の出で、父の二人目の妻だ。

私たちは『紫司』の血をその半分しか受け継いでいないので、本来ならば私たちが『紫司』の姓を名乗ることはない筈だった。

しかし、まだ私が小学校に上がって間もない頃に母がなくなつた。それだけならば、まだ幼い私たちはただ父の元へ引き取られただけで、紫司の姓を名乗ることはなかった。

私と違つて“魔法の才”に恵まれていた兄は、六歳の頃から魔法師として家業を手伝っていた。その力は神童と言われる程で、あときはまだ八歳でありながらCランクだった。

その兄が、任務中にとつてもないことをやってのけた。

その任務はテロリストの討伐。まだ幼くあつてもそれ程の力があ
り、四柱の縁ゆかりの者ともなれば、当然その任務に殺生 殺人すらも入ってくる。

この任務のその手のものだった。部隊編成もぬかりなく十二分に整えた部隊だった筈だったが、一つだけ誤算があつた。

テロリストの戦力、たつた数名だけのテロリストだが、彼らは尋常ではなかった。

彼らは普通の人間では無かつたのだ。彼ら全員が外世界の住人だった。主要国家以外の魔性汚染地域の住人。

彼らのその風貌は最早、人のそれとは一線を画す。その全員が魔象たすまを携えた魔人たち。

いくら万全を期したとは言え、それは普通の人間を相手にという意味でのことだ。

たつた数名のテロリストに部隊は壊滅の危機に追い込まれた。

だが、結果だけを見ればこちらの部隊は重傷者は出たものの、辛うじて死はおらず、テロリストは“跡形もなく全滅”したという、大勝に終わった。

何が起きたのか？ それを知るのは、あの戦闘の中ただ一人無傷だった兄だけの筈だが、兄はそれを語らなかつた。

そして、暫く 数年、父に引き取られてから間もなく して兄の部隊が似た様な状況に追い込まれたことがあつた。今度は以前の相手よりも数段上の者たちで、その中の一人は推定でBはあるだろうと判断された。

上層部に連絡は入れたものの、応援が直ぐに 時間的には五分と掛からずに来るだろうが、それでも彼らには絶望的な時間でしかない 来るわけがない……

一縷いちろの望みを掛けて、有りつ丈の力を込めて防壁を張つてはあるが、こんな物は気休めでしかない。と、それを作り出している本人たちが誰よりも理解していた。

だが、敵に向かつて歩いていく小さな人影が一つだけあつた。

それが兄だ。

そして、彼らの目の前で衝撃的な光景が広がつた。

少年から尋常在らざる魔導波を感じた瞬間には、目の前に存在していた筈の魔人たちが次々と消滅していくのだ。

少年の視線を向けた先には、紫の閃光が煌めき、それを受けた者は消えて行つた。

全ての敵を滅した少年が振り返ると、その右眼は紫の眼光を放つていた。

本来はあり得ないとされていた。

しかし、兄にはそれが現れていた。紫司の最大の才、紫眼が。

故に兄は凍夜となつて、正式に紫司に引き取られることになつた。そして、私も一緒に紫司の姓へと変わった。念のためにと検査を受けたところ、私にも僅かながらに“紫司の才”があることが分かつたからだ。

紫司には名に決まり事がある。紫眼を持つ者に凍夜と言う名を付ける他に、紫眼以外の紫司の才を持つ者にも、凍夜には及ばずなが

ら『夜』の名を付けるという決まりだ。

故に私は小夜となった。けど、それは宝の持ち腐れ……紫司の才があるうとも、私には肝心の“魔法の才”が無かったから……

何という皮肉だろう、姉上は魔法の才に溢れた才児ではあったが、紫司の才に恵まれなかったために夜の名を与えられなかったというのに、私はその逆なのだから……

凹む様なことばかり思い出していたけれど、徐々に時間軸が現代に近づくに連れて、私の心の中は、お兄様との思い出ばかりがより強く支配する様になっていった。

たっぷりと時間を掛けたお陰で情緒も安定した様で、やっといつもの私に帰ることが出来た。

「そろそろ、戻るね。いつも心配ばかり掛けてごめんね、お兄ちゃん」

私は写真の兄に、先刻とは違うチャンとした笑顔を向けて、隠し部屋から出た。

さて、こっかは頑張らなくちゃっ!! お兄様が帰ってきたときに、何もしてないんじゃない、だらしない子だと思われてしまうもの!! お兄様がそんなことを思う筈ないというのは分かっているけれど、これくらいのことではしておきたい。それに、ちよっとはしたくない考えだけど、それをやって置くとお兄様に褒めて貰えるから……(恥) いつもはそんな下心はないけど、今日は……ちよっつくらいいいよね?

そして、私は家の掃除を始めた。のだけれど、はつきりいってあまりやることはない。

何しろ、日頃からお兄様が管理しているだけに、目立った汚れがない。いったいいつ掃除しているのだろう? と本気で思う。

あとは、窓のサツシや網戸、普通なら大掃除のときにしかやらない様なところかなのだけれど、それにしたって、定期的に手入れが行き届いていて直ぐに済んでしまった。

お洗濯はお兄様が出かける前に済ませてしまったから、あとは乾くのを待つだけだし……、本当にお兄様は隙がなくて困ってしまう。そこで私は、本当はあまり気が進まないのだけれど、これほどあっさりしていると何もした気が起きないので、取り敢えず全部の部屋の掃除　単に掃除機を軽くかけるだけ　をすることにした。

先に自分の部屋を片付けた私は、お兄様の二室から掃除を始めた。私あまり気が進まない理由が二つ　一つは、お兄様の部屋のこの有様が好きではないからだ……

ベッドは今朝使ったかどうかは私には分からないが、それでもホテルのベッドメイキングが済んだときの様に皺一つなく、掃除機を掛けても取れるのは絨毯の毛ばかりで、髪の毛の一本すらもない。本棚は当然整頓されているし、机の上も中も乱れなど存在しない。ただ整っているだけではない。

人の生活感が感じられないのだ。髪の毛の一本すらないお兄様の部屋が、私は正直言って怖い……いつでも、消えていってしまうようにしてある様に思えてしまうから……

でも、ただ一点だけ、きつとわざと残してある痕跡ある。

お兄様が使っているシャンプーの香り、ただそれだけはほのかに香り、私にこの部屋の主人の存在を訴えかけてくれている。

二つ目はそれを、自分でかき消さなければならぬということところにある。

掃除をするのだから、換気をするのは当たり前で……そうすると僅かばかり残っていたお兄様の残り香が消えてしまう……かと言って、やらない訳にもいかないのが、辛い。

それに、綺麗に整ったベッドのお布団も干さなければならぬ。

干すのはいいのだけれど、それを元に戻すととなると大変だ。私はお兄様程に綺麗に出来ないから、私がやったものだと思えるに分かつ

てしまうので、そんなことも出来ない自分が恥ずかしい。

魔法を使えば出来るけど、いったいお兄様はどうやって、ああも綺麗に整えるのか？ これも『七不思議』の一つに入れて良いかしれない、と考えたら少しは楽しくなった。

38・妃依里のお兄様のいない休日4

入学式当日、私は沙樹ちゃんに中学時代のお兄様の話を訊いてみた。そこで聞かせて貰ったのが、『紫司凍夜の七不思議』という話だった。

どうやら、彼女たちはお兄様に纏わる、不可解なことをそう呼んでいたらしい。だが、七不思議とは言っても、それは良く言う学校の怪談に合わせただけで、数は七つではないとのことだった。

大きいところでは、（見た目からして）『（相手から）目が見えない眼鏡』に始まり、『右手の手袋』『真夏の学ラン』などがあり、後はどれも人それぞれに違う疑問を抱いたことが、七不思議として挙がっていたという話だ。

入学当初は、普通科に入った理由など裏事情ブライバシーに関することが多く囁かれてはいたが、お兄様の事情や人となりを知ったクラスメイト（主に女子）たちによって、そちらは淘汰されたいらしい。

彼女から聞いた話を頭で再生させながら、掃除を進めていき、残すところ母屋は、この部屋で最後となった。

この部屋はお兄様の『研究室』。魔術が使えないお兄様が、それでも尚『紫司凍夜』在らんとするために、それを補う術を得るための、魔法に関するありとあらゆることを研究するための部屋。

ということになってはいるが、お兄様にとってはそれは建前でしかなく、彼としては“『魔法』の研究をするために得た”部屋だ。

“紫司凍夜となるために与えられたのではなく、この研究室ちからを手に入れるために、紫司凍夜となった”というのが、お兄様の言い分。これが、お兄様と紫司わたしとを結びつけた原因と考えると、私にとっても感慨深い部屋でもある……でも、それを抜きにしても、この部屋は“私にとって”特別だ。

多分、この部屋の重要度は、お兄様より私の方が重く感じていると思う。

他者からみればただの魔法研究室　個人レベルでは十二分に整ったのもでも、大手の研究機関に比べるべくも無い　というものでしかない部屋なので、紫司やお兄様は特段機密にするつもりはない。

しかし、私にとっては隠し部屋よりもこの部屋の方が、正確にはこの部屋の中身の方が余程重要な代物だったりする。

お兄様はガラクタバばかりだと言うけど、実際にはそんなことがあるわけがない。

もし、この部屋の中身が世に知れたのなら、お兄様はそれだけで身の証を立てられる。

紫司凍夜という偽りを捨て去り、一個人として世間から認められる存在となる。

けど、お兄様はそれをしない。

それは、紫司の命に関わりなく、単純にお兄様に必要なことだからというのは分かる。

私は出来ればお兄様には、自分の人生を歩んで欲しいと思う……

……でも、本来それを望むなら、私は中の物を公の場に晒すべきなのに、それが出来ないでいた。

それは、私のエゴ……お兄様から離れたくないという、私の我が儘。

お兄様のことを第一に考えるなら、自分の事など考えるべきじゃないのに、お兄様と離れると思うと、考えるだけで耐えられなくなる。

それも、これは心がという意味では無く、物理的な距離がという意味でだ。故に尚のこと、自分の矮小さが浮き彫りになって嫌になる。

お兄様なら、例えば紫司との関係を絶とうとも、私と交わした約束は守ってくれる。その確信はある。

でも、今の様にいつでも一緒にいられるとは思えない。

お兄様が私を想っていてくれていても、私はそれだけじゃ耐えら

れないから……

手を付けた箇所だけを言えば、ほぼ丸々大掃除に近い筈なのに、お昼時には母屋の掃除は終わってしまった。

軽くお昼をとった後、今はコーヒーを飲みながらテレビを見ていた。

外は良く晴れて、ぽかぽかしていて気持ちが良い、気を抜いたら転た寝してしまいそうだったから、コーヒーにして、それにお兄様特製の香料を入れて転た寝防止をしていた。

今回の香料は、活性効果のあるものを選んだから、これでお兄様が帰って来たときに転た寝していたなんて、恥ずかしい事態は避けられる。

『続いてはH・D情報です。先月から多数発生していた沿岸沿いでの水棲魔獣とはことなり、先日内陸部での魔獣が発生しました。魔獣は発生から数時間の内に、軍により討伐され、被害は警察との連携により最小限に止めることが出来ました』

内陸部で発生の魔獣騒動……本来この日本では起こりえない現象の一つ。

しかし、現にこうして起こってしまった。いや、起こさせられてしまった。

『未だにその“犯人”は見つかっておらず、警察・軍関係者は全力でその犯人捜査に当たっている状況です』

何者かの手によって……

蒼縁の庇護、水晶結界の内世界に置いて、それは“自然現象”ではあり得ない。故に日本という国には価値がある。魔性の驚異が自国で発生しないという、唯一にして絶大、絶大にして絶対の価値が。その日本でこういったことが起こるのは、外世界からのテロリストの仕業である可能性が高い。

今回の犯人に関して今はまだ何の情報もないらしく、警察も軍も躍起おどろきになっていくということだった。

その所為で、姉上は結局まともに授業をやったことがなく、今のところお兄様が元来姉上がやる予定だった教科の担当をしている。

『 現在、太平洋側の沖合200キロ地点に大規模な嵐が発生している、気象庁から発表がありました。嵐は、今のところ発生位置から移動していないということで、直接の被害は出ていませんが、海沿いの一部地域には高波の警報が出ていますので、くれぐれも注意してください。これで、H・D情報を終わりにします』

沖合200キロだとその後の進路で直撃の可能性もあり得る。

今(テレビで)見た限りではかなりの大物だった。アレだと、直撃以前に近づいて来た時点で対応の対処が必要となる筈だ。そうやってくると、益々姉上が学校にいる時間が無くなってくる。

姉上自身が悪いわけではないけど、それでもお兄様に全てを押しつけるカタチになるので、正直ちよつと腹が立つ。

何でも命令めいれいを聞く『駒』として接している、姉上や父上のそう言ったところが私は嫌いだ。お兄様が、自身の扱いに無頓着なのを利用している様で尚気分が悪い。

兄上が生きていた頃は、姉上ともそれなりに仲が良かったし、父上のことも大好きだっただけに余計かも知れない。あの人たちの変わりようが、私は一番シヨックだった。

好きだったから、今の嫌悪感がより一層強く感じてしまうのだと思う。

「お兄様……」

クッションを抱きかかえて、ソファーに横になって何の気無しに呟つぶやいていた。

「なんだい？」

「はひゅっ!!」

急に上の方から聞こえた声に、私は驚いて変な声を出してしまった。

急いで立ち上がりはしたものの、変な声を出してしまったことと、ソファーに横になっていたというだらけた姿を見られた恥ずかしさや焦りから、きちんと視線を合わせることも出来ない。

私は抱えたままのクッションで目元までを覆って顔を隠し、俯いた視線を徐々に上へと移して行き、漸くお兄様の顔を見ることが出来た。

でも、言うべき言葉が出てこない。

どうしよう！ お兄様にだらしない姿を見られちゃったよ（泣）お兄様がないときはいつもこんなだと思われたら、どうしよう？

予想外のお兄様の帰宅に私は最早パニックになってしまった。

そんな私を見ていたお兄様がクスクスと楽しそうに笑う。

「なんか、久々。小夜のそう言う困り顔」

ソファーを回って正面に立ち、私の手を取ってクッションをおろす。

「可愛い顔（困り顔）をされると、余計に悪戯しなくなっちゃうじゃないか？」

お兄様はそう言って、満面の笑みを私に向けた。

パニックということは、つまり興奮している、しかも感情剥き出しで……そこにそんな笑みを向けられたものだから、私の意識は限界を迎えてしまった。

39. もう一つのサイコロ

車の中では一組の男女が、向かい合わせに座り無言の時を過ごしていた。

女性の方は、まだ少女という年頃の、それでいて大人びた雰囲気も見て取れる、とても美しい顔立ちをしていた。しかしその少女はとて少女には似つかわしくない筈の、黒い重苦しい印象のある眼帯をしていた。

少女は、何を見るでもなくただ流れる外の景色を眺めながら、時折目の前に座る『少年』へと視線だけを向けていた。一応、もうすぐ二十歳になる筈で、本来ならば青年と称するべきなのではあるが、実際のところ少年という表現も間違っではない、ということはこの少女は知っている。

少年は、少女の格好や仕草に愛らしさを覚え、相手からは視線の先が読み取ることの出来ない、不透過の眼鏡越しにじっと少女を見つめていた。

少女の方は、一瞬視線を少年に向けるも即座にまた何事も無かったかの様に視線を戻す、つとということを少年が車に乗ってからの時間、かれこれ十分程繰り返していた。

「そういう格好もする様になっただね。僕のイメージだと、君は和服姿が一番印象的だから、そういう格好は新鮮だよ。でも似合ってる。可愛よ、神堃」

少年は一頻り少女の愛らしさを愛でると、漸く口を開いた。車に乗ってから、おはようの挨拶以来の開口だった。

自分の格好を褒められた 否、この少年に褒められたことが嬉しく、また気恥ずかしい少女。神堃は不機嫌を装うポーズのまま顔を真っ赤に染めていた。彼女を知るものが見たら嘸かし驚くべき光景だろう。

神堃は今可愛らしいパンクファッションに身を包まれていた。

「折角の時間なんだ。話をしようじゃないか？ 今の『僕の立場』では君の望みを叶えてあげることができない。だけど、今このときは蒼縁の時間だ。だから、出来る限りのことはしてあげたいよ」
そう言つて、少年は神埜へと会話を促す。

「ありがとうございます……私はその言葉だけで十分です。今この時、貴方と共にいられる。そのことだけで私は救われていますから」
『ありがとう』ただそれだけを言つて少年はまた口を閉ざした。
『ごめん』という言葉がいいそうになったが、それは言わなかった。

これは『贖罪』^{こくへんざい}。ある者との誓いを、否その大前提すらも破り去つた、そのための贖罪。

それに神埜を付き合わせている。神埜はそれを知るが故に今の距離を取る。本当はもっと近づきたいという自身の本当の気持ちを抑えて。

そして、少年もまたそれを理解するが故に感謝の言葉を述べた。謝罪の言葉では、彼女の想いには答えられないと、そう分かつているから。

入学式の沙樹から言われた言葉を思い出す。『紫司さんって何者？』という問いを。

存在自体が虚像ならば、それは偽りの本物。改めて誰かを騙す必要はない。そもそもが嘘なのだから、しかしそれでも尚その存在は本物であるという矛盾を少年は抱えていた。

故に皆は思ふのだ。その疑問を。

『凍夜』というサイコロは複雑なカツティングの施された形状だと、作り上げた自身で思う。一度で見える面は数あれど、角度を変えればまた違う面がいくつも出てくる。

ただそれだけの存在ならば、『つかみ所のない人間』^{ひと}という認識で終わる筈だった。しかし、凍夜にあるもう一つの『秘密のサイコロ』、その存在が皆に疑問を抱かせる。

例えそれがあることを知らなくても、存在するならば知れるもの

だ。

世間でいう秘密とは、一般的には隠してあることであるが、込み入った社会での常識としては、二人以上が知ることは秘密とは言えない。故に、秘密とは自己の胸の内へのみ留めて置くのも、ということになっているが、少年にとってはそれすらも適切だとは思えない。

『秘密とは自己がそれと認識した時点で、秘密ではなくなる』というのが、少年の持論である。それを誰かに言ったことはない。言う機会もなければ、言う必要はないからだ。

それ故に沙樹の問いはいつか誰かからは言われるものだろうと思っていたから、覚悟をしていた。

事実だけを述べるなら、沙樹の見た凍夜の憂い顔は単なる錯覚だ。沙樹が彼を想っているが故に見た、沙樹だからこそそう見えただけのことだった。しかし、顔に出さなかつたからと言って、実際に彼がどう感じていたかは当人しか知る由はないことだ。

存在そのものが嘘つみ、それを前提に生きる者の心を理解出来る者など存在しよう筈もないのだから。

ただ

「ただ……一つだけお願いしてもいいですか？」

「なんだい？」

「そちらに行ってもいいですか？」

目の前の少年にすっかりと視線を向けて問いかけた。少年はそれを快く了承して、その傍らに神塾を招いた。

ただ、理解出来ずとも想いを寄せることは出来る。

少年は今の自分は幸せな人生を歩んでいると実感している。それは少年の周りには幾人も自分を、その真意は理解出来なくても『そういう存在』として、『受け入れてくれる』人たちがいるからだ。

そんな虚ろな存在の少年を受け入れる一人である神塾が少年に懇願する。

「いくつも伝えないことがあります。たくさん訊きたいこともあり

ます。でも、今それが叶わぬことも知っています。だからせめて、今少しの間だけ……あの娘よりも、きつく私を抱き留めて下さい、お兄様」

そこには少年のよく知る少女の姿があった。

当時はこんな風に自分に触れることなどはなかったが、しかしそれでもその中身は当時のまま、誰よりも愛を欲していた幼き少女のままだった。

傍らに寄り添い、少年に体を預ける少女をその希望通りに強く抱きしめた。

そして当時を思い出す。自身にある僅かな『記録』の断片を、早回しにビデオを見るように……

やだて辿り着く先に見えて来た光景、そこに映る四人の姿。

「神埜は『あの女性』に良く似てきたね」

「はい……」

一人目は自分、二人目は神埜、三人目は神埜が兄と呼び慕うもう一人の少年、そして最後にその少年少女らを暖かい眼差しで見守る今の神埜によく似ていてそれでいてもつと淑やかな印象の、少し年の離れた女性の姿があった。

その女性の名は神樂、蒼縁の真の長女として生まれながら、その存在を秘匿され、四柱以外の者には知られることの無かった神埜の実の姉。蒼縁の宿命を生まれながらに背負わされ、しかしそれでも尚誰を恨むでもなく、ただ今の世の平和を願い続けた心優しい女性だった。

「『あいつ』が今の君を見たらなんと言うかな……」

神埜は少年の服を強く握り締め、その顔を悲痛に歪ませる。

「日向兄様の話はしないで……」

か弱く絞り出すのがやつとという程度の声量で訴えた。

かつて兄と慕っていた人物、そして何より、幼いながらに淡い恋心を抱いていた相手だった。しかし、今ではそれは神埜を苦しめる楔でしかなくなっていた。

「ごめんね。君が苦しいのは分かってる。でも、これは避けては通れないことだよ」

神埜を引き離し、真剣な眼差しを向ける。

「君がまだあいつを想っているとしても、それは罪じゃないよ。確かにあいつは過ちを犯しているけど。それでも、僕らが過ごしたときは偽りじゃないんだ。それに、あいつだって時代の被害者だよ。こんな時代でなければ、あいつはきっと僕らと一緒にいた筈なんだ」
当時は神埜にとって自分はただ邪魔な存在でしかなかった。大切な人と過ごす時間をいつも自分が奪っていたのだから。特に、日向だ。彼との時間を神埜は何より楽しみにかけていた。

それを、毎度自分が邪魔してはどこかへ連れ去っていたのだ。自分は、当時の彼女にしてみれば日向の友人でなければ、一緒にいることすらなかった筈の存在だったに違いない。

当時はそれで良かった、自分の存在を良く見て貰う必要など感じてはいなかったから。しかし、きっとそのことも今の神埜を苦しめる原因になっているのだろうと思う。

あの頃は自分も何も分かってはいなかった。想うということの意味を。

今は、少しは違うと思う。

他人に傷つけられても平気なのが強さではないことを知った。他人を傷つけないことが優しさではないと知った。

相手が誰かを傷つけているということを示すこと、時には痛みをもって知らしめることも、それは必要なことだったのだと。

40・罪彼(ざいか)

無知とは罪だ……

幼き頃の私は余りにも愚かしく、そして罪深かった。

どれ程私が愛され、想われていたのか……その片鱗すらも感じる取ることも出来ず、感じようともしていなかった。

ただ羨み、憎み、嫉妬していた。

あの人は最初に間違えたのは自分だと言った。優しさの意味を、強さとは何たるかをはき違えていたのだと……

あの人は本当に強い、自分の過ちを認め、それを糧に自身をより大きく成長させている。

あの人は本当に優しい、私をただ慰めるのではなく過ちを諭し、ただ許すのではなく相応の罰を与えてくれた。

罰とは言っても、所詮はあの人の苦しみのホンの一欠片にも満たない程なのだろうけど……罰の軽さに私が罪の意識に苛まれない程度に、けれどそれでいて私を戒める程に適切な優しく苦しい罰だ。

今から約二年前、あのパーティーで彼に再会してから与えられて罰。それのお陰で今の私が保たれているのだと思う。

それが無ければ、私は今頃更に破滅的な道を歩んでいた筈だから。

私たちが到着したのは、人里離れた山奥にある蒼縁の管理下にある“研究所”。

彼は七年前の『事件』以来、ここに通い続けている。否、正確に言えばもつと昔から、そう表現した方が正確なのかもしれない……

先月、まだ(学徒主観の)世間で言うところの春休みであった頃、私たちはここで邂逅した。

別にそれ自体は珍しい事ではない。二年前のパーティー以前は、周囲の力により意図的に避けられていたが、それ以降は度々すれ違ふことくらいはあった。最も、彼の予定に合わせて私がここにしていただけれど……

今日は正式に同行を私から申し込んだ。正直、彼と少しでも同じ時を過ごしたいという想いから来るものであるということは否定できない。否、寧ろそれが大きい。しかし、勿論それだけではない。いくら何でも、私は自身の幸福のためだけに動ける様な立場にはないからだ……。

今回は建前としても、そして確かな懸念としても、『奴』の存在がある。

この計画の技術主任：藤原啓治ふじわらけいじ、彼の存在。技術力はこの計画には不可欠ではあるが、人格面に置いてかなり問題があり過ぎる人物。

彼に対して異常なまでの冷酷・残虐行為を平然と行う様な、はっきり言つて異常者だ。

しかし、こちら側としては、奴がいないと計画が数年単位で遅れる可能性があるために、切ることができない。そして、奴はそれを利用して彼に対して悪行を働くのだった。

今回の同行の目的はそこにある。いくら奴でも、ここは蒼縁の支配下だ。そこにこの私が行くのだから、いくら奴とて下手なことはしない筈だ……と。

「ようこそいらつしゃいました」

私たちが車を降りると、老人ながらに精悍な顔つきの男性が恭しく頭を下げて出迎えた。

彼はこの研究所の所長の西村知道にしむらともみち。いつも必要ないと言っているのだが、こうして私たちが来る度に自ら出向いてくる。

しかし、それは媚びているわけではなく、単に彼の人となりの問題なので、別に気分を害するということはない。

そんな彼が顔を上げ私の格好を見ると、流石の彼も驚きを露わに

した。

彼が可愛いと言ってくれたこの格好の、普段の私とのギャップに
ではない。

この格好をしている私にであることには違いないだろうが、その
意味するところは大いに異なる。

きっと彼は今恐怖している筈だ。私が（好んでは兎も角）良く
この格好をしていたのは、一番荒れている時期だったからだ。

私がパンクファッション（相当なレベルで）不機嫌というのが、
周囲の認識になっている。

最も今回ののは、奴に対する牽制のためであって別段（奴以外には）
気分を害しているわけではない。

「この格好に深い意味はないわ。さっさといきましよう」
正確に私の意思をくみ取れたかは兎も角として、西村はいつもの
人の良さそう（実際に良い人物）な顔を作り、先だつて私たちを招
き入れた。

建物に入ると、直ぐに異様な臭いが鼻についた。

今は法律で禁止されている旧時代の煙草、入手するのも今の時代
では闇ルートを紹介しなければ入手不可能な筈の代物だ。

長椅子に寝転がりながら、堂々と違犯する男がいた。

「藤原くん！！ 君は今の状況を分かっているのか！？」

西村にしては珍しい程の勢いで怒声を放つ。

それに対して藤原は全く気にも留めてた様子もなく、飄々とした
態度で答える。

「ええ、勿論分かってますよ。仕方ないじゃないですか、汚い溝鼠
が悪臭を漂わせていいるんですから。この臭いを嗅いでないと、発
狂してしまいますよ」

溝鼠……それがいったい誰を指しているのか、その答えは
簡単なことだ。分かっているにしても、やはりこいつの言動は軽く私の
限度を超えた。

殺さぬ程度に軽くヤキを入れようとしたが、彼の左手が私の体を

制した。

そして、私に言葉を掛けることすらなく、藤原の元へと歩み寄る。

「お久しぶりです、藤原『先生』。今日も宜しく願います」

こんな奴に不要だと思える程に礼儀正しく、挨拶を送る。

「相変わらず気色悪い、実験体だぜ……畜生、まだ吸い始めだつてのによ」

そんな彼に対して、飽くまでも中傷を続ける藤原。そして、彼が顔を上げたときに徐にその眼鏡を外した。

その眼鏡を取るとこを許されてはいない。はっきりいってこれだけでも、即座抹殺の大義名分としては十分だ。

だが、藤原は更に驚くべき行動にでる。彼の右眼に煙草を押しつけて、煙草の火を消したのだ。

その瞬間に、藤原の髪が風で後ろになびいた。

本来ならば、奴の体ごと壁に激突する筈だったが、風を作りだした私の拳は奴には届かなかった。見れば私の右手は彼に捕まっていた。

「神埜、暴力は良くないよ」

何故こんなことをされてまでこんなのを庇う必要があるのか、私には理解出来ない。

計画の遅れは確かに痛い。しかし、それでももう殆ど完成と言っても言いだから、今更こいつがいなくなったとて問題ない筈だ。

しかし、彼にとってはそういう問題でなく、彼以外の誰もが理解出来ないことがある。

「大丈夫ですか？ 藤原先生、拳圧で怪我されてませんか？」

「しっかりとそのお転婆なお嬢様を繋げとけ、糞ガキ」

お嬢様などと全く持ってそう思っていない態度で吐き捨てて、藤原はこの場を立ち去った。

「何故止めるんですか？ あんな奴もう必要ないでしょう？」

私は訴えるように問う。

彼は、そんなことは言わないでくれと、悲しげな視線を私に向け

た。

「君は知らないんだよ、彼を。彼の優しさを、痛みを何もかも……」
私だけではない、誰も彼もが彼のことが分からなかった。彼は藤原を尊敬していると言っただ。

藤原と彼の接点を誰も知らない。

「僕は大丈夫だから、もう藤原先生に手をあげるのはやめるんだ。
頼む」

のっけからこれだ……、私の存在など牽制にすらならなかった。

私は別室で見ていることしか出来ない。

今彼は沢山の計器に繋がれて、様々なデータを採取されている。

この作業に藤原は関与していない。奴が関わるのは、この後だ。

普段から、体内の計器や携帯からモニタリングをしているので、これは最終的な調整様のデータ採取に過ぎない。

そして、それを元に藤原を始め技術スタッフたちが彼の体の最終調整を行い、それが終わればその後で、スキンラバーを最新のものへと張り替えることになっている。

「先ほどは申し訳ありませんでした」

西村が藤原に変わって謝罪する。

「私に言っても無意味だわ。ねえ？ 貴方はなぜ彼が、奴をこうまで庇い立てするのか知ってる？」

知っているとは思えないが、若しかしたら分かる可能性も考えて一応質問してみる。

「いえ、分かりません。ただ、『あの方』ではなく、『彼』の方と何らかの繋がりがあった可能性がありそうです。以前、藤原くんが勤めていた病院に、彼と覚しき人物が出入りしていた様ですの」

「そう……」

そうなってくるとお手あげた。

『かれ 兄様』の罪の象徴である『かれ 彼』 私たち（限られた極一部の人間）はその存在を、彼の罪『さいか 罪彼』と称している が絡んでくるとなると、最早こちらからでは手は出せない。もし、私たちが罪彼に関することを調べたこと、それが彼に知られれば、きつと彼は罪彼のために全てを犠牲にする。いや、きつとではなく間違いないだろう。

そして、いくら私たちが隠そうとしても、彼を欺くことは不可能だ。よって、これ以上は手詰まりとなる。

（いったい、貴方に何があったのですか？）

ガラス越しに見る彼を見据えて、心の中で聞いてみた。
事件としてのあらましは知っている。しかし、『かれ 兄様と罪彼』の間のことは個人的な問題だと、決して話してはくれない。その内容は詠歌さんですら知らない筈だ。

もし、事件が解決したのなら日向兄様との決着が着いたのなら…
…貴方はどうするつもりなんですか？

41・男の体

《IBGM: Masquerade / Hitomi》

凍夜は居間のソファに、先程意識を失った小夜を、自身の膝に頭を乗せた状態で横たえさせ、その頭を愛しむ様に軽く撫で、愛らしい寝顔を愛でながら、座っていた。

所謂、膝枕というやつだ。そして、実際に（初めて）やって見た。なるほどこれはなかなかいいものだなと思っていた。

普通、状況的に男女の位置関係が逆転しているのではあるが、こうして相手の寝顔を眺めていられるというのは、なかなか面白い。しかしながら、自分は良くても果して小夜の方は、自分の体では不服なのでは？ という、不毛な事も考えていた。勿論、そんなことがあるわけもない。

小夜が凍夜の好意に狎なれるということはない。

好意の意思を向けて貰えることには馴れたとしても、凍夜から与えられる好意にいつまで経っても免疫がつくことはなく、そればかりか与えられれば与えられる程に、小夜の中には恋慕の情となつて募つていく。

恋の病とはよく言ったものだ、と小夜は常々感心している。小夜は、まさに病の如き症状に侵され、常に蝕ほじむまれているのだった。

小夜は『凍夜』と最も親しい間柄である（と自負している）が、その実凍夜に対して気を張っている。緊張という言葉に置き換えることも出来るが、心が引き締まるという点以外では相応しくない、何よりそう陥るのではなく、意図してそうしている。というのが現状だ。

勿論、完全に気を許してはいるのだが、しかし小夜にとっては、ある意味置いて、それがいい事だとは限らない。

何故かと言えば、警戒心のないひたすらに膨れ上がる恋心に、狎

れるのことはない好意あじが注がれるのだ、（今回の様に）気が動転しているときや、不意打ちのときなどは感極まって失神してしまうこともあるからだ。

故にもう少し、ふてぶてしく狎れようなどとは露程にも思っていないが、せめて乙女としての体面を保てる程ではありたいと思っている。

小夜と言えど（逆になればこそとも言える）、凍夜の前でそうなのは恥ずかしい、という思いもあるし、何より凍夜に迷惑が掛かるのだから、不本意極まりない。……のではあるが、そうはあっても凍夜に介抱してもらって嫌なことなどあろう筈もない、などと回りくどい言い回しではなく、素直に嬉しいと思ってしまうのも事実なので、実に悩ましいところだ。

小夜が目を醒ましたときには、その二律背反する想いに煩わされるのだからな、などということも考えて、ただ小夜の寝顔を眺めている。

女の子の悩みはそういう程度　程度と表してはいても、軽視しているわけではない　のことで十分だ。それ以上のことで悩ませることなど、そうはあってはならないし、そうさせる存在などは本来あつてはならない……それが、凍夜の考えであるし、願いでもある。

しかし、皮肉なことに、それに一番反しているのが、自分という存在というのだから救えない。

今の世界では、最早その言葉にすら確かな意味を持たせてしまっているのです、言葉の重みとしては、些か欠けているかも知れない。だが、そんな今の世であつても『神』という存在はおらず、また概念的偶像崇拜かみだのみの対象として消えてはいない。

故に、凍夜ですら、思うことがある。もし、『魔法』が使えたらばと……

『魔法使い』に成れたのならばと……

そうすれば、誰も彼もがただ幸せを願い、それだけが悩みのタネであるような世界が築いて行けるのに……

小夜が目を醒ますと、凍夜の顔が迫って来ていた。

視線は近づいてくる唇に集中し、その軌道がどこへ向いているのか、真つ先に思ったのはそれだけだった。

凍夜の唇が自身の顔の一部に触れた。

額に触れた唇は、触れたと思った瞬間には離れ、凍夜は元姿勢に戻った。その一連の動作は、実際には僅か数秒という時間であったにも関わらず、小夜にとつてはかなり長い時間に感じられた。

そして、暫く小夜は何も考えることが出来ずに、ただ凍夜の唇を見詰めることしか出来ずにいた。

「おはよう」という、凍夜の言葉で漸く意識まで取り戻した。

本来なら、その時点で羞恥心からバタついてしまふところだが、今は凍夜が左手で頭を撫でて暮れているので、当然恥ずかしい気持ちはあるのだが、顔を真つ赤に染めながらも、それでも落ち着いて今の状況を受け入れることが出来ていた。

「もう少し、こうしていたいんだけど、いいかな？」

凍夜が小夜に問う。

この台詞は、普通ならして貰っている立場がする筈なのだが、この状況ではそんなことは関係ない。自分がそうしていたいと望んでいる、それを小夜にきちんと伝えておかないと、小夜は気持ちの上では望んではいても、退いてしまうのは火を見るより明らかだったからだ。

小夜はそれに（当然）肯定を示して、凍夜に身を委ねた。

暫くそうしていて、凍夜が口を開いた。

「ごめんね。寝てる間にちょっと診みさせてもら貰ったよ。やっぱり、そろそろ調律チューニングを入れる必要があるね」

調律の言葉を聞いて、小夜の顔がまたほんのりと赤く染まった。

「では、お兄様の都合のいいときをお願いします」

「じゃあ、今夜はどうか？ もし、小夜の方で明日特に用事がないければ、フルでやっておこうと思うんだけど、どうかな？」

「（フルツッ！）……私は、大丈夫です」

そう言った小夜の顔が益々が紅潮し、朱みを増していく。

「うん、じゃあ今夜ね。ところで、買い出しはまだだよね？」

小夜がそれを肯定する。現時刻は二時を少し回ったところだ、凍夜はそれを確認して一緒に行こうと誘いを申し出る。

「それじゃあ、今からデートがてらに、買い出しに行こうか？」

本来なら、買い出しが主である筈だが、（小夜の気持ちを知らずして、それでも尚普通に接している）凍夜とてそこまで無粋ではない。それに、今朝の詫びも兼ねてという思いもあるので、敢えてデートを主にして置いた。

「はいっ！！」

小夜にとってはデートという響きだけでも十二分であるが、凍夜のそういう細やかな気遣いがまた嬉しさを倍化させるのだった。

「お兄様、お背中流しに参りました」

浴室のすりガラスの向こう側へと、声を掛ける。

自分では、落ち着いた声を出せているとは思うが、実際のところは自分では判断できない。何しろ、今は心臓が破裂してしまうかと思う程に強く激しく鼓動していて、冷静な自己判断が出来ないことは明白だからだ。

これが初めてではないが、やはり幾度やっても馴れることはない。そればかりか、時が経つに連れ、積み重なる想いが増すため、より一層激しくなっている。そのうち自分は、凍夜の笑顔一つで、腹上死 勿論の言葉通りの意味ではなく、快樂による死亡という比喩

的な意味　　してしまうのではないだろうか？　と、半ば本気で考えている。

「お入り」

凍夜からの許可の言葉を聞き、一つ大きく深呼吸して意を決して失礼しますと声を掛けてから、自身と凍夜との間にある、すりガラスの戸を開けた。

先日の朝は、不意打ちでそれを見てしまったがために、今日の昼の様に失神してしまったので、今は警戒というレベルまで意志を強くした。

戸を開けた先では、一糸纏わぬ凍夜が戸口ドアの方に視線を向けていたため、視線が交差する。

久方ぶりに　先日は、視界に入った瞬間意識が途切れて、次に目を醒ましたときには、眼鏡を掛けていたので、カウントしない見る凍夜の素顔。小夜ですら、こうして直に視線を合わせるというのは、実に数カ月振りのことだ。

小夜は凍夜の素顔に見惚れることしか出来ずにいた。

顔にある各種パーツそのものは決して巧妙なつくりをした、美形顔に足りえる素材ではない。それは、凍夜を見た誰もが認めることである。

ある程度いい顔をしていれば、例え眼鏡で目が隠れているとは言え、分かるものだ。サングラス一つで、誰も認識を改めて暮れるなら、芸能人はどれ程楽なことか。

確かに各種パーツそのものが、（ある一点を除いて）人目を惹き付けるものを持っているわけではない、しかし凍夜の場合は、そのパーツのバランスが絶妙だった。

パツと見はやはり普通という域を超えない印象なのではあるが、その顔をマジマジと（つい、無意識の段階で）見る　否、見たくなり惹き付けられてしまう。そういう魅力に満ちた顔立ちだ。

各種パーツの大きさや位置といったものが、まるで計算し尽くして造られた芸術品の様で、それ故に、ただ一点でも陰りがあるだけ

で、完成した美しさを失い、無個性という平凡を強く露わしてしま
うのだった。

そして、その顔の中にあるパーツの中でただ一点。即座に他者の
意識を占領する、美しさを持つ異常が在った。昔、実の兄にあった
筈の、魔法の瞳に酷似した、凍夜の右眼の位置に収まる紫色の瞳の
眼。

それは、『凍夜』として在るために、植えつけられた証。それと
小夜の罪を咎める楔くわくであり、ある種愛の象徴言っても過言ではない
絆と呼べる代物でもあった。

「どうか、この外観からたは？ 以前まで、“使っていた物”とは比じ
やないだろ？」

小夜の視線がいつまでも顔（より正確には眼）から離れないので、
本当の目的である方へと、凍夜から話題を移した。

背中を流しに来たというのは名目で、真の目的は今日仕上がった
凍夜のカラダにある。

凍夜に促されて、漸く動き出すことが出来た小夜は、長々と開け
っぱなしになっていた浴室の戸を閉めて、凍夜の方へと数歩歩みを
寄せた。

「これが……」

凍夜の胸の下辺りに、感慨深げに手を添えた。

その位置には、この距離まで近づいて初めて見える程に薄い、ほ
ぼ横一直線に走る線があり、その線は正面から背中へと続いて、凍
夜の胸を一周している。

そして、その線は右腕の付け根の辺りにも同じ様にあつた。

「先生の話じゃ、時期にその傷も消えるし、ラバーの色も肌の色と
見分けがつかなくなるって言う話だよ」

およそ9キログラム……それが、今凍夜に残された生身の肉体の
重さだ。

右眼と右腕、そして胸部より下の部分がすべて義体サイハネティックボディにより構成さ
れているサイボーグ、それが凍夜として生きると決めた『彼』のス

ガタだった。

41・男の体（後書き）

肉体の重さは、一応計算はしてみたのですが、流石に正確なものは分かりません

細かいところは、スルーして頂けると幸いです

かなり未熟ではありますが、それでも、まだまだお付き合い頂けたら幸いです

これからも、よろしく願います

一応、今後の予定……飽くまでも予定

二章は、この日が終わったら終了して、次はちょっと幕間を挟みます
この世界の在り方について説明がメインになって、少しつまらない
かも知れません

まあ、直ぐ終わりますけど

本作の用語集を作ろうとしたのですが、初っ端からネタばれありきの状態だったので、なかなか造れていない状態なんですよね

幕間入れれば、少しは書けると思います

後は作者のやる気次第……

42・誓いの呪い

データ採取が完了し、いよいよここからが本番となる。

藤原自身が執刀するのは、かなり久しい。いつもは技術開発の方に徹しているからだ。

今までは彼抜きでもどうにかこなせる範囲であったが、流石にこの最終調整の段階ともなると藤原の力に頼わざるを得ない。

後少しと言ったものの、もしここで藤原を外すととなると、別のスタッフの技術訓練や技術・設備開発などで半年近くは遅れることになる筈なので、やはりどうあっても藤原を外すということは出来ない。

「まずは右眼右眼の義眼から入れ替えるぞ」

藤原が他のメンバーに指揮をとる。

おもちやなどと称しているが、それも以前藤原自身が手掛けた、当時の最高傑作である。現時点でも、その眼に金額を付けるならば億円は下らない代物だ。

スタッフの一人が注射を打とうとする。しかし、

「おいっ！！ 何しようとしてる」

藤原がそのスタッフを咎めた。

「はいっ？ いや、普通に麻酔ですけど……」

「必要ない。無駄だ、止める」

「しかし！！ それ

「必要ない」

藤原が鋭くいい放ち、まだ若いスタッフは気おされて身を引いた。別室でそれを見ていた神埜がそれを黙って見過ごす筈がない。

自分の前にあるガラスの壁を割れない程度の力で殴りつけた。そのとたんに、ラボ側の部屋全体に大きな衝撃おのが駆け抜ける。

大抵の者ならば、その顔を見た瞬間におの慄くであろう形相で、神埜がガラス越しに藤原を見降ろす。藤原以外のスタッフたちは、恐怖

に震える他にない。

「藤原さん、それはどういう事か説明して貰えますか？」

傍聴室からの声は本来有線回線では届かないが、そんな手間を掛けていられる様な状況ではないので、神埜は魔法で隣の部屋に直接声を響かせた。

藤原はいかにも面倒だという態度を全面に出して答える。

「お嬢さんだつて知ってるでしょう、こいつの体質からだのことは？ 麻醉をするだけ無駄ですよ。金の無駄だ」

彼の体質は知っている。あらゆる毒素というものを排除する特殊な血液。例えばどれ程の猛毒であろうと、5分もあれば浄化出来るという効能を持つ。

しかし、彼の場合、この血の力が常に効果的とは限らない。

今という場合がそれに当たる。麻醉の効果が5分と持たずに消えてしまうのだ。

確かに途方もない麻醉の量が必要となる。

「この施設に関わる全てが蒼縁の出資によって賄まかなわれています。金銭のことを貴方が気に病むことはないでしょう？」

「やれやれ、これだからお嬢様は……。その金はお嬢さん自身で稼いだものじゃあないでしょう。そうやって、あんたら裕福層が

「藤原先生」

藤原の言葉に徐々に感情がこもり始めたのを感じて、途中で言葉を遮った。

「そのままお願いします。神埜ももういい、これは、僕が選んだことだ。文句は言わせない。暫くアストラルのラインを切っておけば、激痛で苦しむこともないから、大丈夫だよ」

そんなことが何の気休めにもならないのは知っている。しかし、彼がそう言う以上、最早自分からはどうすることも出来ない神埜は、にがにがしく顔を歪めながら、席についた。

確かに苦しむことはない。だが、それはそれだけの話であって、痛みが消えるわけではない。

苦しみという感覚がなければ、どれ程の痛みを伴おうとも、ただ痛いと感じるだけだ。だが、だからなんだというのだろう、痛みを感じているのであれば、結局同じことではないか……なんの解決にも、なんの慰めにも、なんの救いもありはしないのだから。

「いつか……いつか、二人で桜を見に行かないか？ それがいづになるかは分からないし、必ず出来るという保証もないけど、どうかな？」

会話の無かった車内で、彼の方から神埜に、今までの無言の時間の気まずさなどなかったかの様に、訊いてきた。

謝罪も感謝も労いの言葉も、どれを言ったところで今の神埜に届きはしないことを、誰よりも知っている。故に、過ぎた時間かじに対することではなく、これからみらいの可能性についての話を繰り出した。

「っ……！」

神埜は息を呑んだ。

「知って……いたの、ですか………」

神埜の声は震えていた。

それはいつかの約束。彼ののではない、“彼の所為”で果されることのなかった些細な約束。

しかし、今なら分かる。彼自身がそれをどれ程望んでいなかったのかを。

「まあね……、僕が言うのもおこがましい話なのかも知れないけど、今の神埜なら僕と、そうしてくれると思うたから」

自惚れ過ぎかな？ と、おどけてみせる。

当時自分はどれ程彼を攻め立てただろう……幼いながらに、知りえる限り全ての蔑みの言葉を叩き付けた筈だ。そんな自分に対して、どうしてこの人はこれ程までに、優しくあれるのか……

そして、その優しさがあまりにも温かく、嬉しすぎて……また、

痛かった。

「貴方が……兄様がそれを望んで下さるのなら、私の心は決まっています」

「そうか。なら、いつか行けるといいね」

そう言つて、左手を縦にして差し出した。

神埜も左手を、しかし神埜は横にして差し出した。そして、お互いの薬指を絡め合い、拳を握る。

心許しあえた者同士が交わす誓いの呪い^{まじな}。その誓いを違えるときは、死を持ってしかあり得ないという、生涯を掛けたの誓い方だ。

「結婚するわけでもないのに、何かこども見たいですね」

「そうだね」

こんな誓い方をするのは、それこそ真剣な付き合いをする大人か、何事も大げさに騒ぎ立てるこどものどちらかではない。

自分たちの間柄を考えれば、兎戯の様にしか感じられずに、神埜は思わず笑つてしまった。

よく言われる台詞ではあるが、どうしても言わずにはいられなかった。

「やっと、笑つてくれたね」

そう指摘されて、神埜は俯き恥ずかしげに頬を染めていた。

彼女の笑顔は、7年前から失われたままだった。

そして、彼女の自分に向けられた笑顔というものが、実のところこれが初めてなので、喜びも一人というものだ。

神埜にもいつか、その笑顔でいることが当たり前である様なときが来ることを、誰よりも強く願った。

43・移り行くとき

実際に今の義体ボデーに換装したのは、春休みが始まって直ぐの頃だったが、（藤原が）どうせ直ぐに調整のために切り刻むのだからと、全身の人口皮膚スキンラバーを、古いタイプのを、おざなりに付けたために細部が不自然になり、他人に見せられる状態ではなかったため、そのため小夜がこの最新の義体を見るのはこれが初めてになる。

それまでは、これと同じコンセプトの試作義体を中学に上がる前から使っていた。

そして、その試作品でデータを集め、更に技術開発を進めて行き、数多くのマイナーチェンジを経て、今の完成系へと至る。

本来ならば、それ以前に別のコンセプトで開発されていた義体があり、完成体として生涯使用する予定だった物があった。しかし、その義体ではどう（滅茶苦茶に）高く設定しても、身体能力が、当時（十二歳）の魔法による最大強化時の5割強と言うレベルでしかなかった。

当初はそれも已む無しと思っていたが、丁度その時期に藤原が新しい人工筋肉の開発に成功のを切っ掛けに、計画を変更した。

まだまだ本格的な使用段階には至らない状態ではあったが、将来的な展望を見越して、思いきってフルモデルチェンジをすることになったのだ。

それ以来ついこの間までは、その試作義体を使用していたという訳だが、試作品だけあって、様々な制限や制約が付き纏っていて、最低限の私生活は兎も角として、学校生活という日常には様々な不具合が生じていた。

これでどうにか学徒として普通に生活していける状態になり、喜ばしくはあるのだが、小夜にとってはそれも手放しに喜べる状況ではなかった。

何せそれだけでなく、『万が一』の事態には、凍夜自らが前線に

立つということも可能になったということにもなるからだ。だが、当然の話として、そのことに関して小夜が乗る気になれる筈もない。もうこれ以上に、普通の生活から外れた生活はして欲しくなかった。

《IBGM:tune the rainbow/坂本真綾》

ここまでの道のりも決して楽なものではなかった。

確かに、技術スタッフたちの苦労はあつただろう、四柱とての国内外に対する裏工作とて生半可なものではありえなかった筈だ。

だが、その中で誰が最も苦勞と強いられたと言われれば、凍夜に他らないことを小夜は知っている。

小夜は誰よりも凍夜の近くで、それを目の当たりにしているからこそ、そう断言することが出来る。

凍夜は決して他者に決して『不意に』自分を見せる人間ではない。今とて、その気になれば、どれ程の重傷であろうとも、小夜ですら騙し抜くことが容易く出来る程だ。

しかし、小夜がこの家に来てからの時間、凍夜は敢えて小夜にだけは、己の辛いという胸の内を語る様にしていた。故に、正確に凍夜の辛さを知っていた。

それは、単に自身の辛さを吐露するところで、当たる様な真似をしていたわけではないし、況してや思いを吐き出すことによって、小夜に罪悪感を与えさせようとしたわけでは決してない。

逆に、ある種における特別な優越感 自分にだけは心を開いているのだという感覚 や親近感を与えようとしたわけでもなければ、同情を引こうとしたわけでもない。

そこにあるのは信頼の証明 例え辛くても、『お互い』がそれを溜め込まずに、その思いを素直に示すことの出来る間柄なのであると、自分たちは『確かな絆』で結ばれているのだと言うことを小夜に示すための証明だった。

これ程までしてくれる相手を、こうまでさせてしまった相手を、どうして愛さずにいられようか……その全てが自分のためでないことは知っているし、分かってもいる。

だが、そんなことは些細なことではしかない。自分の傍らに居るためにから始まったという、紛れもないその事実と彼の覚悟、そして彼と積み重ねて来た時間。例え、彼という存在を真に理解出来ていないとしても、彼の想いが、自分の想い抱くそれとは違っていたとしても……今までの生活に嘘偽りは存在しないのだから。

小夜は、白い長襦袢が濡れるのも厭わず、凍夜の体へと自らの体を合わせ、耳を左胸に当てて、確かな鼓動を聴いていた。

「お兄様、この体でどの程度まで、近づかれたのですか？」

「そうだね……多分、以前の全力の8割弱くらいかな？」

以前、それはまだ凍夜が今の状態になる前のこと。

元々は魔術も当然の様に使っていた。否、それどころの話ではない筈だ、と小夜は確信している。何しろ、凍夜の魔法の才は身近にいなから嫌という程に思い知らされているからだ。

今までの状態でも、魔術を使えない凍夜に、Bランクの魔法師ですら翻弄させられている。無論、自分など赤子の扱いだと言ってもいい、と小夜が感じる程に、凍夜の魔法技術は卓越　最早超越と言えるのではないだろうか　している。

もし、凍夜が最良の状態で今の歳を迎えていたのなら、どれ程の存在に成っていたのだろうか、想像もつかない。若しかしたら、本当に『魔法使い』になっていた可能性だってあっただろう。それ程の逸材であることは間違いない。

だが、今彼はここに居る。

彼にとっては、悪いことなのだろうと分かっている、自分にとっては、喜ばしいとそう思わずにはいられない。そんな自分が何より疎ましいと思う、ジレンマを抱えながらもだとしても……

「ほら、余り時間が経つと風邪を引いてしまうよ」

凍夜がそつと引き離すと小夜の長襦袢は、凍夜の体の水分を奪つて、薄つすらと濡れているのが見て取れたいた。

近代（？）の和服の着こなしとして、中に身につける下着までが和物であるというのではなく、小夜もその流れに反らずに洋物の下着を身につけている。そして、小夜の胸元では濡れた長襦袢越しから淡い水色が、完全にではないもののそれと分かる程には、透けて見えていた。

凍夜は視線で小夜にそれとなく伝える。小夜は、胸元を手で覆い、ほんのり顔を赤らめた。

「失礼いたしました……」

凍夜になら見られれも 否、寧ろ……という思いは無きにしも非ずだが、さりとて恥ずかしいものは恥ずかしい。

それに、凍夜の好む女性のタイプが如何ものかは兎も角としても、慎みのない蓮葉女はすはあんなに好感を抱くことなど、（想像すら出来ない程に）あり得ないことなので羞恥も然さる事ながら、故意こゝろではないにしろ若干の焦燥感もある。

「直ぐに出るけど、冷やさないようにな」

小夜の心情を察してのことと、凍夜としては、名目は兎も角本題は終わったのだからと、脱衣所へ送り出すつもりで言ったのだが、小夜としては名目で止めておくつもりなど毛頭なかった。

「まだ、終わってません」

頬を朱に染めながらも、そう言い張る瞳は、決して負からぬと主張する様に凜としているのに、薄つすらと潤みも帯びていた。

（これを意図的にやっているんだったら、断れるのになあ）

そうでないことを誰よりも分かっってしまうが故に、凍夜にはこの申し出を断ることが出来なかった。

「……わかった。じゃあ、本当に背中だけ、お願いね」

「はいっ！」

凍夜の許しに、満面の笑みで返す小夜。

今まで幾度となく見ているその表情は、やはり何度見ても見飽き

るということはなく。それどころか、日を追うことにその破壊力を増している気がする。

だがそれは凍夜の気のせいというわけでもない。

高校一年生、思春期真っただ中の女の子である。その成長は、凍お夜が考えているよりもずっと早熟で、つい先日までは、あどけない少女だったとしても、いつの間にやら女性へと変貌をとげているものだ。

小夜も丁度そういう時期に差し掛かっている。

例えその変化が、当人の望むと望まざるにかかわらず、確実に…
…周囲に与える影響も構うことなく。

44・女の体

小夜は言葉通りに凍夜の背中だけを洗い、潔く浴室を後にした。

その後、数分という時間しか経っていないが、凍夜がシャワーを浴び終わったので今度は小夜がお風呂にする。

小夜は湯船につかる際に、いつも入浴剤を使用する。そして、その入浴剤というのもやはりというべきか、凍夜の調合によるものである。

小夜に何らかの異変がある場合には、凍夜が使用する入浴剤を指定することもあるが、それは稀なことで、基本的には小夜のその時の気分次第で決めている。

今日は、この後に凍夜による調律が控えているということ踏まえて、血行促進効果の高いものを選択しておいた。

はつきり言って凍夜にはそんなことは関係ない、というもの分かってはいるのだが、逆にそうであるが故に、何を使っても問題ないということでもあるので、そこは気分を盛り上げるためと、敢えてそれを使うことにした。

凍夜は、自身はその体故に湯船につかるということをせずに、いつもシャワーだけで済ませているのに対して、小夜には基本的に湯船に入ってしっかり体を温める様にと指示している。

小夜はその命に従い、という意思ではないが今日もいつも通り湯船に肩まで深々とつかっている。

使っているものは人工的な入浴剤ではあるが、その効果は天然温泉の比ではない。温泉の場合、そこまで来たという、達成感などの精神作用も相まって爽快感を生み出すものだが、それすらも軽く凌駕がしてしまう。

気分が高揚することで得られるプラシーボ効果による作用ではなく、入浴剤の成分 科学的なものは勿論のこと、魔法的或いは、魔導的な作用もこの成分という意味に含む が精神面にも作用す

るため、はつきりとした効果があり、更に肉体面に置いて温泉より高い効果が得られるとなれば、最早病みつきになるのも必然だ。主立った趣味や好尚^{ウチゴコロ}などを持ち合わせない小夜ではあるが、凍夜の調合する魔効薬^{まこじやく}は、ある意味嗜好品^{しゅうひん}と言ってもいい。

だがそれは、別に特別なことなどではなく、これを知れば誰しもがそうなると小夜は確信していた。

薄い水色に染まった半透明のお湯につかりながら、今日の凍夜とのデートを反芻、またこの後のことを思い浮かべては、お風呂の熱以外の理由で頬を赤らめていた。

そして、先刻のことを思い浮かべては更にその色を濃くするものそれは長くは続かなかつた。

一度そのことに思い至ると即座に切り替えるのはかなり難しい。入浴剤の効果とて、いくら何でも入ったばかりで最大限の効果が現れるわけではない。

先ほどの嬉々とした表情とは裏腹に、今の小夜の表情に陰りが見える。

湯船の中を目的もなく彷徨わせていた手の内の一方が、自身の乳房に宛がわれた。

「お兄様……」

暫く何を考えるでも無しに呆けてから、又しても自分では意識しない内に、熱の入っていない声でそう呟いていた。

小夜はここ最近で急激に熟れていく体に、今までにない戸惑いを感じていた。

嬉しくない訳がない、などと言いつ言い回しでは卑怯だ。正直に嬉しい。そう言えるくらいのは、はつきりとした思い自体は確かにある。しかし、それと同じくらいにまたそうであるが故に、辛い思いも抱えていた。

取り分け視覚的に顕著な、今は控えめな表現で言つて小振りと呼ぶくらいだが、着実に成長していて、もうすぐサイズを一つ上げ

る必要が出てくる、その胸を見ながら戸惑いの色を濃くした。

嬉しいと思うのは『女』としての自分。

女として好きな相手に、少しでも好んで貰いたいという思いが無ければ嘘だ。

凍夜が女性の外観を気にするよな、そういつたところで人を判断する様なことはない、というのは分かっているがそれでも自身でそれ望んでしまう。

別にそれ自体を疚やましいと思ったことはない。

例え誰と比べるでもなくとも、男性を魅せるわけではなくても、自身の乳房にある程度の大きさを求めるのは女性として自然なことだと、理解しているつもりであるし、以前凍夜もそう言っていたので、それが強い後押しとして肯定しているというのもある。

女になる。そのこと自体が悩ましいというのはなんとも皮肉な話だ。

否定するのは、『妹』としての自分の中心とした、それ以外の感情。

自身が女であること自覚してくると、段々に求める思いも強くなり始めた。否、逆なのかも知れないと、小夜に思わせることもある。まるでその思いが胸の内を満たし、それでもまだ沸き上がる想いが乳房を膨らませて行くような、そんな気さえしているのだった。

思春期になって恋の一つでもしたならば、男子でなくとも大なり小なりに、性行為への興味・関心くらいはあつて当然のことだ。

俗物的な表現として、肉欲などと言う言葉があるだけに、そう称されると忌避するところだが、行為そのものに違いはなくとも、そこに想いを見出すことが出来るかどうかで、その意味は丸つきり違うものとなる。

純情の果てとして行き着くのであるならば、乙女とて心踊らぬ訳はない。そしてそれは当然のこと、と小夜自身もその思いを抱え内に秘めている。

しかし、例え自身が女としての成長を遂げたとしても、求められ

ることのない確固たる現実が切なさを積もらせる。

それ故に馬鹿げた考えだと思つものの、子どものままであつたらばと思つこともある。

熟れた自身の体を見なければ、きつと無自覚で無邪気でいられたのだからと……そんなことなどあるわけもないと、自分が一番分かつてはいても……

凍夜と離れることに比べるならば、その程度と表現することも出来る。だが、だからと言つて辛くないと言つこはない。

平気などと言えばはそれこそ嘘だ。

自身と彼との間にある、『兄妹』としての絆ちかいは、どうしようもない程に、あらゆる意味で重たかつた。

本当の兄妹であつたならば、余計な誓いなどなく、惹かれるままに想いを寄せ合えたのに……そう思つことすらある。

しかしそれは、最初から彼が兄だつたならばと望めば、死んでいたのがお兄様だつたかも知れないというものであり、死んだ兄上へのこの上ない侮辱でもあることに思い至り、以後その考えは絶対にしてはならないと自身を戒めた。

自身の願望を押し通すなら、本来は赤の他人であることが好ましいと言つのは明白なことなのに、それすらも望むことは出来ない。

何しろ小夜が愛しているのは、紛れもなく今の凍夜なのだ。

今小夜が、凍夜に特別な扱いを受けているのは、枷とも言える絆のために他ならない。ならば、それが無くなるということは、自分は凍夜の中で特別ではない一個人になつてしまう。

幾千幾万といる女性の中の一人 否、ただの人間。その程度の存在になつてしまう。

沙樹には申し訳ないとも、決してやす嫌い感情からではなくれんびん憐憫の情を抱きもしている。そして、それは小夜が知つているのは沙樹だけであるが、その他にもいるであろう、凍夜に恋心を抱く者全てに言えることだ。

何故なら凍夜は他者を特別な観点で見ることがない。そうそれは、

例えどれ程親しくても、視界に入るだけで、魅られることのない存在ということだ。

それは、この想いを抱えたままでは余りに辛すぎて、とても耐えるものではない。

故に、小夜にとつて、今の関係は揺るがすことが出来ないのだった。

しかし、『いつその想いを無くせたのなら……』そんな考えだけは未だかつて思考の片隅にも上がったことが無い。

お兄様を愛するということが、それが小夜の大前提であり、全てがその上になりたっているのです、その考えは有り得る筈もないことだった。

自分という存在を肯定した上での、悩みはこんなところだが、小夜の悩みはこの程度では尽きるものではない。

そして、今は恋愛観からなるものもよりも寧ろ、こちらの方が本題だと言える。

何しろ、それと比較すれば、これまでの自身の悩みなど、どれ程も贅沢で傲慢なことが……

パシャーンツ！！

お湯を顔にまるで叩き付けるかの勢いで浴びる。

「情けない……女になることが不安？ お兄様に受け止めて貰えないから？」

浴室の壁の一つの面に大きく張られた鏡に映る自分を、まるで憎い敵を気殺す様な形相で睨み付ける。

「本当に馬鹿馬鹿しくて浅ましい考えだこと……」

胸の前で腕を交差させて両肩を掴み、強く締め付ける。

今朝と同様に自分を八つ裂きにしてしまいたいと、本気で思う。しかし、今朝と違っていまは、悲しみからではなく、憎しみからくるものだった。

先ほどと同じように凍夜の姿を、その一つ一つの部位を思い浮かべる。

『計算し尽くされた造形美のそうな顔』

『その中に収まる正に造形の品たる眼』

『決して肉付きは良くはないが、それでも自分を受け入れるくれるには申し分ない程の胸板』

『人工的であつても、優しく包み込んでくれる右腕』

『全てを超越する魔法の左手』

『ピツタリと張り付く様にして、初めて見られる繋ぎ目』

『外からではそれと分からぬ程精巧に出来た腹筋』

『体のバランスの理想を忠実に再現した両足』

一見すると、不自然さがなさ過ぎて、それが正しいのだと受け入れてしまそうになる凍夜の体……

しかし、それ故に人間として完全に欠落していた。

凍夜は男だ。

なればこそ、あらねばならぬものがなかった。今の凍夜の体には飾りとしてすらもない。

義体であるという事実のみを知るものならば、当たり前だと思つこともあるだろう……

だがそれは、実に当たり前ではなかった。

本来凍夜が欠損したのは、外観的には右腕と両足という部位のみだ。若干腹部にもあるが、腸を少し削られただけで、処置すれば機能は十分に果たすことも出来た。

にも関わらず、現在の凍夜の体は胸部より下が全て義体化してしまっている。

人間たるもの例えその部位に異常があろうとも、出来ることから生身の部分を少しでも多く残そうと思つてもだ。

魔式生物学医療が発達した今の時代、本来なら義体などと言うものすらも使うことは滅多になく、生体複写技術クローンの応用と再生魔法

の複合治療により、肉体の損傷だけなら、即死しない限りはほぼ完治が可能になっている。ほぼと言うのは、脳への後遺症は、場合によって残ることもあるからだ。

なれば望む筈だ　生身でいたいと。

しかし、凍夜にはその治療は出来なかった。

ならばせめて、願う筈だ　出来限り生身を残したいと。

だが、それすらも構うことなく、凍夜の体は、手術により更に半分をもぎ取られた……

凍夜が四肢の無くして行く様を見ていたものたちは、嘸さそかし奇怪な現象を目にしたと感じていたに違いない。

それは、普通のことではあり得ない筈の消失の仕方だった。

その原因は、肉体ではなく霊体エーテルの方にある（日本でエーテルとはその特徴が旧時代の霊という概念に相応することから、その字をあてる）。

生命体とは、肉体せいたいと霊体、その二つが一对で初めて成立する。

霊体とは、生体の器であり、それがあからこそ肉体は、形を保つことが出来る。

凍夜の場合は、霊体を失ったことにより、肉体が保てなくなったのだ。

そうなってくると、最早再生治療は意味をなさない。そのときは元に戻すことが出来るが、霊体が欠損したままなら、また崩れてしまふからだ。

クローン医術の場合も同じで、クローニング技術で作られ生体部品は一定期間しかその姿を保てない、それは生体を作ることは出来ても、そこに霊体を宿すことが出来ないからだ。本来なら、肉体部位が欠損しても霊体は無事なので、移植することで元通りにすることが出来る。

肉体を治療する為には、霊体が万全でなければ成らないのだ。

しかし、凍夜の場合は肉体が無事なのに対して、如何かの“法”

を持ってして霊体を先に消失させられたために、物質である機械義体を余儀なくされたのだ。

ここまでは、仕方のないことだとして割り切ることも出来る。

だが、無傷であった筈の部位まで凍夜は義体へと作り替えた。

本来、生命活動を 私生活を十二分に不自由なく行っただけなら、そんなことをする必要は一切なかった。

にも関わらず、凍夜はその殆ど無傷であった肉体を、なんの惜しげもなく差し出した。

何故か？ 必要だったから

どうして？ 守るために

誰を？ 妹を

気付いたときには、両肩の肉に爪が食い込み血が流れている。

痛みを与えるためにやったことなのに、残念なことに激情の余り痛みすら感じない様だ。

魔力を込めた 魔法などにより効果を付与された状態を指す

手の力は、実のところ骨すらも砕いていた。

なのにやはり痛みは感じられない、実に残念だ……小夜は心の底からそう思った。

このまま暫くすれば、入浴剤の効果も相まって、精神が落ち着いた頃には痛みも感じる筈だと思うが、それを待っていては、流石に時間が掛かり過ぎる。

仕方ないので、傷の治療魔法を施して、あとはゆっくりお風呂につかることにする。

(あまりお兄様をお待たせしては申し訳ないわ……………)

今のことで少しは気が治まったのか、なんとかピークは過ぎ去ったが、別の嫌な気分がまた沸いて来ていた。

(ごめんなない、お兄様……自傷して、自分を好きになれなくて、でも結局そんな自分を捨てきれなくて……………そのくせ、お兄様に

愛を求めてる……)

バスタブの縁に頭の預け仰向けになった小夜の、瞼を閉じられた
その両目の端から、涙が伝ってた。

45・裁きと鮮血 吸血の少女へヴァンパイアガール

流石に荒れた状態で凍夜に会えるわけもない。申し訳ないという思いを抱きつつ、きつとお兄様にはその全てをお見通しなのだろうけど、それでもこんな自分を直接晒すよりはずつといい……

そう思い、小夜は気分が完全に立ち直るまで湯船につかっていることにし、そしてすっかり長湯をってしまった。

だが、その甲斐もあり、気分を持ち直すことが出来た。

さつきまでの考えが無くなることはない。しかし今は、悲観的なことばかりを考えているわけではない。

入浴剤の精神作用の効果が現れて、暫くの間はマイナスに感情的にならず、客観的に捉えさせ、混迷ではなくきちんと思考出来る状態にさせている。

凍夜は日頃から、良く考えるようにと言っている。

そして、彼の言うこの言葉は勉強という枠に捕らわれない。況して、それは思い悩めと言っているわけではない。

確かにときにそれが必要なこともあるかも知れない。しかし、固執した思考に捕らわれて導き出された答えは、ときに曲解となり得る。

いつも正しい答えを出せとは言わない。

更には言えば、人生には正解とされる答えなど本当の意味では存在しないのだから、とこれも彼の言葉だ。

当人に取ってすら、その時の正解が後の不正解になることも、その逆も、将又更に後で逆転することだって、あり得ないことではなく、その時になって見ないと分かりようもないことなのだ。

ならばせめて、今の自分の思い描く最善を考えて欲しい。狭い視野で捉えたものではなく、より広い視野で導き出された答えは、少なくとも前者よりは、ぶれにくく強固である筈だから。

そして、以前一度だけした話を思い出す。

『例え、それが誰の目から見ても、救いのない悲惨な状態であったとしても、当人がそれを幸福と感じるなら、それは間違いなく幸福なことなんだよ』

また逆も然り、周囲からの視点による幸福な光景が、当人にとって幸福とは限らない。

『それが良いことか悪いことか……それは“他人”には、決めつけることも、どうにかする権利もないんだ』

所詮世界とは自己の認識の元でしかあり得ないのだから。

小夜は初めてそれを聞かされてとき、凍夜が自分に対してそう言っている様に感じ、拒絶された気になって悲しくなつたのを憶えている。

『でも、もしその人を想つて、その人を哀れむなら、迷わないで手を差し伸べて』

その言葉を聞いてその思いが早合点だと知る。

つまり、世界が自己の認識というならば、それは

『そう出来たなら、そのときから君はその人の“世界の一部”なんだ』

そう、ならば

『世界の常識を覆せるかも知れない』

遠巻きで眺めやる者には出来なくても、相手を想い親身になれば、想いは届き、そしていずれは、その者の在り方をも変えることが出来るかも知れない。と、そう小夜は解釈している。

これは、凍夜に教わつたものの中でもかなり大切にしていることの一つとして、いつも胸に留めていることであり、また実際に小夜が凍夜に与えて貰つた影響でもあつた。

筈であつたのに、先刻まではこんな大事なことも頭に無かつた自分が情けなくなる。

やはり、悩んでいいことなど有りはしない……とは結論づけなかつた。今こうして、改めて思い返すことで、このことが自分にとつてどれ程大切であるかが再認識出来たのだ。それはそれで、やはり

得難いことの一つだと、受け入れる。

悩むもよし、惑うもよし。

でも、もうこの言葉は片時も忘れない様にしようと改めて堅く誓った。

例え自分がまだ許せないとしても、こんな自分でも、凍夜の世界を変えることが出来るかも知れないのだから。

脱衣所の洗面台の鏡に映る自分に向かって宣言する。

「待っていて下さい、お兄様！ 私は絶対にお兄様を解放して差し上げます」

表面上、強制的には簡単かも知れない。だが、それでは意味がない。凍夜自身がそれを望まない限り、それは解放とは言えない。

どれ程掛かるか分からない。今はまだ、何をどうすればいいのかすらも分からない。

でも、やり遂げたい。凍夜が自ら望んで、もっと自由な道を選んでくれるように。

脱衣所から出て、凍夜が準備して待っている筈の一階にある和室に、急ぎ歩を進めた。

「お兄様、小夜です。遅くなりました」

「お入り」

部屋の中へと声を掛けると、中から凍夜の声が返ってきた。しかし、小夜はその声を聴いて、身が引き締まるという感覚を超えて、若干寒気がした。

凍夜の声が、まるで機械の様に全く感情の色を含んではいなかった。

戸を開けると、左側にマットがこちらから見て縦に敷かれ、その隣、丁度入り口の正面の位置で凍夜がマットの方へと向いた姿勢で正座していた。

凍夜の格好は、いつもの部屋着でTシャツにハーフパンツという和室には不釣り合いな格好ではあるが、その姿勢は見とれる程に様になっている。

小夜が部屋に入ってその凍夜の横へと、凍夜を正面に捉える方向で正座したのを、音で判断した凍夜は、目を開けて、小夜と向き合う様に向きを変えた。

（ つ！ お兄……さま…………… ）

その瞬間、凍夜からいつもの暖かさが伝わってこず、小夜はそれだけで戦慄した。

「僕が今、どう思っているのか。それは分かるよね？」

「はい……………」

やはり、声に表情がない。今までに凍夜の怒気を感じたことがあるが、それとは違う。

丸っきりの無表情だった。

しかし、今までが余りに柔和で暖かかったため、その差だけでも身を裂かれる程に冷たさを感じる。まるで、拒絶した様な恐怖が身を包む。

小夜がこんな凍夜を見るのは初めてだが、凍夜は別段隠していたわけではない。単に、今まで見る機会が　凍夜がそうせざる得ない事態がなかったというだけだ。

「その理由も分かっている？」

「……………はい……………」

凍夜の機械の様な無機質さに、小夜はまともに凍夜を見据えることすら出来ないで、歯切れ悪く小さく返事をする。この返答をすることだけすら、最早やっという状態だった。

目の前に凍夜がいるというのに、いつもの暖かさが伝わってこない…………… たったそれだけのこと…………… ただそれだけのことにも関わらず、小夜は幼子の様に恐怖し、泣きたい衝動に駆られていた。

今はただただ怖くて、自身がだらしないと叱責することや、シャボンとすると活を入れることなど微塵も考えられなかった。

凍夜がポケットから何かを取り出し、スツと手が動く。

小夜は瞬間に、反射的に顔を正面に動かした。

「　っ！！」

視界にそれを捉えた瞬間には、理解よりも早く体が反応して、息を飲むと同時に体が硬直してしまった。

動かない様にと、凍夜が指示する。

小夜の目には、凍夜の手握られたナイフが映っている。

そのナイフが首筋に当てられ、その先端で弾力を確かめる様に、首筋の肌を軽く突いていた。

「分かってると思うけど、これは罰だよ」

「お兄様！！　辞めて下さい。もう、あんなことしません。絶対にす」

「駄目だよ」

凍夜は無情に言い放つ。

普段は小夜に対して、かなり甘い凍夜ではあるが、罪を犯したなら決して放置するようなことはせずに、然るべき処置を施す。とは言っても、それはこれが初めてだ。普段、小夜が罪を犯すことなど有りはしないのから当然である。

そして、最初だからこそ、その罪の意味をしっかりと理解させなければならぬ、それがどれ程のことなのかということ。その罪の重さをしっかりと焼き付けて、心からそれを出来ない様に縛るために。

だが、小夜に対して、肉体的苦痛は罰としてあまり意味をなさないことが多い。それこそ、それだけをもって罰するのならば、拷問という程のことをしなければならぬが、無論凍夜がそれをやる筈もないのだった。

凍夜の手が力が入り、ナイフの先端が首の皮を少し裂いた。

その瞬間、小夜が言葉にならぬ程の悲鳴を小さく上げた。

ナイフを退けると、そこからツーツと赤い線が首を伝って下に進

んでいく。

凍夜は血の出る首筋を突き出すように頭を倒して、
「飲んで」

っと、小夜に自分の首を差し出した。その声には、もうお終いだ
とでも言うように、暖かさが滲み出ていた。

小夜は勢いよく凍夜に飛び込み、その首の傷口に唇を這わせる。
先ほどの声に安堵を感じて、頬には涙がたつたっていた。

暫く無言の時間が流れる。

ヴァンパイアガール

小夜は凍夜の首筋に食らいつき、まるで吸血姫の様だ。実際のと
ころ、吸っているのではなく、単純に飲んでいるのだが、光景的に
は大差ない。

昼の膝枕といい、どうもポジションが男女逆転しているのだが、
ある種これが自分たちのスタンスなのか？ と、凍夜は場に全くそ
ぐわないことを考えていた。

凍夜は今、飛び込んできた小夜をしつかりの受け止め、体に両手
を回して抱きかかえている状態だ。いつもそうする様に、左手で小
夜の頭をあやす様に幾度も撫でる。

「ごめんね。でも、これで分かって貰えたよね？」

凍夜の服を握る小夜の手がグツと力が籠もり、無言ながらも、コ
クツと軽く頷くことで肯定を示した。

出血が止まった様で、小夜の唇が首から離れ、凍夜との体の距離
も少し空けて、お互いの顔がはつきり見えている位置で停まった。

「はい！……はいっ……ごめんなさい」

泣きじゃくって、声を出しづらい状態だったが、これだけはしつ
かり伝えなければならぬと、精一杯に答えた。

その声を聴いて、今度は凍夜の方から小夜を自分の胸へと抱き寄
せた。

罰するためとは言え、流石に小夜には辛いことだ。

何しろ、凍夜が自分の体を傷つけたのだから当然だ。

どんなことでさえ凍夜に傷ついて欲しくないのに、その理由を作

ってしまったのが他ならぬ自分だとなれば、平気でいられるわけではない。

これこそが罰だ。小夜自身の体にくら痛みを刻みつけても、ときが立てば痛みは消える。しかし、こうして刻みつけた心の痛みは、毒針の様にいつまでも痛み続ける。故に罰たり得る。

そうは思うが、だがやはりそこは凍夜だ。

刑の執行人として、いつまでも冷ややかに徹することが出来なかった。かと言えば実のところそうでもない、そうでもないが、だがやはりそうしたくはなかった、というのが本音だ。

そのために首筋にしたのだ。きちんと両手で小夜を抱き留められるように、自分の血を飲ませながらも抱きしめられるように。

46・心も体も

どれ程の事があるかと、凍夜のその温もりに抱き留められたならば、小夜がいつまでも嘆きに浸ることなどあり得はしない。

勿論、凍夜の意図はしつかり受け止めた。“つもり”ではなく、間違いなくしつかりと。

しかし、それはそれこれはこれである。小夜は今朝と同様に情けないとも思うが、最早仕方がない事として、今は諦めている。

小夜が凍夜を振り払うとこななど出来よう筈もなく、凍夜とてそれを重々に、若しかしたら当の本人以上に分かっている筈で、それでも尚こうしているということは……つまりそういうことだ。

凍夜は皆が思う程には甘い性格はしていない。例外的に小夜には甘い、それでも緩い^{ゆる}ということはない。

もし、今回の件で仮に小夜が少しでも凍夜の意図を履き違えていたならば、こうして抱き留めたりなどはしなかった。そうするのは、そうすることが出来るのは、小夜が誰よりもこの事を理解し、以後自身を戒めて行けるという確信があるからに他ならない。

凍夜が小夜を甘やかすのは、そうしても問題ないという信用から来るものだ。

小夜とて、それを分からぬ程愚かではない。その信用を裏切らぬためにも、更に自身を律しようとする務める。

このメビウスリングの様な、交差する二重螺旋の様な関係がこの二人の在り方だった。

体が冷えて終っては宜しくない。合図として、凍夜は小夜を抱き留めたまま、無言のままに部屋の明かりを絞り、仄暗い部屋へと変化させた。

小夜はそれを読み取り、自分が本来どうする筈だったかを思い出した。暗い部屋では判別出来ないが、小夜の顔は真っ赤に染まって

いた。

凍夜の顔を覗いてみれば、こちらを待っている様な顔で見下ろしていた。視線が交差して、気恥ずかしさで咄嗟に俯いてしまったが、それとは別に答えを返すために、首を縦にしつかりと振って同意を示した。

凍夜は小夜と共に立ち上がり、無言のまま『どうする？』という表情を浮かべる。

暗くて、本来なら表情を読み取るのは困難な状況だ。これがもし他人ならば分かるわけもない。しかし、相手が凍夜だけに、小夜にはその表情と意味を正確に捉えることが出来た。

小夜はそれに何かを訴えかけるような表情を返して、凍夜もまたそれを理解し、頷いては数歩さがり、後ろを向いた。

お互い無言で表情だけでの会話。内容が内容であるだけに、調律チューニングの前は大体こんな感じだ。直接口に出すことは小夜には羞恥の面から憚はばられ、凍夜はそんな小夜を慮おもって口を閉ざす。

小夜は、凍夜と詠歌の指示語だけでの会話に軽い 否、少なくとも嫉妬心を抱いている節があるが、こちらの方が誰から見ても強く結ばれた関係であるのは明白だ。所謂いわゆる、気付かぬのは本人ばかりと言っ奴である。

だが、そこは乙女心のなせる業わざというところだろう、意中の男性が自分の許容できない異性と親しくしていれば当然の反応だと言える。

凍夜の後ろから衣擦れの音と少し動く様な気配、そして少しして真後ろではなく、横から小夜の声が漸く発された。

「お待たせしました」

凍夜は声のした方向、マットを敷いてある方へと体を向ける。

その足下には、綺麗に折りたたまれた、先ほどまで小夜が着ていた長襦袢が置いてある。

マットの上に横たわる小夜の姿は、必要最低限の被服がされてい

るのみだ。白い布地以外からは、普段はあまり人目に触れることのない部分の白い肌までが露わになっている。

見られても平気、寧ろ見せる、或いはものによっては魅せるためのつくりのその布地ではあるが、それはやはり場に即した状態でこそかも知れない。

下着であるよりかは確かにマシではあるが、水着と言えども、こうして部屋の中でというのは逆に羞恥心を掻き立てる。勿論原因は、凍夜の視線が自分へのみ向けられているからというのは言うまでもない。

それに、通常外で着るものは、これほど露出の高い水着は着ない。今小夜が着ているのはビキニタイプ、同じツーピース水着であっても普段使用するタイプより格段に露出が高いこの水着は、こういう場合のみに限られる。

「先ずはちよつと診せてね」

凍夜は屈み込んで、小夜の両肩を注視する。風呂場で小夜が傷を付けた部分だ。

治療を施したとしても、小夜とてその方面には素人でしかない。

医療魔法は、本来魔法医師の資格を持っていないと行えない魔法である。それは、当然人に命を左右する行為であるが故にそう言った制度が設けられているので、出来るからと言って、平時であれば自己に対してもやっていいことではない。それが許容される、否最早義務としてやらねばならぬときはあるが、それは事故などによる緊急事態でのみだ。

体表面に出来たかすり傷を治す程度のことは茶飯事はんじではあるが、骨にまで異常がある状態ならば流石に病院での治療は必須だ。

素人が下手に手を出すと骨が異常な状態で固まったり、血管を傷つけた状態で済ませてしまう可能性もある。

小夜があ程度の傷でミスをするとは思っていないが、それでも素人であることにはかわりはない。仮に、傷の治癒のみは万全であったとしても、肌に傷が残っていないとも限らない。

小夜に限らず（肌だけに止まらず）女性に傷が出来る事態など、凍夜にとってはあつてはならぬことだ。ならば当然、万全を期すに越したことはない。

故に、自らの血を飲ませた。

『穢れた聖水』と冠された凍夜が抱える霊障の副産物の一つである、その血の効果は解毒作用だけではない。他者がそれを飲めば、肉体の有りとあらゆるを治せしめる万能薬となる。

肉体を透視出来るわけではないが、小夜の状態を感じ取るに飲む前より良くなっているのは確かだった。

「よし、いいようだね。じゃあ、いつも通り、足から始めるよ」「はい」

凍夜は先ず体を解きほぐしに掛かる。

その前に。マットの近くに用意してあつた香を焚く。そして、バリアンの香りが広がっていく。

まだ焚いたばかりだというのに、バルサム調の香りが心地よく、小夜の全身の無駄な力を弛緩させていく。

更に、香と一緒に用意してあつたオイルを持って小夜の足下へと移動して、マッサージを始めた。

《凍夜IS：水中の青空／水樹奈々》

そして、だめ押しとばかりに『歌』を口ずさみながら、小夜の全身を解きほぐしていく。

定期的にマッサージをしているだけあつて、小夜に変な凝りはなく、痛みを感じることはない。

マッサージが痛いのは往々にして、不調たる証拠である。

凝り固まった筋肉で体流が悪くなったところを、短時間で強く刺激してやれば痛いに決まっている。本来ならば時間を掛けてじっくり解してやれば、さほどの痛みを伴うこともないのだが、『時は金なり』それを生業にしている者たちには、その時間を一人に裂い

てやれる余裕はないのだった。

そして、そういった職業とは無縁なれば、凍夜が小夜のために裂く時間に惜しむことなどありはしない。

各所を丁寧に時間を掛けてじっくりと、足の裏から手の指先頭の天辺までを、二時間という時間を掛けて解きほぐした。

小夜は正に夢見心地にマッサージされ、ふわふわとした感覚に身を投じていた。

マッサージが終わったと告げられた瞬間一気に意識が覚醒しその差が余りに大きかったため、幾度か体を動かす指示も受けて応じていたので実際には寝ていなかったのだが、今まで寝ていた様に思えて凍夜に申し訳なく思った。

「お疲れ様。じゃあ、オイルを流しておいで」

凍夜が後ろから、長襦袢を羽織らせ、労いと催促の言葉を掛けた。

「お疲れはお兄様です」

とは、返さなかった。凍夜には、労いよりも感謝の言葉の方が喜ばれる、そう知っているから。

「はい。ありがとうございます。では、失礼します」

「うん、じゃあ次は僕の部屋だね」

小夜はマッサージに使ったオイルを流すために、また風呂場へと向かう。そのままでも害はない（あるう筈がない）が、ベタ付きをこのままにはしておけないからだ。

《BGM：フリースタイル／水樹奈々》

もう幾度となく同じことを繰り返しているのに、一向に慣れることのない自分は学習能力がないのではないかと疑いたくなる。

凍夜のマッサージのお陰で、体は地に足が着いているのが不思議なくらいに軽い。

その軽い足取り　というよりは、急ぎ足で脱衣所までの短い距離をそそくさと移動した。

マッサージを受けている間は全く気に掛からなかった自分の格好が、終わった瞬間には始めたときと同様に恥ずかしくなって、凍夜から逃げる様に出て来てしまった。

実際に動く体は羽根の様に軽やかな動きをするのに、動かそうとする意思是ブリキの人形の様になりがちになるという不可思議な現象に、我がことながら呆れてしまう他なかった。

入浴する際、小夜は二つの決め事がある。

一つは、湯船に入ってしっかりと体を温めること。そしてもう一つが、自己調律をするということだ。

小夜は、日々その二つの凍夜の言いつけを当然のものとして、出来る限り実践している。今日とて、あんな状態ではあったが、それは欠かすこと無く、しっかりと自己調律はやっておいた。

毎日欠かすことなく行っているが、自身で調律を施そうとも、完璧には行かない。

それは、小夜だけに限らず誰しもが同じであり、一流の魔法師であろうとも、定期的な調律師による調律が必要になる。否、一流の魔法師なればこそ、と言った方が正しいのかも知れない。

先ず、調律というものを知っている魔法師自体が、全魔法師からすれば一部にしか過ぎない、更にそれを施そうとする者となると更に少なくなるというのが、現代の実情である。

更に言えば、自己調律などと言うものに関して言えば、一般的にははつきり言って皆無だ。

その実践方法をネットで開示してはいるが、所詮開示しているだけであって、広報活動をしているわけではないので、まだまだ一般には普及していない。しかし、その効果は確実なものなので、四柱員 四柱の家柄ではなく、属している人を指す言葉 では数多くの者が実践し、その効果を実感している。

そしてその自己調律というものを編み出したのが、凍夜だ。霊体を正確に把握している凍夜だからこそ、その手法を見出すことが出来た。

普通の調律というのは、霊体内部の各霊器群　魔導器官の状態を“正常に戻す”ことで、元来その専属魔法師：調律師により施される特別な処置だ。今までは、それを自己でやろうなどと思うものもいなかった。

霊器というのは、生体で言うところの内蔵にあたる部位のこと。

霊体の内部にあるのは、生体と相応するもの他に、魔導器官（干涉器官、活性器官、魔溜器官、まりゅう概念器官など）という部位が存在し、これらの器官が魔法の“利用”を可能にした。

因みに凍夜は、この魔導器官の内の活性器官に何らかの異常が発生したために、魔力を沸ヒスかす　活性化の俗語　ことが出来なくなり、魔術が使えなくなったのだ。

魔粒子というものが、そもそも人間にとって『害毒』以外の何ものでもなかったのに対して、『進化』と表すべきなのか、現存する人類が『魔導器官』という霊障を有する魔族』が生き残った成果だという事実を言うべきなのか、どちらにしる人類という種が後天的に手に入れたこの器官によって、人類は『害毒』を『魔法』という名の才能へと昇華させた。

しかし、未だ持って魔粒子が害毒であることには変わりはない。

その害毒を我々は魔法と称して常日頃から使っているのだから、その弊害が出たとしても何ら不思議なことではない。

その弊害の最たるものが霊障ではある。そして、それ以外でも目立たぬところで異変が起きている。

それが、魔導器官の機能低下だ。

殆どの魔法師はそのことにまでは気付いていないが、魔導器官は酷使すればするほどその機能を鈍らせる。気付かぬのは殆どの場合、機能そのものの低下よりも、技・術の練度向上度の方が上回っているからだ。

故に調律というものが必要となってくる。

それこそ、丸つきり使えなくなるまでの機能不全を起こすとなると、尋常在らざる程に魔法を酷使していなければ起こりようもないことで、それが一流の魔法師以外には知られていない原因だ。

そして、低下した機能では当然いずれ向上にも陰りが見えてくというものだ。なら、元に戻してやれば、今まで以上になることは必然であり、出来るなら常に万全の状態を保てる方が良いに決まっている。

これからが一般的な調律の重要性であるが、小夜の場合はその『身』故に別の問題も抱えているために、他者よりもよりその重要性は高い。

オイルを洗い流し、今度は寝間着の浴衣姿で凍夜の元を訪れた。部屋に入ると直ぐにベッドへ横になる様に指示され、従って横たわる。

「それじゃあ、チューニング調律を始めようか。今日も眠りながらの方がいいかな？」

小夜は若干顔を赤らめ、浴衣の袖で口元を隠して、答えた。

「……はい。いつも、申し訳ありません。本来は起きている方がやり易いのでよう？」

「まあね。でも、そんなこと気にしないでいいよ。どうにしろ、ホンのちよつとの差だし。確かに、調律中の小夜の反応に興味が無いとえば嘘になるけどね。」

などと、意味深な含み笑いをしながら、軽口を返す。

すると小夜は、若干だった顔を真っ赤にして、珍しく避難する様な口調で叫んだ。

「おっ!!!お兄様~~~~!!!!!!!!!!」

振り下ろすことはないが、手も拳を握って振り上げている。

「ごめん、ごめん。冗談だよ。大丈夫、ちゃんと眠らせるから」

片手で小夜の振り上げた拳の手首を掴み、もう片方の手で頭を抑えてもう一度ベッドへ戻した。

「本当ですよ？ 絶対ですよ？ でなければ、私もうお兄様に顔向け出来ませんっ！！」

これまた珍しく小夜が執拗に迫る。

「本当に！！ 大丈夫だよ。信用して、ねっ？」

「はい、私には“もう”お兄様を信用していないときなどありません」

「よし、じゃあ目を瞑ってね。始めるよ」

小夜に額に左手でを乗せる。

小夜に意識を合わせて霊体なまがを探っていく。

「それじゃ、暫くお休み」

同時に小夜の内うちで魔法が発動し、小夜が眠りに落ちた。

以前沙樹にもやってのけた芸当エキテイマイユ『無慈悲なる悪魔の囁き』略して：
エクテマ。

相手の魔導器官マジック・リストラクションを掌握しゅあして、意のままに繰る、凍夜の魔法再構成マジック・リストラクションに並ぶ、凍夜の究極技の一つ。

相手の魔法を支配する『波導調はどうちやう』の延長線上に当たる技であるが、勿論その難易度の差は段違いである。

凍夜は小夜の魔導器官に意識を集中し、調律を開始する。

先ずは、小夜の霊体内なかにある魔粒子マジクスを“空”にする。実は、この最初の作業である魔力の抜き取りが、本来最も厄介な作業だったりする。

以前模擬戦の際に、大輔が魔力切れを起こしたが、実際のところ体内の魔力が本当に空っぽになったかと言つとそういうわけではないのだ。

いくら使い切ったと思つていても、本能的に最後の最後万が一の備えのためにも、ある程度の魔力は無意識に使えない状態になつて

いる。

それを使い切る様な状況となると、それは命に関わる様な危機的事態か、薬・強力な暗示・特殊訓練などによりリミッターを外された者たちなど、通常とはかけ離れた事ではあり得ない。

通常の調律の際も、薬と暗示を利用して行う。そのため、この調律という作業は、多大な危険が伴う。

魔力を削がれた状態の襲撃や調律師の裏切りによって、簡単にその命を落としかねないのだ。魔法師と調律師の関係は腕もさることながら、何より“信用”という面に置いて重視される。

故に、調律師の選択は魔法師にとって一生のパートナーを決める程に重要な要素となってくる。

その存在も広く知られていないために、その総数も僅かで、一人前に調律が出来る様になるまでに、20年と言われる程にその道は険しい。そのため、一流の調律師と称される者たちは、超高額の報酬と多大なる権利を有しているのだった。

そして、その一流の調律師なる者たちにしても、調律に掛ける時間は早くても半日（十時間以上）は掛かる。それも、機械で受律者調律を受ける者の状態を把握しながら、様々な薬を投与しなければならいので、その苦痛も生半可なものではない。

長時間の無防備状態と苦痛、普通の調律には切り離す事の出来ない、やむを得ない副産物だ。

だが、凍夜の調律はそれらの調律とは丸つきり違う。エクテマを自在に施行する凍夜だからこそなし得る独自の調律方法だ。

この方法ならば、覚醒状態であれば、霊波動を掴むには多少の時間が掛かるが、調律自体は魔法が発動するが如く一瞬で終わらせることが出来る。眠っている状態でも、十分程度あれば終わらせられるというのだから驚異的だ。

そして何より、小夜にとって凍夜以上に信用の置ける相手はいないのだから、正にこれ以上ないベストの状態だった。

覚醒状態ならば一瞬で済ませられることをどうして、小夜がわざわざ凍夜に手間を取らせてまで睡眠状態で行わせたのか？ それは、苦痛を伴わない代わりに、逆にある副産物が発生するためだった。魔力を空にする、このことは霊体的にも精神的にも実に良いことだ。

何しろ、魔導器官は所詮、害悪を利用するために手に入れた苦肉の策でしかない。その害悪が体から取り除かれて、悪いことなであらう筈もない。

そして、その際は今まで感じていた（実際に意識的に感じるようなものではない）ストレスから解放されることにより、一瞬にして快樂とも呼べる程の開放感に満たさせる。

その快樂は、性的興奮にも通じる。

故に小夜は眠っている状態での調律を希望する。どうまかり間違っても、あられもない姿を凍夜にさらせる訳がないのだから。

戦時下で命からがらの死闘を経験した兵士の中には、そこに快樂を見出す者がいると言う。肉体的疲労そしてそれに伴う精神の抑圧、それとま真逆の霊体的解放とそこから来る精神の解放という二つの極限状態が相まって、普段では感じ得ない絶頂に達するというのだ。普通の調律の様に、薬漬けの場合には苦痛が先行して、開放感も何もあつたものではないが、凍夜の調律ならば確実にもたらしてくれる。

この場合、小夜にとっての善し悪しは別にして……

実は、この調律こそが詠歌の言っていたアレ（2）の正体である。内容を鑑みるに、確かに女性があのように言うには、好ましいものではないので、こう言ったことを平気で言っただけの詠歌に対して、凍夜はある種の不安を抱えていた。

小夜が目覚めると、時計のは十分強進んでいた。

「気分はどうだい？」

凍夜が微笑みかける。

「とても良い気分です」

「そっか、なら良かった」

「お兄様はお疲れではありませんか？」

「大丈夫だよ。それに今日はこの後、僕にとっても『お楽しみ』が待っているからね（笑）」

「うっ！！」

またも凍夜が小夜をからかう様に笑う。そして小夜は、今度は顔を真っ赤にして完全に絶句してしまった。

今日の調律はこれだけでは終わらない。

通常ならこれで終わりだが、今日はフルでやることになっている。故に、後一工程残っていた。

チューンアップ強化調律、最早調律とは名ばかりの全く別ものの行いだ。

強化の意味の通りに、能力を強化する特殊な処置で、本来ならばこれもきちんとした専門家の指導の下に行わなければ成らないことである。が、何を隠そうその専門家が凍夜であるので何ら問題なかったりする。

凍夜はベッドに入り込み小夜の横に並んだ。

小夜は寝そべったままで、凍夜を見上げ、凍夜は上半身だけを起こした状態で身を乗り出す様に、小夜の上を覆っている。

凍夜の左手と小夜の右手はしっかりと握られていた。

そして、徐々に凍夜の顔が下に降りてくる。

これもまるで昼のデジャブの様だと思いつながら、またしても凍夜の唇に視線を注いでいた。だが、今度の行く先は分かっている。

ある程度凍夜の顔が近づくと、小夜は自然と目を閉じた。

すると自身の心音がありありと感じられる。脈打つ回数はいつも通りだが、一回一回の鼓動の強さは生半可ではない。

本当に破裂してしまうと思える程に強く、荒々しくしかし規則正しく打ち鳴らされる。

そして、凍夜の唇が触れる。

今度は一瞬ではない。

現実の時間はそれ程経つたのだろうか……一瞬ではないが、それでも数秒、だが小夜にはその数十倍の時間を感じられた。

自身の顔の中で熱も持っている場所に意識を集中させる。その唇に。

ただ触れ合うだけの兎戯にも等しいキス……愛を求める故の行為ではなく、必要であるからというだけでの行為。

だが、それでも想いが込み上げてくる。たったそれだけでも、愛しい人と繋がっているという確かな感覚が……そして、それ以上に強く触れ合う魂の感触が……

だが、その時間も終わりを告げる。

凍夜の唇がスツと離れた。

凍夜はそのまま横になると、少し強引に小夜の体を引き寄せてその腕かひなに抱く。

「今日は、もう寝よう?」

「はい……」

凍夜の腕に抱かれ、その胸に額をあずけ小夜はすんなりと眠りに落ちた。

「おやすみ」

規則正しい吐息が聞こえてくるまで、少し待ってから、額にキスしてまた元の様に抱きしめた。

まるで大切な宝ものを守るかの様に。

《BGM: Close To Your Heart / 愛内里菜》

47・二人の異端1

昼間であつても仄暗い路地を、背に袱紗に包まれた棒状のものを携えて、一人トボトボと歩みを進める。

流石の魔法大国女王の庭クイーンガーデンとは云え、端の郊外地域ともなるとその女王様の御威光も届かぬと見えて、この街も荒れ放題だつた。

今、日の光をまともに浴びることの出来ない様な者たちが跋扈はっこするこの街を支配するのは、女王ではなく大罪人まわつだ。

数年前は、それこそ血と腐敗臭の漂う死の街だつたが、ある者が住み着いたことにより、その装いは一変する。

政府の目の届かぬところには咎人が集う。力を持たぬただの貧困層の民に抗う術などあるはずもなく、理不尽にただ一方的に支配され続け、咎人たちには、咎人同士ですら共存の意味はなく、その抗争は悪戯に血を流させていた。

人々に心休まる時はない。しかし、他にどこに行くことも出来ない。故に、自分に被害が来ないことを祈り、ただ怯えることしか出来なかつた。

だが、そんなときにこの街を　この無法地帯を根城にしようと、一人の少年がやって来た。

当時はまだ幼い子どもであつたが、その力は絶対だつた。この街にその少年が来て僅か数ヶ月、その間にこの無法の街は少年を頂点とした社会が形成され、まるで宗教の教祖や神の如く敬われることとなつた。

少年にしてみれば、ただ住みやすい環境にするために害虫駆除をしたに過ぎないのだが、今まで一方的に搾取さくしゅされる側であつた者たちからすれば、正に聖人の到来だと思わせた。

今まで強者は何かを強いるばかりだつたが、少年は何も望まなかつた。少年には、ただ日々飢えない程度の食事と静かに過ごせる場所、それさえあれば良かったからだ。

はつきり言つて自分の邪魔さえしなければ、他者はどうでも良かった。

しかし、この街は少年が住むには賑やか過ぎた。ただそれだけのことで、この街を好き勝手に搾取していた咎人たちは少年によって簡単に駆逐されたのだ。

それ以降この街は少年を中心に据えた街として、作り替えられた。勿論、少年の意思など丸つきり関与していない状態だ。

だが、そのお陰で不自由なく過ごせているので特に気に留めることもないのだった。

少年の存在そのものが法という様な街になつたが、世間から見れば無法地帯に変わりなく、今も尚咎人がこの街を訪れるが、問題（少年の気に障ること）を起こすものはいない。

この体勢の発足当時、何も知らぬ咎人よそものが事を起こすことがあつたが、自身の根城で騒がれるのを嫌つた少年はその悉くをねじ伏せてきた結果だ。

正に、触らぬ神に祟りなし。少年に不快感さえ与えなければいいのだから。

本来、政府からは狙われる側である咎人もこの街では誰も気に留めない。大人しくしていれば、安心してくらしていける、人目を気にせず暮らしていけるとあつて、彼らも穏やかに暮らしている。そうして、いつしかこの街はまた凶悪犯罪者たちの溜まり場となつていったが、それでも以前の様に市民が被害に遭うことはなくなつた。その元凶たる少年は、今や青年と呼ばれる程に成つた。その間も当然のことながら、彼の支配力が衰えることはなく、街は丸で高級地区と同等レベルの治安の高さを誇つていた。

彼は遅い足取りで漸く自宅に辿り着いた。

そのままソファーに寝転ぶと、まるでタイミングを計つていたかの如く携帯が鳴る。

『もしもし』

秘話モードのため画面は出てこない。

そして、自身の発言は思考で伝えるため、発声もしない。

『今時間いいからしら？』

『ああ』

相手の発言は、ピアス型の携帯から骨伝導で受けている。

最近の携帯は様々な形状があり、その機能面に置いて形状を生かした物がある。

その代表格が、彼のしているピアス型だ。

何と言っても、通話を秘話で行えるだけでなく、その事すら外部には知られずに済む。正に、秘匿に特化して言えるタイプのものだ。その分、アプリケーションの機能が劣るが、それも周辺機器を使えばカバー出来るので、全く気になることはない。

普通の携帯でも秘話モードの会話は出来るが、顔に手を当てる必要があるので、会話しているのは丸分かりになるのだった。

『コウモリから、気になる報告受けたから、専門家に意見を聞きたくてね』

『アンタが気になる程のことか……詳しく頼む』

彼が属する 正式には、属するというよりは協力しているだけだが 組織は、真正正銘の精鋭部隊だ。組する一人一人のレベルが一国を左右する程に。

その一員たる彼女がこちらに訊いてくるというのは、かなり興味をそそられる。

彼女から訊かされたのは、T1の模擬戦闘の話だった。

T1が施行した幾つかの不可解な技ちから、それが何なのかというものだった。

『波導調ミステリオンと魔粒結晶は問題ないな？』

ヒューガは、リユードから話を聞くと思索する時間もなく語り始める。

『ええ』

『最初の動きがどうこうつてのは、恐らく違うな。問題は視覚的……いや、知覚的・感覚的な問題の筈だ。

いくつか心当たりはあるけど、それだけじゃ特定は出来ないな。それに、どうにしろそっちはフアナの専門だな。若しかしたら彼女なら、それだけで特定出来るかも知れない。

で、最後の奴だが、正直信じられないな……アンタを疑う気はないが、コウモリが間違ってるってことはあるだろう？』

『可能性がないとは言い切れない。

でも、あのコウモリは優秀よ？ 先ず、間違いないと言っていいわ』

流石の彼も暫しの沈黙を余儀なくされた。

『分らないわけじゃない。だが、これが実際に可能な奴がいるとは思えない。っという、レベルの話なら出来る』

『聞かせて』

数分の思考の末に、考えるのも馬鹿馬鹿しい程の仮定を見出した。魔法師として、常識がある者なら先ず持って否定するところだが、ヒューガ自身が比類なき魔法理論の専門家であるために、それ以外の可能性がないこともよく分かっている。

『知つての通り、魔法の発動 否、正確には魔術だな。魔術の発動には、“活性波”と“発動波”という魔導波が必ず発生する。

そして、作り出された魔法はその内の活性波と同じ信号を帯びることになり、魔法の操作とは、この活性時に付与された波長によって行われる。

つまり、その活性波に波長を合わせることが出来れば、例え他者の発動した魔法であろうとその操作が可能になる。その魔導波の波長を同調させる技術が、波導調というわけだ』

波導調、最初にその認識についての確認は済んでいる筈だが、ヒューガは改めてその説明をする。

『これくらいのは、ある程度の魔法師なら誰でも知ってる。そして、それが“大して役に立たない”ということもな』

そう、これは魔法師としての一般常識だ。

大輔らはまだ正式な魔法師ではないので、知らないのも無理はないが、彼らがその道を進むなら必ずそのことを知る。

『アストラリス
概念付与の影響ね』

その理由にリユーダが答える。

『その通り。活性波は通常なら霊波動と同じ波長になるが、活性時に概念付与すれば幾らでも変えられる。』

霊波動は脳波と同じで個々人固有のもので、変更のしようもないが、活性波は訓練次第でどうとでもなるから、実践レベルで霊波動と同じ波長で活性化する者はいない。単一で発動すれば、捕まれちまうからな。

だから、本来波導調による魔法誘導は実践じゃ使えない。

だから、今回のケースはかなり特殊な例を大前提と考える必要があると思う』

『前提？』

『ああ。今回の対戦相手はまだまだヒヨツ子だ。まだ魔導波のことなんて、発動時に感じる波動という認識しかしていない筈だ。そのなヒヨツ子なら、当然活性波は、通常のままの筈だ。掴むことはそう難しいことじゃない。』

だが、T1のやったことを考えると、そんな程度の相手をする為だけに、考えられた技だとは思えない』

『どういうこと？』

リユーダが疑問を素直に口にする。

『T1は恐らく、即座に波導調をアジャストできる』

これが、第二の仮定。

本来、波導調が役に立たないと云われるのは、その波長が幾らでも変更出来るからだだが、それは合わせる側が合わせられないという前提の話だ。

もし、それが変更した魔導波に即座に対応出来るのなら、驚異以外の何ものでもない。

『勿論これは仮定の話だ。だが、恐らく間違っていないとも思ってる。その根拠は、奴がやった最後の技のそのものの存在意義に起因する。奴の行った魔法を作り変えるという技、それについてアンタなら何かしら推測は立つか?』

リユーダへと意見を求める。これは、リユーダ個人というよりは、彼女クラスの魔法士としての意見を求めたということだ。

『はっきり言って丸つきり分らないわね』

ヒューガはそれが答えだと返した。

『どうということ?』

流石に意味が分からない。分からないことが答えとは……

『そう、君らクラスでもその糸口すら理解出来ない高度な技術だっ
てことだよ。その技は』

そして、リユーダは理解する。彼の言っていた仮定の確信の理由を。

『それ程高度な技術を、わざわざ使い道のないのに習得するわけがない!?!』

『そういうことだ。』

それに奴は、たった数手で対戦相手の魔導波を掴んだ様だからな。俺でも、単純な魔導波だろうと掴むだけで、数分の時間がかかる。

となると、波導調のアジャストは間違いないと思っ
ていい』

リユーダは流石だと感心する他ない。実際に見たわけでもないのに、又聞きの話だけでここまでのが分かるとは……

意見を聞こうと連絡したのはこちらだが、まさか収穫があるとは思って
いなかった。然も、これ程早くに、これだけのものをだ。

だが、それすらもまだ終わってはいなかった。

『だが、そんな奴にとっては、朝飯前なんだろうな。恐らく、
技そのものに比べたら、大したことのない練度だろうぜ』

リユーダは息を飲む、この言い振りからするに間違いないだろう。
彼は分かったのだ。T1の行った技の理論を……

『分かったのっ!?!?』

つい意気込んで訊いてしまった。だが、それも無理からぬことだ。ただの“囿”だと思っていたT1が、よもやあのような技を使うとは予想外だった。

となれば、T1も完全に対象外ではなくなる。

そればかりか、魔法を作り変えるなど自在にやられたのならどれ程の驚異か。計り知れない。

故に、少しでも情報を集めようとして、ヒューガにまで連絡したのだ。

そのヒューガから答えにまで辿りついたのだ。これを僥倖と言わずして何と言おうか。

『ああ。とは言ってもこれも仮定の話だがな……』

それにこれに比べたら、正直さっきの仮定の話なんてのは、丸つきり見戲見たいなもんだ。だが、俺はこっちの方が真っ先に浮かんだよ。

そしたら、その更に課程として、さっきの仮定が必要になったつてところだ。

“あいつの代わり”をやるうって奴だ。ただの道化だとは思ってなかったが、こいつは道化どころか、神の領域を超えて、最早既知ちぎ外がいだな』

ヒューガを持ってしてここまで言わせしめる程のこととは一体なんだろうか？ と、一魔法士として興味が興奮を生む。

『それで、一体どういう理屈なの？』

『理屈そのものは単純だ。リューダ、魔術を使うときはどんな手順だ？』

基本は、魔粒子の活性化、魔法陣の構想・記述、発動となる。

『なら、その魔法陣の構想・記述それは一体どういう作業だ？』

リューダはその質問に答えることが出来なかった。

魔術を自在に繰る、その中でも世界的にトップクラスの人間がある。

そついう風に言葉としては認識しているが、実際のところそんな

感覚は一切ない。単に、施行する魔法を思い描くだけで、魔法はその通りに発動するのだ。

魔法を施行する際は魔法陣を構成する。それは、基本中の基本であるが、実際のところそれがどういうことか理解出来ているものはほぼ皆無とっていい状態だった。

『魔法陣は存在する。しかし、それを目にした者は殆どいない。』

それは、魔法が余りにも、“自在に過ぎる”というところに起因している』

“自在に過ぎる”とは一体どういうことなのか？ リューダは、このヒューガの言葉に更に困惑した。

47・二人の異端1（後書き）

この二人の異端（次の話）で二章は完結と成ります
その後は、若干幕間を入れる予定です

物語を読み返し、驚くほどに誤字脱字が多く自分で自分の馬鹿さ加減にゲンナリします……
もし、誤字脱字が有りましたら、連絡して頂けると幸いです

48・二人の異端2（前書き）

今回は、とあるアニメのキャラソンを使いますが、キャラ名は無視して、歌ってる声優さんの名義にしてあります

48・二人の異端2

『じゃあ、先ず魔法陣の説明からだ。知つての通り、魔術を出すための回路だ。』

だから、マジックサーキット魔術回路なんて呼ばれ方もするわけだが、魔法陣も電気回路と同様の仕組みだと言っている。そこに描かれる記述式に活性ビクス魔粒子が流れることにより、魔法という現象を作り出す』

ここまでは、極一般的な事で、リユードでも知っている。

『その魔法陣だが、これは想像により構想されて、ミストラル魔粒子結合体によって概念器官に記述される。』

構想とは言わば画像イメージ、記述はそれを実際に書き込む作業のことだ』

そう魔法陣は概念器官内に構築される。更に、ミストラルは不可視の非物質。ひびくしつ

通常では、その姿を見ることがすら出来ない代物だ。

『ところで、アンタは相手と丸つきり同じ魔法を使えるか？』

『貴方の様な特異魔法でもなければ、ある程度は可能ね』

急激は話題の変化だが、リユードは冷静にヒューガの話聞いてる。

ヒューガは、一見飛び飛びに話を持ち出すが、最後にはそれらを纏めた話し方をするのだった。

『そうか。だが、何故同じ魔法が使えるんだろうな？』

まただ、また意味が分からない。さっきの解答をまだ貰っていないので、謎は深まるばかりだった。

何故か？ 同じものを想像しているのだから、当然なのでは？

普通はそう思う。だが、ヒューガが敢えて問うているのだ。なら、きっとそうではないということだろう。

ヒューガは基本的に説明の際でも、相手との意思疎通を図るタイプだ。

それは、自身の認識と他人との認識に食い違いがないことへの確認のためであり、相手の説明をただ聞いているだけよりも、その間でも自分なりの考察をした方が、より理解を深められるということを考えてのことだ。

だが、説明を受ける側にとって状況によっては勿体振っている様にも感じてしまう。

『何故か？ それは、さっき言った魔法陣の構想の方法による。』

想像と言ったが、実はそれだけじゃない。一応、訊いて置くが、ならアンタは魔法陣を知らないのに、どうやって魔法陣を作ってるんだ？』

リユーダは答えない。ヒューガもそこで答えるとは思っていない。『使用する魔法の想像は脳です。そして、想像されたイメージは、概念器官を介して、法則をもった式に変換「コンバート」される。そして、その法則をもつて変換された式が魔法陣ということだ。』

だが、単なる想像を魔法陣に変換するってのは、ダレがやっていると思う？』

殆どの魔法士が魔法陣の構成式を知らない、法則を知らない、しかし魔法陣は存在し実際に魔術は使われている。

『俺たちの脳てのは、得てして良くできたもんだ。いや、若しかしたら、この世界そのものの仕組みがそもそも元からそうだったのかも知れないな。』

単なる想像を法則をなぞらえて変換しているものの正体、それは『アカシツクレコード』だ』

アカシツクレコード、世界録・概念世界など言い様はいくらでもある。ある種において、神とすら表現出来るその存在は、正しく“全ての根源”。

『俺たちの脳つてのは、アカシツクレコードと繋がっている。俺たちの魔法のイメージは、アカシツクレコードを介するところで、特定の法則をもつた魔法陣へと変換される。だから、同じ魔法が使える。本来、脳そのものは個人独特のものだ。個人の思考・価値観が絶

対的に統一出来ない限り、“同じ”ものを想像しても、誤差が生じる。だから、丸つきり同じ想像というのは、不可能になる。

だが、アカシックレコードを介すると、“相手と同じもの”という部分で補正が掛かって、近似から同一の結果へと変更される。そして、それをコンバーターを通すことで、“同じ結果”の魔法陣を各々に構成することが出来るという訳だ』

そして、ここに来て漸く『自在に過ぎる』ということに繋がっていく。

『だが、“同じ結果を生む式が同じ式とは限らない”』

一瞬理解出来なかった。だが、数学の式を思い浮かべれば単純な話だ。

例えば1という答えになるような式は、一体どれだけあるだろう？

$0 + 1$ は1になる、 $2 - 1$ でも $0 \cdot 5 + 0 \cdot 5$ でも答えは1……

『流石がだ気付いたみたいだな。そう、そこに行き着くための式は無限に存在するんだよ。そして、それらは個々人の嗜好や好尚によって決まり、アカシックレコードはそれらを最適化した状態で変換する。』

数式のように、 $1 \times 1 = 1$ 、 $0 + 1 = 1$ という単純な話じゃないからな。この様式に偏り易いつてのはあっても、特定の式が被るということは先ず無いってことだ。

ここで話を戻す。奴の技は最初に言った、魔導調によつての操作・分解、魔法を一端ラピスへ戻す。それと同時に、ミストラルで魔法陣を手動で構築して、その魔法陣にそのラピスを注ぐ。と言った手順だ。

どうだ、理屈は簡単だろう？』

ここに来て、その技 否、この技を使う者の真の驚異に気がついた。

『ご明察。奴は、魔法陣を理解してる。でなければ、成り立たない。普通に魔術を施行するだけなら、魔法陣は勝手に形成される。だが、その技をやるうとすれば、ミストラルを使って、自身で描く必

要がある。ということ、奴が魔法陣が如何ものかを理解していないと、これはなり立たない。そして、それはただ一つの魔法を発動するのに幾万と存在する。式の式素しきもとと法則を理解したってことだ』
勿論、これは仮定の話でしかない。

何しる数学で言えば、加減乗除などの様々な記号や数式。だが、それらは人が勝手に作り意味を持たせたものに過ぎない。

しかし、魔法式は違う。それらは全て、アカシせかいックレコードが決めたこと。それを、通常は目視も叶わぬ筈のそれを、一体どれ程の式素があるかも分からぬそれを、彼はやってのけたことになるのだ。確かにその一部は知られている。しかし、その全貌となるとまだまだ研究段階で、とてもではないが実用レベルどころか、実験の域にも至っていないというのが現状なのだ。

現在の魔法界でも、魔法陣の視認は特殊な環境下に限られるというのだから、これ以上早足での研究も現段階では出来ないでいる。

それを、模擬戦とは云え実践してきたというのは、彼はその研究を終えたということに他ならない。

一体どれ程の時間を費やしたことだろうか、想像を絶する。

本来なら、あり得ないと切って捨てるどころだ。

事実やってのけたのは認めるが、それ以外には出来ぬ筈だ決めつけるか。或いは、全てを理解したのではなく、単純に自身の魔法陣を作り出しただけだとするのが普通の考えだ。

しかし、ヒューガはそうは考えない。そして、リユードもそれを過大評価だとはしない。

『俺も用途は違うがその手の研究をしてるからな、その関連でフアナに聞いた限りじゃ、法列式と魔列式は別物だって言った。

よもや、フアナみたいな能力者じゃあないとは思うが、奴もなんらかの特異な、それも異端の力を持っていると見た方がいいな』

そんな甘い考えなど一切考えない。

どれ程小さく少ない可能性だろうとも、絶対というものでなければ、それは有り得ることであり、可能だということ。

彼らは、そのことを絶対に軽んじたりはしない。

更に、幾ばかりかの話を終えて通話が切られた。

実際のところは分からない。否、はっきり言って不可能だと思っ
のが当たり前だ。

そんな内容のことだったが、彼らはそんな馬鹿げた可能性だけで
もこうして真剣に話し合わなければならぬ。

それは、彼らがたった数名で一国という規模の敵と渡り合うため
というだけに止まらない。

そう、彼らにはある。どれ程馬鹿げたようであっても、ないつと
笑って斬り捨てるよこの出来ない、確固たる理由が……

《ヒューガBGM：MIZU・KAGAMI／関智一》

それは罪の名……他の誰でもない。自分が背負う罪。

『カナタ』

誰かがそう呼んだ気がして目が醒めた。そのことにより、自分が
寝ていたのだと気付く。

リユータとの話の後、そのまま微睡みに落ちたらしい。どれ程か
と時計をみれば、一時間も経ってはいなかったが、その短い眠りの
中で、夢を見た。

内容までは憶えていない。しかし、夢を見たという事実だけは確
信出来る。

内容そのものは臍氣おぼろけにすらも憶えてはいない。だが、幸福な夢だ
った……そんな気がする……

それ故に、今は頗るすこぶ気分が悪い。

夢の中では幸福だった。しかしそれで、現実の自分が幸福になっ
たかと云えば違う。

自分が幸福だと感じる　感じていたときは、幼き頃より他にない。

だが、その幸福が今も同じかと云えばそうでもない……
全てが元通りなら、或いはそうであつたかも知れない。しかし、
そうではない。

もう彼女はいない。そして、彼もいない。

何より、彼は自分の手で殺めた。

親友だつた。心より信頼し、尊敬し、友として愛していた。

その彼を自分の手で殺めた。その事實はヒューガの中でいつまでも消えることなく、癒えることなく、いつまでも深い傷として、報いとして、断罪の業火が燃え盛っている。

以前、彼の偽物を許さないと云う意味を込めて言つたあの言葉、その言葉に嘘は無かつた。

彼の死は、自分が犯した罪であり事實である、そう自負している。それ故に、例えどんな理由であろうとも、その友を下らない工作のために利用されるのは、不快を通り越して憤慨に値する。

どれ程傲慢な考えか、分かつてはいる。だが、所詮人間は感情の生き物だ。

己の内から自然と沸き上がる感情という泉の、その種類まではどうあつても制御出来るものでない。

例え、傲慢だとしても、本来その権利がないとしても、ヒューガの友も想う心は嘘偽りなく本物だつた。

《ヒューガBGM：All I need is love / 酒井
ミキオ》

近しい家柄に生まれ、幼少の頃から共に励んだ。

いつもいつも彼の方が優秀で、何をやっても敵うものなどなかつた。

若輩ながらに最強などと謳われたこともあつたが、彼に勝つたこ

とのなかった自分には、全く意識することもなかった。

彼に対して対抗意識というものも全くなかったし、同い年であった彼に、教えを請うことになんの恥もなかった。

ただ純粹に憧れていた。

それ程に魅力と実力に充ち満ちている人物だった。

しかし、彼はもういない……自分が殺してしまったのだから……

彼の實力は当時ですら恐らく今の“自分たち”を凌駕する。それ程の逸材だった。

故にヒューガたちは細心の注意を払う。

当初こそ、ここまでの警戒など必要だとも思っても見なかったが、やはり『彼』の代行品。彼と偽るだけの實力は伴っている。

実際のところはまだ未知数だが、そう思って警戒する。でなければ、足下も救われかねないからだ。

ヒューガは一枚の写真を眺め始めた。そこに、映るのは少年・少女、2・2の写真。

彼を思い浮かべている内に、この写真を見ずにはいられなかった。

中央に映るのは、周りの子どもたちより少し年の離れた少女……

以前は、ずっと離れた存在だと思っていたが、いつの間にか彼女よりも歳を取った自分というものに感慨深いものがある。

その少女の（写真を見て）右下のあたりに、この少女を逆巻きにしたらこの子だとうと思わせる程に良く似ている小さな女の娘。

そして、左側には肩を組み合っじぶんたちて映る少年二人組。

少年たちにはそれぞれに特徴があった。

片方の少年の左眼には『アレキサンダーライト金緑石の瞳』が輝き、もう一人の少年の右眼には、鮮やかな紫色が讃えられていた。

48・二人の異端2（後書き）

この作品、ある変化を元に四つの構成になっています

表・表、表・裏、*、?の四つです（敢えて、伏せてます）

現在ストーリーは、表・表の状態で、表・裏を少しずつ動かしつつ、
*をちよつただけほのめかしている感じですよ

49・黒歴史／乙女の集い

現在、魔法という存在は人々に『才能』という形で認知されている。

しかし、それは一部地域に限る話あり、それ以外のその一部地域に住まう者たちよりも遙かに大多数の人間にとって、魔法とは否、『魔粒子』とは災いという認識が強い。

何故ならば、その一部地域以外の世界は魔粒子という存在に蝕まれているからだ。

魔粒子、それはエネルギーそのものであり、世界に変革をもたらすことの出来る、概念世界の自由変数因子。

その方向性を定めてやれば事象を引き起こす、アカシックレコードより生み出された『この世界』^{オーベ・レセル}の概念^{ことわり}序列をも変革できる、力の根源。

だが、それを完全に御するには、人類という種にはまだその体が追いついてはいなかった。

魔粒子遭遇危機より、数千年が過ぎた今でも、まだ人類という種は、人間という域を超えてないなかった。

西暦2300年、人類は滅亡した。原因は、世界的に同時多発した未知の病『悪魔病』。

その銘々と呼んで時の如く、人々を悪魔にするところに由来する。比喩的な表現ではない。実際に、人間という貌が失われ、『悪魔』そう表現されてもおかしくない姿となる。

発生初期に置いては、そのおぞましい姿に耐えかねて自殺する者があり、逆に人外^{じんがい}と迫害し死^{おと}へ貶める者もいた。

だが、次第に後者は数を減らしていった。

理解を示したからではない。責め立てていた自分達自身がそうな
ったためだ。

健康不健康、老若男女、何をも問わずに人々は次々と変質してい
った。

しかし、それはただの変貌に止まらない。

ある者は忽然と、ある者は苦しみながら命を落とし、ある者は正
気を失い尋常在らざる怪力にて暴れ回り、そして結局は力尽きて死
に至った。

こうした騒動が世界中でおこり、人類社会はたったの数ヶ月とい
う時間で滅んだのだった。

しかし、絶滅はしていなかった。

完全に変質しながらも生き長らえる者、僅かの変化のみで至って
良好な者、その病の影響も全く受けなかった者と、僅かながら人類
という種は絶えてはいなかった。

そして、ここから暫くの間が、この悪魔病の発症期よりも、凄惨
な暗黒期と言われている。

社会というものが崩壊と同時に 否、本質的には悪魔病の発症
期からからだろう、人間の個々のモラルというものも崩壊仕切っ
ていた。

協力・助け合い・同族意識……ありとあらゆる人々の結束を促す
言葉が失われていた。

正に動乱の時代。強者ではない、狂者こそが正義を統べるという
時代だった。

今の世から見れば、或いは滅亡以前の人類から見れば、蛮族と云
う他ない醜悪極まりない社会だ。

しかし、それを攻めることの出来る者は存在しない。

人類の初期の社会大系も同様であった筈であるし、現在生きる者
たちはそういった歴史があるから、今の自分たちがあるのだから。

彼女は、そこまでの歴史の話を子どもたちに分かり易く、昔話
まあ、歴史のことだから昔の話って意味では合ってるんだけどね
というよりは御伽話おとぎばなしを読み聞かせる様に語った。

私はその間、彼女の話聞きながら、丁度今度の社会の小テスト
の範囲であるそこを、教科書の内容に置き換えながら頭の中で繰り
返す。

「沙樹お待たせ〜」

子どもたちの相手を終えた、マリちゃんが私の方ににこやかにや
つて来た。

今まで子どもたちに、歴史の本を語り聞かせていたこの娘は、國こ
府田うたマリ子。私の中学からの仲の良い友達グループの中の一人。

ここは児童図書館、彼女はここでボランティア（？） っって言
うよりは、趣味だよね（笑） どころして偶に子どもたちに本の
語り聞かせをしている。

図書館の筈だけど、もうここはほぼ児童館ばりに子どもたちがは
しゃぎ回ってって大変。私も何度か、手伝いに来てるけど、その度
にヘトヘトを通り越して、ボロボロにされちゃう……（苦笑）

でも、今日は単なる待ち合わせ、ごめんねみんな、マリお姉ちゃ
んは私が貰っていくね。

「うーうん、ぜんぜんだよ。それより、久しぶりっ！！」

「ホントだよ〜！！（怒） 春休み中、全然連絡取れなかったの、
あんただけだかんね」

私は卒業式以降、初めて会った気の置けない友達に嬉々として挨拶
をしたら、マリちゃんはそれよりも、春休み中に連絡を取れなかつた私を咎めた。

「うっ、ごめん（泣）」

だって、しょうがないじゃ〜ん！！ 私だって色々あったんだよ？
「でも、ほんとに良かった。沙樹が元気で」

そう言ったマリちゃんさっきまでと違って、とても優しい声と温もりで、私を抱きしめてくれた。

「うん、ホントに心配掛けてごめんね」

春休み中の私は、あの事で完全に参っていてもみんなと出かけられる状態じゃなかった。

だから、誰からの連絡も気のない状態で適当にあしらってたから、きつとみんなに凄く心配掛けちゃったと思う。

いつも、元気な私がそんなだったら、余計に……ね？

だから、今日はその埋め合わせ！！ みんなで騒ぐぞー！！

「今日は楽しかったね」

「いや、騒いだ騒いだ」

女三人寄れば姦しいって言う様に、四人集まれた尚のこと、騒がしくもなる。

私とマリちゃんは後の二人、半場友恵はんばともえ：友ちと島涼香しまりょうか：リョカチ

ヤンらと合流した。因みに、この二人は私なんかよりも、大分賑やか　と云うか、騒がしい。

授業などでは兎も角、それ以外となるとマリちゃんには手に負えなくなるので、いつも私が率先して、引っ張ることで、彼女たちの暴走を食い止めている。というのが、私たちの関係かな？

そんなんだから、全員で集まったときも、この娘たちが何かをしでかす前に、私が纏め上げてたって云うのが、凍夜くん曰く『真面目なこと以外での中心人物』の実態。決して、私が人一倍お転婆つてわけじゃないことだけは、間違えないように！！

このメンバーが、いつものグループ女子部で、それに凍夜くんを始め緑川くん（コウくん）、真殿くん（みつちゃん）、伊藤くん（けんちゃん）の男の子四人を加えた八人が、私たちの中学三年時代のいつものメンバー。通称、凍夜隊（笑）

今日は、始めにジョイセンターでバーチャルアクション系を遊び倒して、次に体休めでカラオケ、その後は話し込むためにこのモールまで来てこのファミレス入るまで、通りすがりに店にも入らずに適当にウインドウショッピングして、漸く今に至る。

「ホント！！ 久々で何か疲れちゃった」

「アンタはサボり過ぎっ！！！」

私がポロツと言ったら、結構な勢いでリョカチャンから突っ込まれた。

でも、サボるって……別に義務じゃないんだから（苦笑）

何て、苦笑いしたら更に友ちからも言われてしまった。

「そうそう。ウチらは、春休みの三分の二はこんな感じだったかね！！！」

だからっっ！！！！ 義務じゃ（ry

何て感じでちょっと責める様な言い方をするのは、それだけ私を心配してくれたってこと何だよね……

それでも彼女たちは私の春休みの事を訊くことをしない。

それは、私への配慮とそして頃合いを見て、私から話してくれるという信頼から来るものだと分かっているから、とても心地が良い。流石は凍夜隊！！ 凍夜くんが近くに置く人たちだけのことはある。

って、それを言うと自分も含まれるだけに、ちょっと自意識過剰かな〜とは思っけどね。

ここにいる娘たちは、みんな凍夜くん片想いをした（三人は継続中）経験のある娘たちばかりで、友ちに至っては中一から言う、私なんかよりも片想いの大（？）先輩だったりする。

友ちだけじゃない、凍夜くんに想いを抱き始めたのはみんな私より先……告白もみんな中学の頃に済ませてるって状態。

結果はみんな実を結ばなかった訳だけど、それでも人としてお互いに良い関係が築けてる。

当時、凍夜くんに告白した娘は、振られても逆に仲良くなるって

言う七不思議の一つがあつて、中学までの私はその理由を分からなかったけど、今なら分かる。何しろ、実際体験中ですからっ（苦笑）
この中で唯一彼氏のいるリョカチャンも、凍夜くんのお陰でそういう機会に恵まれたって言つてたから、凍夜くんへの想いは無駄ではなかつたらしい。

それだけに、黙つてはいられない。

今のことを……そこに至つた訳を……

でも、もう大丈夫。凍夜くんが平気だったから、というだけでは本来足りないかも知れない。でも、彼に打ち明けて、それでも受け入れられたことは本当に励みになっている。

そして、何より今目の前にいるこの娘たちは、凍夜くんだけじゃない、私自身が選りすぐつた親友たちでもある。だから、もう怖くない。

そして、私は打ち明ける。私の家柄と立場を、そして今の私と凍夜くんの関係を……

49・黒歴史／乙女の集い（後書き）

幕間は、こんな感じに進めて行きます

今月は、引越しのため、もう更新できない可能性があります（まだ、確定ではありません）

最悪来月の頭にまで、色々食い込む可能性があるのですが、ご迷惑お掛けすると思いますが、これからも宜しく願います

50・魔粒子ノ二人の想い(前書き)

今回は、折角なのでちょっとやさかしくちゃってる感じですよ

50・魔粒子/二人の想い

悪魔病、嘗てそう称されていた現象は、今ではその仕組みが解明され活性魔粒子性変異霊障害と呼ばれている。

その頃は病の原因は掴めていなかったが、何らかの原因が無ければその様なことも起こるわけもないので、その原因を当時悪魔因子と呼称した。

当時に見ればその悪しき根源でしかなかったそれではあるが、時代が進みその用法を知り有用性を知り、人類の再復興に不可欠な存在となり、その名称も悪しき根源のイメージを払拭するために、しかし身を滅ぼす危険を孕むことを忘れぬ名称として、現在では魔粒子と命名された。

現在の日本の一部の人間は、本来の表記では Demon Part
イテイクル iccle : DPが正ではあるが、それを喩えて Magick Part
イテイクル iccle : MPと称することもある。だが、流石にそう楽観的な見方を出来る代物ではないだけに、後者は(当人たち曰く)第三世界に限っての、所謂スラングと化している。

魔粒子は自由変数因子というその特性上、非常に移りやすい不安定という性質を有し、エネルギーそのものではるが変異する、そしてその状態によってその性質が異なる。

初期状態のときは有害性がなく、エネルギーである筈なのに更に高次元のエネルギーを発生・蓄積させるといふ性質を持ち、その高次元のエネルギーを有した状態こそが有害であり、また有用でもある。その二つの状態を指して、前者を非活性魔粒子、後者を活性魔粒子と称する。

そして、自然界に置いてこのヒスのがラピスになる、有害な高次元エネルギーを有するための課程は実に簡易的だ。

空間中にあるヒスは、大気中に満ちるエネルギーに作用される。それはつまり、風が吹けば流れ、陽が当たれば熱を持つということ

だ。

そして、それらによる作用でヒスは容易に活性化^{ライズ}する。

今や世界中に魔粒子が満ちているのだから、本来ラピスから逃れることは叶わず、人々の生存率はそのまま活性魔粒子抗毒耐性の有無、耐性値に依存することになる。

故に今の世でも尚、ラピスの魔性汚染が靈障を引き起こし、人々を蝕んでいる。

「ところで、アンタさ。何だか“あいつ”と“異様”に仲良くない？」

二人で勉強をする最中^{さなか}テーブル越しの目の前の少女が、今まで会話もなく黙々とノートを書き続けていた状況下で、いきなりの質問を投げ掛けてきた。異様の部分を強調して。

この少女が突飛なのはいつものことだが、今日のはいつものとはなんだか異質な感じだ。

この少女が“あいつ”と呼びそうな対象、少年は“あいつ”を思い浮かべる。

「“あいつ”って“どっち”？」

少年に浮かび上がった名前は二つ。少女にとっては兎も角、自分にとっては両方とも“あいつ”なので、過分にして分かりきっているが、それでも敢えて問うて見る。

「あたしが、凍夜くんをあいつ呼ばわりするわけないでしょっ!!」
「だろうね。それで、檜山がどうかしたの？」

入学式当日、凍夜たちと一緒に花見に行った際に同行した一人。少年はそのときに、檜山と友人になった。

「中学までのことは、仕方なかったことだと思う。それに、あたしもそれで、一応平穩無事な生活を送ってた訳だしっ、あんたのお陰で”あたし自身は”変な目で見られることも無かったわよ……」

少女の声がどんどんフェードアウトしてく。

そして、完全に沈黙はしていないが、今は目の前にいるのに最早聞き取れないくらいの声量で、ごちゃごちゃと言っていることしか分からなくなってしまった。

だが、今度はより熱を込めて語りかける。

「今はあのときとは違う。だから、ああ云うことしなくてもいいでしょ」

例の一件で、この少年少女らはお互いへのある想いを隠すのをやめた。凍夜の粹な計らい（？）……少年にとっては騙し討ちによつてだ。

そのことで少年、双子の姉弟の弟である智之は凍夜に感謝の念を抱いている、と共に油断の成らない相手として、要注意人物にも指定した。

あのとときのあの歌には、力があつた。歌つた側には、この思いを伝えるんだと云う意思を漲らせ、聴いた側には歌い手の想いをこれでもかという程に伝えてきた。

その効果があつたのは、何も自分たちだけではない。故に、姉弟はそれは間違いないことなのだと確信している。

しかし、自分たちの“唄”にそれ程の力がある筈がないことを知っている。ならば、それはそれ以外の要因、つまり凍夜の“曲”の方にあるとしか考えられない。

それが、どういった理屈なのか、そういったことは分からないが今の彼らにそんなことはどうでも良かった。ただ、そのお陰で今こうしていられる。それだけで十分だった。

そして、そのことにより、姉弟の関係は進展を見せ始めた。

「分かつてる。檜山のことはそれとは無関係だよ。単に、本当に友達として”仲良くしたい”ってだけだ。

なんか、あいつ初対面って感じがしないんだよな……なんて言えればいいのか、ちゃんとした言葉では言い表せないんだけど。兎に角、気が合うんだよな」

しかし、だからといって万事全てが上手くいくとは限らない。

少女、双子の姉である麻里奈は近づいたことで逆に感じ始めた智之との感覚差に不安を募らせ始めた。

「それは分かるわよ……あたしもなんだか、初めて合った気はしないし……でも、あたしの中では何だか眼鏡君って感じがするのよね……なんでだろう？」

っと、どこから来るイメージに自分で首を捻る。

「それに、あんたと檜山が一緒にいると何か妙な胸騒ぎがするのよね……」

そのことだからなのか、中学時代のことがあるからなのか、麻里奈は出会って間もない筈の智之と檜山の関係が信じがたい程に良いことに、何とも言い難い焦りを感じていた。

「っと、まあそれは置いといて、何だか今のあんたたちを見てると、逆転したブライアンとウイルを見てる気分になるのよ!!」

(ブライアン? ウイル? って誰だよ!?)
声には出さなかったが、いきなり訳の分からない外国人の名前を出されて困惑する。

両方とも男の名前であることは間違いない。

きつと、自分の中学の頃のことを、引つかかっているのかも知れないと思う。だが、それがどういった経緯でそうなったかは麻里奈にも分かりきっていることなので、まさかという思いの方が強い。(常識的に考えて、あり得ないから……)

双子であっても、お互いの思考が読める訳ではない。

想いや思いは言葉にしなければ伝わらない。

「なら、お前はジニーってか? それこそ辞めるよな!!」

(ジニーって誰だ?)

智之も、麻里奈に当てられ訳の分からない返答を返してしまった。自分で分かっているのだから、世話はない。

「ジニーって誰よ!?!」

「知らねーよ。そっちこそ、ブライアンとウイルって誰だよ。然も、

『逆転した』とか何か妙に詳しいっぽい設定まで入ってるしょ!!」

「んなこと、あたしだって分かんないわよ」

「なら変なこと言うなよ」

最早、お互いに訳の分からぬ言い合いになってしまった。

「仕方ないじゃない。寂しいんだからっ!!」

分かってるわよ。私の我が儘だっただけのことくらい。でも、仕方ないじゃない……

貴方と少しでもいられればそれで良いと思ってた……でも、今はもうそれだけじゃ駄目。少しじゃ駄目!! ずっといたって思っちゃう。男の友達だっただけなのに、それでも駄目なの私より誰かと一緒にいるのが嫌なのっ!!!!!!」

智之の熱が一気に冷えていく。

否、逆だ。

今の麻里奈の台詞で、今までとは別種の熱が一気に燃え上がった。それ故に、冷静さを取り戻す。

今感じているこの熱は、先ほどまでの訳の分からない不毛な感情のぶつけ合いとは違い、智之が幼き頃から常に押さえ込んできた類の熱だ。

それ故に、押さえつけられる。ずっと堪えてきたのだ、自分はこの熱を……

「悪かった」

「私の方こそごめん……」

「もうちょっと、待ってくれ……もう少ししたら、もっとちゃんとするから。だから、ちょっとだけ我慢してくれ、頼む」
「うん」

確かに、お互いの関係は良い方向へと向いている。

以前までは、外でボロがでない様にと、家にいるときも智之は姉弟としての装いを崩すことはなかった。それが、今では家の中なら割と良い雰囲気になることもあるのだ。

自分たちはこの間までとは違う。二人がそれぞれにそう感じてい

ることは間違いなかった。

しかし、だからこそ智之はより冷静になる必要がある。

この間までは二人にとって必要だったのは、智之が目の前にいるこの少女の強い意志を受け止める覚悟だけだった。

今ではそれを受け止め、進展を見せ始めている。

そして、智之はその段階になって初めて見えてきた問題と直面した。

それが、麻里奈が感じている感覚差の正体だった。

麻里奈にとっての問題は全て解決している。後は、智之との間柄をもっと進展させて行くだけだ。

『恋人として』

正式に恋人になったらもっと楽しいことが待っていると思っていた。家でも学校でも、誰に何を言われてもずっと二人で乗り越えられるとそう思っていたから。

だから、堂々とデートなんかをしたりして、ずっと二人でくっついていられると思っていた。

確かに、自分の考えが急なのかも知れない。

でも、今までにあった壁がなくなった瞬間から、想いは洪水の様に溢れ出し、思いは願望となり慾となり始めた。

今までよりも良い状態ではある。だが、こうなってしまってもっともつと思わずにはいられなくなっていた。

新たに見えた問題、それは智之自身の想いの強さにあった。

四六時中、家でも学校でも、自分の思い人が側にいる。手を伸ばせば届く、思うままに触れていい……

そのことが還って智之に危険信号を發した。

今までは意図して避けてきた。しかし、もう避けることはしないと決めた。

そして今の状況だ。

智之は自分を年頃の男だと認識している。喻え周りから大人だと評価されようとも、所詮はまだ一介の高校生に過ぎない。

それに、その大人という評価でさえ、自分の思いから一歩引いた態度がそう映っているに過ぎない。

なら、それが無くなったら？

生理的に沸き起こる衝動、本能的に滾る劣情たぎ、感情的に燃え上がる愛情……

今まだいい。まだ、何もことを起こしていないし、麻里奈はそこまでの考えに至ってはいない。

しかし、一旦何らかの拍子にこれらを押さえ込む、理性という城壁が決壊してしまったら？

壊れたならば、きつともう元には戻せない。

そして、この余りにも激しい思いが溢れ続けたならば……

それを思い、智之はもう一度冷静に自分を見つめ直している。自分たちがより良い関係でいられるように。

愛する麻里奈のために。

50・魔粒子ノ二人の想い（後書き）

今後も、こんな感じに進めて行きますので、楽しんで頂ければ幸いです

もし、元ネタを知りたければ、ご一報下さい

51・魔法/友情

今や地球に、魔粒子の存在しない地はない。よって、魔粒子ラピスの魔性汚染の危険のない場所なども存在しない。

そうそれが自然状態であるならば……

確かに人々はラピスの毒素という負の影響を過分に受ける。だが、それと同時にそれ相応の恩恵をも手に入れているというのも、間違いない事実だ。

『魔法』そう称される術は伊達ではない。

人々がある程度その使い道を理解し始めたころより、人々は結界という法をもつてその毒素へと抗ってきた。

しかし、その効果や大きさは術者に大きく作用される。そして、その結界とて完璧なものを作り出せているものは少ない。

通常よりは結界内の方が活性化ライズが起こりにくい、というだけで無効に出来る訳ではなく。また、外でライズしたラピスを遮断する効果も万全とは言い難いものばかりだった。

だが、世界で唯一その中で完璧な理想的な結界を作り出したものがある。

それが、『血晶結界』を作り出した蒼縁の開祖。『第一魔法』：『悠久』を司る『世界で最初の“魔法使い”』の子孫の家系。それが、蒼縁だ。

現代の世に置いて『魔法』という定義は、『魔粒子を使って生み出される現象』とされる。

その意味に置いてはその言葉通りではあるが、現在の世にあつて尚通常の意味の魔法という言葉よりも更に、より旧時代的な意味合いが強い、それこそ現在の魔法を旧時代の科学と置きかえるならば、その当時の『魔法』こそが現在の世のそれに当たるといって程に、未

だ持って不可解であり絶大あり不可能の領域にある『魔法』がただ『三つ』だけ存在する。

日本に置ける“最高の魔法師家系”『蒼縁』の開祖、『凍結』の『君織蒼』の『第一魔法』：『悠久』

QGの世界を救いし英雄、『救済』の『カライル・エルクスティス』の『第二魔法』：『消滅』

同じくQGの無限の知識、『不老』の『アスラ・ファーノック・レイド』の『第三魔法』：『破壊』

現在歴史の表舞台で『魔法使い』の称号を得ている彼らの施行した魔法は正しく人々が古来より想像する魔法のそれだった。

現在通常に使われている『魔法』という言葉は実のところ、理想的なそれに値しない。

そう呼ばれているのは、“そうありたい”“そうあるう”とする希望のもとにある。孰れは全ての者がそうある様にと願って……

そして、定義としては同じではあるが、この理想的な正に『魔法』と呼べる代物を、それを区別する際には『神魔法』と呼ばれる場合がある。

現在の『魔法』は完璧ではない。

物質を作り出すことは出来るが、それは一時的なもので内包される活性魔粒子エネルギーが尽きれば消滅する。

物を消し去るといふ表現はするが実際のところ質量を消滅させる訳ではない。原子レベルにまで分解することはあっても、その原子を消滅することは出来ない。

これらは、『この世界』が『アカシックレコード』より分岐、創世されたときから決められているこの世界の法則『概念序列』を超えられないということを証明している。

この世界には物理法則というものが存在する。

この世界は、概念序列の序列順位が決まっている。そしてそれが、複雑に干渉し合いそれを作り出している。

そして、より高位の概念を超えることが出来ないということになっている。

分かり易く喩えるなら『生』と『死』というものがある。

この世界の序列は死の方がより高位に値する。故に、死した命は生き返らない。

身体的な働き……心臓が動いているなどを生きていると表現するならば、確かにそれは可能である。しかし、それはただそれだけのことであり、そこに依然と同じ人間性を宿すことはない。

そういった意味で、生は死を超えることはない。

これが概念序列と云われるものの考え方だ。

神魔法というのは、その概念序列をも超越した魔法ということになる。

悠久 それは正しく尽きることないの魔法の現象。外部の干渉がなければ半永久という時を刻み続ける魔法

消滅 それは質量保存の法則というものを無視し、原子すらこの世から消し去る魔法

破壊 それは序列或いは概念そのものを破壊する魔法

これらは正に、神たるアカシックレコードに反する魔なる法だと言える。

そして、その三つの内で世界で初めて行われた神魔法、悠久を駆使して施行された魔法：『水晶結界』は二重の意味で人々の希望だ。

一つは、効果そのものに

今の世で、安全な『普通の生活』をすることなどがどれ程価値のあることか、それは世界中の誰もが分かっていることであり、それを可能にしている水晶結界が計り知れない価値があるというのは当然の話だ。

もう一つが、その存在に

神魔法というものの存在が伝説や言い伝えなどそう言った、神聖性だけが高まり信憑性の薄れたものとして伝わるのではなく、実際に存在するものとして『ある』ということの証明になっている。という点だ。

それ故に、世界中の誰もが焦がれて止まない。

そして、今世界はその恩恵を受けられるか否かで二分されている。

コトソツ……

っと、机の上に今までノートに淀みなく文字を書き綴っていたペ
ンが、手から滑り落ちてころがっていた。

それを聴いてから実に数十秒の時が経過していた。

それを耳にしたときに、その正確な意味が理解出来ずに『そうか』
としか思わなかった。

しかし、その単語の意味をかみ砕き飲み込むと同時に、手の力が
抜けた。

「紫司に喧嘩売った」

少年が同じことを繰り返す。

上田祐司うえだゆうじは親友と呼べる程に親しい少年、小野大輔の方へと机に
向かっていた体を反らし、椅子の背もたれ越しに見やった。

「それは、アレか？」

何時ものつい突発的に怒鳴りつける様なチンピラ風ではなく、物
静かにドスの利いた大物の風格を手に入れたと、そういうことか？
「んっなわけあるかっ!？」

「だとすると、喧嘩ではなく決闘を申し込んだと……そう解釈すれ
ばいいのか？」

「だから、なんでそうなるんだよっ!?!?!」

「そうか……じゃあ言葉通りなんだな？」

祐司が漸く^{せむじや}まともな思考に入っただと思っただ大輔は、『ああ』と答えた。

その返答を聞いた祐司は、大きく溜息をついた。

昔から誤解も色々あったが喧嘩っ早い性格はしていた。だが、流石にそんなことをするとは露程も思っていなかった祐司は心底呆れたという態度を示し、大輔も流石にそれは仕方ないことだと諦めた。「流石に、今回ののはシヨックだよ……」

祐司が声を落とした調子で言った。

「……ああ」

そう答えた大輔の言葉は、先ほどと同じものではあったが、今回の方が明らかに覇気がなかった。

「まさか、お前が女の娘に手を挙げ、あっ!!!ああ~~~~」
祐司は椅子から転げ落ちて額を抑えて悶えていた。

「人が真面目に話してんだから茶化してんじゃね〜よ!!!」

大輔が祐司の言葉が言い終わる前に、デコピンのフォームで（硬度と大きさがパチンコ玉くらいの）魔弾を弾いたのだった。

祐司が必要以上に痛そうに叫ぶので、今度は指ガンを作って狙いを付ける。

その瞬間、祐司は叫ぶのを辞めて正座して大輔と向き合う。

「つたく、お前には真面目に話すことは出来ないのかよっ!？」

「いや〜、昔っから注意力散漫って言われてるからね〜」

お前だつて良く知ってるだろ？ 俺が、一つの物事にいつまでも集中出来ないって」

「今のは、そういうレベルじゃね〜だうが」

分かつてはいたが、やはりこの男に真面目に話しを振ろうとした自分の方が馬鹿だったのかと後悔した。

たった一月程だったが、その会わない期間でこの男への付き合い方を忘れてしまったのか？ と自分を問いただしたく成るほど無駄な時間と労力を使わされた。

そして、ここに来て漸くこいつとの円満な付き合い方は相手にしないことだったということを読み出し、いつそう疲れた気分になった。

暫く不毛な応酬を繰り返したことで、大輔はやっと話を本線に戻すことが出来たのだった。

「それで、それがどうかしたのか？」

(つぶん!!! つくづく……)

そう思わずにはられない。

『紫司』に喧嘩を売った、そのことを“それが”と言い切ってしまふ当たりやはりこの友人は大した器だと心から思う。

「そんなときに、アレをやった」

「アレ？」

アレの意味を祐司は計りかねた。

「アイス・エクスプロージョンだよ」

「早速使ったのかよ？」

あれ程の大技だ。魔法学校に入ったばかりのヒヨツ子が使う機会などないと思っていたが、いきなり使用報告が来るとは全くの予想外だった。

「ああ、相手があの紫司だからな」

「つで、どうだった？」

先ほどまでとは違い、祐司は嬉々とした表情を見せ始めた。

「丸つきり歯が立たなかった」

俺の力不足で最後まで発動は出来なかったけど、あいつはそれをたった一回で“お前の技”をきっちり見破ったよ」

凍夜はあのおとき大輔に感心していたが、あの技は大輔が考え出したものではない。

「そっか。でもまあ、紫司が相手じゃ、端から勝負以前の問題ですよ。そんなに落ち込むなよ。」

それに、お前なら直ぐ使えるようになるだろ？」

落ち込むのは自分ではなく寧ろ祐司の筈だが、祐司にその気配は

全くない。自分が苦勞して考えた技であるのだ……

「なら、大会目指して頑張れよ！！　そこで、みんなの度肝を抜いてやれ」

祐司は、学業面でも（一部、そうとは認めたくはない部分があるが）それ以外でも頭が良い。しかし、その反面魔力が乏しく、自分で考えた技ですらまともに発動することが出来ないでいる。

そこで、祐司は大輔と協力し合い研究開発をしているのだった。

アイス・エクスプロージョン
氷片爆発はその中の一つで、出来としては攻撃系で最高のものだった。

それをただの一撃で、然も最後まで見られもないというのに見切られたのだ。本来ならば、悔しくて当然の筈だ。

それは本来大輔にも言えることではあるが、大輔は間近でその圧倒的な様を見せつけたたので、そんなことを思う気持ちすら失せた。だが、祐司は違うのだ。

間近で見た訳ではない。そして、自分が直接放つことも出来ない、様々な想いを託した技をあっさりで見切られた。

通常の思考の持ち主なら、喩えそれが紫司であろうと四大柱だとしても、悔しくない筈がない。

自身の才能を容易く凌駕されて傷つかない人間は稀だ。

そして、祐司はその稀なる人間だった。

というのも、先ほど彼自身で言っていた様な祐司の性格に起因する。『一つの物事にいつまでも集中出来ない』という点だ。

本来こういった性格は人の短所として挙げられる場合が多いが、祐司の場合は違う。彼は自身のそういった面を理解した上で、それに反らず様々なことに目を向ける様にしている。そして、それが彼の短所たり得ない最大の理由は、彼の場合一挙集中型ということにある。

一度興味を持つと、寝ても覚めてもそれ一つのことを考える。

それでいて学校の勉強を疎かにしない当たりは流石ということころ

だが、その代わりに一度興味を失った研究課題は途中であろうと完全放棄する可能性もある。

しかし、元々頭のいい彼であるので、そこで得られる成果は周囲にもきちんとした評価を得ているのだった。

彼曰く、『いつまでも楽しくやり続けよう、それがいい結果を出すための秘訣だよ』だそうだ。

魔法研究は断続的に続けているが、時折別のものに興味を持って数ヶ月単位で別のことに耽っている。

現に今が丁度そのときで、先ほどまで書き留めていたノートは、最近興味を持ち始めた半導体についてのことを書き連ねていて、こゝ暫くは魔法の研究の一部すらしていない。

そして、今回は被ることはなかったが、研究課題になんらかの接点がある場合には、今までの知識も実に有効的に活用される。

思わぬところで伏兵もあつたりするので、彼にとつてこういった性は損というものではないのだった。

そんな彼なら知っているかも知れない。そう思って大輔は祐司の元を訪れたのだった。

大輔は凍夜との決闘の話をして、不可思議な現象のことを訊いてみた。既に、相手の魔法を使役する方法『波導調』についての説明は受けた。

だが、他の三つに関してはまだ説明を受けてはいない。

自分はただ一人あの中でその技を使う者と直接手合わせをしているのだ。誰よりも興味があつて当然だと思っっている。

それ故に色々調べては見た。しかし、一向にその糸口すら見つからない。

いつそアップルツリーにでも……つとまで思ったが、流石にそれはやめておいた。

やはり、これを使うのは負けた気がする。自分に……
そうして思いついたのが祐司だった。

大輔の質問を受けて、祐司は全ては分からないが、黒い箱の見当はついたという。そして、それを大輔に伝えた。

(流石、ユージ)

口には出さずに、胸の内のみで賞賛を述べた。

「さてと、そうとわかりや、後は特訓あるのみだな。今度こそあいつをギャフンと言わせてくるぜ!!」

「じゃあなっ」

大輔は立ち上がり祐司の部屋を後にした。

「おう。まあ、頑張ってこいや」

春休み 公立の合格発表のときから、大輔が一方的に気ま

ずく感じて連絡が取れないでいた。

それが、大輔が苛ついていた原因だった。

祐司は頭が良い、しかし魔力の基礎値が乏しい。一応、国立の合格を目指してトレーニングを積んでいたが、基礎値そのものの値はギリギリ足りていなかった。

しかし、その値でも場合によっては合格者がいない訳ではない。

それ故に、一縷^{いちる}の望みを掛けて受験したのだ。

結果は不合格。

元々大輔自身は高校はどこでも良かった。正直、普通科でも良かったのだ。

その大輔が国立(魔法科)へ行くことになったのは、祐司から誘いを受けたからだだった。

誘った側の祐司が落ちて、誘われただけの自分が受かってしまった。

祐司はそんなことに頓着する人間ではないが、自分が気にせずにはいられない。よって、その気まずさから春休み中には連絡が出来

なかったのだった。

そして、凍夜の一件だ。

能力不足で親友とまで呼べる友が落とされた、しかし『魔法
が使えない』凍夜が国立こくたつにいる。

そのことが、大輔には納得がいかなかった。

今は凍夜のその底知れぬ技量と知識を目の当たりまにして、そんなことなど有り得ないということは分かっているが、入学式当日に詠歌から言われたときには、四大柱としての権力としか映らなかった。最もそれは大輔の事情に関わらず誰しもがそう思っていたことであり、未だクラスの者以外にはそう映っている状態だった。

52・軋轢／責務

現在大国と言われる国の発展は日本との協定なくしては有り得ない。

彼の魔法大国クイーンガーデンですら例外でないとすれば、他の国がそうでない道理はない。

世界でも、安定した生活を維持し国家としての正常な機能を果たしている国は、魔粒子遭遇危機以降数千年のときが経過した現在で尚片手で事足りる程しか存在していない。

僅か五力国、日本・クイーンガーデン・エジプト・帝華連合体・アメリカ帝国だけだった。

そして、そこに住まう者たちにとってそれ以外の国というものは“ない”という認識に等しい……… たったの五力国、この地球上でそれ以外の地域の面積の方が遙かに広大であるのにも関わらずだ。

無論、人が存在しない訳はない。

彼らとて大規模ではないにしろ、数十万・数百万単位でのコミュニケーションを築き生活している。彼ら自身はそれを国と呼び、社会を構築している。

しかし、大国と彼ら数多くの小国とは歴然とした隔たりがある。だが、それは大国と小国という人口や軍事力と言ったパワーバランスの違いではない。

日本という国は人口が僅か約1800万人であるのに大国に位置づけられる。

この人数なら、いくつかの小国が連合を組むだけでも裕にその数を上回る。しかし、その連合体が大国という扱いになることはない。それらを隔てるのは、生活水準。それは、穀物の豊かさや教育制度・学力の向上や娯楽の発達と言ったことでない。どれだけ、魔粒子という危険因子から安全を確保出来ているかということだ。

安心して生活できる環境、それが今の世に求められるもつとも価

値の高いものだった。

各小国とてそれぞれに防壁を張っている。しかし、それらは血晶結界の効果には程遠い出来でしかない。

防壁内と言えど、魔粒子ヒスの活性化は僅かに抑えられる程度、外からの魔粒子ラレスの進入を防ぐ効果も余り期待出来ない。

よって、防壁内でも靈障・魔性ましようきしやう気象が自然発生する。

その驚異は人々を病む。

いつ起こるとも知れない魔性汚染の驚異に怯えて暮らしているのだから無理もないことだ。

大国と呼べる国の中で更に一線を画す国がある。それが『日本』だ。

そして、それは勿論血晶結界のオリジナルを有しているということから来る。

日本以外の大国の防壁は、この血晶結界のレプリカを日本より提供されている状態だ。

日本という国は島国だ。資源が豊富にあらう筈もない。

それ故に、他国にそれを提供する代わりに資源或いはそれに代わるものを供給して貰うことよって成り立っている。

各国に置いてそれは表向き『友好の証』であるが、裏では『支配の象徴』と言う捕らえ方をされている。

血晶結界は神魔法を用いて築かれたもの故に、現在の魔法水準では作り出すことは出来ない。

だが、それを劣化させたレプリカの構築には成功した。

劣化品と言えどその効果はオリジナルの八割を発揮するため、自国で元々展開されていた防壁を裕に凌ぐ。故に、当時の各国はその申し出を受けた。

そして、日本と帝華連合体・クイーンガーデンとがそれぞれ協定

を結び、共国語という共通の言語体系を整えることで『新暦』という時代が始まった。後に、エジプトとアメリカ帝国が加わり、現行の世界体制となる。

日本以外の大国は血晶結界の恩恵に肖るあやかことで更なる発展を遂げ、他国との接触を断つても自国のみでの運営を可能とし始めた（日本は未だ自国のみでの生活には苦しい状況だ）。

そのため、大国間同士での最低限の交流はあっても小国と交流は次第に無くなり、更に世代は進む毎にそれが定着して行くことで、完全に途絶えた。

大国の民にとって交流のない国についての情報など知る由もなく、“知識”としてどういった状態かを知るのみだ。よって実態を知らない、交流もないその他の地域の事など彼らは”ある”と知っていても、”実感できない”故に”ない”という扱いになるのだった。

取り分けその思考は日本に強く根付いている。

その理由は実に明確で、日本人にとって国内以外は“全て危険地域”という認識になっているからだ。

大国には”劣化版”レプリカなれど血晶結界の防壁を張っているが、日本人にしてみればそれは”粗悪品”というものでしかない。

何故なら彼らはオリジナルの血晶結界の庇護の下、完全な安全圏に住んでいるのだ。

そんな彼らにしてみれば、例え自国のレプリカによって庇護されていないようと、そこで普通に住まう者たちがいようと、危険が皆無ではないのなら同じ事で、好きこのんで身を危険に投じる事もない。よって、海外に行くという感覚は彼ら（日本人）には存在しない。それを行うのは、一部の外交に携わる者だけで、一般市民が国外に出るということは有り得ないのだった。

だが、それはそれだけの理由ではなく、外交的政治問題をも大いにはら孕む根の深い問題でもある。

日本国内は（時折テロが発生するものの）平和と云っていい。それは、国内の争いが無いことや魔性汚染の危険に対するものだけではなく、意識面でのことも含めてだ。

しかし、四大柱を中心として政治・軍事の上層部の意識はそれとは異なる。

日本が四柱国家　四大柱を中心とした国家の体制　を取り始めて数千年、他国と協定を結び新曆として歩み初めて約千年が経とうとしている今でも尚、日本は非常に不安定な立ち位置にいた。

「旦那様、紫司康嗣様いじがいらっしやいました」
「通せ」

屋敷の主の声の後に、障子が開き紫司家の現頭首康嗣が姿を見せる。

康嗣は、主人と向かい合わせに用意された座布団へと腰掛け、前置きなく本題に入る。

「ご用件は何ですか？」

「此度の一件、紫司は手を引け」

対する蒼縁の現当主：蒼縁哲生あつひも即座に切り返す。

康嗣は予測していた通りの哲生の答に深い呼吸をして間を空けた後、淀みなく答える。

「それは出来ん。アレの始末は私自らの手でなさねばならん。それが、紫司の頭首たる私の仕事だ」

哲生にしても既に予測済み　否、それ以外の返答など有り得ないことぐらい分かりきっていた。

「あの事件は我が紫司の失態だ……」

「何も、自身をそこまで責めることも有るまい。それに、肝心の『ダイヤ』はまだ奪われた訳ではない。そして、それは貴殿の娘の功績だ。」

貴殿らには我が方の無理を聞きいれて貰っているのだ。もう、十分だろう……

それに、元を正せば私の失態だ。今更ながらに私が人並みに親心などというものを見せなければあんな自体は起こらなかつたのだ……

「無理などと、そんなことはただの一度も思つたことはない……何もかも、誠に感謝しております」

康嗣は言葉と共に深々と頭を下げた。

「あれは贖罪などではなく、こちらにとっては希望そのものだ。」

私も人の親だ。貴方と同じ立場なら私も迷わずそうしていましたよ。それこそ、誰にも責められるようなことではない」

「なればこそだ。」

私なんぞより貴殿の方が遙かに人の親だ。なればこそ、この一件から手を引け」

康嗣は首を横に振る。

申し出はありがたい。

何から何まで……悲運を背負う一族の名に相応しく在るこの男から、これ以上の何故望めるだろうか……

「人の親なればこそ、私はその責務を果たす」

「この頑固者目が……」

「そのお言葉そっくりお返しいたします」

哲生はやれやれと首を振るしかない。

もう彼は決めてしまっている。この一件の結末のその最後の一項をどう括るのかを……

その覚悟は、直接顔を合わせたことでどれ程のものかが分かつた。恐らくあのときの自分と同等の覚悟を決めているに違いない。ならば無理だ。

自身で経験が在る故によく分かる。分かつてしまっただけに辛いことだった。

「だが、一つだけ言うておく。あやつはただの駒では終わらんぞ？」

しかし、哲生は最後の悪足掻きとでも言っつよつた口元をっり上げ
て笑った。

高校生活最初の休日を終えた二人は何時もの様に腕を組んで仲良く登校する。

小夜は昨日一日至福のときを過ごしたことにより、今日は一段と上機嫌になっていた。

それもその筈で、二人は言葉通りの意味に置いて片時も離れずに過ごした。

凍夜の強化調律の後、小夜は暫くの間凍夜との距離を空けることは出来ない。
チューンアップ

それは、距離が離れば離れる程制御が難しくなり、距離が開くと凍夜の負担が大きくなるというの話であって絶対ということもない。

だが裏を返して、距離が離れると制御が難しくなるというのなら、その逆も又然り。つまり、近づけば近づく程容易になるということになる。

ともすれば話は早い、離れなければいいのだ。

そして、それを実行する小夜の行動と言えば実に単純にして明快なもので、それこそ言葉通りの行動を実行した。

離れない＝直接触れ合うというものだ。

小夜は家の中だというのに、外で見せている様に一日中凍夜の腕を絡め取っていた。

凍夜としては、他者の視線がないにも関わらず外でするときよりも何故か幾ばかりもぎこちなさを感じずにはいらなかったが、小夜は逆にいつも以上に嬉々とした表情を露わにしていたのだ。

常時ならそれを考えているだけでも、自分に対してうんざりするところだが、このときばかりは小夜にも名目だけでなく実質を伴う大義名分がある故に、凍夜に対しても自分に対しても『いい訳』が立つのだった。

それが、自身を抑えた凍夜への配慮だけなら凍夜はそれを断る術を持つている。しかし、それが何よりも本心であると、誰よりも理解出来る凍夜にそれを受け入れる以外の選択はない。

そして二人は“いつも以上の距離”でもって昨日一日という日を過ごしたのだった。

それに、そしてそれに伴っての反作用のこともある。

凍夜の制御が衰えればまだ安定していない状態の小夜の体が辛くなるというものだ。

このことを踏まえ、この二人のことを鑑みれば当然のこととしてある解答が導き出される。

凍夜がその様な思いを小夜にさせる筈がなく、どれ程の距離が隔たれようと凍夜が小夜の制御を怠ることはない。そして、凍夜が小夜を縛ることを良しとせず、小夜がどのように過ごそうとも自身がそれに合わせる様にして好きにさせようとする。

それと同時に、小夜が進んで凍夜の負担になる様なことを望む事も又、無いことだ。よって、小夜は自身の体のことは差し置いても、凍夜との距離を離れることはない。

だがそれが凍夜を慮おもつてのことと素直に口にするのは憚はばられる。

そして、何もそれが全てではないのまた事実……というよりも、そちらは『いい訳』程度の問題ではなく、寧ろ願望だ。それにこの場合“どちら”に対してのいい訳かも分かったものではない……それは小夜が心からそうありたいと“常”に願っていることでもあるからだ。

普段それを口にすることはない。負担に成りたくない、邪魔をしたくないという思いから来るものだが、最近ははしたない女だと思われたくないという思いが何より強いかも知れない……

即ち、『お兄様といられること』というのが彼女の望みそのものだからだ。

今回施した 最も、小夜に行うのは毎回これだけだが 強化調律は、最大魔溜値まりゆうの強化だ。イメージとして分かり易く言えば、最大MPの強化ということになる。

人間が保有出来る（或いはしている）魔粒子ヒスの量：魔溜量は、鍛錬によって増やすことは出来るがそれにはどうしても時間を費やさねばならない。

だが、それを短時間でどうにか出来ないものかと考えられたのが、この強化調律だ。

通常の強化調律でなら魔法を使わず安静にしているだけでいい。調律師と一日も同伴しなければならぬこともない。

この強化調律というものは理論としては実に簡単だ。

その方法は魔溜器官を胃に喩えると分かり易い、魔溜量の最大時は満腹状態でも考えて貰えばいい。

そして、そこに無理にでも少しづつものを詰め込む。胃は筋肉で出来ているため、伸縮しある程度であれば“多少の無理”はきく。それを繰り返していくと、胃は段々とそれに慣れていき、その伸びが数倍にまで広がるのだ。

この方法とてそれなりに時間は掛かるが、日々の演術鍛錬のみよりは早い成長が期待出来る。

だが、凍夜の施す強化調律の場合だと多少話が異なってくる。

通常の強化調律の場合だと一度に増強出来る量は精々3%と云ったところで、それ以上は暴走の危険があるためにやらない。

凍夜の場合は最大で現状の1/3程の魔粒子を押し込める。勿論、普通は体が堪えられるわけではない。

しかし、凍夜は相手の体内に押し込んだ暴走する魔粒子を自身でコントロールすることにより、それを可能にしている。

小夜の霊体内レイクスにある魔粒子をエクテマにて掌握し、押し込められた圧力で活性化レイクスしてしまうのを抑えているのだ。

そして、魔溜器官がその膨大な魔粒子を貯蔵するのに慣れるために一日という時間が掛かる。一日で完全に増強分が完全に定着する訳ではないが、今の小夜ならそれで私生活に問題ないくらいに適合出来る様になっている。

その後は、数日間無茶な使い方をしなければ定着して、最初に注いだ約80%分（全体の約1/4）が定着増強される。

普通なら先ず離れることはおろか、相手の体内の魔粒子制御という事が出来よう筈もない。それが可能なのは、偏に彼だからという事に尽きる。

だが、それは彼が“その身”であるが故に可能に“なった”

この表現は彼自身からすればの話で、他の者にしてみれば“せざるを得なかった”という認識がされている。ことで、それを才能と呼ぶ者は在っても、事情を知って尚羨む様な者はいないという程度のものでしかない。

誰から見ても、明らかに失ったものの方が大きすぎた。

そして、彼がその大きすぎる程の贄を支払い更に、血の滲む様な努力があつて初めて自分が生かされている。というその事実を目の当たりにする彼女にとって、彼は正に絶対的存在になった。

たった数日で最大魔溜値の1/4が増えるのであれば、結果だけを見るなら確かに驚異的だがやはり命の危険が大きい。

凍夜は当然として、細心の注意を払うが自身が完璧な人間などとは思ってはいない。

否、『人間』としては自分は確かに完璧と言えるだろう……人間
の定義には、不完全であることが含まれる。つまり、“完璧”であるならそれは人間ではないということであり、“人間”であるなら完璧ではないということだ。

即ち、自身が『人間として完璧』だと認識する凍夜にとって、ミスは絶対的に有り得ることということを含む。

万が一が絶対には凍夜自身にも断言は出来ないのだ。

それ故に本来であるなら、出来る限りこういう方法は取りたく

ないというのが本心だ。しかし、小夜の体のことを考えればやむを得ない。

この方法にはかなりのかなりのリスクが付きまとう。胃に喩えはしたが、当然ながら胃と同じではない。

何よりも違う点は、霊体には（陽的）感覚器官がないという点だ。胃袋も直接痛みなどは感じることはないが、満腹状態げんかいちは分かる。

それ故に、辞めどきというものが分かるが、霊体で直接それを感じることは出来ない。

もし、異常を感じたのならその時点でもうやり過ぎという状態だ。そして、そうなると霊体内たいたいにて、魔粒子の暴走が起こりうる。

その場合、直接身体に苦痛を伴うだけならばまだいい。だが、それが霊障の原因にもなり得る。そして、最悪の場合には死に

否、魔性現象ヘルズ・ティザスターに至ることもある。

魔粒子を魔溜器官に注ぎ込むということはそれ程難しいことではない。そして、注がればその分を受け入れる。しかし、それが制御出来るという訳でないのだ。

それ故に専門家が必要となる。とてもではないが、その限度を見極めることが出来ない者が行うようなことではない。

そうした理由から、この方法を用いるのは余程「そうしなければならぬ立場の人間」ということになる。例えば「名門魔術師家系でありながら魔力に乏しい」などだ……

だが、今の世で言えばそれでもそこまでする様な輩はいない。

ここ数百年という時間をさかのぼれば、表面上日本は至って平和だ。名家と言えど、我が子に敢えて命の危険を犯してまで家名に相応しくさせようとは思わない。

しかし、小夜の場合それは別とその身体みの都合によって悠長に構えている余裕がなかった。

“身”に余る“才”は身を滅ぼす

小夜　　否、妃依里という“一般家系”の出自の“身体”には、紫司それも夜の名を冠する“才”は、余りに大きすぎたのだ……

凍夜は小夜の生殺与奪の自由を握っていると言ってもいい。

その絶対的に上位者である筈の彼が自分に求める見返りは余りにも小さい。そしてそれは、見返りにすらならない。何故ならそれは、彼女が望んでいることでもあるからだ。

それ故に小夜は不安にかられる“ことがある”　　ではない。常に不安と隣り合わせで過ごしている。

見返りを求めないというのは、自分にはその価値が無いからではないだろうか……と、そう思わずにはいられないのだ。

確かに初めは贖罪いびんざいから始まったことかも知れない。だが、今はそれ以外の何を差し置いてもそうありたいと願って止まない。

『側にいたい』究極のところはそれが彼女の望みだ。

それ以上のことは、本来望んではいけない。そう思っている筈なのに、しかし彼女は今が抱える想いはそれより遙かに度をこしていた。

『“自分自身”を見て欲しい……』

最近の小夜は身体の成長に合わせてその気持ちを日々募らせて、確実に強く想い始めていた。

そこへ、神禁のことがあり、昨日のことがあった今、小夜はその気持ちを抑えきれない程になっていた。

だが、それを言葉にすることやはりない。そしてそれにこそ彼女の覚悟があった。

しかし、それでも行動の端々には滲み出る彼への想いを止められないことを、彼女自身は知らず気付かず。また、それを咎めることもまた誰にも出来ないことだった。

54・悪習？

二人が正門を潜ろうとしたその瞬間、凍夜の足下に小さな穴が穿たれた。

「明らかな魔法の一撃、放出系恍惚線型^{しょうせん}。」

「待っていたぞっ！ 紫司凍夜！！」

「僕は、別にそうして頂かなくていいんですけどね」

軽く溜息をついて、苦笑いを浮かべながら返す。最早この相手には呆れを通り越して感心の念すら抱く……とは言ってもやはり迷惑極まりないことには変わりはない。

「今日こそ貴様の不届きなその態度改めて貰うぞ」

本来ならそれは自分にはなく、“彼女”に言うべきことである筈だが、そんなことを気にする相手ではないし、自分も彼女が心から望まぬ限りそうするつもりはないので、『お相子』と思い込んで置くことにする。

「お兄様、鞆を」

小夜が凍夜の腕を放し、いつもの様に凍夜の鞆を先に持って行くとする。

「いいよ。少し先に行つてて、直ぐ追いつくから」

しかし今日は、凍夜はそうはせずそれを断った。

それを見ていた彼は、激昂する。

「きつさ〜ま〜、俺を愚弄^{ぐろう}するつもりかっ！」

「そんなつもりはありませんよ。ただ、先週末とはちょっと事情が違つんです」

凍夜はそれをやんわりと受け流す。

「俺とてこの休みを無意味に過ごしたわけではないわっ！」

いいだろう、貴様に目に物見せてくれる」

目の前の男子生徒が本格的に構えたことにより、小夜が凍夜の言葉を受けて歩き始めた。

今までの流れの間で、小夜はただの一時も彼に視点を合わせてはいない。

まるで、そこに人がいないかの様に凍夜に敵対する彼の横をスツと抜けていった。

入学式の次の日から続き、最早彼の中では恒例化しているのかと考えるとゾツとするこの朝の時間。

曰く『紫司小夜争奪戦』と称されているらしいが、これの“勝者”に小夜が付くというわけではないのでそれを早く理解して欲しいのだが、負ければ負けただ“この相手がどうなるか分かったものではない”ために、わざと負けるといふことも出来ない。

全く持って厄介な相手に捕まったものだと言ひ止めるしかない。否、それ以上に問題は自分自身かも知れない……そう思い、少し苦笑を零した後で真剣な顔を作った。

「では、行きますよ」

凍夜は相手が仕掛けてきてから返すことが多いが、今日は自ら仕掛けに出た。

小夜が朝の日課の一つである凍夜の起床確認 本来の目的は確認ではなく、起こすことだが を済ませて一階に降りてくると、いつものことではないことがあった。

台所から何かを焼く音が聞こえてくる。

(どうしたのでしょうか?)

小夜はいつものこの時間、ランニングに行っている筈の凍夜がまだ家にいる、そして下拵えではなく調理に取りかかっていることに疑問を感じた。

居間から入って台所を見るとエプロンをして朝ご飯を作っている凍夜の後ろ姿が見える。

「おはようございます、お兄様。今日はどうなされ……たあゝあゝ

「……」
「！！ おっと」

小夜の挨拶に反応して凍夜が振り返った。そして小夜の視線が凍夜の顔を捉えたその瞬間、急に貧血でも起こしたかの様に小夜が崩れ、床に倒れる前に凍夜が小夜の体を支えた。

小夜が目を醒ますと目の前には凍夜の顔があった。

状況が理解出来ず、小夜は一瞬にしてパニックに陥る。

（えっ？ あれっ？ 私はどうして？ あれっ？ 何故お兄様のお顔がこんなに近く？ えっ！ もしかして私は今お兄様に……！！）
抱きかかえられていた。

状態を把握しても小夜のパニックは納まらない。寧ろ、この状況が原因なのは明白なので当然と言えば当然なのだが……

脳が過度のパニックを起こしているお陰で、逆に体に命令が届いておらず、凍夜を突き飛ばしたり暴れたりしなかったのは、後になつて見れば小夜にとって幸いなことだった。

凍夜が小夜をゆっくりと起こして立ち上がらせる。

凍夜の前でいつまでも失態を晒すことを嫌った小夜の心理が働き、凍夜が小夜を立ち上がらせたときには少し落ち着きを取り戻しきちんと自力で立てていた。

「ありがとうございます、お兄様」

そう礼の言葉を述べるが、状況は分かっている。

（私は何故、なぜお兄様に抱きかかえられていたのでしょうか？）

「ごめんね、僕の不注意で。少し休んで」

不注意？ つと、そこに疑問を感じたものの、小夜はいと返事を返して居間のソファで心を落ち着かせて自身の行動を思い返してみる。

そして、朝からの行動を頭の中で振り返り凍夜に挨拶をしたとき
のところにもまだ辿り着いた。

間違いなくここだ。そこで記憶が飛んでいる。

次に目を開けた時には、眼鏡を掛けた凍夜の顔が度アップで映し出されていた。

(眼鏡……!! そう、眼鏡ですわ)

小夜は先ほどの振り向いた凍夜を思い返す。

そう、あのときの凍夜は素顔のままだった。そうして漸く小夜はそのことを頭で理解した。

さっきは頭で理解するより早く、視界に映る刺激が強すぎて失神してしまったのだ。

本来なら挽回を図るためにも、凍夜の下へ急ぎ馳せ参じるところだが、今の小夜はそれどころではない状態に陥っている。

ドクンツというより、今はズキンツという表現の方が合っているだろう。心臓が脈打つ度に痛いほどの“高鳴り”を感じる。

高々そんな程度のことです(凍夜の前で)失神してしまったという羞恥心と情けなさが小夜の胸の内の埋め尽くしていた 訳ではなかった。

小夜の性格からして、本来ならそのことで自らを責め立てるところだが、今はそれどころではない。

“そんなこと”をしている場合ではない程に凍夜の素顔に当てられていた。

朝からの(かなり)嬉しいハプニングのお陰で、小夜の機嫌は昨日の初めての二人での登校をも上回る程だった。

腕を絡めるだけに止まらず、歩きながらだというのに頬摺りまでしている。

はつきり言って小夜は、登校中であるという現状を把握していない。

何しろ、朝食を食べ終えソファに座って、時間を調整していたときからこの状態で更に目を瞑ったままなのだ。

体は無意識でも凍夜に合わせて動くがその意識は今何を想像して

いるのか……それは凍夜にも分からないことだ。

そして、当然の如く凍夜は昨日の比ではない視線　凍夜の中で
は死線　を受けている。

昨日の段階では、『離れる』という程度のものであった眼差し
凍夜の受け取るイメージ　が、今は『死ね』と言っている。

昨日の一件で自分たちが兄妹であるということは知れ渡っている
筈なのに、“彼女の兄”という立場はどうやら彼らには関係ないら
しい。最も、今は兄妹姉弟きょうだいでも恋愛対象になる世の中だけに、本当
に関係ないのだろう。

そうしている（凍夜が死線に堪えている）内に、漸く正門へと差
し掛かった。

そして、その瞬間『まずいっ！』と心の中で思うと共に、“小
夜を抑えた”。

「待つていたぞっ！　紫司凍夜！！」

私は、紫司小夜私設ファンクラブ『Fairys for es
t』会長、二年魔術実習専攻Aクラス、石井真いしいまこと。

貴様は我らが、『紫司小夜』フェアリープリンセスの隣に並ぶに相応しくない！！

よって、この場で貴様には我らがプリンセスと離別して貰う。そ
れに応じない場合、こちらも実力をもって排除する用意がある」

先手の一撃と共に何とも手前勝手なことを言い連ねるこの私設フ
アンクラブの会長に、二人はそれぞれ違った反応を示す。

小夜は当然の如く、憤慨する。その怒りで先ほどまでの幸せな気
持ちも吹き飛んでしまい、それも相まって常の比ではない程にこの
男子生徒に嫌悪感を抱いている。

先ず気に入らないのは凍夜への態度だ。

学年では確かに上ではあり、1 - A以外の生徒が凍夜の年齢を知
っている筈がないので（生徒会の二人は例外）、多少先輩面して高
圧的になるというのは仕方がないと思える。

しかし、彼の態度はその度を超えている。そして、それは間違い

なく入学式のときの詠歌の発言によって、明かされた『魔術が使えない』という事から来ている筈だ。でなければ、学校という一種の魔界や結界と呼べる特殊な社会大系の中と言えど、四大柱に対してこつも高圧的な態度に出ることなど考えられない。

あの言葉だけで、詠歌の言っていた意味を理解するということは不可能だというのは分かる。だが、だからと言って彼の態度は許容出来ない。

『魔法が使えない』そう認識する彼は 否、そう思っているのは彼だけではないだろう、その他の殆ど……恐らく全部と云っている程の人間が勘違いしているに違いない。そして、それでも尚魔法学校にいる凍夜を“格下”と見下しているのだ。

それだけならまだいい、良くはないがそう思っている分にはまだ仕方ないと諦められる。詠歌のあの言葉だけでは理解出来るわけではないのだから同然だと。

しかし、こつ明け透けに態度で表されると覚悟していてもやはり聞き流せなかった。この場合には、この相手の態度が常人よりも幾ばかりも飛び抜けているというのも多分にある所為もある。

更に当てる気がないとは言え不意打ちで魔法を放ってきた相手、それも凍夜にだ。

小夜にとつてはそれだけで、十二分に極刑に値する。

正門に差し掛かったときに魔導波を感じ取った小夜は、反射的に魔法をおうとした。自身の状態がどういった状態であろうとも、凍夜に対する危機感知が疎かになることはない。そして小夜にとつて、凍夜を狙う相手に手加減の必要など考えるまでもないことだ。

先刻凍夜が小夜を抑えたのは、そのためだ。一階の高校生相手に小夜が殺意をもって攻撃をすればひとたまりもないからだ。

(そんなことはこの相手を知る由もないことだが)凍夜のお陰で命を繋ぎ止めたにも関わらず、その相手が凍夜に暴言を放った。然も、自分を出しにしてだ。

小夜は、自分が凍夜にとつて枷でしかないと思っっている節がある。

ただでさえ不必要な存在、否はつきり言つて邪魔な筈だ。とそう思っているのだ。

そんな自分の存在が、こうして他人を介して更に凍夜の迷惑になる。小夜にとつてこれは、禁句だと言つてもいい……

この相手の取つた行動は、二重三重で小夜の怒りの炎に油を注いだのだ。

凍夜はと言えば失礼とは思いつつ笑いを堪えきれず、口元は緩み抜ける様な息を吐いていた。

いろいろ褒められたことではないことが多いのは事実だが、それでもこうして正面から堂々とするのは凍夜は嫌いではない。

自身に対する失礼など意に還す様な凍夜ではない、褒められない点というのは小夜に対する配慮だけでそれ以外には何の感慨もない。そのため、自身が好ましいと思うことを素直に評価する。

困つた相手だとは思ふ。しかし、こういう輩を嫌いに成らない自分自身が一番の問題なのではないかとも思ふのだった。

それと同時に、昨日の生徒会の勧誘は流石だと感心する。入るつもりは“今のところ”ないが、それでもこういつた状況が続けば揺らいでしまうのではないかと一抹の不安が頭を掠めた。

「“見えている”ぞ」

真が言葉と共に腕を振るい、手から恍惚線を放つた。

“目の前”に映っている凍夜に出はなく、“右斜め前方”に向かつてだ。

凍夜は“自分に真っ直ぐ向かつて来た”恍惚線をサイドステップでかわ躲す。

「どうした？ 言つたはずだ。俺とて無意味に休みを過ごしたわけではないと」

「その様ですね」

大輔に仕掛けた技を真に見切られた。

だが、彼にこの技を仕掛けるのはこれが初めてというわけではない。

先週は毎朝この技を受けていたのだ。休みを挟めば対策の一つや二つあつて然るべきだと言える。

“ 所詮はその程度の技” でしかないので、それを破られたとて凍夜に焦りはない。

「ではもう一度。紛れではないことを証明して貰いましょうか？」

そう言つて凍夜が先刻同様、真に向かつて行く。

「紛れであるものか。俺にはきちんと“聞こえている” さっ！！」

最後の言葉と共に、今度は左方向に攻撃を放つ。

先ほど向きを変えたので、丁度元に戻して正門を正面に捉える方向に真の魔法が飛んだ。

そして、凍夜はそれも横にずれて躲した。

その瞬間、先ほどまで（今の方向から）右斜め前方に見えていた凍夜の姿が消えた。

「その技、『不調破音』という奴だろう？」

驚いたよ。まさか、法術を実践で使う輩がいたとはな」

「お見事です。正確には違いますが、概ね正解ですよ。この技は、その応用技ですからね。」

振音法術の二系、名は『ジャイル』といいます」

振音法術、それは言葉通り『振動』と『音』により魔粒子を刺激することにより、魔法現象を引き起こす術だ。

ただしこの場合には、正確には魔法を使つてはいない。凍夜が使つたのは飽くまでも『二系』の技だからだ。

法術には『一系』と『二系』という区別が存在する。

一系とは魔法そのものことで、二系というのは魔法ではなく作用や効果・法則などの“導的效果”のことを指している。

振音の場合は、一系なら魔粒子に固有の振動を与えることにより

特定の魔法を発生させる。二系なら音を聴いた人間を不快にさせたり、音で物を破壊したりといったことが出来る。

凍夜のジャイルの正体は口笛だ。それを聴いた者の脳に直接作用して知覚を狂わせるといふ代物である。

気付いてしまえば、魔法科の生徒なら幾らでも手の打ちようがある。

魔法ならば、効果はお互いの演術力の勝負となるが、二系であるならば、魔法で打ち消すことも出来るのだから、圧倒的優位に立てる。

「さあ、どうする？ 貴様のその技はもう俺には通用しないぞ？」

真は勝利を確信する。魔術と違い法術系は尋常でない演術力を必要とする。

四大柱と言えど、高校生が幾つもの法術を習得しているとは全く持って思っていない。

何せ、現代では法術は魔術の補助的な用途でしか使われない。それは、難しすぎて習得に時間がかかるからだ。

向き不向きもある。更に向いているとはいっても、技一つの習得に数ヶ月から数年という単位が必要になることもざらにあるという。

故に、普通の者は魔術の鍛錬に時間を割く。その方が、圧倒的に自己の成長を感じ取れるのだから当然の結果だろう。

真は休みの間で、手当たり次第に調べて散々自分を翻弄した凍夜の技の正体へと辿り着いた。

そして法術という、名前を少しばかり聞きかじったことのある程度でしかなかったものだと分かり、打倒凍夜のために、法術に関することをひたすらに調べた。

まだ、全てを終えたわけではないが、それでも容易でないということには十分に理解したつもりだ。

故に、凍夜がこれ以上法術の技を持っているわけがないと判断し、魔術も使えないのであれば、自身の勝利は揺るがないと確信しているのだ。

「言ったでしょう？ 先週末まではちょっと違うんですよ」

そう、凍夜は先週末までは違う。この休みの間に凍夜の体は調整を終えたのだ。

今までの状態の身体能力は常人の半分程度しか出すことが出来なかったが、最終調整を終えた今の体は、その能力を全開に引き出すことが出来る。

つまり、魔法の身体強化に匹敵する身体能力を魔法を介さずに入れている。

そして、それに伴って（超常の身体能力ではなく）制限無く動ける体になったことによりある技が解禁された。

「行きますよ」

そう言って、凍夜が真に向かつて駆け出す。

「フンツ、馬鹿の一つ覚え見たいにそればかりか？ ん？」

真の耳には先ほどと同じ音が聞こえて来ている。そして、目の前のこれが本物ではないということとは分かっている。

しかし、今度は本体の居所が分からない。

耳に音は届いている。だが、その音の出所が掴めないのだ。

目の前ではないのははっきりしているのに、特定出来ない。

周囲を警戒するがそれでも分からない。

凍夜の幻影が目前に迫る。幻影と分かっている、無駄に反応する程もう未熟ではない。

真はその幻影を意に還さずにひたすらに周囲の警戒だけを行う。

「うをつー！」

そして、幻影が真の体を通り過ぎたその瞬間、後方から軽い衝撃が奔^{はし}った。

後ろを振り向くと誰もいない。しかし、更に遠くの校舎付近を見れば小夜と並んで凍夜が歩いた。

二人はもうすぐ校舎に入るという位置だ。小夜はあのまま歩いていればそのくらいものだろう。

凍夜は言葉通り直ぐに小夜に追いついていた。

「ちょっと待てー！ー！！！」

自分との勝負をいきなり放棄して去るとは何事かと、真が凍夜を呼び止める。しかし、凍夜はその声が聞こえてはいても無視した。

「くっそ〜」

真も直ぐに追いかけてようと力を込めた。

しかし、魔法が発動しない。それどころか、活性化すら出来ない。

「ちっ！！ 又やられた」

今度こそはと思ったが今回もやられてしまった。

凍夜は真との決着を魔法を封じることで行う。

魔法を封じられてまで挑むのは大輔の様な近接戦闘向け、然も『

向け』というより『好き』なタイプに限られる。

真は典型的な放出系の魔法師なので、魔法を封じられれば手も足も出せないのだった。

「お疲れ様です、お兄様」

小夜が何の気配もなる忽然と真横に現れた凍夜に驚くこともなく
労いの言葉を掛け、凍夜はそれについてうんと軽く応える。

「どうですか、お体の調子は？」

「うん、いいね。久方ぶりの『忍び足』だけど良い感じだった。

抜き足も差し足もいいキレ具合だったと思う」

「それは何よりです」

小夜は笑顔で返す。凍夜が良好であることが我が事のように、否
それ以上に嬉しくてたまらないと言った表情だ。

55・悪鬼新参

世界に名高き夢見人の第三者アスラは、800年という長き人生に置いて数多くの著書を残している。

その中でも最も有名な作品『レセルエースエッシア三幻世界録』に纏まつわるは名めいは現在の世でも様々なところで活躍の場を見る。

三幻世界とは、悪魔が住まう世界『ロクサレア』、天使の住まう世界『ルーミリクス』、神の住まう世界『バーレロー』を指し、この三つの世界は『オーベ・レセルこの世界』と隣接する世界でこの世界とは異なつた『ジドリックレコード概念序列』により成り立ち、その世界『ルクタフ・レセル』に住まう悪魔・天使・神ら幻士が、この世界に渡り来て引き起こす数々のエピソードを描いた作品がこの『三幻世界録』という作品だ。

500年以上にも渡り書き続けられたこの作品は、『“人”の写本』とも言われる程にありとあらゆる人の姿を如実に写し出しているという。

それ故に、そうあって欲しいと名を付けることもあれば、その人物の人となりから二つ名として幻士の名を受けるといふこともときにはあることで、ある集団を三幻世界録に借りて呼ぶことや名乗ることもまたあることだった。

仄暗い地下のパブで五人は、いつも最後に来る男を待っていた。約束の時間を二十分程過ぎた頃に、店の扉に備え付けてあるベルからカラカラと響きを失った音がなった。

「いやー、今日も全員お揃いですね。つて、ヒューガがまだ来てねーじゃん！珍めづしいこともあるもんだな」

ニッドは、そのまま遅れたことを詫わびることもいい訳することなく、ツアクアとその対面にファナが座っているテーブルについた。

「ヒューガはまだ来ない。あいつの集合時間はあと50分後だからな」

隣に座ったニッドにツアクアがピンを滑らせて渡す。

一仕事終えたばかりのニッドは渡されたピンを一気にあおった。

「ってことは、これは内輪の話ってことか」

ニッドはここに来て初めて集まりの中身を知る。いつも集合の場所と時間の連絡が来るだけで、その内容は実際に集まるまで誰にも知らされない。

だが、基本的には現在の状態から話題はある程度絞られるので、いつもなら確信に近い推測を持ってこの場に挑むのが常のことだ。しかし、今回は全く持ってその推測が立たない。

何せこの間集まったばかりだ。それからほんの数日、幾ら何でも状況が変化するには早すぎる。だが

「ああ。さて、我らヒュストレムが“全員揃った”ということ、まずは紹介しておこう」

その瞬間、四人が「やはりそう来るか」と若干ながら引き気味に思った。

「アルフェーノだ。実力は俺が保証しよう、“動機”も十二分。能力その他諸々は本人から聞いてくれ」

壁に寄りかかっていた仮面の男……否、男かどうかも定かではない、全身をローブで包まれていて性別の判断も出来ない状態だからだ。これ程までに如何にもな格好はかなり目立つ。彼らが、このパブに入り店内を見回した瞬間に、壁に寄りかかるこの怪しげな輩がやから目にとまらぬわけがない。

そして、その輩が自身の知り合いの付近にいるというのだから、なんらかの関わり合いがあるかも知れないという推測は立つ。

そして、今回のヒューガを除く「ヒュストレム」のメンバーのみを先んじての招集だ。店に入ってから、もしかしたら……という予測はあった……だが、これ程までに如何にもな格好の人間を知人に迎えるというのは些かの抵抗があるというのが正直なところだ。

その如何にも怪しげな輩が壁から背を離し、格好とは別に普通の挨拶をする。

「みなさん、初めまして。この度はアルフェーノを勤めさせて頂くことに成りました。若輩者ですが、宜しく願います」

流暢な^{じゆうせう}共同語で応えたところを見ると、出身は大国のいずれかという可能性が高い。そして、もしそうだとするなら姿を隠している理由が霊障を隠すためというのは格段に低くなる。

となれば、この格好は益々持つて怪しいことこの上ない。

青年の声だ。声からは大分若い印象を受ける。

声などいくらでも変えようがあるが、わざわざここまで若さを出す必要はない。どちらかと言えば、こういった場合は大人びて見せるのが普通だ。

なら、自然とそれが肉声である筈なので、恐らく声の通り若いのだろう。

「随分と若い様だな」

この中では二番目の年長者であるデフォイドが、思ったままを口にする。

根本的な体力の低下などは避けようがないが、魔法士として生きる者ならば年を取ればその分魔法の技量が増していくのは道理だとなれば、肉体の衰退を補って余りある技量を身につけているというのが自然だ。

更に^{れいたい}魔導器官自体に加齢による衰退はない（魔導器官の機能低下は、魔粒子による弊害なので加齢とは無関係であるので例外）。

そのため一般的には年齢と技量が比例関係にあるという認識にもなっている。

勿論、限度はある。どうあっても脳の衰退は否めない。“魔法士としての究極の衰退は思考の低下”。つまり、脳の衰退だ。

魔法を維持し続ければ一定レベル 現在の日本に置ける魔法師の平均寿命は百歳を超える までは問題ないが、老齢になるとある日突然精細を欠くようになり、本来の肉体の限界に直面して死に

至る。まるで、電池の様な一生の終え方をするのが今の魔法師の一番多い生き様だ。

デフォイドは実年齢は四十の半ばなのでまだまだ現役、年齢だけで考えれば人によつては若僧とさえ言えるくらいだ。よつて年長者と言つても、彼の言葉に含みはない。

含みはないが、驚嘆きまつたんの思ひはある。

この目の前の仮面の輩は、メンバー一人一人が一国を左右する実力者揃いのヒュストレムに、その若さで入つたというのだ。何らかの関心はあつて当然だろう。

「ああ“相当に若いぞ”。まあ、ヒューガが来たら色々わかるさ」
つと、この輩の事情を知るツアクアが含みを持って笑いながら応えた。

ヒューガが重い扉を開くと酒を酌み交わし賑わう店内で、沈んだ一角を見つけるのに時間は掛からなかつた。

「遅れたか？ 時間通りだと思つたんだがな」

既に来ていたニツドを見ての発言だが、ニツドがそれを気にした様子はない。

「いや、時間通りだ」

ツアクアがそれに応えて、飲むか？ つと訊くように持っているピンを傾けた。

ヒューガはそれを手で制して拒否の意を表し、席に着いた。

「それじゃ、ヒューガも来たことだし、リユードがコウモリから得た情報を元に今後の方針について協議といこうか。つと、言いたいところだが、その前に先ずヒューガに紹介しておこう。」

俺たちに新しいメンバーが加わつた。“お前が殺した前任のアルフェーノ交代要員だ”

すると隣のテーブルに座っていたアルフェーノが席を立ちヒューガの前に歩み寄る。

「アルフェーノだ。君の噂はかねがね、会えるのを楽しみにしていたよヒューガ」

「これは、何かの冗談か？」

ヒューガはアルフェーノではなく、ツアクアを不透過の眼鏡越しに鋭く睨む。

一瞬の出来事だ。瞬き一つを終えた目の前には、普段袷紗に仕舞い込んである刀まで抜刀してツアクアの首に宛がうヒューガが写し出された。

兼蔵未綴紫士焰『陽向』：兼蔵陽向、名刀の中の名刀たる最上大業物の一振り。この刀は神具級の法具であり、本来日本のある一族に宝刀として代々受け継がれてきた一振りだ。

ヒューガがこれを遊び半分で抜刀することなど有り得ない程に物騒且つ心強い代物だ。勿論前者は相手にとって、後者は自分にとってである。

「何の冗談でもないさ」

それに応えたのは、問われているツアクアではなくアルフェーノだった。

「気に入らないな。その声、そのしゃべり方。俺の知り合いに酷似し過ぎてる」

刀を下げぬままに首を反対側に向けてアルフェーノと対峙する。

「そりゃそうさ。お前のその知り合いというのは俺の同胞きょうたいなんだからな」

「キョウダイだと？」

「ああ。もつとも、彼は俺見たいな失敗作なんて知らなかったらうけどな。奴は唯一の成功体、俺は“唯一の失敗体”って訳だ」

「成る程、冗談じゃないのは本当の様だな」

話が一段落したかと思いつアクアは少々気を抜いた。

ツアクアは例えヒューガがほんの少し力を入れれば首が飛ぶ程の状況だとしても、それを打破出来る自信はある。だが、間近に少ない危険が迫っている状況に変わりではなく、自然とそして万が一のためにも神経を研ぎ澄ませていた。

だが、ヒューガがアルフェーノの存在に納得した様に見えたので、気を抜いてしまった。

「だが、それがどうしてここにいる」

ヒューガの話は終わってはいなかった。

話はまたツアクアに振られて、刃は肌に触れるまで近づけられた。

「俺が引き込んだのさ。ある伝からこいつのことを知ってた」

しかし、この程度のことと動揺する程脆弱な神経はしていない。

刃が肌に当たる冷たい感触を漢字ながらも平然と応える。

「なんのために？」

「理由……？ 理由を問うか、俺たちに？ ツフ、ハツハツハ」

ツアクアは大きく笑う。ヒューガを馬鹿にする笑いではない。心底可笑しいから笑うそんな豪快な笑いだ。

「俺たち『ヒュストレム』にある目的なんてものは決まっているだろう。それ以外に俺たちの存在する意味も価値もない。」

そう、俺たちの目的は“世界の救済”。それ以外には何の執着もない。俺たちにある全ての意味は全てそこへ回帰する」

凍夜の使うジャイルも三幻世界録の中の悪魔の名称を借りたものだ。

音を使い人を拐かす悪戯好きの最低級の悪魔。作中での扱いは極々小さいもので、一度読んだ程度でこの名を憶えている様な者は先ずいないだろう。

ヒュストレムというのも、ロクサレアの住人だ。

ロクサレアに存在する最高位級悪魔：珙はいあくま悪魔の一人ヴェクリフォ
ーデが筆頭に立つロクサレア最大の魔群、その中の次高位級悪魔：
君珠きんしゆあくま悪魔の十四将の一人がヒュストレムだ。
ヒュストレムは、“裏切りの悪魔”として鮮烈的に印象に残る悪
魔で、一度読んだだけでもその名を覚えている者は多くいる。

55・悪鬼新参（後書き）

日勤だったり、夜勤だったりで体が馴染めず、更新が滞っており
ますが、必ず完結までこじつけます

いつになるかわかりませんが、気を長くして待つて頂ければ幸い
です

因みに、今更なのですがこの作品、作品の傾向としましてはラブ
コメのつもりはありません

恋愛は押すところですが、コメディではないつもりです

その時点で、コメディだと言われる可能性はありますが、まあ、
全ては最終段階までいけば分かるかと思えますので、最後までお付
き合い願えることを切に願います

56・機械仕掛けのサヴァン1

国立がエリートとたり得るその最大の理由はその授業スタイルとそしてそれによってもたらされる生徒たちの実績に寄るものだ。

否、最早これは“授業”ではない。そう一般高校の生徒に言わせれば、国立魔法科の授業は“授業ではない”……

日本人のエリート意識の基準は今も昔も学業勉学の数字の高低で決まる。

そして、国立魔法科の生徒たちは、全国统一学力テストにて普通科の生徒と遜色ない成績を残している。十分に輝かしい成績だ。

しかし、それは教師たちの英才教育の賜^{たまもの}ではなく偏^{ひとへ}に生徒たちの努力の結果だ。

国立の魔法科高等部に普通教科の教師は各教科毎に十人前後しか存在しない。国立各校ではなく“国立魔法科”にである。

その十人程度の教師陣で、国立魔法科全体の授業をどの様に行うか？

それは、あることを考えると分かり易い。

教師がいなくても成り立つものであり、そして一般的な学校に置いては通常定期的・周期的に行われるもの。即ち、テストだ。

国立魔法科の“一般教養の授業は全てがテスト”という実に生徒泣かせなものになっているのだ。

この授業スタイルは何も生徒を追い詰めるためや教師の人件費削減のためにやっている訳ではない。

魔法科全校の中でも、国立の魔法科の授業というのはハイレベルなものになっている。それはつまりそれだけ魔法の使用頻度と魔力の消費が激しいということだ。

自主学習は大いに結構だが、こと魔法に限って言えばそれが必ずしも正しいとは限らない。よって、国立魔法科では授業での密度を

上げて他所での使用を禁じるといふ方針をとっている。

魔法の使用が解禁になったとは言え、彼らはまだまだ成長期の高校生だ。

適度を過ぎ酷使という程の魔法の使用は今後の成長にも影響を与えかねない可能性がある。

勿論そうならない様に、魔法課教員はその管理を徹底している。しかし、学校内に置いてはそれらを管理出来るが、それ以外の部分に置いては一応厳禁という扱いにはなっていない。結局のところ生徒たちの自主性に期待するほか無いというのが実状だ。

高校生という年頃は魔法の使用が解禁したばかりで、私用に置いても何かと使いたがることが多い。

ジョイセンターに行けば、マジックアトラクションが多彩にある。今まではギミックで我慢するしかなかったが、これからは実際の魔法で楽しむことが出来るというのだから抑えきれないのは当然の話だろう。

何も国立に入ったからと言って真面目であるとは限らない。勉強の時間と成績が必ずしも比例しないのと同様に、勉学の出来と素行が必ず一致するとも限らないからだ。

別に不良ということはない。普通の学校ならそれが当たり前という程度の者たちだ、勉強より娯楽を優先したくなる。

彼らとて、中学時代成績優秀者としてここへ送り出されてきたのだから、ある程度家庭学習というものの習慣はあるだろう。しかし、彼らの様なタイプは向上心がさほど強くないことが多い。

だが、一般教養の授業は全てがテストともなれば、定期考査の様に付け焼き刃でどうこうなるものではない。

きちんと毎回のテスト範囲を予習しなければ点は取れないのだ。だからと言って落とされる訳にもいかぬ彼らは、勉強せねば超えられぬ高いハードルも設けられ、否応なくも“自主的な”学習を迫られることになるという寸法だ。

それに、国立魔法科の生徒には特典がある。おいそれと辞めるに

は惜しい程の実に美味しい特典だ。

その特典目当てで入学を希望する者も少なくはない、よって嫌々ではあっても結局のところ自身に返ってくるのだから、彼らとて自身のためにも努力を惜しまないのだった。

一般高校ならそれでもいいだろうが、国立魔法科ではそれだけでは通用しない。

学校という教育機関の出口の最終地点は就職だ。例え大学へ行こうとも、選んだ高校によってほぼその方針は大まかに決まっていると言ってもいい。

四柱校に劣るといするのは仕方なくも当然ではあるものの、大手の魔工系企業や魔法関連国家機関など魔系の就職口を考えたなら国立魔法科の卒業は絶対であり、勿論成績上位者であることが好ましいとなれば、遊びに現を抜かしている暇はない。しかし、成績を伸ばそうにも放課後の魔法使用は禁止されている（休日はその対象ではない）、やったところで罰則まではないが、それで自己の体を害しては元も子もない。

従ってそのベクトルの矛先は魔法以外の方向に向いてくる。

というのが、（多くは優良企業狙いの就職思考向けの）ほぼ半数以上を占める勤勉で真面目な生徒の在り方だ。

理由はどうあれ、日々膨大な時間を学校外で勉強に費やさねばならない。そのことが、国立魔法科の生徒は自身よりも周囲にエリート然と映るのだった。

デスク型の端末では名前は公表されていないものの、クラス全員の個々の得点と平均点を見ることが出来る。

始めのうちはどんなものかと見るものだが、始まって約一週間。

最早、上位者がどれ程の点数を取っているのかなど見るまでもない。

名前も端末からは開示されてはいなくても、生徒間の口からは容易に知れる。

小テストで有りながらもかなりレベルの高いこの基本考査は基本的に100点という得点を取らせるために作られてはいない。

その中でも中にはいるもので、1-Aのクラスには満点を取った経験者が三人もいるというのだから驚きだ。取り分けその中の一人は更に驚くべきことに、現段階でパーフェクトを成し遂げている。

他の二人は（それでも驚異的なことに変わりはないが）90点を下回ることがないものの、常に100点ということはない。

この三人以下の上位得点者は80点半ばから始まり、下位のものでも40点を下回ることにはない。平均は60点台といったところだ。しかし、このクラスにはそれとは逆に基本的に最低得点、然も一桁台も有り得るといふ国立生にあるまじき輩も存在していた。

現在の時間は社会科。授業時間五十分という時間の内三十分というその社会科の基本考査の時間が終了し、反省会をしているところだ。

一般高校なら世界史、日本史、地理などに分けられる教科だが、魔法科ならば当然専門教科によってその単位が削減されることになる。

それにもなつて、国立魔法科では全教科が独自のテキストにて総合的に学習していくという方法を取っている。その分、密度が濃く生徒にはたまつた代物ではない。

「何度見ても信じられない数字だよね……」

麻里奈が端末に写し出される点数を見て呟く。

現在彼女の端末のホロウインドウに写し出されているのは、得点の記録だ。

「あいつ自分にはとことん厳しい見たいだからな」

後ろの智之が麻里奈の後ろから声を掛けた。

「らしいね。沙樹が言つてた。中学の頃からずっとだつてさ」

「すげーな、あいつ」

当の本人はと言えば、今は教卓に立ち解説をしている。

模範解答には、答えと合わせて解説が載っている。本来ならそれを熟読するのみだが、このクラスではこの様にして凍夜に解説を依頼する。

彼の解説は何かとの関連付けやテキストではそのままの意味を覚える他ないことでも、詳しいことを事細かに説明してくれるので実に覚えやすい。

全く持つてどうしてその彼が……？ と事情を聞かなければ誰もが不思議に思うことだ。

だが、聞いたところで納得は出来ない。何故ならそれを回避する手段を彼は持ち合わせているからだ。

それをしないのが、凍夜という人物を如実に物語っている。先刻智之が言った様に、凍夜は自分に敵しいのだ。

凍夜にそのつもりはあまりない。自身を律するのは当然のことだ。それは自分でなくとも、誰もがそうしている。だからこそ社会が成りたるのだと、そう思っている。

だからこそ自分も、他者と“同等”であるべきだとしてそれを用いらないのだ。

だが、周囲の人間からすればその在り方は実に潔癖に映る。

何故ならそれは、言わなければ分からないことであり、そして、何よりそうせざるを得ないのだからそれは当然のことの筈なのだ。

高校生活最初の授業は待望の實習（？）かと思いきや国語へと挿げ替えられ、一同は浮き足出つ心を抑えて目の前のテストへと向かった。

テストの時間が終了し最後まで完了していない生徒の懇願も虚しく操作不能になり、即座に合否の判定がなされて得点が判明する。

「おっつー。中島はどうだった？」

模範解答の見直しもそこそこに麻里奈が沙樹の元にやって来た。

「78点、まあまあかな。森川さんは？」

今回のテストの平均が62点なので、沙樹の得点はなかなか良い方だと言える。

沙樹は特例入学ではあっても、特待生という訳ではない。

だが、そうは言ってもそれを知る者からすれば“特別”なのだろうという先入観は拭いきれない。

沙樹の得点は驚く程でないにしろ、そのイメージからすればそれ相応と言ったところだ。

「よしっ！！ 83点、あたしの勝っちっ」

麻里奈は沙樹が特例組であることを知る数少ない生徒の一人だ。

だが、事の詳細は話してはいないので、麻里奈の沙樹に対する印象はその先入観のままだった。

その沙樹に勝ったのだから自然と嬉しくもなる。小さいことかも知れないが、これから始まる高校生活に弾みがついた気分だ。

何気に麻里奈の得点は、とある上位者三名を除けば二位という好成绩である。“以外なことに”麻里奈はデスクワーク(?)の成績はいい。

因みに言えば、智之は75点。多少の前後はあるものの基本的に麻里奈の方がテストの点数は高い。

実は、普段からどちらが上だか分からないと周囲から言われるため、少しでも威厳を保とうと何気に努力している結果がこれなのだった。

だが、智之としては、テストの点よりももっと落ち着きをもって行動して欲しいと思わずにはいられない……

「あんまり自慢すんなよ。“お前みたいなのに”負けると目茶苦茶凹むんだから」

麻里奈の後ろを智之が麻里奈の頭を軽く小突いて通り過ぎる。

それはどういう意味かと叫ぶが、智之は取り合わずに凍夜へと模

範解答の解説だけでは理解出来ない部分の質問をしていた。

凍夜はそれに淀みなく応えてみせた。

「ああ、なる程なサンキユ。よく分かったよ。流石にこんなテストで100点なんて取ってるだけのことはあるよな。説明も教師の書いた解説より余っ程分かり易い」

「はは、残念ながら僕はそんな点数とは無縁ですよ」

凍夜は軽く笑って応えた。その笑みは、嘲笑という部類ではないし自嘲ともまた違っていた。

智之は凍夜の言葉に疑問の色を示した。凍夜の声は隣で、小夜を含めて話をしていた麻里奈にも聞こえたらしく彼女もまた同様以上に、驚きを示していた。

ざっとテストの点数を端末で確認したときに高得点者の上位三名は各々100点を取っていた。ならそれは、小夜・凍夜・神埜であると智之と麻里奈は自然に思い込んでいた。そして、それは彼らだけに限ったことではない。

ほぼクラス全員がそう思っていた。何しろ彼らは四大柱なのだ。低得点という無様な姿を全く持って想像出来なかったのである。

それ故に智之は凍夜に聞きに来たのだ。先走った印象かも知れないが彼ならばきっと分かり易く教えてくれるだろうと思つて。

そして、実際のところ凍夜は応えて見せている。

「それってどういうこと？」

惜しくも逃したというのならまだ分かる。しかし、彼は無縁と言つた。それは、自分が100点を取ることなど有り得ないと言っている。

智之も十分に気になっているところだが、麻里奈の方がより興味を示し凍夜のより近場にいた弟を差し置いて自ら問いを投げかけた。「簡単な話ですよ。貴方が、僕のことを勘違いしているだけです。論より証拠、これをどうぞ」

その言葉と共にホロウィンドウがポップされ、凍夜はそれを森川姉弟がそれぞれ見える位置にそれを示した。

「僕の今の實力”ではこんなものです。僕は“頭が悪い”んですよ」

「にっ！！ にじゅ、ん~~~~！！！！？」

その瞬間麻里奈が思わず叫べんた。

智之も目の前の画面にはかなり驚かされたが、それよりも日頃の成果と言うべきか麻里奈の叫びを押し止めようと無意識下で麻里奈の口を手で覆っていた。

いつもなら、何すんのよっ！！ と言って智之に喚き立てるところだが、流石に今回は言葉では表さないものの感謝した。

クラスの者たちが何事かとこちらを覗き見るがその視線を無視して二人は平静を装う。

麻里奈は馬鹿ではない。テストの点数がいいとか、そういうところではなく。人格的にだ。

普段は突飛な行動をよく取るし、思ったことが即言葉と態度に出るが場を考えない程愚かではない。

今クラス内、否校内に置ける凍夜の立場というのは実に危うい。それくらいのことは十分に理解している。

『魔法が使えないのに魔法学校に在籍している生徒』それが全校生徒の凍夜に対する認識だ。

更にはそれと彼の背負う名のことを考えれば『家の力で入学した者』ということになる。

その彼が今度は『頭が悪い』ともなればそれこそ収集がつかない事態に成りかねないのだ。

無論、智之もそれが分かっているでこれ以上探られないためにも、麻里奈には悪いが（とは思ってもいないが……）麻里奈に奇異の視線を集めておくことで留めておくことにした。

「でも、なんでだ？ さつき俺に分かり易く教えてくれてただろ？ 空欄になってるから、たまたま出来たところってわけじゃないしな」

少し落ち着くのを待つてから、智之は若干声の調子を落として質問をした。

「言ったでしょう、実力ではこんなものだって。今はイカサマしてるんですよ」

そう言つて凍夜は自分の頭を一差し指で軽くトントンと叩いた。

「イカサマ？」

何故そんなことを今更するのかが理解出来ない。

普通に考えて、テストで狡ずるをして得点を稼いでいる者が平時では不出来というのなら分かる。だが、その逆というのはメリットが見えない。

「お兄様……」

小夜が気遣わしげな視線を投げる。

そんな小夜に大丈夫だからと声を掛けて二人へ向き直る。

「今は時間がないですから、昼休みにでもゆっくりお話ししますよ」と言つて、取り敢えず二人を席に帰した。

「おに……」

「全部話すから、この話はその時に、ねっ？」

小夜が何を言わんとしているかに察しがついている凍夜は言葉を遮つて先に応え、それに小夜がはいと応えてこの件に関しての会話は一時幕を下ろした。

この時森川姉弟以外にもう一人、偶然にも友人の机に足を運んでいたとある男子生徒にまで凍夜の答案が見えていた……

アレから授業三つを挟んでの昼休み、当初森川姉弟にだけ話つもりだったが、成り行きで結局クラス全体に話すことになってしまった。

凍夜としては別段隠すことでもないのだから知れること自体には問題ない。しかし、わざわざこうしてみんなの前で言う様なことでもないだけに心境はある種複雑だ。

だが、だからといってもう後には退けない。自分としては大した

話ではないのだが、皆は興味津々　嬉々としてではない　といった様子を見せていた。

「始めに言って置きますが、皆さんのご期待に応えられる様な、紫司や四大柱絡みの複雑な事情は持ち合わせてませんよ」

苦笑い気味に前置きしてから本題を話始める。

「僕は不可解現象に遭ったチェンジリングなんです」
フェアリーテール

その瞬間、誰も彼もが息づかいの音さえ発するのを躊躇ためらいクラス内から音が消えたようにシンと静まり返った。

フェアリーテール　魔粒子遭遇以降、魔性気象や霊障と等しく魔性現象と考えられているが、他と異なり現在でも尚人知を超える理解し難い不可思議な現象であり、その内容は基本的には類を見ない。そのため、現時点で未解決であるその現象らを総じてそう呼称する。

チェンジリングというのは、元の意味で言えば妖精に攫さらわれてその代わりに用意された子ども『取替え子』ということあるが、今は不可解現象に遭ってしまった被害者を総じてそう呼ぶ。

これは不可解現象に遭ってしまった者の多くと、妖精の悪戯に共通点があることから来る。

取替え子は『病弱でほどなくすると死んでしまふ』と言われている。
チェンジリング

そして不可解現象の遭遇者もその殆どが、それを再現するかの如く即死ではなく数日から数年というときを苦しみの中で生き、最後にはその苦しみの中で息を引き取るという場合がよくあるのだった。また、『妖精に攫われた子どもは二度と家には帰れない』というのも有名な話だ。

この場合は、実際には帰っている。だが、帰った先は自分の家ではなくなっている。そこにいるのは血の繋がった実の両親であるに

も関わらずに……

この話の要は記憶にある。妖精は記憶を拐かどわかす。

つまり、帰ったとしてもそこが自分の家だという実感がなくなっているのだ。これでは確かに、もう二度と帰ることは出来ない。永遠に妖精に攫さらわれたままと変わらない状態にされてしまったのだ……

不可解現象の遭遇者にも、程度の差はあれ『記憶』に関するなんらかの障害がつきまとう。

『体』とそして『記憶』こころに深い傷跡を残す不可解現象は、当然人々にとって畏怖の対象としてある。

57・機械仕掛けのサヴァン2（前書き）

注意、今回の話の中には記憶に関することが書かれていますが、これは飽くまでも小説としての話です

57・機械仕掛けのサヴァン2

「僕はその不可解現象フェアリーテールに遭ったときに、各所に欠損を負うことになりました。そのため僕は現在その欠損部位たる“体の一部”を機械によつて補っている状態です」

実際のところ体の一部どころか義体部分の方が多いくらいだが、
敢えてそれを教える必要性はないのでそこは省いた。

憐憫れんびんの情が欲しくてこんなことを話すわけでない。凍夜としてはただそうであるという事実を押さえて置いて貰いたいだけだ。

只でさえ義体を使用しているという今時としては希有けうな存在なのだ。自身が気にも留めていないことでこれ以上余計な感情を持たれるのはごめん被りたい。

「ご存じの通りフェアリーテールはその多くの場合、『体』と『記憶』に障害を残します。僕の場合もご多分に漏れずという奴で、その両方に障害を負いました。」

そして、その『記憶』に纏わる障害ですがこれが僕の場合にはかなり特殊なケースに当たります」

不可解現象で起こりえる基本的な記憶障害は、消滅がその大半を占める。どの様な状態かはケースバイケースであるが、基本的に記憶が消えるというのが殆どだと言っていい。

そして彼らの関心事もどちらかと言えば、体のことよりもこちらの方が大きいだろう。

「実際のところ僕は“皆さんの言うところの記憶”はその一切を失つてはいません」

そのことを聞いてクラス内の殆どの生徒の緊張の意識が若干ながら和らいだ。

魔式生物学医療の発達した近代においては肉体的な損傷よりも、
精神的 精神そのものだけでなく、
霊体エーテルや感覚的なことなど内面的なこと
なことがより重きが置かれる傾向にある。

靈障を例外として大概の損傷は完治を当然とし、最悪の場合義体化することにはなるが義体だからと言って通常不都合があるという事は滅多にない。という今の医療レベルの高さからくる結果だ。しかし、それも束の間に次ぎの言葉で皆に一気に重い衝撃が駆け巡る。

「ただ、僕がそれを認識するのは天文学的な数字と言える程に不可能になりました。僕は『記録』を記憶として認識出来ない状態になっってしまったんです」

元からそれを知る三人はその事実をそれぞれに再度受け止める。

特に昨日新たな事実を知ったばかりの沙樹にとって、凍夜のこの事実に対する受け止め方は今までの比ではない。

知ったのがつい昨日だということもある。沙樹は中学時代に既に知っている話ではあるが、凍夜から語られる言葉を真剣に聞いていた。

「記憶というものには、三つ或いは場合によっては四つの過程が存在します。記録・保持・想起そして最後が忘却。

忘却というのは、皆さんがイメージする記憶とは逆のものかも知れませんが、これも記憶の過程の大事な一つとなります」

本来人間の脳は一度見聞きした情報は“失われない”。と言われている。

人間の脳はざっと百年分の記憶を保持出来る容量が存在する。とも言われる。

流石にこれらのデータを確実に取りうる手段だないだけに推測というレベルでしかないものの、現代科学で導き出された推測である。そこはある程度の信用はしてもいい推測。否、この場合は仮定だと言える。

しかし、その脳を持ってして。否、そうであるならばこそ忘却もまた必要なのだ。

過程の三つ目想起。これは、記憶の検索や再認または再構成のこ

とを指す。要は思い出すということだ。

人間の脳に置いて記憶という言葉は単に覚えるというだけに留まらない。思い出すことまでが出来て初めてそれは記憶という意味を成す。

言葉の例で言えば、『瞬間記憶能力』・『完全記憶能力』などのものがある。これらは、頭の中に情報が刻まれただけではそうは呼ばない。これらがそういった能力だと認められるのは、それを即座に答えられる点にある。

例えば百の項目を一度だけ見聞きしたとする。しかし、それを即座には答えられず数日たつてからとなると、喻え同じ条件一度だけという前提を守ったままで答えられたとしてもそうは呼ばない。

つまりこれらの能力の本質は、二つの仮定を前提とするならば『想起』にあり、検索と再認の速度にあると言えるだろう。

単なる言葉の綾でしかないが、これらを鑑みるに記憶とは『思い出す』ことを前提にしなければならぬということだ。

この能力に特化した人間ならばいいだろうが、残念ながらこの能力は“おいそれ”と手に入るものではない。

そのために忘却というのは必要になってくるのだ。

これも仮定を前提とした話になるが、もし『忘れない』『大量の容量がある』ということになれば当然脳は刻一刻とその情報を肥大化させていく。

しかし、想起の能力は個人差はあるもののそれ程に万能ではない。情報が増えれば増える程に目的の情報の検索に時間が掛かるようになっていく。

年齢が増す事に、時間を重ねる事に情報が増して思い出すのが遅くなっている話にならない。

そこで脳は、情報に優劣を付ける。つまりはそれが忘却だ。優先順位の高いものは早く思い出せて、低いものは思い出しづらいということになる。

忘却と消滅は違う。通常、健全な脳は決して記憶

記録そ

のものが消滅するということはない。

その様なことが起こるのは脳に何かしらの影響があったときだけなのだ。

これは余談だが、記憶喪失という言葉がある。

だが、全てがこの言葉の通りかと言えばそうではない。寧ろ、そうでない方が多いと言える程だ。

何故なら、そういわれる疾患の多くは一時的または死ぬまで戻らない場合だったとしても、実際のところは脳にはその記録は残されているのだ。

ただ、何かしらの原因でそれを見つけれなくなる又は、脳がそれを拒絶するというのがこの疾患の大半を占めている。となれば、その呼称としては『記憶喪失』というよりも『記憶迷走』と言った方がまだ正しい。

しかし、未だ脳の完全な解析は出来ておらず、物理的な損傷の有無は知れてもそこに保存されていたデータの損傷までは機械や魔法でも知ることは出来ない。

それ故、記憶を（喻え一時的であっても）思い出せない状態をそう呼ぶ。

「僕はその四つの過程の内三つ目『想起』に傷害が起きています」

そう、“現在進行形”でだ。

「言葉にしてしまえば、『記憶喪失』確かにそれで合っているとさえ合っています」

彼の記憶に関する障害は特異なケースであり、基本的なそれよりも悪辣あくらくと言っても過言ではないだろう。

「僕の症状の名称は『重複性想起障害』という極めて稀な……：というより、前例がないってことで……：つまりは今まで僕だけしかなくていいということですね」

最後に少し戯おもけた口調で言ってみせるものの、クラス内の空気が弛緩することはなかった。

別段それで皆の意識を和らげよとした訳ではないのでそれはそれで構わない。

凍夜にとつてはこれも意思表示の一つで、自身が気にしていないということを表した過ぎないのだ。

「そして、その肝心の内容ですが要は“上手く検索出来ない”、そしてどうにか検索出来たとしても更にそれを“再認し辛い”という症状です

一応言つて起きますが、『銘記』と『保持』には異常はありません。だから、想起の段階でこの両方をクリアすれば奇跡的に思い出すということもあります」

通常の想起に纏わる記憶障害とえば、逆行性健忘などと呼ばれる方をするものがある。しかし、彼の症状はそれだけでは当てはめることが出来ない状態だった。

逆行性健忘というのは極一般的に言われる記憶喪失の事例で、「ここはどこ?」「私は誰?」と言った人格に纏わる今までの記憶をなくしてしまう状態だ。

この症状は、今までのエピソード記憶を何らかの理由で読み込めなくなつた起こるもので、それ以降の記憶は問題なく機能する。

それ故に、記憶喪失以降は別人格としてだが普通に生活をすることは出来る。

だが、彼の症状はそうはいかない。

まず、読み込めない記憶の種類がエピソード記憶だけに留まらない。

エピソード記憶を始め、陳述記憶・意味記憶・非陳述記憶ありとあらゆる記憶の種類が意味をなさない。これだけならまだ所謂幼児逆行と言われる程度だ。

確かにこれはこれで相当な重傷ではあるが脳が機能していれば学習していくことが出来き、どれほどの年月が掛かるか分からないが、自立することも出来る。

しかし、彼の場合にはそれすらも出来ない。

先に述べた通り、通常の逆行性健忘はそれ以降の記憶には問題なくアクセス出来る。

だが、彼の脳は新たに銘記された記録さえも意味をなさない。通常これは前向き健忘という分類で、銘記に障害があるときに起こる症状なのだが、彼の銘記の能力には問題ない。

飽くまでも彼の障害の原因は『想起』にある。

彼の想起能力が正常に作動するのは、時間にして約二時間分の最新の記憶のみに限られる。

それ以降の分はどういう訳か急激に読み込めなくなってしまいますのだった。

そして、彼自身で言っている様に偶然にもそれを検索出来たとしても、再認の段階でそれが自身の記憶なのかどうかの判断が正確に出来ない。

どういふことかと言えば、それが自分の実体験による記憶なのかそれともテレビや本など外部からの知識なのか、はたまた将又自分の想像なのか………その判断が正常に行われないのだ。

実体験のほすの事実をそうでないと感じてしまったり、体験したことのない筈のことを実体験の様に感じてしまうのだ………

だが、それすらも稀な話だ。何しろ、検索の段階で読み込むことが先ず難しいのだから………

「まあ、ここまでは深刻な様ですが、別段問題はありません。何より、現段階で皆さんとこうして話をしているというのが何よりの証拠でしょう。」

確かに、“僕の脳単体”ではただのガラクタです。それでも、こうして正常に皆さんと向き合うことが出来ています。

それ故僕は科学の力は偉大だと常日頃から感心させられていますよ。

僕の脳には脳の記憶能力に代わるチップが埋め込まれています。そのチップのお陰で本来の能力を補って余りある記憶力を僕は手に

入れることが出来ました」

だが、それも彼であるからこそ可能だった完全な荒業だ。

そのチップが埋め込まれているのは脳の深部、本来そんなところにメスを入れようものなら即死は免れない。それを可能にしているのは穢れた聖水をその身に宿す彼だからこそだった。

「それに、ここまではフェアリーテールで被った後遺症の方ばかりをお話しましたが、何も悪いことばかりでもないんです。失ったものもありますが、基本的にはそれに代わる代用品を手に入れていきます……」

そればかりか、その性能が元のそれを上回っているとすれば悪いことばかりじゃないでしょう？」

ものは考えようとは言え、流石に皆がそれに同意するのは無理があった。

やはり人間生身である方がいい。その思考はなかなかに変えがたい。

能力の向上という点は確かに魅力的な響きだが、だが日本人の中で生身の体を捨ててまで力を得たいと考えるものがあるかと言えば答えは否だ。霊障の発症が少ない日本ではその思考は特に強かった。「それに、“失ったことで得た力”もあります。所謂、サヴァン症候群ってやつです。」

それで僕が得た能力は『高速演算思考力』、僕の脳は常人の演算力遙かに超えた演算が可能になりました。更に、コンピューターより優れている点として、コンピューターでは未だ不可能な感情思考も可能です。

一魔法士としては願ってもない最高の能力だと自負していますよ。確かに驚くべき能力であり、能力だけを見るなら是非とも欲しいものではある。

魔法士としてならば是が非でも惜しむ者はあるだろう。だがこれを、人間として諸手を挙げて受け入れられるかと言えばこれは否だ。

魔法士である以前にはやり自分たちは人間なのだ。

魔法は確かに便利である。昨今の世の中より高位の魔法師であることが好ましいに決まっている。

だがそれは健全であることが前提だ。全てはそうであるからこそ意味があるのだから。

確かに優れた能力ではあるだが、失ったものからすればそれは（凍夜には申し訳ないが）“たかが”と言える程度のものでしかない。というのが、この場にいる者たちに限らずそれを知った者ならば思う筈の答えだった。

ここまでを話して凍夜は改めて皆の視線を確認する。

そこにあるのは戸惑い憂いのそれが殆どだった。

自身が気にしていないことなので、彼らにも気にして欲しいとは思っていないが、それでも今はそれである種の安堵感がある。

何せ彼らは普通の一高校生に過ぎない。そんな彼らがこの話を聞いて取る反応としては極真つ当なものだからだ。

その中であって只四人にして七つの眼差しは、皆のそれとは違うものであった。

単に憂いているだけではない二人の視線は熱く同情というには余りある熱を持ち、一人の眼差しは見ているこちらの方が哀愁に駆られる程に切なさを宿していた。最後の一人、その者からだけは熱のないしかしそれでも冷たい視線でない、事実を有りの儘に受け止めているという真摯な眼差しを感じた。

「さて、前置きが長くなつてしまいました、ここからが本題です」だが最早皆の意識はそこにはなくなつてしまっていた。

当初はそれを目的として始まった筈の話であったが、予備知識と必要な話が深すぎてすっかりそちらに気を取られていたのだ。

「さつき説明した通り、僕の頭の中には自身の脳に代わる高性能の記憶装置が埋め込まれています。更に、高速演算思考と相まって実に優秀な機能を果たしてくれています。ですが、それは僕自身の力ではありません。

普段の生活をする上でならいいでしょう。でも、この学校という組織に組みする生徒の一員である以上、僕は皆さんと対等ですよ。いや、対等でなければなりません」

このとき皆は胸を打たれた。

紫司・四大柱であるという生まれの立場、皆よりも年上であるという事実、魔術が使えなくても魔法学校に在籍しているという異常……それらをもってして、『対等』と掲げているだけなら誰も何も思わなかっただろう……

だが、彼は違う。

自己の抱える負の要素も含めて、それでも尚皆と対等であろうとするその姿勢に……

優等生が劣等生に手を差し伸べる様な高圧的な慈悲ではなく、劣等生が優等生と高を並べる為おとしに貶める様な醜みにくい嫉妬心からでは決してあり得ない、その両者の資質を持ってしてそのどちらでもない、彼の頑ななまでに真摯な強い有りように……

それを口先だけでなく公言するよりも先ずそれを事も無さ気に行するのその態度に……

皆は強い想いを感じた。

『対等』であること、“高々その程度”のために要らぬ恥を忍ぶ様な人間に何を思うことがあるのか？ と、この場にいる皆は再度凍夜への意識を改めた。

彼の話した事実には偽りはない。しかし、多少の着色と隠蔽いんぺいがあった。

実際のところ確かに彼は不可解現象と呼べる現象で四肢を失っている。だが、それはフェアリーテールではない。

フェアリーテールというのは飽くまでも魔粒子による魔性の“自

然現象”に限って使われる。

彼がその霊体を失う原因は間違いなく人為的なものであり然も、その犯人すらも発覚している。

ここで語らなかつたのは、二重に意味がある。

確かにこの場では不要であつたというのが一つ、そしてもう一つがその事実を知るのがこの場では凍夜以外に“もう一人”しか知らないという点にある。

これが一体どういう意味を持つのかはその事実を知る者以外には知る由もないことだつた……

これが、着色の部分。そして隠蔽であるがこれは、それこそ必要のないことであるが故に省いただけのことだ。

彼の記憶障害は実のところあれだけではなく『忘却』にも異常を来しているのだつた。

だが、それを言わなかつたのはこの場ではその意味を成さないからだ。

そして、これが沙樹が知つたばかりの事実の一端でもある。

彼には忘却が存在しない。

彼の積み重ねる記録には、優劣が存在しないのだ。

全ての記録が等しく同じ優先順位であるということ、それが彼の検索ミスに大きく荷担しているのは間違いないことではあるが確かにこの場では不要なことだつた。

だが、これが彼を取り巻く人間関係 取り分け『恋愛』に

分類される感情を向ける者たちからすると非常に大きな意味を持つようになる。

彼が話をするときにはこの様にして話す場合が殆どだ。

この様にとというのは、事実と虚構・隠蔽を折り合わせてという意味を指す。

彼には数多くまだ明かせない秘密がある。

それは、四大柱として一般人である者たちに対してのもの・『兄』

として『妹』に対してのもの・一個人としてそれ以外の者に対してなど様々だ。

それ故彼は敢えて秘密を作る。

木の葉を隠すなら森の中、人を隠すなら街の中、秘密を隠すなら秘密の中……

一見どうでもいいことを敢えて隠したり、逆に一見（どこころではなく翌々考えても）重要なことでもさりと話したりする。

そうすることで彼は自身という存在を“さらけ出している”のだった。

57・機械仕掛けのサヴァン2（後書き）

もし、記憶の分野に詳しい方が居ましたらお話を聞かせて頂ければ幸いです

一応、自分で調べられるだけ調べたのですが、どうも分からないことが多くて、そういった部分は脳内補完&強制変更しちゃってます

自身の更新の不出来振りに呆れ果て、どうにかしようとしてネットブックを購入しました

これで少しはマシに………なることを祈ります（お前がか！！）

58・始まりの雨

今日の1-Aの体育の授業はいつになく賑わいを見せた。そして、それには凍夜という存在が関与している。

今まで体育の授業は見学だけだった凍夜が初めて参加したのだ。

凍夜は今まで『体調不良』を理由に体育を休んでいた。それは、高校に入ったときからではなく、中学時代からそうだったことなので、それを誰より驚き心躍らせたのは沙樹だった。

だがそれは当然のことながら全員が全員、沙樹と同様にして同等に思った訳ではない。

しかし、それでもいつにない熱意を掻き立てられたのは間違いない。凍夜の存在があつた。

凍夜たちの登校時間は比較的早い方だと言える。

転送装置がある今、殆どの者にとって登校時間や登校距離というものは自宅から駅までのものであると等しい。

となれば、時間ギリギリまで自宅にいたい　元い、寝ていたいと思うのは人の性だろう。

例え周囲からエリートだなんだと言われようが、彼らとて普通の高校生である。朝の時間をゆったり過ごしたとて何ら不思議ではない。

ということ、大多数の生徒たちの登校時間は予鈴の十分前当たりがピークとなる。

凍夜たちの登校時間は更にその三十分前頃だ。

前時代なら早いと言われる程ではないが、今の時代では十分に早い時間だと言えた。

だが、”学校で”何かをする訳でもない。寧ろその前……登校そのものが、小夜にとって重要なことだった。

小夜にとって”登校の道のり”と云うものは非常に大きい意味を

持つ。

凍夜たちの家から学校と駅までの距離はほぼ等距離にあるため、彼らは徒歩で登校する。

その際、”凍夜は”真っ直ぐには学校へ向かわない。その時々で路を変え、敢えてゆっくり歩いては時間を掛ける。

本来、二十分も掛からない筈の時間を倍以上掛けて登校するのだった。

理由は推して知るべし。朝のこの登校という時間を利用して登校という名目の散歩……………デートと洒落込んでいるという訳だ。

そう言った理由から時間には十二分な余裕を持って出掛ける（小夜は単身で瞬間移動出来るのだから本来そんなところに気を遣う必要はない、という身も蓋もないことは考えない）。

しかし、今日は生憎の曇天。土曜日に小夜がテレビで見た『嵐』の影響であることは間違いないだろう。

昔ならいざ知らず今の小夜ならばそれ程警戒することもないのだが、そこはやはり凍夜。

普通こんなことを言われれば、『どういう意味だ？』と問い返すのが真つ当な反応の筈だが、それを誰かに言われたとしてもその意味を正確に理解した上で、『どうも』の一言で受ける（受け流すわけではない）当たり最早末期だ……………

その過保護な凍夜の配慮により、何時もよりも更に少しだけ早い時間で学校へとたどり着いた……………にも関わらず、彼が待ち受けているあたり、一体彼は何時からこうしているのかと疑問に思わないでもない。

そして何時もの様に、しかし何時もとは違う方法で彼を去なした。この時間彼らのこの不毛な戦闘（？）は、それ程多くの者の目に留まることはない。

だがこのとき何の偶然か、クラスメイト1-Aの誇る『三バカ』（本人たち否定）の一人、キッシーの愛称で親しまれる岸尾だいです

けがそれを見ていた。

キッシーが今朝の一件を見ていたことにより、凍夜の新技披露会をやるうと言い出した。

当然この会というのは単なる語呂合わせであって、特別な何かを彼らがする訳ではない（それどころか、凍夜にとっては新技という訳でもない）。

寧ろ、凍夜により手間が掛かるのだが、それに気を払うでもなく皆はそれに大いに賛同し、その結果として体育の授業がいつになく賑わいを見ることとなったのだ。

魔法科に置ける体育の位置づけは実に微妙である。というのも、生徒からしてみれば実習？とほぼ同義だからだ。

本来、体育は非魔法科目であり魔法を使わない運動をするということ謳っているのだが、高校生たちがそれを守ることにははっきり言って稀である……

一応必修科目にあげられるために名目としてそう取っているだけであって、教師たちもそこは目を瞑るところだ。

そんな体育の本日の内容はサッカー。本当ならクラスを適当に半分に分けて、15対15の変則プレーをすることになる。

確かに初めのうちはそうなっていた筈のだが、途中から三つの勢力に分かれてしまった。

一つ目は勢力と言いつつも一人だけ、勿論凍夜一人の仕掛ける側。二つ目は凍夜と数名を除くそれ以外の全員の受ける側。

そして、受けるのではなく“見る側”に回った観望者たちという変則過ぎる三つ。

当然その内容はサッカーという競技をなしてはいなかった。

皆の希望に応じて凍夜が真をあしらった技を繰り出した。

一瞬にして視界から消えるその現象に皆は目を眩^{みは}る。

魔導波は感じなかった。『魔法』ならば魔導波が伴う。

そしてそれは、魔法器^{ボアムス}であっても同じ事……であるならば、これは“魔法ではない”と言うことで間違いない。と、皆は判断する。

凍夜は“魔法が使えない”のだから、これも何しかの法術の効果の一つであることは疑いようもない。

だが、彼らが法術についてその触りだけでも知ったのはつい最近のこと、それも凍夜に教示されてのことだ。

そんな彼らにその教えを説いた当人の繰り出す技を、それもまだ教わり始めたばかりの段階のヒヨツ子では、それが法術だということ以上のことは分かりようもなかった。

視界から凍夜が消えて皆が困惑している間に、いつの間にやらボールがゴールに押し込まれていた。

始めはサッカーという競技を行いつつのことだったが、何時しか皆はこの技を看破しようと敵味方関係なく躍起になり、いつしか凍夜一人（仕掛ける側）とその他（受ける側）という勢力に二分された。

だが”直ぐ”にという表現よりも早く……というより受ける側に参加せずに観望者に回った者が二人 否、三人いた。

一人は元からそれを知る故に当然と自負し、そして彼女が自分と同じく観望に回ることに驚きはない。

しかし、彼が自分たちと同じ側に回ったことにひとまずは驚きを感じずにわ要られない。

だが、別にそれは彼だからという訳ではない。

誰であろうと小夜の反応は同じ反応を示す他にない。何故ならそれをやってのけたのは他ならぬ凍夜なのだから……

「檜山様は傍観なさるのですか？」

一見して極普通の質問。

だが、修之はこの質問に小夜らしからぬ違和感を感じさせられた。彼女と初めて会ってからまだ一週間程度、交わした言葉もそう多

くはない。

しかし、それでも感じられる程に彼女は……………
つと、そこまでの結論にまで達し、

(厭いやな男……………)

今この場では絶対口に出来ないことを思い、小夜へ返事を返した。
「いや」

小夜の質問『意味』を、恐らく……………それでも間違いないだろうと
いう確信を持って、正しく理解出来たと判断して否定した。

そして、更に的確に返す。

「暫くは『観望』させて貰うさ。こんな芸当は早々“見られる”も
のじゃないからな。精々勉強させて貰うさ」

小夜は“今度こそ”修之に感心の驚きを露わにして示した。

「ただのあれだけで、もうお解りになったのですか!？」

何の前置きも心構えもなくこの技を凍夜に繰り出されれば、一流
の魔法師でもいつときは拐かどわかされる。

それをこの短時間で正確に捉えているらしい修之に、小夜は驚か
されているのだ。

「いや」

しかし、修之はそれを否定する。

「以前に一度見ているからな。そのときに若しやと思ってたから解
つただけさ。さっきのが真正銘一度目なら、俺もあいつらの中の
一人だった筈だ」

修之は幾人かで固まり凍夜の技の仕掛けを暴こうと話し合う集団
に視線を流した。

小夜は更に修之に対する感心を強くして、先ほどの自分を恥じた。
「それもお気付きになられていたのですね。私感服いたしました。

そこまで存じていたとは露知らず、とは言え先ほどは無礼なもの
言いをしてしまい申し訳ありませんでした」

修之が感じた違和感。それは、『傍観』という言葉。

傍観とは、ただ旗から無関心に見ているだけということ。

他の誰かならそのまま受け流すところだが、あの小夜が単なる言葉の綾とは言えそんな（些細ことなれど）言葉を凍夜に対して使うとは思えなかったのだ。

そして、自身も見る側に回ったにも関わらず、『檜山様“は”』と自分を限定したことだ。

そう判断して、修之はそれを否定して、観望という言葉を持つて返したのだった。

表面上は兎も角としても、それを正確に読み取った修之になら、確かにあの質問は失礼に当たるだろう。それ故小夜は動もすれば、腰を深く折り曲げ頭を下げてしましそうな程の勢いで謝罪した。

実際にやらないのは、やられた方が反って迷惑であろうことが分かっているからだ。

修之はそれを『気にするな』と返し、グランドで右往左往している皆を見ていた。

横合いから凍夜に翻弄されるクラスメイトを眺めつつ、“注意する”のはやはり凍夜の“動き”だ。

「凄いな……」

その凍夜の動きを見ながら修之が素直な感想を述べた。

「『APS』のディスプレイーステップというやつか……？ これ程鮮やかだと、分かってはいても“見てる”と“見えなく”なりそう
だ」

小夜は修之の発した言葉に耳を傾けた。

今の世界の状態からして日本人が国外へ行くことはまずない。一般人にはその発想がない程にあり得ないことであり、また逆に日本に外国人が来るということも稀なことである。

そうすると当然異国の言葉というものに対する認識も薄く……それどころかなくなつて”いる”。

昔から日本人は様々な国の言葉を独自に砕いて転用するということをしていたために、今ではそれらの外来語を含めて日本語という認識になっている。

そのため、その外来語に至っては日本独自の発展を遂げて、元々の意味とは掛け離れたもの（キューブが良い例）や文法や品詞のへったくれもなく　　という程度に収まらず、元来起源の違う言葉を掛け合わせて使うことや語呂合わせで使うことすら茶飯事となっている。

差し詰め、島国根性こゝろねいせいここに極まれりと言ったところだろう……
そして、法術系に関する言葉は特にと言える。

それは、日本という国が元々から魔術よりで法術に疎かったために、法術はどちらかと言えば異国の文化というイメージから来る。

修之の言ったAPSとは、Active-void boundary流動法術の第二系という意味だ。

「その通りです。あれは、ウツウツ流動法術の二系の歩法：『くちりやく消足』。

それも、お兄様が手を加えられた改良版『忍び足』という技です。流動法術、流れや動きそのものが意味を成す法術大系の一つ。

その正体は足運び。この様に法術を用いた特殊な足運びを総じて『歩法』と言う。

「成る程通りでな………」

ディスプレイアーステップ消足というのは、消えるのは消えるが身動きが取れなくなる。

人間の意識は目に見えていても意味を成さなければ、認識できない。眼には見えていても“見えなくなる”。

消足というのは、それを強制的に引き起こす歩法だ。

他人の意識から一時的に自分の存在を無意味な風景の一つと誤認させている。

だがそれは所詮は一時凌ぎ、余計な動き一つで容易にその意味を取り戻し、人の知るところとなる。

本来、一瞬の虚を生むためだけの技でしかない。

しかし、凍夜は消えた状態を維持しつつ移動する。それも、時間はまちまちであり、数度見た限りではどうやらそれは任意であるらしい。

凍夜の忍び足は、自身を他人の意識をから外す『抜き足』とその逆に引き付ける『差し足』に寄って構成される。

先ずは、差し足で皆に自分の存在を強く意識させる。その間で抜き足を使うと他人は凍夜がそこにいなくてもいると誤認する。そして、差し足の効果が切れたときに、初めてそこにいないと気付き消えたと感じる。

更にそのときに差し足をまた使用する。すると、不思議なことに人間には消えたまま印象づけられる。

これらを繰り返すことにより、消えたまま移動するのだ。

人間は思い込みの生き物であるということを証明する様な、意識の錯覚を利用した巧妙な技だ。

修之が言っていた様に、実は凍夜はこの技を一度皆の前で使っていた。

初授業のその日の実習？の時間。小野大輔　クラスの総意(?)により大輔あらため小野D　との模擬戦にて、後ろに回り込んだときにやってのけたのがそれだ。

その一回とこの時間で凍夜の技を見切った修之に小夜は心から感心する。

確かに知っていたならば見破るに苦労は無いだろっ。

気付いてしまえばただの錯覚でしかないのだから、意識一つでどうとでもなる。

だが、そうは言っても相手は凍夜。そのレベルは一流の魔法師であつても一時とは言え、術中に掛ける程だ。

その彼の技を、確かに“見せるために”練っているとしても、こつもあつさり看破して見せたのだから驚いて当然だった。

(厭な女)

小夜は自己嫌悪を感じずには要られない。

修之とのやり取りの後で小夜は一人沈んでいた。

中には“そういった輩”が居るということも考えて置いて然るべきこと……………

それをこの様に責め立てた自分が矮小すぎて嫌いだった。然もそれがただの自分の勘違いだったとなれば、最早目も当てられない……………

曇天の空模様に等しく、小夜の心にも陰が刺していた。

天気が徐々に崩れ始めた。

肌で感じるかどうか、霧の様にも見える程の雨が降り始め、少しずつその密度を増していく。

小夜はそのことにハッと気付いて、凍夜の元へ駆け寄った。

「お兄様!!」

そして、雨のときのいつもの対処を施そうとしたところで凍夜に止められた。

「今はいいよ」

「えっ、ですが……………」

「これも何かの縁だよ。丁度良い、百聞は一見にしかず。みんなには、直接見て気付いて貰うさ」

そう言って小夜を下がらせた。

未だ修之以外の生徒には凍夜を捉えた者はいない状態だった。

凍夜は説明するよりも先ずは皆に考えさせる。

あらゆる状況から自分で答えを見つけ出すこと、それが今後の人生で大きな力になることを知っている故のことだ。

困難に直面したときに自身で乗り越えられない様では意味がない。これは、魔法師であろうとなかろうと関係なく人間として必要な力だ。

皆は幾度も繰り出された忍び足を見極めようと、凍夜を凝視していた。

実のところそうすることがこの技を最も見破り難くすることなのだ、皆はそのことをまだ知らない。

そのため、未だに皆は凍夜を捉えきれないのだった。
しかし、皆は今の状況になって現れた変化に気付いた。

凍夜の姿が霧雨によって浮き彫りにされるようになったのだ。
所詮は忍び足は眼の錯覚に過ぎない。実際に消えた訳ではないの
で、当然ものが触れれば当たりもする。

全身を覆う霧雨ともなれば、雨が人の形を作り出すのは当たり前の
ことだった。

皆はそれを手掛かりに凍夜の姿を探す。

「おお、見えた!!」

すると不思議なことに今まで見えなかった凍夜の姿までもが見え
る様になった者までいる。

一人や二人だけでない。時間を追う毎に増えていく。

そして、凍夜の姿を捉えた者たちはその姿に魅了された。

《IBGM：まつりうた／林原めぐみ》

凍夜は舞っていた。

雨の中を皆の合間をかくぐりながら淀みなく。

時折溜まった水滴が髪先から跳ね飛ぶ様や、ぬかるみ泥濘始めた地面から
泥が跳ね上げるその様までもが美しかった。

しかし、それも長くは続かない。

凍夜の姿が直ぐにまた見えなくなってしまうのだ。

だが、また雨や足下の泥を辿ると容易にその姿を見つけることが
出来る。

しかしまた……………

皆はこのループを暫し繰り返すことになった。

全員が凍夜を正確に捉えられる様になった頃には、凍夜はすっかり
全身を濡らしていた。

58・始まりの雨（後書き）

どちらかと言えば、ここからが、厄災・天編の始まりな感じ……

……
なんだか一日の密度のやたら濃い作品ですが、もう少ししたら時間軸の流れも早くなる……予定……

59・神住まう厄災

忍び足を捉える方法それは見ないこと。

真正面から向き合おうとするとその効果で拐かされる。

忍び足の効果は見ようとする意識に作用し、術者を意味のないものと認識させることで、見ようとしている対象が意味を成さないために、視えないと脳が錯覚を起こす。

だが、元から見ようとするのではなく、視界の端に不意に捉えただけならその姿を見ることが出来る。

興味のないものが目の端に掠めたとして、そこに『何か』があるということは分かったとしてもそれが何かまでは分からない。所詮見ようとするでもなしに見たものは元から意味を成していないからだ。

元から意味のないと判断されているのだから、それ以上の変化はない。それ故に見ることが出来る。

しかし、それを故意にやろうとするとなかなか難しい。

それに意識を集中せずに、それを捉える。言うは易く行うは難し、一朝一夕とは行かないのが普通だ……

それを1・Aのクラスの者たちは僅か50分という授業の中でやっつけたのだから大したものだ……と、言っても差し支えないし、実際彼らの努力は認めるところではある。

だが、この事態の功労者はやはり凍夜である。

丸っきりの素人である彼らに、それを意識させずしてその方法を身に付けさせた彼こそ、誰よりも称賛に価する偉業だと言えた。

今時高校生にもなつて雨に濡れるということは非常に珍しい。

方法は十人十色なれど皆一様に魔法を使用するためだ。

勿論凍夜とて平時であればそうならない様にするための手段を持ち合わせている。

しかし、あの時は忍び足を使用していたためにそれは叶わなかった。

出来ないということはない。だが、喻え幾多もの術や技を体得した凍夜と言えども、それを幾重にも渡って使用することは容易なことではない。

それに、あの場ではそのままにしておくことが皆のためでもあった。

その甲斐あってクラス全員が凍夜を捉えられる様になるまでに至った。

本来、あれは体育の授業であって魔法教科ではないので、凍夜が教えを説く義務はない。更に言えば、こうして学校という組織で教えるということ自体が詠歌によって押しつけられている状態であるとも言えるので、義理すらもない筈なのだ。

そうである筈の授業を一人ずぶ濡れになりながら終えた日から数日、その雨は未だにあがってははいない。

それどころかその勢いは増すばかりだ。

テレビの放送では『嵐』　つまりは、魔性乱流の影響というだけの情報しか流れてはいない。

四月という時期でありながら……否、最早これ程にまでとなると季節など関係ない、それ程までにこの降り注ぐ雨は温かかった……

……

幾人かの者たちがだだっ広い和室に詰め寄り、事態の再認と打開に向けての話し合いを繰り返している。

そこに集う者たちの面々たるやこれ以上ないという程に”錚々”と云うに相応しい。

「事情はともあれ、目下の最優先事項は如何にして“あれ”を消し去るか……ということろね」

「『九極天』に吹き飛ばして貰うってのはどうさ？」

「無茶を言うな、あれだけの規模だ。それを力でねじ伏せたらその後がどうなると思ってる」

「分かってるさ。たんなる冗談さ……」

「なら、中和を計るといっのはどうでしょう？ 今回の、イーフリーハビテット。更に不幸中の幸いとして、あれはまだ海の上です。強力な水気で中和出来るかと思えます」

「ああ……、そいつは多分無理さ……。詠歌姉さん」

「何故だ継貴？」

詠歌から問われた月友継貴は、自分でも半信半疑である内容を戸惑いがちに口にする。

「あの獄炎嵐はただの魔性現象じゃないのさ……」

「どういうことですか？」

今度は緋捺璃樹澄が問いかける。

何しろ彼の言葉は捨て置けない。

ただの魔性現象ではない。というのなら分かる。

天の厄災は、地の厄災と並ぶ最悪の厄災。

その驚異は日本であつても捨て置くことは出来ない。

血晶結界の効果で国内にて発生することそないものの、外で起きてしまったものまでは然しもの血晶結界もその力を抑えることは出来はしないからだ。

しかし、彼は魔性現象を指して“ただの”と、そう言ったのだ。

「オレの見立てじゃ、あの魔性乱流は確かに規模は大きかったけど、精々気象変化で留まる筈だったのさ……」

それがどういふ訳か、急に火気を帯び始めて数時間で獄炎嵐の出来上がりさ。更に、オレ自身で確認してきたんだが、あれは一次限現象じゃないのさ……」

『オレ』の発音に訛りを効かせ、危機的な内容とは裏腹に独特のユツタリとしたテンポで継貴は話を続ける。

「あれは見た目は普通の炎だけど、二次限事象だつてことさ。」

今の雨は確かにあれの影響だけど、直接的に起こってるわけじゃなくて、二次限層からの熱量概念を受けているのさ」

その話を聞いて一同は俄にわかには信じがたい話に渋い顔をする。

だが、誰も継貴の言っていることを疑っている訳ではない。

皆が信じがたいのは事柄の異常性……………

魔性気象というものは自然現象だ。風・日差し・波その他様々な自然現象が複雑に織りなすことで起きる法術による魔法の気象変化。二系の様に導的効果を現すだけでは済まない、法術の第一系による本当の魔法の現象。

自然現象であるだけに、起こる事象は様々で今回の様な炎嵐、その他に雷・恍・重・時などさまざまな現象がある。

だが、今までに観測されたことのある現象全てが今のところ一次限層 物質界における現象だった。

今回の獄炎嵐イフリハレメットは見た目通りの代物ではなく、二次限層 非物質界における事象だというのだ。

確かに自然から発生する法術なのだから、何があっても不思議ではない。

しかし、今までに起こったことのないことだけに皆困惑している。更に、この事柄が二次限層ということになるとその干渉は高位の魔法師と言えど、そう容易いことではないだけに、頭を抱えているのだった。

「さっきのお前の冗談も、本気で考慮しなくちゃいけないかもな…

……………」
「年齢三十五にして羽月わづなの頭首となった若き（なれど）獅子と呼ばれる誠吾せいごは、先ほどは自分で即座に否定した継貴の案を再び挙げた。
「そうすると米帝アメリカからの抗議は覚悟しなくてはね……………」

樹澄も苦笑を交えて中半本気で対応策の検討を既に頭の中で考え始めていた。

「月友公、あれの解析はどうなっている？ 表層的な部分は兎も角、発動の術式が解ればまだ手の打ちようもあると思うが？」

「残念ですが紫司公、そいつは人間には無理さ。」

オレたちが気象を解析する方法は、現象からの逆算なのさ。それが可能な法術の組み合わせを膨大なデータの中から照らし合わせて発動術式も求めて行くって方法さ。」

でも、今回の様に前例がないんじゃ、それは無理なのさ……」

「ならば、貴公らの『サイコメトリー過去視』ではどうだ？」

「それが出来ないから人間には無理なのさ……」

オレたちの過去視の能力は万能じゃないのさ。」

過去視ってのは、アカシックレコード零次限層に介入して情報を読み取る能力の一つ

さ。でも、何故零次限に直接介入する能力なのに、オレたちはいつも現地・現物に直接触れるか考えたことあるさ？」

過去視の魔法、それは月友の所有する魔族としての固有魔法。」

各魔族家系の固有魔法はその秘密が外部に漏れない様に、同じ魔族同士であろうとも、喻え彼らを統括する四大柱であろうともその詳細までは知らない。」

「零次限には全ての情報が漂ってる、その中から必要な情報を見つけ出すっていうのは、それだけで一生掛かっても為し得られない大仕事なのさ。」

オレたちが現物に直接触れるのは、それを出来るだけ限定的にするためにやってることなさ」

「つまり、直接触れられない二次限層のことは調べられないということか……」

「それも理由に挙げたいところだが、実はそこじゃあないのさ……」
「どういうことだ？」

「確かに容易なことじゃないさ、でも今回の場合ならまだ絶対に無理ということもないのさ。」

でも問題なのは情報量の方なのさ。」

自然現象っていうのは、それだけで物凄い情報量さ。その情報量は、とてもじゃないが人間一人の脳でどうこう出来る量じゃあないのね……」

それに、アカシックレコードから情報を引き出す際は、その情報に応じて最低限の回線が繋がってなきゃいけないさ。オレの脳じゃ、まずその情報の一旦すら引き出すことは無理さ」

継貴で無理だとするならば他の月友家の者でも無理だということだ。

彼はそれだけの力を持っている。それは、ここにいる誰もが認めていることだ。

「ならば、やはり力押しで消し飛ばす方法しかない……ということか……………」

詠歌も力なく呟き唇を噛みしめる。

最終的判断を仰ぐべく、皆は今まで一言も挟まずただ鎮座する蒼縁の頭首たる哲生に視線を集中させた。

「一つ確認する……………」

そして、その状態で幾ばかりかの時間が過ぎ漸く哲夫の口が開いた。

「お主の言い方だと、丸で“人在らざる者”ならば可能だと言っている様にも聞こえる。それはどうか？」

哲夫は継貴を見るではなく、質問のみをして眼を閉じたまま座している。

一同は、哲夫に向けていた目を継貴に向け直した。

「流石は蒼縁公さ。」

まあ、オレも実際のところ『彼』の能力を知ってるわけじゃあないさ。だから、恐らくという推測でしかないさ」

それを聞いて（哲夫以外の）一同は更に顔を曇らせる。

「……………私は、出来ることなら彼にはあの一件以外関わらせるべきではない。と、そう思っているのですがね……………」

「私も同感ですね……………まあ、こればかりは“我々部外者”がどうこう言えたことでもないでしょう……………」

だが今は、事態が切迫している。選択の余地があるとも思えませ

んがね……」

樹澄と誠吾はその判断を委ねた。

こと彼に纏わることは、自分たちは直接的に関係していない。しかし、当事者たちにとって彼という存在がどういう存在なのか知っている。

それ故に、当事者たちのことを慮って自分たちは口を挟むのを辞めたのだ。

「あれはそういう存在だ。そうあるべくして生を受けたのだ。今更を気に病む必要はない」

哲夫はそう言い切った。

「ともあれ、あれにどれ程のことが出来るとも分からん。取り敢えずは、あれとの話を付けねばな……」

「ご子息をこの一件に？」

康嗣は分かっているつもりでもやりきれないと云った表情で哲夫を見る。

だがいついかなるときも、日本の行く末を担うこの男の表情にはただの一点の陰りも見つけることは叶わなかった。

「場合によっては」な。妙案があるなら聞こう……ただし、時間はそうはない」

場合によって……哲夫はそう言ったものの、それがほぼ決定事項であることは誰にとっても明らかだった。

彼の存在が表舞台 自分たちの活動の場であって、歴史の表舞台ではない にあがる。

そのことに誰もが何かを思わずには居られなかった。

しかし、事態は更なる転換を見せた。

『彼』が自らの意志をもってそれを拒絶したのだ。

そして、哲夫が口にしたその妙案をその彼の口から聞こうとは誰も予測していなかった。

業炎渦巻く大天災^{こうえん}

底から吹き上がるだけでは足りない、天上から降り注ぐもまだ足り
ない……

見渡す限り一面に広がり、そこかしかで龍が群れをなすが如く蠢
き、忽然と姿を消してはまた這い回る

恐ろしくも幻想的で魅惑的な光景に、人は『神』の存在を見出した
その様は正に、『炎神の住処』^{イフリールハレニット}

全てを灰にする炎神の以外の所行だとは誰も思うことはなかった

「それじゃ、今日もよろしくね」

外に出る前、玄関の中で言葉と共に凍夜は左手を掌を相手に向けて差し出した。

差し出された相手である小夜は、その手に自らの右手を重ね合わせて意識を集中する。

待つこと約六秒、凍夜は魔導波を感知する。

先週の段階では十秒以上の時間が掛かっていた。しかし、ここ最近では毎日繰り返し返している事もあって大分スムーズになってきた。

「如何でしょうか？」

「うん、問題なし。そろそろ接触しなくても、任意で対象の設定が出来る様に練習してみようか」

「はい」

そして、二人は外へ出た。先週からの雨が依然として上がってはいない。しかし、二人の手には荷物はなく、互いの腕を組む姿もいつもと変わらない。

二人はシトシトと大粒の雨が降り注ぐ中を常と変わらずに歩いていく。先刻掛けた小夜の魔法の加護を受けながら。

若干でも魔法の心得がある者なら、雨風を避けるという程度のこととは容易にやってのけるのでそれ自体は珍しいところではない。

しかし、ただ擦れ違うだけの者たちでは分かりようもなく、暫し現象を見て気付くかどうかというレベルの些細な異変を二人は纏っていた。

こういう雨の日に大概の者たちが使うのは、防壁の魔法であることが普通だ。

頭上或いは全身を覆う防壁を展開することによって、雨を避けるという最も単純な方法である。

それ以外にもいくつかの方法はあるが、どれもこれも”雨を避け

る”という点に通じて、普通は目に見えてそれと分かるものだ。

だが、二人は 二人の周囲には、それらしい反応はない。一見すれば、魔法を使わずに雨に当たりながら歩いているかの様にも見える。

しかし、二人が雨に濡れるということは勿論ないことだ。

良く見れば雨は二人の体を通り抜けている。

まるでそこには本当は人がいないかの様に、二人が幽霊であるかの如く降り注ぐ雨は一切の変化を伴わずに、あるがままに舗装されたアスファルトにまで届いていく。

凍夜を名乗るのこ少年が、“小夜のために”本物の『凍夜』の死を祀るための部屋を作ったときに使用した空間概念操作魔法、その大本たる『次限系統』の魔法だ。

世界は起源と二つ ある一部のものたちからすれば、三つの内世界から成り立っている。

第零次限世界層：全ての外世界に置いて共通でアカシックレコードのことを指している。全ての起源であるが故に零番目という位置づけがされている。

第一次限世界層：この世界の仕組みの世界。つまりは、人が生きている物質世界のこと。この世界は、『オーベ・レセル』という『ジドリックレコード』ジドリックレコードに従って成り立っている。

まだ実際に観測されたことは無いが、こことは違う『概念序列』の世界があるとされて、それを外世界と称している。

また、こちらにも観測はされていないものの、そう言った概念もあるということ、同じ起源からなる類似の世界 所謂、平行世界パラレルワールドという世界もあるとされている。

第二次限世界層：一次限層の魔粒子やアストラルなどの非物質的な要素の世界。

この世界には更に、その性質上第零から第三までの四つの（非）物質に分類されている。

それぞれの代表格は、第零類非物質：活性^{ラビス}魔粒子、第一類非物質：非活性^{ヒス}魔粒子、第二類非物質：エーテル、第三類非物質：アストラル。

同じ魔粒子でありながら、活性状態と非活性状態ではまるでその性質が異なる。そして、第零類は非物質の中でも特殊な扱いとなり、そのために一からの数字ではなく零が当てられている。

この様にして、世界は一つの世界で在りながらに幾つかの世界層で成り立っている。とわ言っても、勿論これはそういった”考え方”という意味に置ける概念の話であって、実際にそれが世界の構成として正しいか否かは未だに知る術はない。

しかし、世界の構成云々は別としても想像出来る・考えられるということとは即ち “引き起こすことが可能” だということだ。何しろ、それが魔法なのだから。

今彼らは雨というものを限定的に対象として、世界と隔離している状態 正確には、異次元層に在るといふ状態だ。

物や人に触れることが出来き、術者が雨と認識した対象の一切の干渉を受けないという限定的な世界の中に彼らは今身を投じている。もしもこれが、光を対象としているならば世に名高き高位魔法：『透明化』であつたり、壁というものを対象としたならば壁抜けも可能になるといふ実に応用の効く便利な魔法だ。

勿論、それだけのことが出来るのだから相当に難しいかなりの高度な魔法である。

それをこの様にして雨避けとして使うことなど普通ならあり得ないし、誰も思いつきもしないことだった。もつと簡単な方法で事足りるのだから、当然と言えば当然なのだが……………

これが雷雨であるならば、或いはこうして歩いて登校するのではなく小夜の練習がてらに（然も誰かさんを避けるために直接校舎内へ）瞬間移動^{テレポルト}を使っていたかも知れない。

しかし、凍夜は基本的に日常生活のレベルで体を動かすことに魔

法を付加することや魔法で省くことをあまり好しとはしていない。

だがそれは、凍夜がある程度知った者たちにしてみれば意外に感じることだが、常の論理的な思考に乗っ取った明確な理念に基づいたものではない。ただ何となくという漠然とした感覚的な問題。

個人の好尚と言つてしまえばただそれだけの話。

魔術が使えないということのみを捉えればある種の嫉みと捉えられても可笑しくはないが、当然凍夜がその程度のことを気に留める筈もない。その証拠に小夜の日々の魔法鍛錬を魔導師として指導している程であり、今もこうして他人から見れば（やっっている事の程度を理解出来る者が限られる程に）無駄にハイレベルな魔法を使わせている。

更に堂々と公言している訳ではないので皆が知る由もないことではあるが、凍夜には『無慈悲なる悪魔の囁き』という無双の特技がある。そして、小夜という一般的平均よりも活性力の強い相棒がいるのだから、本来小夜に魔法を使わせる意味すらもない。それ程に単身の技量のみでどうしても出来るのなら、嫉妬など持ったの他だ。もし、凍夜の技術力を知ればそれこそ万人が彼に嫉妬することは想像するに容易く、そしてまた彼が単身で魔術が使えないということとを哀れむどころではなく、蔑視は疎か心から喜ぶに違いない。と、小夜は確信していた。

今日は平日であり、二人はいつもの時間に家を出た。

しかし、当然こんな雨の日ではいいスポットがあるわけもない。

雨が降っているから全て駄目かと言えばそうでもない。雨の日にこそ綺麗に見える景色もあるというものだ。

だが、そういった場所はどちらかと言えば希有な場所であることが多く、そしてこの近辺には彼らが登校中に寄れる距離では存在していない。

よって、彼らはいつもの寄り道デートをせずに真っ直ぐに学校へ最短ルートで向かう。そのため到着の時間はかなり早い。

以前、雨が降り始めた日の朝の途中で切り上げたときよりも更に早く、七時を少し過ぎた頃にはもう学校に着いた。

門を潜った二人、その凍夜の足下にいつもの如く魔法の一撃が来なかった。真より早くついた……という訳でもない。真は（何が目的か）いつもかなり早い時間から学校にいる。そして、今日とても既に学校の敷地内にはいた。

しかし、二人はそれを気に留めるでもなく正門と普通教科棟校舎の間にある第一校庭通称『Fグラ』を抜けて行き、校舎は目指さずに学校敷地内の更に奥にある第二校庭『Sグラ』へと真つ直ぐ歩を進める。

こんな早い時間ではるが、凍夜たち以外にもチラホラと生徒の姿があり、皆同じくSグラを目指して歩いている。

然もその装いは制服ではなく体育着だった。

「おつはよートーヤくん、サーヨちゃん」

沙樹からいつもの様に澆刺はっしゅうとした挨拶を送られ二人も返した。

自己の家柄に関わることには控えめに言っても消極的になる沙樹だが、元来彼女は快活で社交性にも富んでいる。始めこそ慣れないクラスや役目のことなどでいまいち（凍夜以外には）地を出し切れずにいたが、時間の経過と何よりもやはり凍夜という存在のお陰で今では神塾を前にしても素の自分を失わずにいられる程になった。

そして、地が出てきたのであれば当然いつまでも仰々しく名前にさん付けなどしていられるわけもない。

沙樹は自身が親しいと感じる者程、親しくなりたいと思う相手程より砕けた態度や呼び方をすることを好む傾向がある。そしてそれは、節度を弁えないということがなく、人が無神経だと感じる程にまで図々しくなることもないので、往々にして人に受け入れられやすい。

凍夜には諸々の事情　　というより情そのもの　　があつて逆に

出来ないでいたが、この間の告白の一件からは（一応？）振られはしたもののその一步を踏み出すことが出来るようになった。

「も、二人ともこんな日まで、朝から見せつけてくれちゃってさっつ！！」

自分のことを好きだっつて娘が目の前にいるっつのに、凍夜くんっつてば何にも悪びれてないんだもんなあゝ」

振られたことには勿論シヨツクを受けた彼女だが、今ではそれをバネ（ネタ？）に頻々しきしきと攻勢に転じている。

そんな沙樹に小夜が本当の意味で打ち解けるのにそう時間は掛からなかった。凍夜との関係も、嫉妬しないと云えば嘘になるが、神堊のとき程の拒絶反応はない。いや、寧ろ同じ相手を好きになった者同士という仲間意識の様なものすらも感じていた。

ただ

「僕はそういったことに配慮のないの欠片もない様な酷い奴です。

こんな奴は嫌って然るべきですよ」

凍夜は敢えて取り繕う様なことはしない。自分の様な奴を好きになつて良いことなど一つもないと断言する凍夜にとって、相手からの好感以上の感情は好ましいものではない。もし、自分のこの態度に熱が冷めてくれるのならそれにこしたことはない。

だが、そうは言っても沙樹はそう甘い相手ではない。

「嫌われないなら、いっそ弄んでくれれば早いと思うわよ？」

沙樹のその台詞には流石の凍夜も『勘弁してくださいよ』と頂垂れさせられる。この程度で冷めてくれる相手なら苦労はないというものだ……

その有様に二人がクスクスと笑う。しかし、小夜の心の中には一点の陰りがあった。ただ、凍夜がその想いに応えることは“絶対に”ないことを知っているだけに、心苦しさを感ぜずにはいられない……

「ところで二人ともどうしたのその格好？」

沙樹は、二人の格好を（漸く）問い掛けた。

凍夜たちも制服ではない。だが、学校指定の体育着という訳でもない。

沙樹は体育着と銘打っているだけあって動きやすそうな、Tシャツとハーフパンツという黒い衣装に身を包み、黒色という点のみに同じで有りながらに自分たちとは違う二人の格好を観察する。

魔法科の体育着は普通科の白いものとは違い黒い。

それは、魔法科の実習授業にて時折流血沙汰を含むということを考えてのこと。本来は生徒である彼らが怪我をすることなどあってはならないことだが、実質ある程度の傷は茶飯事だ。

白い体育着ならばその色が赤く染め上がるのにそう時間は掛からないだろう。そんな状態の服をいつまでも使い続ける訳にもいかない。だが、魔法科で使用している体育着という物はそう安いものではない。

魔法耐性を付与させた特殊な繊維を、特殊な技法で編み込んで作っている物で、それなりの値段がするのだ。

機能的には問題なくとも、血の色で染まった服をいつまでも着ているというのも印象が悪い。ということ、体育着の色は血が目立ち難い黒となっているのだ。

はつきり言っていただの印象の問題でしかないことなのだが、それでも生徒も保護者もそれで気にならないというのだから、人間如何に印象というものが大事かということを思い知らされる……………

無論、沙樹も件の黒い体育着を着ているが彼女の服はまだ血の一滴も付いていない純粋なもの。

凍夜たちが着ているものは、同じく黒い色ではあるものの正に衣装と云うに相応しい。否、これは衣装よりも更に『装束』と言った方がしっくりくるだろう。

体育着と銘打っているが、それは体育にも使用するからというだけで、目的からの呼び名で言えば『魔闘衣』と言った方が正しい。

そして、彼らの装束は彼らにとっては正しくそれに当たる。

「まあ、お家柄という奴ですよ（苦笑）」

沙樹はふーんと頷きながら、二人をマジマジと観察する。

「それにしても……………」

沙樹は小夜に視線を固定して、睨む様に凝視している。

「私がおか？」

その視線の意味を問い掛けるが、彼女からの返答は暫く無い。

「……………小夜ちゃん」

「はい。何か？」

全身を満遍なく見回していた沙樹の視線がキツと正面を向き、小夜と顔を向き合わせる。

「小夜ちゃん、その格好……………」

（やはり、皆様からは場違いだと思われるのでしょ…
…？）

自身の格好は、一般的に今の状況に即したものと確かに言い難いかも知れないと自覚している。とは言え、これは紫司の正式な『武装』でもある。

だが、それは『凍夜』の専用であって本来それ以外の者にはそういったものはない。

小夜が今着ている装束は、凍夜のその装束に合わせて同じものを着てきているに過ぎず、それは小夜の我が儘と言ってもよかった。

故に、自身の格好に若干の後ろめたさを感じていた（後悔はしていない）。

「……………すつごく、かわいいっ！！！！」

沙樹は小夜に飛びついた。

「さっ 沙樹さん!？」

流石に思っていた反応とあまりに違いすぎて、小夜は混乱気味になつた。

そんな小夜にお構いなく、沙樹は頻りに小夜を愛でていた。

「ホントっ、かわいい!!! 巫女さんだ、巫女さん!!! 今時和服って言うのもかなり珍しいのに、その上、巫女装束。然も、元が元

だからもう可愛すぎ〜!!」

そう二人が今着ているのは所謂神子装束。しかし、当然のことながら単なる衣装ではない。

『凍夜』の戦闘は『当千当然』、千と当たることを当たり前とするという意味を持たされている。それは、代々戦神せんしんを担う『凍夜』の名を背負う者の責務。

無論それは流石の『凍夜』と言えど容易いことではない。

戦神として常に戦場の最前線に立たねばならぬ身なれば、防具に如何ほどの重厚があっても心許ない。

故にこの神子装束も、見かけからは想像出来ない程に幾重にも防護術式を編み込まれた正に鉄壁の鎧と呼べる代物になっている。

「沙樹さん!!! 少し落ち着いて下さい」

しかし、小夜の言葉も虚しく。沙樹のテンションは一向に下がる心配がない。

中身は兎も角としても、外観からは間違いなく巫女さんだ。それを絶世の美少女が着こなし、またそれが良く似合っているというのだから、彼女のテンションも分かるうというものだ。

「おっ、お兄様〜」

凍夜に助けを求めるも、凍夜は二人を楽しげに見ているだけで止めようとはしなかった。

小夜にとってこういうった態度を取る友だちが初めてであるだけに、その対応には慣れていない。しかし、慣れていないというだけで厭だと感じはしていないのも事実であり、寧ろ楽しいとすら感じられている。

それを分かっているのです、自分の介入しない彼女たちだけの関係というものを大切にしたいと思う故のことだ。

小夜と沙樹は始めから親し気だったかも知れないが、しかし小夜にとつての始まりは所詮凍夜を介しての色眼鏡でしかなかった。それが良いか悪いかは別にしても。

それが今では心から自分の友だちとして慕っている。今までその

様な相手は一人だけだった。それにその相手は本当に色々な意味で特別な存在で、きつとその娘以外にはこんな風に思える相手は出来ないだろうとすら思っていた。

中学時代は表層的に親しくしてくれていた者たちはいたが、深く関わろうとする者たちはいなかった。小夜の人格に関わらず、『紫司』の姓はそれだけで他人との距離を決めていた。

紫司家直下の学校であったというのも原因かも知れない、何しろ学園側からはこれでもかという程の待遇だった。そして、それに対して他の生徒たちは不平・不満などというものを感じない程に紫司という名は高位であるという印象を持ち、また学園が実際にそう扱うことでよりその像を膨らませていった。

そんな状況で友人と呼べる様な相手が出来よう筈もなく、小夜にとつては皆等しく知人という扱いでしかなかった……

ここに来て凍夜と同じクラスになり、小夜は改めて凍夜の魅力を感じ知った。

中学時代の自分はどうかあっても相手に真の意味で理解などされることはなかったし、そもそも小夜を同じ土俵に立つ人間としてすら思われていなかったのだから、理解など持った他だったかも知れない。

それがどうだろうか、凍夜の周囲では誰も彼もが凍夜の個を重んじ認めている。中学時代では、自分は敬いを超えて崇拜或いは盲信の対象でしかなかったが、ここに来てからは紫司の姓に捕らわれずに一個人として皆に受け入れられているという自覚がある。

紫司の姓のみならず『凍夜』の名をも背負う彼に、皆が気をおかずに接している。それは、彼の魅力がそれらの“肩書き”すらも凌駕するというこの確固たる証明だと思えた。

きつと沙樹との 否、沙樹だけではない。そして、きつとではなく絶対だ。麻里奈や智之そしてクラスメイトたち、凍夜と一緒になければこういった関係は築くことは出来なかっただろうから。

61・揺れる心と揺るがぬ決意

「しっ！ 失礼いたします!!」

二人のやり取りを微笑ましく眺めていた凍夜に、不意に声が掛けられた。

声の調子からもかなり堅くなっているということが分かる。

「わたし……、自分は82-13所属橘三曹であります」

そこには背筋をピンと伸ばし、左手は体の横に当てたまま、右手は親指を握り込んだ拳を作って左胸の前にした姿勢の二十代前半であるう若い女性がいた。君礼と言われる今の日本軍の敬礼だ。

軍は部署の名称が往々にして長い。それは名は体を表すという諺がある様に、名称がそのまま分かりやすく部署の活動を表しているためだ。だが、名乗る度に都度口になっている様では調子が悪い。そのため、“身内”での名乗りはこうして所属に宛がわれた番号で行う。

つまり、この橘とななる女性は日本軍の軍人ということだ。

「そう堅くならないで下さい、そう畏まれる程僕は大了たことはしてきてないですから。ここに居るのは図々しい一介の高校生とも思っていて下さい」

余りに緊張に強張るこの女性軍人に凍夜は無理だろうとは思いつつも、それでも少しは解れてくれたならばと思つて楽にする様にと声を掛けた。

然しもの凍夜もまだ二十歳にも満たない若輩ものである。目上のものからこうも傳かすかれることには慣れてはいないし、自身がそうされるだけの分に実が伴っていないと自覚しているので気分のいいものではない。

「はっはいつ!!」

しかし、橘はその意味すらも理解出来ずに返事のみを返した。

凍夜からの視点だと、橘の眼は若干ながら上を見ている気がする。

きつと彼女は凍夜の姿すら正視できずに明後日のところを見ているのだろう……………

「橘三曹でしたよね。そのお年で三曹だなんて、とても優秀な方なんですね。」

知っているでしょうが、改めて自己紹介させて頂きます。紫司凍夜です。宜しく願います」

凍夜が自己紹介と共に握手を求めて右手を差し出した。

「いえ！！ 滅相も御座いませぬ！！」

それと、わたし……………いえ、自分如き一兵卒が紫司しすい司帥と握手など恐れ多くて……………」

無理もないことだとは思うが、これ程緊張しているというのも流石に可哀想だ。

やはり自分には過ぎた階級くわいだと凍夜はしみじみ感じる。

だが、凍夜を名乗る限りは切っても切り離すことなど到底出来ない役目の一つだ。

『司帥』というのが『凍夜』の軍に置ける階級。これは、軍という組織に置ける絶対の最高位の階級であり、『凍夜』専用の階級だ。普段詠歌が凍夜に命令するのは紫司として、そして姉としてという立場からということになる。軍に所属する者としての立場からすると中将という階級であつとも司帥の前には格下の階級でしかない。

勿論、本当の『凍夜』ではない『彼』に『紫司』をどうこう出来るだけの実権が有るはずがないが、それを表に知られるわけにはいかない。よって、軍という組織を介してのみ凍夜 彼は詠歌を使うことも、詠歌の命を断ることも出来る立場にある。

しかし、彼がその力を彼としての意志で施行することはないし、今までに軍人 否、戦神としての務めなど果たしたことなどはないというのが現状だった（無論、戦神としての務めなどに越したことはないわけだが）。

「それは残念。僕としては、その若さで下士官職を務める様な優秀

な方とお近づきになりたかったのですがね……………まあ、これ以上はハラスメントと言われてしまいそうなので、諦めるとしましょう」などと軽口を挟んで手を戻す。

凍夜としては、無駄な力を抜いて欲しい故のことだったのだが、橘はその程度のことにも『あの……………』 『その……………』 っと、何か弁明を述べようとする。

完全に裏目に出ってしまった。

流石の凍夜も苦笑をこぼす他無かった。

「それでは橘三曹、定刻までまだ暫く有りますから、それまでは部隊の方々とリラッククスして待機して置いて下さい」

「りよ、了解致しました」

女性に恥をかかせて喜ぶ趣味はない。

彼女が声を掛けてきたのは、『お偉いさん』がいるから部隊を代表して挨拶をしに来たという程度のことと、別段凍夜とのコミュニケーションを図りに来た訳ではない。今回の彼女たちの部隊の任務と凍夜の任務はそれぞれ独立しているので、打ち合わせることなど何もないのだ。

となれば、無為に彼女をここに留めておくというのも酷なので凍夜の方から退路を示して、彼女を早々に帰した。

その束の間のやり取りが眼を引いたか、クラスの面々が凍夜たちの周囲に集まって来ていた。

勿論、男女問わずに皆体育着を着ている。

そんな中はやり小夜の格好はその容姿と相まってかなり人目を惹き付ける。今はクラスの女生徒たちに取り囲まれてハグの嵐を受けている最中だ。

男子生徒はと言えば、他のクラスの者のみ成らずクラス内の者も含め、幾人か……………という表現では些か少なく感じる程に多くの男子が一樣に同じポーズを取っていた。

親指と人差し指を直角にして丁度「」の様な形を作り小夜をフォ

ーカスしていた。

今年の国立魔法師育成高等学校常盤校舎^{とぎわ}では主に男子生徒を中心として奇妙な眼鏡ブームが巻き起こっている。

但しそれは当然視力補正のためではなく、またファッションのためでもない……………

彼らが使用しているのは、携帯のオプション『グラススクリーン』。

普通の眼鏡のレンズに当たる部分がスクリーンとなっていてホロウインドウをポップアップさせずに情報表示させることの出来るの代物で、物によっては更に様々な機能があるがそれらの大半は専門家向けに特化したものが多く一般にはあまり需要がない。

だが、何故そんなものが普及しているのか？

それは、それが本来は特定の職業又は趣味を持つ者向けとしての狙いで販売されているものもののだが、また日常的にも在って不自然ではない機能が備わった代物であることに起因する。

アイビューズカメラ、その意味そのまま、眼の視点そのままに写真を撮る機能のことだ。

彼らの使用しているグラススクリーンにはその機能が搭載されている。

つまり彼らは、あからさまに小夜を目的として写真を撮りますと堂々と公言しているにも等しい。メーカーにより掛けられた操作ブロックの所為で撮影の際は動作・音声の承認コマンドが必要なため、更にそれは如実に現れる。

だが、それ自体に罪はないので罰しようもない。

小夜がそれを不快に感じるならば相応の対応を取ることもしただろうが、彼らにしてみれば幸いなことに、小夜は遠巻きに見られる程度のことには意を介さないで、悪質な行為にでも及ばなければ良しとしているが、自分としてはこれ程の視線に晒されても尚“他人を意識出来ない”彼女に単純成らざる意を持って思惟せざるを得ない。

だが、女生徒とのやり取りを見ている限りでは良い方向に向いていると思う。

いつか彼女がそのことを吹っ切ってくれればと、凍夜はクラスの女生徒たちから揉みくちやにされる小夜を微笑ましく眺めていた。

「呑気なもんだな……………」

不快と呆れを半々に織り交ぜた様な声色が、突如真横から発せられた。

「そんな刺のあることを言わないで下さいよ。彼らは『僕』の協力者なんですから」

声を出すまで、凍夜とてその存在を認識出来てはいなかったが、その程度のことので一々驚くこともなく、発せられた声に間を置かずに苦笑を浮かべて言葉を返した。

「おはようございます、蒼縁さん」

横を向いた凍夜の顔には、苦笑を即座に打ち消して柔和が笑みが灯されていた。

「あいつらのことじゃない。紫司妹のことだよ」

「そう彼女を責めないで下さいよ。彼女も被害者の一人なんですから……………」

まあ、それを言ってしまうえば、貴女にどうこう言える権利なんて僕には無くなってしまうわけですけどね」

「あたしはそうは思っていない。あたしはもう十分に救われてる側の人間だよ。それはあの娘にも言ってる。

だからこそだよ。あたしとあの娘は似てるんだよ。何もかもがねだからこそ、あたしはそこを間違っているとは思わないっ!!」

凍夜の左側に立つ神埜の横顔は、凍夜の側からは眼帯が大半を占めていて表情を読むことが出来ない。

しかし、凍夜には彼女の想いはひしひしと感じられた。

神塾から伝わる複雑な感情に、凍夜は一つ吐息を零して言葉を紡ぐ。

「どうして、僕の周りにはこうも優しい方々ばかりなんでしょうね？ 父や母……姉や妹に……学校の友達や研究所の皆さん……」

雨の降る曇天の空の下、大きく深呼吸すると共に手を伸ばして、背筋を少し反り返る程に伸び上がらせながら今度はポツリポツリと一人一人名を連ねていく。

「……藤原先生に……」
（なんであんな奴まで……）

そう思わずにはいられない。きつと凍夜にこのまま言わせ続けると時間さえあれば、知人全員の名前を挙げ連ねるに違いない。とすら思う。

だが、

（彼はそれでいい）

それをバカだとは思わない。

彼はそういう存在なのだ。

そうである彼に自身が救われた過去があり、現在も救われ続けている。

そんな彼だからこそ全ての者を惹き付けるだけの“魅力”を備えてもいる。

故に彼の存在が変わることがあつてはならない。

しかし、だからこそ周囲が彼と見合うだけの存在でなければならいとも思っている。

その思いがある故に神塾は藤原が好ましく思えない。

彼を知ろうとせず、ただ頑なに否定する。その姿勢が何よりも不快にさせる。それは以前の自分そのままだったから……

「それに、君もね」

幾つかの名前が耳を通り過ぎて行ったが、それが一体幾つあったのか誰の名前があったのか全く聞き取れていなかった。

だが、その部分にはつきりと意識の中に入り込み神塾の視線を、

いつの間にか正面に移動し笑みを浮かべる凍夜へと釘付けにさせた。

「バカを言うな……」

どうにかその言葉だけを絞り出して、顔を背けた。

（全くこの人は……、私がどれだけ醜いか知ってる癖にそういうことを平気で……）

その癖それでこつちがどう思っているのか。それも、分かっているやっっているんだから尚質が悪い。

どうして、この人はいつもいつも……いつもいつも他人の事ばかり……）

その思いはやがて矛先が誤っていると分かっているても怒りを駆り立て、神埜に怒りと想いの丈をぶつけずにはいられなくさせた。

「一番救われてないのは貴方だ。貴方はいつもいつも他人の事ばかりを気に掛けて、私やあの娘、あいつやあの人……」

神埜の声には強い感情が込められ、口調も元の状態に戻っていた。「もつと自分のことを考えてよ……」

今度は消え入りそうな程一気に声は小さくなった。絞り出した様な苦しげな小さな叫び……

ともすれば、全てを壊してしまいたい衝動を抑え、本当に伝えたい全ての想いを乗せた一言。

俯く彼女の顔には前髪がかかって直接表情は見る事が出来ない。泣いてはいない……だが、泣いてしまいそうな程に張り詰めているのは間違いないという確信はある。

（本当に……僕は最低の存在だな……）

神埜の頭に左手をポンツと乗せて撫でてやる。

それが今の自分に許された精一杯……

こんな時であっても意識的に役目を優先する自分は、どうあっても真つ当な人間ではないとしみじみ実感させられた。

「ありがとう。ほらっ、やっぱり君は優しい娘だ」

今が雨で良かった。

私の零した涙は、降り落ちた雨水で分からなくなるから……
私の聞き苦しい嗚咽おえうを、激しい雨音で掻き消してくれるから……

今回、常磐校舎で集まった生徒の人数は350人弱。

見込みとしては200人程度と踏んでいたものでそれを上回ったことに、集まってくれた生徒たちに万謝といったところだ。

そして、クラスメイトが全員参加してくれたことには正直驚いた。他の生徒たちの意気込みは分からないが、きっとクラスメイトたちが自分という存在に多かれ少なかれ信頼を寄せているが故のことだと思うので、その彼らを裏切らぬだけの働きはしなければならないと、凍夜は決意を改めた。

しかし、全体的な状況としては芳しいものではなかった。

確かに常磐校舎では多くの生徒が集まってくれたが、協力を要請した魔法学校三十余りを全て合わせて、集まってくれた生徒の数は六千を満たなかった。

七千人は欲しいところだったが、それを遙かに下回ってしまったからだ。

「どうです凍夜くん？ この人数で行けそうですか？」

四大柱が一柱、羽月誠吾が凍夜に問い掛ける。

ここは獄炎嵐対策本部、肉眼で獄炎嵐が見られる程に近い海岸沿いに設置されている。

凍夜たちは、橋の部隊によってここまで運ばれてきた。彼らのメインの仕事はここまでだ。後は、ここで他の部隊の補佐となる。

そして、ここでの凍夜の立場は最早一介の高校生ではない。

司帥という軍の最高権力者であり、紫司という一族の一員であり、凍夜という日本の最高戦力でもある。

「元は僕一人でどうにかするつもりだったんです。これだけ集まって頂けたなら十分ですよ」

彼はそう言つてのけるが、それがどれ程の無茶かを分からぬ者はこの場にはいない。

権力があつたとて自然現象に与えられる影響力はない。

戦力があつたとて自然現象を穏やかに鎮めることは出来ない。

結局彼に頼るのは、彼個人の抱える異端の中の更なる異端の能力に他ならないのだから。

「流石さ、神の代行体^{セーテング}。とても、オレたちには真似出来ないさ」

月友継貴の呼び方に苦笑を浮かべる。

継貴のいつもの悪ふざけだ。

「その呼び方はやめて下さいよ、継貴さん」

「君は堅いさ。これから契りを交わす仲なのになさ」

「気色悪いことを言うなバカ者」

誠吾が継貴を冷たくあしらう。

「今回の件に我々は無力だ。済まないが、宜しく頼むよ凍夜くん」

「お構いなく。これは本来の僕の役目の一つですよ。」

それでは、継貴さん。血を頂きます」

「おうさ。それじゃあ、ガブツと行ってくれ」

継貴が首もとを広げて首筋を差し出す。

しかし、凍夜がそれを辞めさせた。

「そんなことする必要はありませんよ。僕の右手には注射針が内蔵されていますから、手を出して頂ければ十分です。それに、僕は生来のヴァンパイアじゃないので、牙も有りませんしね」

「そいつは良かったさ。流石にオレも、男に首を食いつかれるのはごめんさ」

凍夜も全くだと同意して、差し出された継貴の腕に親指の針を刺して、その血を「取り込んでいく」。

「これが、悪名名高い『^{ヴァンパイア}血系吸収』………いったいどれくらい抜くのさ？」

「ものによりますけど、だいたい100cc程頂ければ“借りる”
くらいは平気だと思いますよ」

凍夜が宿す異端の能力の一つ『ヴァンパイア血系吸収』。別名を『魔族殺し』。血液を取り込むことにより、その者の魔法能力も取り込むという異質な能力だ。

過去この能力を手にした者は公には一人だけしか存在していない。そして、その能力者は世界中から指名手配を受けた大罪人だった。これ程の能力だ。上手く活用すればどうとでも立ち回ることが出来る。強力な能力を身に付けられれば身に付ける程強くなれる。ならば、手っ取り早く強力な力を得るためにはどうすればいいか？

簡単だ。強力な魔法師から奪えばいい。

強力な魔法師、つまりは魔族。彼らを狙えば間違いない。

そしてその能力者は世界を股に掛けて各国の魔族の力を取り込んでいった。その際、数多くの魔族が血を抜かれて死に至った。……より強力な魔法は、完全に固着するまでに大量の血を必要とする。一人二人だけでは足りず、二桁単位で餌食にあったのだ。

故に魔族殺し。

世に知られる能力の中で最も忌み嫌われる能力の一つだった。

今回は『サイコメトリ過去視』の能力を完全に自分のものにすることが目的ではないので、暫く使える程度の量があれば問題ない。

だが、100ccとたったそれだけで済むのは凍夜の体質故だ。

オリジナルの吸血鬼でも、仮で能力を使えるまでに一人一人分は裕に必要となる。

「こちらの配置は完了した。首尾はどうだ？」

そこへ詠歌が儀式陣の配備の完了を告げに来た。

「丁度終えたところです、それでは行きましょう」

凍夜は詠歌の横を抜けて陣へと歩き始めた。

応えた凍夜には一切の表情が無くなっていた。

他者の能力を自己のものにするという特異な能力だけに、その制御は容易ではない。暫くの間凍夜は取り込んだ能力を押さえ込むの

に手一杯の状態になる。

「ちよつと待ってくれ」

陣の中心点へ向かう途中、暫し歩いてから詠歌が凍夜を呼び止めた。

「どうしたんです？」

「今回の件、まだちゃんと礼を言っていないからな。

本当にいつも君には世話になりっぱなしだ。本当にありがとう」
詠歌が腰を深く折って頭を下げた。

「『最後の最後まで、思うままに好きにさせてやりたい』以前貴女が、僕に言った言葉です。覚えていますか？」

「ああ」

入学式の日、小夜と少し揉めた後に詠歌が凍夜に言った言葉だ。

「その思いが貴方方だけの思いだとは思わないで下さい」

それだけ言つて凍夜は再び歩き始めた。

未だにその声にいつもの柔和さは戻っていない。

しかし、そこに込められた想いは自分たちと同じであると詠歌は強く感じた。

この先僕の言葉は彼女を傷つける。否応なく、間違いなく……

それは、身を引き裂くことよりも更に酷い真実を彼女の心に刻みつけることになる。

だからこそ今は許す限りを全てを彼女のために捧げようと決めた。
喻えそれが泡沫うたかたの幻であろうとも、どんな偽善うたかたであろうとも。

「それで？ 今回のこの件はどういうことなのかしら？」

その声に責め立てる声色なくフアナは問い掛けた。

「さあな。俺の方が知りたいくらいさ。アンタらよりも寧ろ俺の方が余っ程驚いてるんだ。少しは察してくれよ」

「だろうな。あんなことが可能なのは本物の『紫司凍夜』だけだ。

だが、それがあの場に行かないことを俺たちは いや、お前は誰よりも知ってる。あんなことをやられちゃ、流石のお前も動揺するな
って方が無理だろうな」

動揺など全く感じさせない態度でヒューガが応じるが、誰もそれが嘘だとは思っていない。

それどころか、この状況に直面して尚態度を崩さない当たりは流石だと感心する程だ。

「だが、ヒューガあれば本物なのか？」

「さあね。ただのトリックか……将又何かしかのギミックか……」

見せかけだけの偽装である可能性は十二分にあり得る話であつて、更に言えばその方が一般的常識に乗っ取った思考をすれば高いと言える。

だが、一般的思考などこと彼らを相手にするならば無いに等しい。正攻法・奇策・大手・搦め手、それら全ての中にどれ程のものであるかと可能性があるのなら、それはあり得ることなのだ。

「ダイヤを流用すれば可能なのではないかしら」

低い可能性の中のその一つになりえるだけの仕掛けについてフアナが案を出した。

「確かに、根源概念は同一の系統だ。神魔法までの昇華は無理だとしても、高位魔法としての使用は可能かもしれない」

「もし、そうであるならターゲットがやつ一人に絞れるという点では手間が省けるが……」

「流石にそう甘い相手ではないな」

彼らの今現在の目的としているものそれが通称『ダイヤ』、彼らヒュストレムとヒューガの最終的目的を達成させるために必要とされているものだ。

「そうだな、それにどうにしろ厄介な相手だ……………」

彼らのこの“厄介”の言葉には二重・三重に意味が含まれる。

当初ただの囷テュインだと思われたT1が実のところかなり特殊な能力者であること。

そのT1がある特異な魔法を使用したということ。

それが、本物なのか否か。そして、方法論としてあがったダイヤの使用の可能性について……………

ざっと挙げただけでもこれだけあるのだ、もっと細かく煮詰めていっても減るところが増えてくに達しない。考えなければならぬことが多すぎる……………

向こうの『反撃』は確かに効いている。

「全くだ。丸で、“奴”そのままの厄介さだ」

「なら、その可能性もあるんじゃないですか？」

アルフェーノがヒューガの呟きに可能性を示唆する。

「なんだと？」

「そう睨むなよ。お前は俺を意識し過ぎだ。まあ、無理もないだろうけどな」

最初の紹介のそのときからヒューガとアルフェーノの仲は良好とは言えない。

そしてお互いにそれを隠そうとも、況してや好転させようなどという考えは一切持ち合わせてはいなかった。

「そんなことはいい。どういう意味かさつさと言え」

「そんなの簡単だよ。俺とアイツのことを考えれば答えは出るだろう？」

『禁燭計画』……………誰も口に出しはしなかったが、それを思い浮かべる。

「アレが、まだ終わっていないと？」

「さあ、どうでしょう？ でも、僕らが知らないだけって可能性は否定出来ないでしょう？」

ヒューガが僕を知らなかった様にね」

ツアクアに対しては……否、ヒューガ以外に対してはこうして敬語で対応する様が、只でさえ似ているというのに、ある人物をより強く連想させてヒューガを苛立たせる。

そして、余計は一言も忘れず添えてくる。

「てめえは俺に喧嘩売ってんのか？」

「やめる二人とも。アルっ！ お前もヒューガに絡みすぎだ！！」

ツアクアがアルフェーノを嗜めるが、この仮面の男にそれが効果がないことは明白だ。

「確かにそういう可能性もあるわけね。私たちは彼で完成してプロジエクトも終了したと思っていた訳だけど、実際はそれがまだ終わっていないかった……」

「もしくは、その成果を流用していたってことも考えられるわね」

「というと？」

「わざわざ一から全てを作る必要はないってことよ。部分的にでも作れば、それでいいのではなくて？」

「確かに。完成体一つを作るのに掛かるコストを考えれば、その方が确实そうだな」

他の面々は、彼ら二人とそれを宥める（？）ツアクアを余所に話しを進めていく。

「『紫眼』の精製か………確かに、あり得ないことではないな………T1は、ついこの間眼の入れ替えもしたのだったな？ なら、それがそうであった可能性もあり得るか」

「でしょう？ でもこれも憶測の一つでしかないわけだけど……」

「今は、憶測だろうがなんだろうが可能性が絶対ないと断言出来るもの以外は考慮する他あるまい。お前のコウモリじゃこれ以上の情報は望めないだろう？」

「残念だけどね……………」

「やらやれ、ターゲットを絞り込む筈だったのに、余計にこんがらがって来ちまったな」

他のメンバーが真剣に話し合う中で一人何も発言せずただ寝転がっていたニッドが他人事のように呟いた。

「なあ、この際あのT1はアイツってことにして、いいんじゃないの？」

「馬鹿を言うなアイツはもう死んでる。それとも俺の言ってることが信用出来ないってか？」

その言葉にヒューガが即座に反応して、アルフェーノの所為で高まった感情を抑えきれずに問い返した。

「そういう訳じゃねえよ。ただ、アイツに関しちゃうようなことがあったって不思議じゃねえだろ？」

“お前が” 正面からまともにやりあって、負かされる相手だぞ？ お前には悪いけど、お前が騙されたってことだってあり得るんじゃないのか？」

「……………確かにな……………、あいつなら何をしても不思議じゃないかもな……………なら次は俺も行く。直接俺の目で確かめてやるさ。T1の^{あいつ}の正体を……………」

「なら、僕も行きましょう。もし、彼が本物だと言うのなら、会っておきたいですからね」

敵を騙すならまずは味方からと言う言葉がある。

しかし、この場合本当に騙したい相手は誰なのだろうか……………
味方と呼べる者たちのことか……………或いは……………

凍夜が陣の中心の円の中で腰を下ろし、座禅を組む。

凍夜を囲う円の直ぐ横に立つ小夜と沙樹が凍夜の合図で彼の肩に手を置き、これで陣の完成となった。

「では、始めます。皆さんは暇でしようがそれはご辛抱願います」
その声は、互いに手を取り合い数珠繋ぎになって陣に整列する全ての生徒たちに一斉に駆け巡った。

眼を瞑り意識を自身の霊体へを集中する。

凍夜の両肩にそれぞれ片手を置く小夜と沙樹は触れているにも関わらず、そこから人の気配が抜け落ちていく様な感覚を覚えた。

手から伝わる人の体温は何故かその暖かみを感じずに、人肌の熱を持った何かの様にすら感じてしまふのだった。

『六道遁甲陣』ろくどうとんこうじん、アカシクレコードから情報を引き出すための儀式陣。

アカシクレコードとの無意識領域での繋がりである『濫觴道』らんさうどうというものがある（とされている）。

その濫觴道を凍夜は特技である波導調で自己の概念器官を他者の霊波動と導調させることで、同期させる。但し、この場合は全員を一斉に同期させる必要があるので、得意であるうと容易いことはない。

何しろこの場に集まったのは六千人弱、その全てと同期するということとは、凍夜一人で六千通りもの霊波動を発生させなければならぬということだ。並の魔法師ならば不可能なことであり、一流の魔法師と言えども向き不向きによっては不可が分かれる程のこと。

更に、今の凍夜は血系吸収ヴァンパイアの能力により月友家の過去視アヒリテ 正確には過去視という能力を可能にするための特異なる魔法体質を取り込んでいる状態でもある。

脳の他の機能を犠牲にすることによって得た高速演算という能力が無ければ到底為し得ることの出来なかったことだ。

そして、六千人分もの濫觴道を一つに同期させた状態で、陣を介することにより擬似的に一つの群体意識として統合する。こうすることにより、まずはアカシックレコードより情報を引き出すことを可能にする。

継貴の言ったように、とてもではないが本来人間一人の脳、意識レベルでは情報量が大きすぎるあまり読み取ることすらできない。それを、出来るようにするというのだから“多少”の無茶は覚悟の上だ。

高校生を集めたというのは、大きく政治的・外向的な問題に起因する。

本来なら軍人を集めて行うべきことではあるのだが、軍を大きく動かすというのは他国に対して余計な警戒心を抱かせる。

というのが表向きがいい訳で、実際のところは凍夜を余計な人目に触れさせぬためだ。

彼が『凍夜』ではないということを知るのは、四柱の中でも一部に限る。紫司の親族ですら知らされていない者もいる程の秘中の秘。この作戦に参加している軍人は二百余名、その殆どが橋たちと同様に人員転送の担い手で、その他は生徒たちの安全を確保するための防護障壁を展開する部隊で構成されている。

更にこの作戦は、こちらにとつては一つの作戦行動ということになつてはいるが、軍としての記録には同時進行で行われている個別の訓練という扱いになつてはいる。

常警校舎に來た橋は二三歳とかなり若い、だがこれは橋が特別若いということではなく、今回の転送部隊は全員がほぼこれくらいの歳で構成されていた。

彼らは表向き、若手の避難　させるための　訓練を行つてい
ることになつてはいるからだ。この場合、実際に天の厄災が迫つてき
ているということもあり怪しまれることはない上に、魔法科の生徒
たちは民間人を想定しての訓練という扱いになり秘密裏に人数も集

められるので、都合がいい。

一方、障壁部隊の方は手練ばかりで構成された選りすぐりの部隊だ。

これだけの規模の厄災ともなれば万が一の場合には、主要機関だけでも死守しなければならぬ。その万が一に備えての訓練というのがこの部隊の目的。ということになっているが、当然こちらも名目的なものでしかなく、彼らは魔法科の生徒と言えど民間人である彼らに一切の危害が加わらぬ様に配備されている。

これは諸外国に対する偽装の一つで、彼らがこの真実に気付くころには全てが終わっている頃か、若しくは今の段階になって漸く気付き、今々いまこまこちらの動きを追っている頃だろう………彼らが、こちらの思惑に気付いてこの場に来る頃には全て完了している筈。していなければならぬ。なので、作戦そのものが失敗して“力尽く”という最悪の手段を取って諸外国に影響を及ぼさぬ限りは問題ない。

そして凍夜はその事の成否を一手に握っているのだった。

魔法に置ける『能力』という言葉の意味は大別すると技術能力スキルと保有能力アビリティという二つに分けられる。

スキルというのは、必要な技能を駆使して任意の意志によって発動させるもので、攻撃などのアクティブスキル、能力向上のパッシブスキルなど一般的な魔法の在り方がこれだ。

アビリティというのは、スキルを発動させるために必要な『リテイン
アストラルアビリティ
概念属性：LAA』、体質や潜在的なもので“任意の発動をしなくても効果を発揮しているLA”と“その切り替えが可能なAA”とがある。

保有概念属性は属性という略で良く使われる。しかし、一口に属性と言ってもゲームなどの様な単純なものではない。複数の要素が

ありそれらの属性の組み合わせで術者の適正魔法が決まってくるので、魔法士には重要な素養となる。

レイテンション、アビリティ、ヴァンパイア
L AとA Aは一般的な表現では天恵属性と言われる。

特質的なもので、それそのものが魔法となる。つまりは、靈障による変異の現れ、当然誰もが持っているという訳ではない特異的な才能だ。

サイコメトリー、フレコグニション
過去視や未来視などの能力は魔法という超自然的分野に置いても更に特殊な能力に当たる。

それが何故かと言えば、魔法に限らず森羅万象のその殆どがアカシックレコードとの繋がりが無意識領域でのことであるのに対して、これらの能力は意識的領域でアカシックレコードに触れることが出来るからだ。スキルでは真似ることの出来ない、アビリティによる特異な素質。

凍夜が継貴から血系吸収で手に入れたかったのはその能力だ。アビリティ

アビリティ
この能力にて、アカシックレコードに介入し炎神の住処の発動術式を読み取るといことが今回の目的だ。

凍夜が精神集中させてから約二十分が経った頃、見た目からでは到底分かりようもない雰囲気の変化が現れた。小夜と沙樹は凍夜の肩に手を置きその間じつと只凍夜を見つめていたが、フツとそこに人間味のある気配を感じたのだ。

凍夜が目覚める。と、二人は安堵した。しかし
「おいっ！！ どういうことだっ！！？」

その大声に小夜たちだけでなく聞こえたもの全てが振り向けき、この陣列に加わっていなかった神埜の姿を認める。

だが、肝心の問われた当人だけは振り向くところもなかった。常に感情の抑揚に乏しい筈の神埜の顔に、ありありと浮かぶ驚愕

の表情……………

「どういうことだと訊いている!!!?」

刹那、凍夜の胸ぐらを掴み有らん限りの怒気を乗せて問い詰めている。

流石の小夜も神埜の早さには警戒を怠っていた状態では対応出来なかった。

しかし、意識がその状況を認めたらならば黙っていられる訳もない。「何をしているのですか?!?」

神埜を払いのけようと、彼女の腕を力を入れて握るがピクリとも動かない。

形振り構っていられる状況ではないので、魔力を込めた。しかし、それでも彼女の腕を引き剥がすことが出来ない。

かなりの力を込めている、握力だけでも300kgは超えている筈だ。小夜の身体強化ほぼ全力に近い力を発揮しているというのに全く持つて歯が立たない。

地力が違いすぎるのだ。

だからと言って引き下がることは出来ない。

「お離しなさい!!」

小夜も他者に向けるには非常に珍しい怒気を包み隠さずぶつける。

「煩いっ!!!」 “部外者” はすっこんでろ!!!」

『部外者』 その言葉が小夜の頭の中で木霊する。

(『部外者』……………)

それは、私とお兄様の関係が“ない”ということ?

この女は、私が赤の他人だと無関係の人間だと……………そう言っているの……………?

この女が私の存在を否定する……………)

小夜の理性に亀裂が入った。

元々から神埜に対しては、ある種の恐怖心があった。その想いも

相まって今までにない感情の昂ぶりを引き起こした。

「貴女こそ、お黙りなさい!!」

怒声と共に強烈な魔導波を浴びせ付けた。

「黙ってる!! 今はアンタなんかに構ってる暇は……………」

神埜の言葉が途中で強制的に止められた。

凍夜が手刀で神埜の意識を刈ったのだ。

崩れ落ちる神埜の体を抱き留めて、

「悪いね、お嬢ちゃん。ちょっとこの“娘たち”を看着てくれるかな」

と沙樹に神埜の体を預けた。

凍夜の目覚めからの展開について行けずに呆然としていた沙樹は、その意味も理解出来ぬままに、神埜の体を受け取った。

神埜の崩れる様を見て虚を突かれた小夜も、今は思考が停止している。

神埜を沙樹に預けた凍夜の体が視界から消え……………そして、小夜の意識もまた、凍夜に刈り取られたのだった。

そして、今度は小夜のことをその後ろにいた麻里奈に預けて、

「さーて、“俺”の仕事が片付けるかな」
イフリーハピテット
炎神の住処へと歩みを向けた。

63・戦神VS炎神1

神柱と妃依里を寝かしつけた俺はあいつから与えられた仕事をこなしに炎嵐へと向かう。

自分の体ではない体を扱うという奇妙な体験をさせられている訳だが、この体は実に扱いづらい。

体の設定が完全にあいつの仕様になっている所為で、俺はに正直扱いこなせない代物だ。

特に厄介なのが頭だ。

出てきてからずっと頭の中がゴチャゴチャですつきりしやしない。『高速演算思考』とか言う能力の所為で、色んな情報を捉えすぎ

る。脳が処理出来ても、俺という人格がそれを処理しきれていない。全く持って、宝の持ち腐れもいいところだ。

だが、文句など言えよう筈もない。仮にとは言えまたこうして生有る感触を味わうことが出来ているのだから……

だが、だからこそ煩うこともある……俺がこの体を使うということを彼はどう思うのだろうか……

俺なら許せないという程度の感情では収まらない筈だ。

しかし、その彼は今はいない。俺を責め様にも最早それすら出れないのだ……

だからこそ今はそれを気に掛けている場合ではない。

(それを思うのであれば力に変える、こんなことで償いになるとは思っちゃいないが、俺に出来るのはそれだけなのだから)

それにしても、流石は『大壊の巫女』様でいらっしやる。これ程大がかりな仕掛けを組み込めるのは彼女だけだろう。

その仕掛けの所為でこうして俺が呼び出されることになった訳だが………

あいつはこれをどこまで考えていることやら、俺には想像も付かない。

元々こうするつもりはあいつの頭にも無かった。

然しものあいつもこの天の厄災が人為的に作り出されたともだとは思ってはいなかった。しかし、アカシックレコードから情報を参照しようとしたときに見えたのは、ファナの姿だ。

然も肝心の構成術式部分はかなり強力なプロテクトが掛かって読み取れなかった。

辛うじて分かったことと言えば、こいつは『炎神の住処』イーフリーハビテット“そのもの”ってことぐらいだ。

俺を呼び出したってことは、少なくともアレを使わせるつもりなんだろうが、幾ら何でもこの規模を全て塵にするのは不可能だ。

流石に巢からアレを引きずり出さなきゃ話にならないが……

こいつの体はライズが出来ない。となれば、サイドギミック法術か第三技法でどうにかしなけといけない訳だが、生憎と俺も魔術系の魔法師でそっちの系統には疎い。

さてどうしたものか？　っと、取り敢えずあいつの記憶装置を参照する。

すると有るは有るは、あいつの記憶装置の中には大量の術式が記録されていた。

今好ましいのは、大規模且つ周囲に余り影響が出ない代物だ。

そんな都合のいい魔法があるのか甚だ疑問ではあるが、取り敢えずは探して見る。

「ねえ、沙樹？　凍夜くんどうしちゃったの？」

その問いは彼の今の様子に対するものだ。

あの凍夜が、幾ら自分たちよりもより身近で特別な関係にある者

たちとは言っても、誰かにそれも女の娘に手荒な真似をするとは到底信じられなかった。

「そんなこと私に訊かれたって分からないよ……」

この小夜と神埜の意識が無い今、確かに彼を一番知るの自分だろうが、だからと言って自分が彼のことをどれ程知っているかと言えは大したことは知らない。

そして、沙樹の知る数少ない彼の人となりを思い浮かべても、今の彼は沙樹に取っても馴染みがない。

逆に、そうでない彼との時間が長く占める沙樹だからこそ、今の凍夜の変貌振りは麻里奈たち以上に困惑の的なのだった。

『さて、全部隊員に告げる。これより、海上は俺のテリトリーだ。誰も通すな。いいな、誰もだ』

眼前に広がる海へとその歩を進め、波の揺蕩うその上に野を行くが如く足を踏み入れ淀みく”カッポ”する。

『障壁部隊は特に注意していき、ちよつと“荒らすぞ”』

声は誰の耳にもはっきりと聞き取れるにも関わらず、間近で発せられているかの様な声量で耳に届いてくる。『彼』が天の厄災へと向かい、確実に遠ざかっているとしてもその声量に変わりはない。

念話テレパスではない、言語思考に直接介入される様な感覚ではないし、なによりはつきりと耳から音が伝わってくる。魔粒子通信バストでは限定的過ぎるし、況してや双脳通信チャネリングというものは絶対にあり得ない。

如何いかな法かも定かには出来ぬ遠話法を用いて語られる『彼』からの言葉には、いつもの様な和やかさもなければ語調すらも違う。

これでは丸で………

『丸で人格が変わった様だ』と、多少なりとも彼を知る者たちは当惑させられた。

凍夜が歩み始めたと同時に彼の方から風が勢い良く吹いてくる。様な、感覚を感じる。それは高密度の魔粒子ヒスの流れ。

凍夜が凄まじい勢いで高密度の魔粒子を周囲に撒き散らしているのだ。

だが、そんなことになんの意味があるのか？ 多くの者が疑問を感じずにはいられない。

魔粒子の使い方など活性魔粒子ラヒスか魔粒子結合体ミストラル或いは魔粒子通信バストと言ったところだ。

前二つは今放たれているのが単なるヒスであるという点で有り得ず、パストも先の遠話法があるのならこの場合はないと考えていいだろう……

何かの意味はあるのだろうか、その意図を正確に読み取れるものはこの場には誰も居合わせてはいなかった。

否、正確には意識のある者たちにはということ。

その答えを知り得るであろう二人は、先刻凍夜自身によって失神させられているからだ。

「恐らくは、サードギミックの類だろうが………これだけのヒスを散蒔いてどうするつもりだ？」

「サードギミック？」

「知らないか」

まあ、当然か。と思い修之は智之に説明する。

「サードギミック、魔術の魔導の分野と法術の二系との複合技術による擬似的な魔法のことだ。」

疑似魔法げんしほうそのもの若しくは第三技法ウサキをそう呼ぶ」

修之の説明によれば、先程の遠話法もそれらしい。

凍夜が放っていてこの空間一体に満ちている魔粒子、その魔粒子を『等振法とうしんぽう』という音振系法術で振動させることにより、彼の言葉がリアルタイムに耳に届いたということだ。

一度に襲い来る光条と化した炎の化身たちの数も秒を追う毎に数を増える一方だ。

形を持っているとは行っても、実際に肉体があるわけでもなく仮にあつたとしてもあれらは炎、人間の様にお互いの事を気に掛けるそもそもあれらに意志なるものが本当にあるのかすらも分からない。必要がない。

一撃一撃が丸で線の様に繋がった途切れることのない攻撃へと達している。

しかし、それでも凍夜と捉えることは出来ないでいた。

あるものはその流れる動きで躲し、あるものはその動作の内で軌道を反らされて同士討ちに合い、あるものは彼の手に触れられて消える……………

その光景が余りにも美しくて皆の心は奪われた。

全てが予定調和。丸でそう思わせるような鮮やかでいて勇ましく、軽やかで壮麗な光景。

彼の纏う神子装束と本来は襲ってきている筈の炎の化身すらとが相まって、彼自身がその炎を手なずけている様にすら見える。

これは舞なのだと思わされる。

彼は戦っているわけでない。ただ舞っている。

そして、あの炎の化身たちはその舞を彩る華でしかなかった。

「馬鹿なっ！ 一体これはどうなっている？」

事態の異変に気付いたのは、水が弾ける様な爆音を聞いてからだ。今の段階ではまだ処置行動に移る計画はない。

一体何があつたのかと思つて来てみれば、何故か小夜と神埜が意識を失わされて凍夜が前線に赴いている。

「彼は何とも？」

珍しく人前で動揺を見せる詠歌に誠吾が確認の意味で問い掛ける。

彼女が計画したことなら、彼女が狼狽えるわけではないので、彼の独断であるのは明白だ。

「私は何も聞いていない。どういっつもりだ………」
流石の詠歌も彼の真意は測りかねた。

今の彼の立場では注目を集めさせるわけにはいかない。それは、こちら側の問題だけでなく、彼個人のことにも当てはまる。

彼がそれを押してまでこういった行動に出たということはそれなりの理由があるのだろう、ということは分かる………分かるが、到底割り切れるものではないというものが現実。そして、心というものだ………」

「それで、今彼は何を？」

誠吾は丸で『神楽』を演じる凍夜を見ながら詠歌へと質問を投げた。

「発動する魔法の特定は出来ないが、アレは『歌奏舞闘』^{マスカレード}」

音振・流動・形象という三大法術を駆使する超高度な法術系の武闘様式。

指先の動き一つで成否が分かれる程の精密な演術力が問われるもので、本来なら直接戦闘で用いる様な代物ではないのだが、彼はそれを実戦レベルで使用出来るまでに昇華させた。

「歌い奏で舞うその全てが魔法となる彼得意の舞武闘です」

最も、まだ完成系ではないがと付け足す。

本来なら奏であるという行為も含まれるが今の彼はそこまではしていない。

今自分たちに聞こえてきている音、歌や曲は彼の実際に発されている言霊に乗せられているだけに過ぎない。

「成る程、それでマスカレード・仮装舞踏会ですか。となると、今彼が発している言葉が、音振系の極意『世界言語』^{ゴスペル}というわけですね」

世界に影響を与え魔法を引き起こす言葉、それ故に別名を魔法言語とも言われる音振法術の極意。

その音を他者に知られぬ様に、術者は自分の発する音に概念付与アストライズを施してその音の意味を変質させるのだ。

「通常の歌湊舞闘は、その歌や動きの一部に単発の魔法を仕込み発動させるものですが、今の彼にそれらしい（魔法の）動きはないので、恐らくアレは全てが完了することによって初めて意味をなす儀式でしょう」

成る程と相づちを打ってから改めて、凍夜に意識を集中する。

そして、丁度彼の歌が終わろうとしていた。

《我が舞に誘われ、我が詔みことことに従え、炎食の邪神獣エフラ・フォロ・ア》

凍夜の歌が終わりを迎えたその時、海上には幾つかの巨大な黒い球体が姿を現した。

巨大な球体は次々に炎嵐の中へと飛び込んでいく。

そして、幾ばかりもの時間も経たぬ間に見る見るうち炎の量が減少して行く。

このまま全ての炎が飲み込まれるのかと思われた。

だが、巨大な黒い球体が突如一つまた一つと何かに断ち切られて潰えていく。

（出てきたか）

しかし、それこそが彼の狙いだった。

瞬く間に三十程は軽くあった筈の巨大な黒い球体が屠ほぶられた。

そして閃光が一条、凍夜へと襲い来る。

凍夜は両の手に刃を構え、自らも閃光へと突撃する。

凍夜と閃光が激突して、衝撃が走る。凍夜の突撃は閃光に食い止められ、閃光の強襲は凍夜の刃に阻まれた。

両者が相対し、閃光の動きが止められたことによりその姿が露わ

となった。

『我が揺りかごをかの化け物に食わせるとは、貴様消滅に値する。ただの死では終わらさん、過去・未来全てに置いて貴様という存在を焼き尽くしてくれる』

「人間の都合で勝手に呼び出されて、巢を荒らされて怒るのはご尤もだが、こつちもそれではいそうですかと言いつ訳にはいかないんで、ねっ！！！」

力を込めて相手を弾き、自分も下がって距離を取る。

月御衣つきみしろを着ていたから良かったものの、そうでなかったら近づぐことも叶わぬうちに焼け死んでいただろう。

それ程までの熱量をこの相手は纏っている。幾ら戦神専用の武装たるこの月御衣 核の雨の中でも十日は裕に過ごせる代物 と言えど、これ程の熱量を当てられ続ければ長くは持つまい。

『ほざくなよ人間。人間風情にこの我を止められると思うなよ』

「一応こつちは『神をも殺す』って触れ込みなんでね、悪いがアンタには退場願うよ」

『ぬかせ！！』

二人の距離はまた縮まり紅蓮の爪牙そつがと銀の刃が再びまみえた。

64・戦神VS炎神2

『ほう、やはり我に触れても無事なのかその刃は。触れられぬ筈のものに触れるか？ となれば、貴様の言葉も強ちただの虚栄ではないようだな、ほざくだけのことはある』

刀の刃に平然と触れながら感心した様に言ってくる。

『我が』ではなく、『我に』というのは慢心ではない。

本来ならばそうあるべくしてある。それを誰より自身で知っているが故でのことだ。

『だが、なまじ“触れられる”ということでも勝機を感じている様なそれが誤りであることを教えてやる』

瞬間的に押し込まれ、凍夜は後ろに飛び退いた。

この場合においてこの触れるということには二つの意味がある。

「まさか、“こんな程度”で神に勝てるなら誰も苦労はしないさ」
一つはそのままの意味。そもそも触れることが出来ているということだ。

この者は正しく『神』としてファナによって召喚された。

現在召喚系の魔法を得意とする地はエジプトであるが、そのエジプトの高位の召喚師タウワーですらもこれ程忠実に神を呼び寄せる者がどれだけいるだろうか。

彼女の召喚はそれ程に高度な技術だ。

召喚には三段階ある。

具象化の魔法や錬金系の魔法によって作り上げた傀儡くわいと言われる意志無き人形を操る式神術、傀儡或いは人や物などの媒介ひょうらいに疑似人格（実際に人であるとは限らない）を憑依させる憑霊術ひょうれいじゆつ、そして媒介を用いずその存在そのものを顕現させる降臨術。

先程凍夜が行ったのも召還で、魔粒子を媒介にして行われた憑霊術だ。そしてこの者は紛れもなく降臨術によって召還されている。

媒介無くして呼び出されたる神、一次限の物質界にも二次限の非

物質にも形としての存在を有しておらずただそういう存在という概念として存在するのみの者。

故に、本来ならば触れられぬ存在。

彼はその筈である存在に触れる術を有する魔法師でも高難度の技術ツクを駆使している。それを“こんな程度”と言ったのは、彼にとつてこの技術キミックが容易いというよりは、相手の存在がその技術キミックよりも遙かに厄介であるところから来るものだ。

《BIGGM：Doubt&Trust〜ダウト&トラスト〜/access》

「だから………恥や外見なんてもんはかなぐり捨てて、今の俺に出来る最高を出さないとな」

「相対する神は眉を顰しかめる。」

「なんだこの音楽は？」

「まあ、言ってみりゃ俺の鼓舞いぶし唱うたってところかな」

「鼓舞唱だと？」

鼓舞唱とは、戦に赴く者を奮い立たせるための歌で、音振法術による魔法まじないが込められているのが普通だ。

だが、この音楽はこの空間一体に満ちる魔粒子を彼の意志で音とアストラルいう概念を伝播させて発せられている。

人の耳には「音」として届くが震えている訳では、これでは音振法術は発動しない。

確かに、実体のない概念体にはそういう攻撃方法もあることにはあるが、この音にその性質はない。

「我は炎神たけという猛る神として戦神いくしの一つとして崇められる一つではあるが、この様なものを聞くのは初めてだ」

「だろうな。こいつは俺の趣味だ。俺が聞いて“楽しければ”それでいい」

「楽しむだと？」

「ああ、そうだ。俺は気分屋でね。テンションの上がり下がりがあるまま戦闘力に影響を及ぼすタイプなのさ。今はこうして好きな音楽でも聞きながらじゃないと、とてもじゃないがアンタの相手は務まりそうにないからね」

『幾ら足掻こうとたかが人間一人が、貴様ら自身の種族の集合意識によつて生み出した我に勝てる^{かみ}とでも？』

「やってみれば分かるさ」

凍夜は不敵に口を歪ませて笑うと双刀を構えて斬りかかった。

現代社会に置いて基礎体力向上以外が目的での筋力トレーニングというものは非常に珍しい。今時そんなことをするのは、非魔法系のスポーツ選手くらいのものだ。

非魔法系のスポーツは、魔法が関与しない人間が本来持つ身体能力のみで競うことに意義を感じる者たちが行っているので、効率面でのことは関係なく非魔法であることに意味がある（但し、魔法を否定的に捉えている訳ではない）。

確かに競技の水準としては魔法競技に劣るとしても、人間本来の限界をめざし己を鍛え上げた者たちの攻防は非魔法ならではの魅力があり、そのファンの数は魔法競技にも劣るものではない。

しかし、そのファンが選手たちと同様に非魔法であるところに拘って何かをするかと言えばそれはない。

何しろそれによつて得られるものがないのだから当然だろう。

彼らは飽くまで観戦する立場であるからこそ心躍らせるのであって、それを自己投影したいとまでは思っていないのだ。

それもその筈で、理由は実に明々にして白々“意味がない”からだ。

幾ら肉体的なトレーニングを積んだとしても、その向上率は下手な魔法の足下にも及ぶことはない。故に、殆どの者にとってそれは

無意味であることなのだ。

トレーニングで得られる能力値は時間が掛かる上に強化魔法による向上率と比べるべくも無い、元々からの身体能力に左右されるために確実性にも欠ける。強化魔法の向上率にも個人差は存在するものの、それでも肉体的トレーニングで得られる期待値よりも遙かに大きく何より一時的ではあっても確実だ。

それに加えて、強化魔法により得られる能力値は肉体的能力に依存しないという点も大きい。

どういふことを例えるならば、屈強な体格の者と貧弱な体格の者の両者が力比べをしたとして、肉体的能力のみでは圧倒的に後者が劣っているとす。しかし、魔法による作用を受けたならば拮抗きうこう又は逆転の可能性もある。

魔法強化による向上率は魔法技術に起因し、限界値は肉体ではなくエンデル霊体に関する。

そして、能力値・限界値の向上には勿論のこと修練が必要ではあるし向き不向きもある。だがそれでも一般的に得られる能力値、最終的ポテンシャルはほぼ等しいと言ってもいい。

その上での優劣は運動能力の優劣ではなく、それを駆使する者の裁量次第というのが“一般的”な捉えられ方だ。

魔法というものは、意識的にも無意識的にも脳を駆使する。

本人にとつては、魔法は発動させれば終わりという感覚でしかないが、実のところはそうではない。パッシブスキルはその最たるもので、その発動の維持には脳の（一般人の場合）無意識領域を使用している。

つまり強化魔法の限界というのは、脳の限界であり人間の限界ということだ。

それ故に、同じ人間である以上多少の差はあるものの、基本的な上限に大差が生じない。

戦いというものには二種類ある。

一つ目は戦力と戦力とがぶつかり合う戦争、そして二つ目は個々が渡り合う戦闘だ。

戦争と戦闘はそれぞれの求める結果が勝利であることに對して、結果を導く手段には大きな違いがある。

戦争に重要な要素はより広範囲で高出力の圧倒的な戦力。一方戦闘で重要なのは確実性。という風に今の世では言われている。

確実性という言葉を分かりやすく置き換えるならスピードだ。

相手より速く動けば攻撃は当たらない、相手の攻撃が当たらなければ負けはない。逆にこちらの攻撃は当たり、勝機が上がる。

勿論全てのことこれにこれが当てはまる訳ではない。だが、往々にしてハイランカーの魔法師の攻防が激化すれば行き着く先がそこであるというのは事実だ。

だが、それでも頭打ちはそう遠くない。そしてこそが一流の魔法師と凡庸な魔法師とを隔てる一つの基準と言われている。

スピードを上げるということはただ魔法を使う以上に脳を酷使する。

速度を上げれば上げる程に周囲の認識は困難になる。それは速度に對して脳の処理速度がつかないからなるからだ。故に、通常の魔法師ならばその限度は脳が処理しきれるまで、電気信号の限界ひいては光の速度の限界と言ってもいい。

魔法による限界はまだ先であったとして、それ程の速度を出しても物を捉えることが出来なければ意味がない。

瞬発的なものであるならば『感』でどうにかなるだろうが、連続的な使用は危険極まりない。

本来ならそれを人間の限界として受け入れるのが普通だろう……だが、一部の魔法師たちはその人間としての限界をも超えようと思つた。

そこで魔法師たちが着目したのが光を超える情報伝達媒介だ。

魔粒子には一次限に置ける法則は存在しない。つまりは魔粒子に速度的限界はない。

その性質を利用し魔粒子を電気信号の代わりに使う術を編み出した。

それが、通称を演算魔法とも言われる世紀の大魔法『ジノープス』。思考から発生する電気信号を魔粒結晶へと置換する魔法だ。

理論上だけでなら、人間の限界を無くす、究極の魔法とも言われる代物だ。

魔粒結晶ミステリオンというのは、概念を魔粒子アストラリスに概念結合させることによつて物質・非物質の両方に干渉可能な中性物質で、それを電気という概念を概念結合アストラリスさせることで物質界の電気と同じ性質を持った魔粒結晶ミステリオンが作られる。

概念結合自体は魔法ではなく魔導ではある。よつて、理論的には万人に使用可能な筈の魔法だが、実際にこの魔法を扱つことが出来るのは一部の魔法師たちで、その者たちこそ世間では一流という扱いを受ける。

《BIGGM：瞬間センチメンタル／SCANDAL》

今日の前　とは言つても、距離的にはかなり掛け離れているがで行われている『戦闘』も激化と言われる言葉に相応しく周囲に撒き散らす破壊力を高めながら、そのテンポも段階毎に増していく。

「なあ見えてるのか？」

智之は隣の修之に問い掛ける。

「いや。七曲目から既に限界だ」

「七曲！！」

智之にとつてはそれだけでも驚きだ。

現在は凍夜が流す音楽は今が九曲目、智之は四曲目からはチラチラと姿が垣間見えるだけで、戦況の把握は出来ずにいる状態だった。

凍夜と炎神の戦闘は派手さを伴わずに細々と始まった。

凍夜が両の手に構えた刀で剣の舞を披露するかの如き鮮やかさで連撃を打ち放ち、炎神がそれを受け止めて隙を作っては反撃をする。始めは海面のみであった筈の戦いは、今や海上という空間全体を使いしかしそれでも尚、両者共飛び道具は無粋とでも言うかの様に直接的な激突のみを繰り返す。

凍夜は曲が終わるとまた新しい曲を流し始め、曲が変わる度に速度が飛躍し戦闘のテンポまでもが変化した。

只音を響かせるだけだった両者の撃ち合いは、いつしか衝撃を生み両者がぶつかる度に海面を荒立たせ、避ける度に雲が裂かれてまだ南中に達していない太陽の姿を覗かせる程にまでなっている。

今では、衝撃音と海面の爆せる現象だけが、二人がまだ戦っているという証だ。

この戦闘をリアルタイムで把握出来るものは二人と同じ領域にあるものだけだ。そして、それはこの場には二人だけしかない。

「妙ですね」

「確かに……………」

誠吾の言葉に詠歌は同意の意思は示す。

「何故、あの炎神をなめる者は放出系の技を出さないのでしょうか？」

「恐らく、それはダイヤの所持者を炙り出すためでしょう。端から炎嵐自体を解体されてアレを呼び起こすところまで奴らの計画の内だった」

流石にここまで来たら背後に奴らの関与が見えてくる。誠吾は成る程と相槌を打って続き引き継いだ。

「知らず畏に掛かった我々が浮き足立って所持者に頼るのを狙ったか……………」

「或いは全員始末してから後から奪うつもりだったか……………」

ころでしょう」

「狡猾ですね。実に奴らしい……………」

凍夜の戦闘を見る限りで読み取れる情報をつなぎ合わせるとこんなところだろうか。

彼は斬りつけるその瞬間以外は炎神との距離を空ける様に間合いを取っている。そのことから推察するに、炎神の名に相応しく奴は熱量を司っているのだろう。

凍夜が警戒する熱量をほこっている。それが、二つ目の触れられぬ筈の理由、本来なら触れた瞬間には灰になっっている筈なのだ。

だが、そうであるのにも関わらず大気に変化はなく。海水も熱を加えられた変化は起こっていない。

つまり、その存在が認識出来ているのが人間であるだけであるあの炎神はその存在と同じく、知覚出来ている者のみを対象にしてのみ力を発揮する様にしてあるのだろう。

確かにそれならば所持者を判別出来てなくても、全ての関係者を屠ったその後でダイヤを無傷のまま手に入れることが出来る。

それが万事上手く行くとは向こうも思っていないだろうが、それでもこれは計算違いに違いないという確信がある。

何しろ、これはあまりにもこちらの予測の範疇も超えたことであるからだ。

奴らのやることはいつも大掛かりでいて更に傍迷惑極まりないものばかりだ。

それ故に、ヘブンス・ディザスター天の厄災よりも悪質極まりなく、悩ましい限りだといふのは分かる……………分かるが、しかし……………

「詠歌さん？　どうかしましたか？」

その奴らと渡り合ってきた詠歌がこれ程にまで取り乱すというのは些か不自然過ぎた。

それを気に掛けた誠吾が詠歌に気遣わしげに問い掛ける。

「妙なのですよ……………」

誠吾の問い掛けに詠歌は素直に答えた。

下手に隠そうとしても相手は、四大柱の一柱を担う大柱たるその一人。そうそう隠し通せるものではない、今の状態では尚更だ。

「妙というのは？」

勿論先とは違う論点のことであることは疑いようがない。だが、それが何であるかは分からない。

誠吾自身には先の違和感以外は感じていないのだ。

「凍夜の動きが妙なんです。動きにいつもの精細と華がない…………確かに鮮やかに舞っている様に見える。が、どこかぎこちなさを感じるのです…………」

「当たり前だ」

詠歌の感じる違和感に、返ってくる筈のない答えが返ってきた。

答えたのは神埜だ。

「目覚めたか」

「見れば分かる」

しかし、まだ完全な覚醒とは言えない様で神埜は片手で頭を抑えて獄炎嵐対策本部の仮設テントから出てきた。

「大丈夫ですか、神埜さん？」

「ああ、問題ない」

誠吾が手を貸そうと差し出したがはね除けられた。

凍夜が気絶させたと沙樹たちから聞いていたので、目が覚めたならば問題はない筈だ。彼女の状態を考えれば少々酷ではあるが、今は一刻も早く事の詳細を聞きたかった。

「神埜、起きたそうそうで済まないが、それはどういう意味だ？」

「そのままの意味だ。アレは『あの人』じゃ

パーーーーーン！！

神埜が言い終わる前に、何かが弾ける轟音が響き渡った。

「何だっ！」

詠歌が叫ぶ。

神埜に視線を向けていた詠歌と誠吾は何が起きていたのを見逃していた。

「凍夜が落とされたっぽいさ……………」

65 戦神VS炎神3 覆われし夜

《SBGM：運命の系/JAM Project》

「君のその想いは、嬉しく思うよ」

両の瞳の内の片方に異才の象徴を抱える少年の告白に、これまた片方の瞳に特異な色を宿す少年がそう答えた。

「でも、賛同はしてくれないんだよな……………」

今更ながらの問いかけだ。本当に今更の

何故なら、その是非を聞く前から少年は今日の前にいる無二の親友へと必殺の一撃を確固たる意志を持って放っていた。

それも背後から他のことに気を取られている状態だ。なんとも情けない話だ。誰にどの様な罵りを受けようとも弁明の余地もない。

だが、それでも“普段の彼”なら当たっていたかどうかすらも怪しかった。幸か不幸か、しかしそれは彼の片腕を奪うという結果をもたらした。

「ああ、それは絶対にならない。人はいつかは死ぬものだ。確かに、あの人の死に方が正しかったとは俺も思っていない。何の犠牲も無しにあの人を蘇らせる手段があるなら、俺もそうしてやりたいさ。でもな、いかなる“魔法”でも出来ないことはある」

その結果とは無関係に、片腕を奪われた少年は奪った少年が予期していた通りの答えを返した。

人類の歴史の中で、望み続けられた最も多くの願いが二つある。

一つは恐れを知る人間が望む自己の生への渴望、不老不死。

そしてもう一つが、愛を知る人間が望む他者への生への願い、死者の蘇生。

当然その二つの魔法は、魔法というものを人類が使役する様になつてから 否、それ以前からもずっと研究されている究極のテーマだが、それらは依然としてその完成を見せていない。

辛うじてその前者の願い不老不死への片鱗を覗かせた魔法師は存在した。

第三魔法：破壊を司り、その超越した知識を惜しみなく世界に流布した偉大な大魔法師アスラ・ファーノック・レイド。しかし、そのアスラですら不老でありながらに死に絶えた。

魔法は万能ではあるが全能ではない　それが魔法師のみならず全魔法士がその胸に刻む真理

「人間の感情つてさ……………それがどんなに無理なことでも、無茶なことでも、どれ程自分で愚かだと分かかっていても、誰にどれだけ迷惑であるかを知っていたとしても　それでも……………どうしても……………どうしようもない……………そんなときがあるんだ……………人間にはそんなときがあるんだよっ」

最早、理屈ではない。

それを察した　のではなく再認した少年は片腕を無くした状態でも、戦意とそして勝機を一切捨てていない強い眼差しを親友ともと慕う少年へと向ける。

「平行線だな……………」

互いに譲れぬ信念を持つ者同士、それが同じ道を歩んで行けていたならばこれ程快いときはなかっただろう。実際今まで同じ時を過ごし互いに、家族程に気の置けない者同士であった。

だが、互いがどれ程に譲らない、譲れないかを知っている二人であるからこそ、その決着の方法は一つしかないのだと確信していた。「ですが、その前にまずは返して頂きましょうか……………我が**を……………、*****」

あのとき彼は何と言っただろうか……………途中までははっきりと

覚えているのに、その先からは曖昧あいまいになっている最後の記憶がフツと蘇る。

きつとあるとき、自分は負けたのだろう……そこから先のことは自身の記憶ではなく、この体の記録を断片的に繋ぎ合わせた様に実感としてではなくただ情報として知るのみであることを、海の中へと叩き込まれ沈み行く体の状態を確認し右腕の肘先からが無くなっている状態を見てから遅まきながら気付いた。

それにしてもこれは何たる皮肉だろうか……相手が神であるだけに、これは神罰なのではないかとすら思えてしまう。そう思うと逆に嗤わらいが込み上げてきた。彼の右腕を奪った当人たる自分が、こうしてこの体の右腕を失うという事態に因果を感じるなという方が無理だった。

流石は神だ。どう誤魔化そうとしたところで、あっさりと弱点を看破されていた。否、神眼を持つ神ならば“中身”などとうにお見通しか……

振るわれる四肢の内左腕だけは生身だ。魔法を　　否、正確には魔術を使えないこの体ではどう足掻いても人間の限界以上のことは出来よう筈がない。

それを可能にしていたのは、飽くまでも両の足であり右腕であった。両足と右腕は最大で彼の最高出力の八割を体現できるだけの性能を誇るといふ代物である。

だが、それを使いこなすことが出来るもの彼だけしか存在し得ない。しかし、それでも並の魔法師には視認出来る術がない程の速度を出せていたのは元々（魔法強化状態）の彼のポテンシャルがあまりにも高かったからだ。

そして左腕だけはどうあっても全体の動きにはついてこられない。速度を上げれば上げる程にそれは如実に表れる。そして、神眼を備える神がそれを逃す筈もなかった。

左腕を狙ったその一撃を右腕で庇った結果がこれだ。

これで、実質的な戦闘手段は絶たれたといつてもいい。

だが、それでも生身の体をこれ以上損傷させる訳にもいかないのだから、義手の一つで防ぎ切れたことはある種の幸運とも捉えらる。推測ででしかないが神の一撃は霊体をも損傷させることが可能は筈だ。

確かめる術はないが、自分たちの想像する神という存在の姿が顕現したものならばその程度のことにはあつてしかるべきであり、召喚したのがフアナであるならばその位の能力を備えている者呼び出したと考えるのが妥当だと考えられる。

ならば、その神の一撃から生身の体を守れたというのは実に大きい。霊体を損傷したならば、流石の穢れた聖水セイブラントでもその修復は不可能だからだ。

元々勝負にすらならない差があることは、誰より自身で分かりきつていたことだ。だが、それでも勝ちたかった　　否、勝たねばならなかった………自分には何かを願うだけの資格もないことを百も承知で、それでも尚、誰にどう思われようとも、せめてささやかな意志だけは貫き通したかったから………

健闘していた様に見えたのは、あの神が闘いを楽しむために自分に合わせていたからに過ぎない。

要は、手を抜いていたからだ。

せめて、下が陸であつたらならばもう少し善戦出来ていただろうが生憎の海の上と地の利が圧倒的に向こうに効いていた。

凍夜は飛んでいる様に見えただろうが、実質的な意味では飛んではいけない　　飛べない。飛行・浮遊などの魔法は魔術としてはそれ程難しいことはない。だが、法術でそれをなそうとするとかなり高度な技量が必要とする。しかし、彼にはその技量はない。知識としてはこの体の記録に記されているが、知っていることと出来ることは別物である。

彼は空を飛んでいたのではなく、跳んでいたのだ。流動法術二系スキル『触空しよくく』、読んで字の如く空に触れる技で、彼が施行してい

たのはその派生の一つ『空歩』、空を歩く技だが飛んでいる訳ではないので軌道がどうしても単純になってしまいう上に、相手は空を飛ぶどころか空間に存在するという反則的な輩だ、高速になる程相手に有利になるというのだから困ったものである……………

最も、何が一番反則かと言えば勿論その在り方そのものが反則であるだけに、ケチを付け始めたら切りがない。対峙するためにはまず辺り一帯をミスティックフィールドを展開しなければならなかったこと、攻防の全てに魔粒結晶化を施さなければならなかったことやその所為で大量の魔力を消費しなければならぬこと……………

持て余す思考力が、自己の表層的な意志とは関係なく頭の片隅で様々な思考を繰り広げている間も、彼の体は海の底へと向かって沈んでいく……………

凍夜が海中へと叩き落とされてから既に五分という時間が過ぎていた。

月御衣つきみしんを着ているのだから窒息することはないが、意識が無くなっているのならば問題だ。更に、悪い状況を考えるならば命の危険だつてある。

「お前らしい加減にしるよ……………あたしに殺されたいのか？」

凍夜が落とされた瞬間、神埜は即座に駆け寄ろうとしたが、誠吾と詠歌の二人がかりで力尽くで止められた。流石に、この二人が相手では神埜とてすなりとはいかず、足止めを食らっていた。時間の経過と共に怒りが刻一刻と増大していく、神埜の本気の殺意を含んだ声が詠歌と誠吾に一層の緊張感を高まらせる。

「神埜さんお願いですから、もう少しだけ待って下さい。今、誰かが手を出す訳にはいかないのですよ」

「それは、アンタら大人の都合だろうが、あたしには関係ない」

誠吾 四大柱の頭首、そして日本屈指の魔法師 の言葉です

らも彼女には何の効力も持たない。

「これは、彼の意志だ。我々は見守ることしか許されていないんだ」
詠歌の彼の意を盾にした言葉ですらも、今はただ神埜の怒りの炎
に油を注ぐだけだった。

「ふんっ、それでもアンタは姉のつもりか？ 弟かどうかも判断出
来ないで偉そうなことを言うなよ」

「さっきも言っていたな、どういう意味だ？」

「あれは……………今あの体を使役しているのは、あの人じゃない」
その言葉に、詠歌は衝撃を顔に露わにした。

「霊波動があの人のもんじゃない。つまりは、あれは別人ってこと
だ」

神埜は凍夜が目覚めた瞬間から、それを第六感たる霊導感^{れいどう} 霊
体或いは魔導器官の感覚であつて、直感という意味はない で、
機敏に感じ取っていた。

流星の二人もこのことに驚愕の度合いを更に高めた。

口調を公私で使い分けることはままあることである。彼の場合、
公としての立場は最高位であり、ある種ならばものは在れどその上
はない。それを考えれば、公の立場での彼の口調が普段より強いも
となるのは必然である。

普段の彼しか知らぬ者なら、確かに口調の変化だけでも十分に驚
くべきことかも知れない。しかし、彼の責務の重要性知る者にとつ
てはそれは当たり前と言えた。だがもし、炎嵐へと向かう最中の言
葉を聞いていたならば、詠歌は間違いなく凍夜の違和感に気づいて
いた筈だった。

そうはならなかったのは、彼がそれをしなかったから故である。
自在に音の領域を指定出来た彼に詠歌たちには聞こえないすること
は容易い芸当だった。

「では一体誰だというだ……………」

どうやって？ なんのために？ 思うことは様々ある。だが、今

はただそのことが何よりも詠歌の頭の中を占めた。

炎神は凍夜を沈めた後は只漂っていた。あの一撃で殺したとは思っていない。だが、最早怒りを感じていない。それどころか、彼との闘いを楽しんでいる炎神は、彼が次ぎに如何なる手段を用いてくるかを心待ちにしている。

戦神いくさかみに讃えられる神で。そうであるなら好戦的であつて然り。始めは確かに怒りを感じていた。しかし闘いを享樂たのしみのために重んじる彼は容易く相手を屠つたりはしない。そして、存外面白い闘いになり怒りを忘れていったのだ。

明らかに 神眼を備えたこの神という存在からしてみれば不備を抱えた体である少年の好闘振りは、戦神たる自分が目覚ましいと感じた程だ。勝ち急ぐ様に最強の一手を繰るのではなく、次に繋がる最善を、その場に合った最高を、不出来な軀体くたいでも尚常に繰り続ける判断力と戦闘センス、そしてそれら支える強靱な精神力は並大抵のことでは体得し得まい。

だが、それだけではない。確かに彼の闘志は本物であり手抜かりなどはなく、正に死力を尽くしていた（筈という仮定ではなく断定）。しかしそれでもまだ少年からは拭いきれない何かを感じていた……

彼の周囲では、炎の勢いが時間の経過と共に徐々に高まりを取り戻している。この炎はこの神の意志とは無関係にまた炎嵐へと成長を遂げる。

凍夜が放った黒い球体が食らったのは単なる表層的な現象に過ぎない、この炎嵐を完全に消し去るにはこの事象の核を消し去るしかない。だが、それは容易くはない。

方法は二つ、この炎嵐を遙かに超えるより強力な魔法で吹き飛ば

す方法。そして、事象の核たる構成術式を的確に解体する方法だ。前者は国内だけに留まらず、海外にも多大な影響を与えるために出来ることなら避けたい。そうした理由から選ばれたのが後者であり、そのための今作戦であった。

だが、分かったことは構成術式ではなく、事象の核が組み込まれているのがこの炎神であるという事とヒュストレムがこの一件に関与しているという事だった。

そこに誰しもが予期し得ぬ誤算があった。それが今は『紫司凍夜』と名乗る彼という存在

詠歌たちは彼のことを知っている様で知らなかった　あの夜に一体何が起きたのかを……その全容を……今の彼がそれがある故での彼であることを……

奴らは　特に、ヒューガは彼の存在をもっと推し量るべきだった。真実を知りながら、結末を知り得ていないのだから……

それは只一夜の出来事
それは一度切りの邂逅かいこう
それは想いのなせる業わざ

皆は知らなかった。七年前の死闘の行く末の真実と結末を……

「えっ？　夜？」

自分たちが集められたのは早朝で、今はそれからまだ数時間しか経っていない。

戦闘中に厚い雲を断ち切って垣間見えた光は、紛う事なき太陽の日差しそのものだった。

だが、今彼女たちの頭上を覆うのは夜の帳とほじ。星はない、だがそれでも暗くても仄かにあたりを見渡せるその闇色は間違いない夜だっ

た。

「今度はどうなってるんだ？」

「何故、俺に訊く？」

溜息混じりに修之は問いかけてきた智之に問い返した。

「いや、俺らの中じゃ一番いろいろ知ってるからさ。何となく、なあ？」

同じく修之に視線を向けていた幾人かのクラスメイトに同意を求め。

『お前らはもう一回あいつの授業を受け直せ……………』と、直ぐに他人に答えを求めるクラスメイトたちを眉間に皺を寄せて突き放した。

「夜は紫司の『凍夜』の象徴の一つだよ……………」

沙樹がポツリと呟いた。

「夜・冽・矢・剣・無……………」

隣の麻里奈が指折り数え上げていく。

「戦・震撼・紫電……………は確か雷と雷土の二つ共で、最後に死だった筈よ……………」

満里奈は事ある毎にいつの間にもやら巷で勝手に追加されていく誤ったものは含まずに、紫司の姓及び凍夜の名のに込められた象徴を正確に答えて見せた。

「だよ……………じゃあ、これはまた凍夜くんが何か仕掛けてるってことだよ？」

恐らくこの中で誰より凍夜の安否を気遣っているであろう沙樹は、そのことだけで十分だった。少なくとも、あの激しい戦闘で命を落としたという最悪の事態だけは回避出来たのだと確信出来たから。

水柱が一気に立ち上り、遅れて激しい音が静まりかえった戦場に再び音を響き渡らせた。

数秒が経過すると水柱の中に一点の光が見えた。

『ヘテロクロミア……。成る程、我にも見えぬ呪いが施されていると思えば、正体はその魔眼か』

その光を宿す主の姿を認めた炎神は、納得の声を上げた。

凍夜の顔にいつも付けている不透過の眼鏡はなかった。

「出来うることなら使いたくなかったんだ……………」

そう呟く少年の顔は悲痛に歪んでいる。

「紫眼、開眼」

言葉と共に紫色の光が眩む程に光りを強め、この戦域一帯にいる者たちのその殆どが感じたことのない、哀の色に染まる全身が痺れる程の魔導波を生んだ。

66・あるがままに

「いたい……………」

全身を激しく突き刺す様な痛みで1-Aの生徒の一人たる荒木香あきのますみ恵かえが体を抱く様にして膝を屈した。

「香恵っ」

席が近いことから親睦を持つようになったクラスメイト浅野真澄あさのますみが、気遣わしげに声を掛ける。だが、その真澄にしても平気ではない。彼女の頬にも、涙が筋となつて滴っているほどだ。

そうなっているのは彼女たちだけではない。

今作戦に協力しているものたちのその殆どがこの様な状態に陥っている。老若男女の例外なく、女生徒だけではなく男子生徒も、将又正規の軍人までもがである……………

その中でも酷い者となると、泣き叫ぶものごといたり、気を失つていたりと本来ならなんの変哲もないただの付随作用の一つに混乱させられていた。

「馬鹿な……………あり得ない……………、そんな話は聞いてないぞ……………」

その中で驚きのあまり我知らず零れた囁きは、幸いにも喧噪の中に消えた。

魔導波は魔術の施行には絶対的に発生する。上級者ともなればそれを気取られぬ程に押さえ込むことは可能ではあるが、それでも完全に消すということは出来ない。

よって、魔導波の隠蔽能力いんぺいは重要なアドバンテージとなる。死角からのアクションや不意打ちの成功率はこの能力の高さがものを言

うからだ。

だが、別にこれはそれだけには留まらない。

如何に相手から自身の魔導波を隠せるか。どれ程相手の魔導波を感じ取れるか。一流の魔法師たちが対峙する際はこの二つに留意するのは常である。しかし、魔導波の隠蔽に関しては一流の魔法師たちだけに限ったことではなく、全魔法士に共通する切実なる問題を孕はらんでいる。

魔導波……より正確には活性波ということになるのだが、それは活性ライズ化時に想いの一部を付加してしまうという特性、ドウィフという現象があり、活性波に付加されたその想いは波動を受けた者に容易に知るところとなってしまう。

他人に想いをそのまま伝えるということは、多くの場合に置いてその内容に関わらず伝える側には相当の覚悟をしているもので、それこそ決死の覚悟をしなければならぬときだつてある………それに加えて、対象も任意に特定出来ず誰彼構わず想いを吐露していたのではプライベートも何もあつたものではない。

今日まで魔法の発展開発・使役をすることが出来てきたのは、そのドウィフを押さえ込む術を身につけることが出来たからというのは間違いない事実である。

その方法とは実に簡単である。概念付与アストライズ、強制的に発生してしまうものならば付加する想いを任意に指定するまでだ。

魔法は心の写し鏡、強き魔法は強き想いより生まれる

今ではそれが幼き頃より自然と教えられるもので、逆に意識をするところがない程に浸透している言葉だ。

アストライズ自体は難しい技能ではない。要は、強く何かを思い、想いを宿すこと、それがアストライズである。

魔法の使用時は魔法のみに意識を向けさせる。ただそれだけのことでいい。その応用として、『無心』へ近づける者が活性波その

ものの発生を押さえられる様になる。

だが、後者は簡単なことではない。しかしそれでも月日を、代を重ね多くの魔法士たちの努力の結果として、近年の魔法に置いては露骨なドウィフは殆ど感じられることはなくなっている。また、社会的にそれが好ましくないという風潮にもあるために、逆に想いそのままを乗せることが難しいという者までいる。

今はそれ程の世の中になった……………

だが、今の凍夜の魔導波はどうだろうか……………

涙する程に悲壮な感情を余りにも露骨に、痛む程に痛切に叩きつけた。

『凍夜』を使うのを躊躇^{ためら}った理由は幾つかある。

確かにその一つとして、この無様な自分を想いを他人に知られなくなかったというのもある。だが、それ以上に凍夜を使うことよって引き起こされる事態を考えれば大したことではない。

そして、この炎神を倒すためだけならば、その問題を考えればそれもまた大したことでない……………

それでも尚、凍夜を使わねばならぬ理由について、戦闘中もずっと考えていた。

凍夜を使うことに確かに意味はある。

七年もの間凍夜が沈黙しているというのは、それだけでも十二分に他国に要らぬ懸念を与えている。その上、今は九極天が半数しかない状況で、明らかに戦力不足だと言える。

それでもこうして日本という国が存続出来ているのは、『血晶結界』という比類なき魔法の効果と、日本の誇る最強の武装組織『九極天』に在籍する凍夜を抜く二人のAランク魔法師の存在、そして世界最高峰の攻撃魔法『凍夜』への警戒があるからこそだ。

結晶結界は諸刃の剣でしかない。今は武力という面にて他国を牽制できるが、それが脆弱と知れば他国は挙って奪いにくることは明白だ。そうなれば、協定などというものは何の役にも立ちはない。寧ろ、レプリカで甘んじてた大国が、その庇護の下で力を蓄えている今、ここぞとばかりに攻めてくることだろう……

故に、ここで凍夜の健在を知らしめることは、ヒュストレムの件を抜きにしたとしても必要なことだ。

だが、それだけではまだ弱い……普通に考えるならば十分過ぎる理由だが、こと彼が彼女たちを悲しませてまでと考えるとやはり弱いと思わざるを得なかった。

しかし、海へ落とされたときにそれらの考えが全て吹き飛ばされた……

何もこの体の無事を願うのは彼女たちだけではない。自分だってその一人なのだ。

理由は彼女たちのそれとは違うものだ。異なる想いを比べることも出来ようないことだが、彼女たちの想いよりも自分の想いのそれの方が強いという自負がある。

その自分がこの体を守るために、この体を傷つける。その相反する所行を、何より自身の意志を持って行わなければならない。

そこから来る想いは到底、技術云々で覆い隠せる程に安いものはなかった……

『なんなのだっ！　なんだと言うのだその右眼はっ？』

まだ何もされてはいないというのに、神たる筈の自分がこれ程にまで狼狽えさせられている。

それ程に異様な気配を凍夜の紫の眼は醸し出していた。

「この眼か？　この眼はな魔法の眼だよ……」

深いく沈むような、響きのない冷たい声で凍夜が答える。

「真に叶えたい望みは何一つとして叶えてはくれない、魔法の眼……」

肘先から無くなった筈の右腕がいつの間にか元の形を取り戻し、その右手が右眼を外して顔を覆った。

「消滅と死を撒き散らすだけのただの兵器さ」

嘗ては誇ったそれが、いつしかただの重荷となった頃、それを『希望の眼』だと言った人がいた。そして、その人こそが、その言葉こそが自分の希望となった。

しかし、その希望すらも砕け散り自らの意志で破滅を選んだとき、そんな自分を最後まで友と呼び続けた友は言った『それでも、その眼は人を救うためにあるのだ』と……

（そう、こんなものはただの兵器だ……）
「魂の通ったなっ！！」

《凍夜一閃！！》

紫の閃光が神の体を貫いた。

（何だ、今は一体……？）

光が貫いた筈の自分の体を見ても別段変化はない。貫かれて穴が空いたわけでも、傷を負ったわけでもない。

しかし、確実に違和感があった。それも違和感などと言う生易しい感覚ではない。

それこそ、生ある者ならば命の危険を感じる程の危機感……それを神たる自分に感じさせた。それだけでも十二分に驚異だと言えることだ。

それ程の代物が何もない訳がないのだが、今は貫かれた瞬間の違和感以外の効果は感じない。

だが、それだけだというのが腑に落ちない。それがかえって『神』である自分に嘗て感じたことのない違和感を感じさせている。

その違和感が何であるか、『神』であったこの者には理解出来な

かった。

だが、その感覚に対する追求よりも今は目の前に存在する不可解な技に意識を奪われていた。

見えなかった……

閃光そのものは確認出来た。しかし、それが自分に届くまでを見ることが出来なかった。

神眼という目に捉えられない速度はない。

物が移動する。その過程が存在するのなら確実に捉えることが出来る。

それが、叶わなかった。彼の目が光った瞬間と同時に、彼の目から伸びる一条の光……それが、自身を貫いたということを理解したのは、自身に言いしれぬ違和感を感じてからだだった。

「つち、はずした」か……」

その声に視線を戻すと、既に目の前に少年の姿はなかった。

どこか？　つと視線を巡らせ上方に少年の姿を捉えることが出来た。

見ている間にも少年との距離は離れていく。そして………唐突に視界が何かによって遮られ少年の姿を見失った。

はずしたという言葉は正確ではない。眼は正確に炎神を見据えて捉え、魔法は確かに命中した。

本来ならば消滅させる筈だった。そのための凍夜、そのための鼓舞唱という伏線、そのためのミスティックフィールド：『夜天蓋・新月』。

万全を期した筈だがそれでも及ばなかったのは、凍夜という魔法の特性が強すぎたことと威力が弱かったためだ。

高い金属音、鈍い打撃音、軽い銃声、魔法による爆発音が響き渡る。

動くものはただ三つ、戦う二人とその二人を中心に生じる余波たる衝撃波だけだった。

凍夜が右手に逆手持ちした日本刀を体を回転させる勢いで振る相手の左肩からの袈裟斬りに掛かる。それを、魔力を固めた左手で受け止めて、右手に携える煌めく赤剣^{せきけん}を横一線に走らせる。

だが、右手の剣は凍夜の胸を捉える事無く空を薙いだ。

凍夜の体は避けるための動作でなく、追撃のための動作によってそれを躲し、刀を振るった勢い。否、その一連のための勢い全てをあますことなく、刀を持った手を回転軸にして縦に体を回転させ刀の棟に、左足の踵落として叩き付けた。

その勢いに左手は外されて、凍夜の刀が相手の胸を袈裟斬りにするも、それだけでは終わらない。

体が回転して足が刀を捉えるよりも速く、左手に構える銃の口は既に相手の胸を確実に捉えていた。凍夜がそのトリガーを引き撃てる限りの弾を浴びせる。

しかし、それに構うことなく避けられた先刻の横薙ぎを逆巻きにした一振りが繰られ、それを今度は右手の刀の棟に右足を当てて受け止める。

凍夜の体はその姿勢のまま、相手の剣撃に押し流される。

そこへ人の頭より一回り程大きい炎弾が数発叩き込まれた。

「コールドブレット」

迫る炎弾に同じ数の弾丸を叩き込み、全てを相殺した。

「人間とは不便なものだな……物理法則概念に雁字搦^{がんじがら}めに縛られ、物質である体はあの程度の動きに反応出来ぬ上に、五感も頗る鈍い」

この場合の五感というのは、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・霊覚のこ

とを指す。

「だがそうは言っても、手負いの者にこうもあしらわれるとは、我がことながらなさけない……」

『凍夜』よつて神であったこの者は真の意味では終焉を迎えていた。先刻海に落ちたのはそのためだ。

そして、以降の戦闘では誰から見ても凍夜が優勢を強いている。

「アンタが今まで卑怯過ぎたんだよ。神の最高位の刀淨神格級二十八士の一士の炎神：ガイスラス」

「ほう、我に気づいていたか」

「幻刃二十三口、炎赤剣ハクルメンツ。そんなの振り回していれば誰でも分かる」

「これか、確かにな」

「もつとも、今のアンタにそいつを使いこなすことは出来ないわけだが」

「誰の所為だ、誰の」

そついうガイスラスに怒りの表情は見あたらな。それどころか

「楽しそうだな、アンタ」

「まあな………不思議なものだ。体は重く、動きも鈍く思ったようには全く動かんし、魔法は施行せねば発動しない。だが、自らアストラルを生み出すということがどれ程満ち足りることか……」

まあ、貴様ら人間には分かりはしないだろうな………」

神という種にアストラルと生み出すという能力はない。神だけでなく、天使や悪魔、幻士族にはその人間には当たり前であることが実に当たり前でない。

しかし、彼らの存在の源は飽くまでもアストラルである。それらがなくして、彼ら幻士の存在はあり得ない。

彼らが自らでは生み出せないアストラルを得るための違いこそが、幻士の種族を違いでもある。

天使というのは、その翼によって外気に放出されたアストラルを得る種族であり、悪魔は直接人間から得る種族のこと。そして、神という種はその方法が実に厄介な種族で、その方法と言うのが崇拜だ。

人々がその神を想い捧げる祈りこそ彼らの糧となる。故に、より多き崇拜者を集めたる神こそがより力を得る。神が人々に崇拜を求めるのはその意味が大きい……否、それが理由だ。

情けは人のためならず、神が人々にもたらす恩恵は人間のためのものではなく、自身の繁栄のためのものである。そして、その逆もまた然り。

この様にして人々の崇高なる祈りから糧を得る神族を聖神というが……それに対して、厄災をもたらし畏敬の念を持って人々を支配する邪神もまた存在する。

そして、同種でありながらにその手法によって派閥を分けているのは天使と悪魔にも等しく言える。純天使と墮天使、功悪魔と凶悪魔、この三族六派さんぞくろっばの攻防はアストラルの乱獲と浪費という悪循環を生み出した。

その結果、幻士たちは常に飢餓に見舞われることとなった。人間の生み出す感情のアストラルは無尽蔵ではあるが無制限でない、いつしか彼らの果て無き争いは人間の生み出し続けるアストラルよりもより多くを求めるほどに貪欲になってしまったのである。

尤も、神族という種は存在の定義からして、他の種族とは一線を画す。それ故に、その特異な蒐集方法であるのだが、それを抜きにしたとしても、その特異な存在性故に神族に満たされるといふことはない。

「だが、この身であることが口惜しい……………所詮この我は、この世界に置ける我の写し身でしかない。この身で、人と成りしも所詮は泡沫、本来の我には何の変化もなく、そしてこの身に沸き起こる感情もまた知り得る術などありはしない」

「そいつは違うな……………」

「否、違わぬな。真の意味で我を墮としめることなど、所詮は無理なのだ」

「いや、まあそれも違うんだが、俺がさっき否定したのはそこじゃない」

その意味が分からずガイスラスは怪訝な表情を浮かべた。

「そのもつと前、『この身であることが』ってことろだ。

残念ながら俺の眼はそこまで強力じゃないのさ。仮にアンタが魔法によって召喚されたのではなく、アカシックレコードから直接介入して着た神という概念体であつたなら、俺の眼じゃ墮とすことすら叶わなかつただろうよ。

つまり、アンタはその身じゃなきゃ、その思いを抱くことすらなかつたってことだ」

「成る程、つまり貴様のあの眼……………あの技では、概念干渉までは至らぬということか……………」

そして、貴様の口振りからするにこの世界にはあるということなのだな？ それを為し得るものが」

「ご明察。 “今は” ないけどな……………」

「成る程……………」

願わくば……………と考えが過ぎる。神たる自分が願い事をするなと思いにちよらなかつた。

しかし、今はその不毛なる願いに現をぬかしているだけの猶予を持ち合わせてはいない。

「さて、そろそろ本当に時間がなくなつて来た様なのでな、続けよう！！ この無意味なる戦いを」

言葉を言い切ると同時に、ガイスラスが両手で剣を構えて大上段

から斬りかかった。

凍夜はその剣を受けることなく、振り下ろすモーションに入ったのを見計らい忍び足を使って視覚へと回り込む。

「無意味だと言うなら止めて欲しいもんだっ」

そこから攻撃を加えようとしたところで、ガイスラスの全身から炎が吹き出し、攻撃を阻んだ。

「意味はないが、価値がないわけでない」

防御のために一旦纏った炎が左手に凝縮して剣と化して凍夜の頭上から襲い来る。そして、もう一方の剣もそちらは下から迫る。

バックステップで剣の間合いから離れ、空かさず銃弾を十発連続で撃ち放つ。

しかし、双剣を繰るガイスラスは放たれた弾を全て切り捨てた。

「どうした？ 威力も数も減ってきている。動きも徐々に鈍くなっている様だが」

「当たり前だ……………アンタと違ってこっちは、一応生身なんでね。消耗だけじゃなくて疲労もするんだよ」

ガイスラスは神ではなくなった。しかし、魔法によって作り出された魔法体であることに変わりはない。傷を負えば即座に修復され疲れることもない。

一方凍夜はその殆どを義体化したサイボーグだと言っても生身の部分が存在する人間である。激しく動けばその分疲労するのは当然のことだ。

『穢れた聖水』セイフランド によつて常人の数倍の回復力を持ち合わせてはいるが、この戦いにおける消耗はそれでも尚足りるものではなかった。「だから……………とつとと、やられてくれやー」

感情を剥き出しにした叫びと共に、今度は凍夜がガイスラスへと斬り掛かる。

誰も分からなかった。最早この二人が戦っているその訳が……………
炎嵐は既に消滅している。

凍夜は外れてはいない。確かに、ガイスラスを消滅させることは出来なかった。彼を構成する要素が凍夜の威力を上回っていたからだ。

だが、それは彼という存在の中核が残っただけに過ぎず、彼を構成していたその殆どが凍夜によって消し去られている。故に最早彼は神という超常の存在ではいられなくなった。そして、彼に埋め込まれていた炎嵐の術式もそれとともに消え去った。

つまり、今作戦の目的は最早達成されている。

だが、彼らの戦いは終わらなかった。

「アンタにとつてのこの戦いの価値ってなんだ？」

「知れたこと、戦神である我が……戦うことに意味など必要ない。ただ戦うことそのものに価値があるのだ」

多くの存在を剥ぎ取られたが、神としての有り様までは失わなかったガイスラスに止まる理由はない。

しかし、それはガイスラスだけの理由であって凍夜が戦う理由にはならない筈だ。

「貴様こそ、揺りかごを消し去るためにその右眼を失った身で、何故我と相對する？」

凍夜の発動と同時に消え去ったのは、炎嵐だけではない。

彼の右眼もまたその自身の放つ魔法の効果に絶えかねて失われた……単に、肉体を失ったわけではない。

確かに、彼の眼は義眼ではあった。だがそれは、手術によって晴眼であったものと入れ替えただけに過ぎない。つまり、彼の眼は実質的は意味で言えば失ってはいなかった。

だが、凍夜を放ったことにより、義眼諸共に霊体までもが消え失せた。この身のこの右眼は永久に失われてしまったのだ……

「馬鹿か？ そいつの所為で大事なものに傷がついたんだ、なら取る行動は一つだろうが」

即ち報復……まだ、存在しているとは言え、凍夜の影響で最早ただの魔法体と化した彼に残された時間はそう多くはないというのに

……
多少の痛みはあるものの直ぐに修復されてしまうので傷自体に意味はない。

しかし、修復するには体に残された僅かな魔力を消費しなければならぬ。その分、ガイスラスの消え去る時間は早まる。また、攻撃にしても同じこと。より多くの魔力を消費する程にその存在は消滅へと近づく。

そうと分かっても、止まらぬ元神ガイスラス……

いずれ消えると分かってもそれを一刻でも早めんと、満身創痍の心身を振り絞る凍夜……

二人の戦いは、最初の頃の様な苛烈さと優雅さを微塵も感じさせぬ程に、戦いの程度としては見劣りするものへとなっている。

だが、それでもここにいる誰一人として、立ち入れる気がしない。詠歌や誠吾のみならず神堊までもがである。

覚悟・意志・本能・感情の応酬は見た目以上に見るものに戦闘の凄まじさを印象づけさせている。

だが、次第に状況に変化が現れ始めた。

凍夜の手数が減り始め、回避もままならぬようになってきたのだ。

(くそっ!!! 体が……)

魂と肉体の連動性が徐々に悪くなって来ているのだ。目覚めが近い……

彼ならば、ただの魔法体であるこの者を一瞬のうちに屠り去る術を持っている。このまま体を明け渡してしまえば、本来それが誰にとっても良いのだというのは分かっている。恐らく彼も自分にこれ以上のことなど望んではいない筈なのだから。

これ以上この体は傷つくことなく、彼を想う誰をも悲しませることもなくなるというのに、今の自分にはそれが許容出来なかった。

ガイスラスの言ったとおりこの戦いに意味はない。ただあるのは、個人的な価値だけだ。

そして、この戦いはそのまま終わらさなければならぬ。余分な意味など持たせぬうちに……

『良く聞け』

内側より直接思考に介入された声が響く。

(何だっ！！)

こうして彼と語れる程に今の自分たちの距離は縮まっている。もう入れ分かるのは時間の問題だ。

「はっ？」

突如この場に相応しくない素っ頓狂な声が上がった。

その好きを逃さず、ガイスラスの剣が凍夜を捉えた。

「くそっ」

月御衣つきみいぬのお陰で胸が真つ二つという事態は免れたが、打撃の威力によって内部が破壊されてしまった。

「どうした？ らしくもない、つまらんミスをしたものだな」

「……るせ〜」

何があつたのかは分からないが、状況がかなりこちらに向いたのは確かだ。勝利の美学というものは持ち合わせてはいない。あるとすれば、己のその手で相手を倒すというその一点に尽きる。

よってガイスラスに手を休める理由はなく、寧ろ畳み掛けるかの如き猛攻へとうつつる。

その猛攻に反撃の余地はなく、凍夜は防戦一方へと追いやられた。しかし、それでも流石というべきか防御に徹した凍夜にそれ以上の追撃は通らない。

だが、この状況も長く続かないというのは誰にでも分かる。凍夜が押し切られるのは時間の問題だと誰しもが思っていた。

「うるせ〜、うるせ〜、うるせ〜」

叫びと共に、左手の銃をかなぐり捨てて一歩踏み込む。その一歩は、今までの速度に馴れた目では追いきれない速度を生み、ガイスラスの胸に一撃を入れて通り過ぎた。

「てめ〜はごちゃごちゃと好き勝手なこと言いやがって……」

ああ、分かったよ。見せてやるよ。俺の戦いをよっ」

夜が薄れ始めて陽が元の明るさを取り戻して行く。だが、それは完全にではなく、虫が食ったかの様な模様を作り出した。

夜の多く残る部分で空の明けたところからは、光の柱が立ち。逆に青空が多く覗く所で陰る部分からは、影の柱が立つという、自然現象ではあり得ることのない光景を作り出す。

「何やら随分と雰囲気が変わったものだな」

「認めたのさ。自分の矛盾なる心を有り様をな……………」

質問に応えているのか、単なる独白なのか凍夜は淡々と語る。

「人間つてのは、不完全で歪で…………その癖完全であることを求めて、求めてる癖にいつでも正しくはあれなくて…………」

咎に対する制裁のみを望んだ。らしさを全て捨て去ろうとした。

「大切なのに憎くて、殺したいと思っても愛おしい、裁かれないのに救いたい……………矛盾する心と感情、相反する理性と心理、混沌だらけの心緒と思考を同時に抱えて、それでも尚生きている。それこそが人間だってな」

「次がラストだ。この攻撃を耐え切ったらアンタの勝ちだ」

刀を突き立てて宣言する。

「実のところこの体は俺のものじゃない、そしてその活動限界も近い。次の攻撃で俺は、その全てを費やす。攻撃が止まるのは俺の人格が消えるときだ。そのとき、この体は無防備となる。そうなたらここを狙え」

自分の右胸を指し示す。

「頭や心臓じゃ意味がない。殺すつもりならここを狙え」

「何故それを？ 貴様の体ではないというのなら、尚のこと弱点は伏せるものだろう」

「言った筈だ。大切でも憎いものだってあるんだよ。じゃ、行くぜっ……」

《BIGM：凜として咲く花の如く／紅色リトマス》

『無限刀舞』

銃を捨てて空いた左手にもう一つの獲物を握り、双刀を携えて突進する。

突撃の勢いで防御を弾き、無防備にさせた。

今のガイスラスには凍夜のこの渾身の攻撃を防ぐだけの余力はなく、彼の言った通りに耐える他ない。

意識がある内に、ガイスラスの体を維持する魔力を全て削り取れば凍夜の勝ち。耐えきり反撃出来ればガイスラスの勝ちだ。

名に相応しく途切れることのない連撃が叩き込まれる。しかし、実際に無限であることはない。

初撃から約十秒、凍夜の顔に苦悶の表情が色濃く見える。相変わらず絶え間はないが、秒毎に手数が衰えて行くのを止めることは出来ない。

身動きは封じられているが、痛みがない分思考に余裕のあるガイスラスはそのことを冷静に把握し虎視眈々と狙いを定める。

もし、勢いが衰えたならば彼が止まるよりも早く、反撃に転じるつもりだ。

そうでなければ、それは仮に勝っても価値がない。自分が勝ちたいのはこの者であって、元の人格がどうのと言った話は関係ないのだ。

……二十秒……三十秒……

徐々にではあるが、だが確実に手数が減ってきている。

ガイスラスは凍夜の攻撃が止まる前に、渾身の力でそれを押し返す。そして、両手に携えた剣が砕けた。

「くそっ!!」

止められた凍夜に再び動き出すだけの力は気力は残されていない。

「我の………負けだ………」

最早魔術を施行するだけの魔力が残されてはならず、ただ後数刻体を維持するのが限度だった。

「消える前に訊いて置こう、貴様名は？」

「紫司……と、いや……」

紫司凍夜と名乗り掛けて言葉を切った。

今の自分がそうであるということとは間違いない。何よりそう名乗るのは義務でもある。

だが、この者を相手にその名を名乗るのは無粋だと感じた。

「たちもり……こつ」

最も馴染み深く心に刻まれた、そして憎らしい……今の自分に最も相応しい名を名乗った。

果たしてその声は最後まで聞けたのかどうか、ガイスラスは名乗る間にその姿を消していた。

67・人である故に……（後書き）

次から、学園話に持って行きます

章は一応三章のまま……

まさかこんなに長くなってしまつとは全くの予想外……

でもまだまだ終わらない、章の区切りとしては後二編書くつもりなので、ホントにアンバランス

感想とか頂けると非常に励みになります

執筆もペースアップするかも知れないので、宜しく願います

沙樹は先程教室で感じた違和感の正体にここに来て漸く思い至ることが出来た。

この場に集まる内の五人が初対面であるということを考えて、後々訊いてみようと思うところだったが、いつの間にか声は我知らずに漏れ出していた様で、皆が何事か？ と視線を沙樹に向けていた。

「どうしたの中島？」

「えっ！？ いや……その……なんでもないよ」

麻里奈に問われて始めてその状況に気付きバツが悪く言葉を濁す。「ああ、これですか」

しかし、その沙樹を見て 正確には、惚けている状態の沙樹の視線と彼女の反応と性格を考慮して、その意味するところを凍夜は正確に読み取り、視線の的であった箸を持った右手を軽く振って見せる。

花見に来た一行は場所を確保して昼食を取り始めたばかりだった。凍夜の弁当に対して少々思うところのある沙樹は、何気なく凍夜の弁当に視線を向けていた。そのとき視界に映る弁当の中身を箸で摘む凍夜の右手、その“何の変哲もない右手”こそが教室で沙樹が感じた違和感の正体だった。

「そう言えば、中島さんには直接お話したことなかったですよね？ 知ってますか？」

「ん……一年の時に、何だか色んな噂があったのは知ってるけど、詳しいことはね……」

凍夜との付き合いがこのメンバーの中で言えば古株であり、そして彼女より長く時を過ごし親密でろう筈の二人ですら知ることない中学時代のこと知る沙樹。

「半場さんや真殿くんあたりからとかは………ないな」

だがその実、中学時代のメンバーで言えば三年の時にグループに加わった新参者（？）である。

更に、一・二年時には関わることもない関わってはならないと、意図的に接触は勿論のこと情報も絶っていた。それが三年のある日を境に激しく悔やまれることになるなど露知らず……

それ故に沙樹は『七不思議』の正体（凍夜が暴露したことの真相）を知らぬものが多い。

「まあね」

そこで二人で同時にクスリと笑い合う。

（お兄様が楽しそうにしていらっしやるというのに………何故………？）

スツキリしない………、そんな二人を見て小夜は今までに感じたことのない妙な胸のつかえを感じ、それを少しでも払拭しようと弁当を食べるために適度に空けられた凍夜との距離を正座したまま、拳一つ入るかどうかという距離までにじり寄る。

「ちよつとなんなの？ 二人だけで楽しいそうにしてさ、アタシらにも教えてよ」

小夜の行動は麻里奈のお陰で誰に知れることもなく行われた。

「仕方ありませんわ、麻里奈さん………沙樹さんとお話になられてるお兄様は、私のことすら気遣ってはくれませんもの………」

つと、少し態わざとらしく寂しげな表情をしてみせる。勿論、態度こそ態とであれ大いに本気である。麻里奈の関係は先の一件で随分と進展しているようだ。

表面的な言葉のみを聞けば自己中心的で傲慢な発言だが、小夜という人物を鑑みるにその意図は感じられないし、当然小夜自身もそのつもりはない。

凍夜が小夜を大事にしているのは、知り合ったばかりの沙樹や麻里奈にも一目瞭然で分かる程に、誰の目にも明らかである。

それ程の好意を受けている本人である小夜が、それを感じていない訳がない。万が一それを無自覚でいるならそれはそのことの方が

罪であり、そしてそれを当たり前であるなど思っているならばそれこそ愚者であると、小夜はそれを重く受け止めている。

「ふふっ……小夜は案外嫉妬深いんだね。それは知らなかったな」
凍夜はからかう様にさらりと言つてのけて、小夜の一瞬にして顔を真っ赤に染め上げた。

羞恥心、そして凍夜よつて嫉妬という指摘されることによつて更に複雑に渦巻く感情が、涙を誘発させるのには十分だった。

「ごめんね。そうやって普段見られない表情がとっても可愛いからつい悪戯したくなちゃった」

「お兄様の……意地悪……」

そんなことを平然と言つてのける兄に対して、妹ですら面と向かつて顔を合わせる事が出来ず、隣に座る兄の服の袖を摘んで、俯き加減にそう返すのがやつとだ。

「嫌いになちゃった？」

俯く小夜の頭を撫でながら、先程謝つたばかりだと言うのに、舌の根の乾かぬうちにこれでもかということを言ってくる。

嫌いになれるわけがない。嫌いになることなどありえない。

そんなことを訊かれたら、全力で否定して大好きだと“告げねばならない”ではないか……

「お兄様……それ以上はいくら私とて本気で怒りますわよっ!!」
そんな分かりきつたことを訊く凍夜に、遂に（色々と）限界を迎えた小夜が珍しく強きな態度で挑む。

「もう知りませんっ!!」

つと、凍夜から顔を背ける。だが、それも睦み合いの一つとして、凍夜が少しだけ必死に小夜を宥める。

そんなコテコテの漫画の展開を誰もが予想し、この兄妹の溺愛振りにつんざりする。

だが、彼らの予想はこの二人を前にしてそれでもまだあまいのだと思ひ知らされる。

「私が、例え冗談でもお兄様に嫌いなんて言葉が言えないことくら

い、ご存知な癖に……」

今日のお兄様は本当に意地悪……、そうは思っても、どれ程意地の悪い質問であろうと、凍夜から想いを測る様なことを言われては小夜にそれを応えないという道はないのだった。

「うん、そうだね」

小夜のその言葉を当然として受け止めるあたり最早流石としか言いようがない。

流石としか言いようがない。が、そこに敬意を込められるかと問われればこの場にいる誰もがNoと答えると断言出来る。

それ以上二人のじゃれ合いを見せ付けられるのは、健全な高校生には目の毒だ。

止める、というよりも消えろつと言ってしまったいたい衝動を誰もがグツと堪え、先程までは目の当たりにした二人の姿の所為で失せてしまった食欲を、無理矢理奮い立たせる様に各自中断していた食事を再開し始めた。

「それでは、本題に入らせて頂きましょうか」

当然お腹が空いて来たから食事をしようと思っただけで、食べ始めれば胃が思い出した様に空腹を訴え、沙樹の妙な反応で中断されて、凍夜と小夜の所為で更に脱線していた皆の食事が漸く再会された。

その間に沙樹の反応の原因である凍夜の右手についての話、そしてお弁当から発展して『お嫁さんにした男の子』など大いに盛り上がり、皆が食べ終わったところで漸く副生徒会長の二人、清水と草尾の本題へと入ることとなった。

「申し訳ありませんけど、お断りさせて頂きます」

凍夜が膠にくも無く即答し、小夜と神堊も同意する。最も、小夜の場合には凍夜の意志に関わらずこのときの凍夜の意見に賛同したまでであり、神堊の場合はそれとは逆に凍夜の意見に関わらず彼の意志に従ったまでという違いがあったわけだが……

「何か特別な理由でも？」

「質問を質問で返して申し訳ないのですが、逆に問わせて頂きます。何故僕らを？」

「心当たりはあるかと？」

香里は凍夜の質問にもはつきりとは答えず問うように返す。

「僕個人に関しては、まあなんとなくの察しはつきます。ですが、何故彼女たちまで？」

「端的に言ってしまうえば、小夜さんと蒼縁さんは凍夜さんをお誘いするそのついで……という言い方では語弊があるのですが、そうですね……」

お二人の場合は我々のあわよくばという程度の願望といったところですよ

「成る程。飽くまでも今回のターゲットは僕ということですか」

「ええ。貴方に生徒会に入って貰うこと、それが貴方の平穏な学校生活への近道であり、延いては学校の平和であると私たちは考えています」

自身にある問題点は把握しているつもりだ。それに伴う周囲への影響も大凡の予測はついている。

だが、それと生徒会への入会というのは凍夜の中ではどうしても繋がらない。

確かに生徒会という組織は、個々の意識差はあるだろうが一般生徒から多少なりとも敬いの対象として見られるものだ。だがそれは選挙という生徒の総意を繁栄させた結果である。

その総意を居られぬ者の果たしてその恩恵はあるのか？

否、そもそも話選挙の時点で対象外なのではないのだろうか？
思うことは多々あるが、それを彼女らに問う前に香里の方からその話を振ってくる。流石にそのあたりのことは織り込み済みということだろう。

「皆さんはご存知ないことだと思いますが、国立魔法科の生徒会という組織は他校のそれとは若干趣が違います」

彼女は、『国立魔法科』と言った。それは正しくその通りで、常盤校が特別というわけではないというのは勿論のこと、育成課全校のみならず各法術高専校をも含めた国立の魔法科ということだ。

「まあ、実際のところ“学校側”としては通常の組織なので、本来なら何ら特別なことはないのですが、国立魔法科のその教育スタイルが“生徒側”にそうさせているという状態です。

ですので、これは入学して初めて分かることであり、暗黙の了解ということでは他言無用でお願いしますね」

「それで、その特異な趣というのはどういったものでしょうか？」生徒会或いはそれに連なる者たちに対する一般的なイメージと言えば、成績優秀・品行方正などが多く挙げられる。そして、同じ生徒としての立場に在りながらに、一般生徒とは一線を画す存在へと昇華されて認識される場合もある。

またイメージだけに囚われず、実際に生徒会という組織に相当範囲の権限を与えている学校もある。

国立魔法科の生徒会という組織には流石にそう言った特別なまでの権限はない。そう、普通の……飽くまでも極々普通の生徒会である。 筈だった……

「まあ、端的に言えば『雑用係』だな。

ウチの学校は……というか、国立の魔法科は高等学校とは名ばかりの魔法師養成機関だ。そもそもって、生徒には（国立）普通科と同等の一般教養と一般私立以上の魔導水準を求められるっていう実に生徒泣かせのな。

うまい餌で誘っておいて、この仕打ちだ。それが公的機関として通ってるんだから悪の秘密結社もびっくりだぜ」

毅は実感の籠もった実に嫌そうな声で語る。

そのままぶつくさと別のことを語り出したので、香里が話を引き継いだ。

「まあそんな感じで生徒は公は勿論、私の時間のその多くを勉強に費やすことになります（苦笑）」

それに、国立と言えど有名大学への進学や大企業への就職はそれ程容易ではありません。

学校としては成績上位者から推すわけですから、その競争は更に激化することになります。そうなると学業外のこととは出来うる限り関わりたくないというのは最早必然です」

「成る程、つまりはそれを自分たちの代わりにやってくれる生徒会という組織は彼らにとっては都合のいい集団ということですか」

「その通り。生徒会役員に何かあればその代償として、自分たちの誰かがその穴埋めをしなければならぬ。それが別の誰かなら構わないが、万が一にも自分であつたなら困る。」

「という思いと、自分たちの代わりを担ってくれているのだからという負い目から、生徒会は生徒からは優遇されている。という訳です」

その都合、生徒会選挙というのは実質的に無いに等しく、立候補者が出た場合には即座決定といつてもいい。………最も、その立候補者という者が基本的には現れず擦り付け選挙なるもので行われるらしいとのこと……

「まあそういうことですから、凍夜さんが生徒会に入って頂けるといふのであれば、それに異論を挟む者はありませんし、凍夜さんに対する不平がある程度抑止出来るのではないかと……と、お誘いしている訳です。」

これは貴方に対しての擁護対策であると同時に、全校生徒のに対する処置対策であるともご理解下さい。

こう言つては何ですが貴方一人のために、他の生徒たちに短い学校生活の貴重な時間をつまらないものにして欲しくはありませんから」

流石にその物言いには小夜を始めクラスメイトたちも反感を感じ得ずには居られなかった。

「あつ………！ お兄様………」

だが、それを凍夜自身が即座に諫めた。

「清水先輩は生徒会には立候補した口ですか？」

「ええそうですね。良く分かりましたね？」

確かに香里の物言いは褒められたものではないかもしれない。だがしかし、それは香里の全校生徒へ対する真摯さの現れでもある。

自分に対することなど元々気にする性分ではないので、彼女に対する印象が悪化することはない。

然もその逆に、その真摯な感じ取った凍夜は快く感じ、またはつきりといいきった彼女に頼もしさも感じていた。

頼もしい反面、それはこの場合に置いては厄介でもあった。

凍夜としては受けるつもりは毛頭ないが、彼女の説得はなかなか執拗で、ある意味魅力的とも思えた程だ。

三十分以上の問答の末どうにか一つの決着を見た。

「それで、生徒会に入っていたかどうかという私たちの意見以外に、どんな妙案が？」

凍夜………否、詠歌とてあんな紹介の仕方をして万事上手く行くなどとは思っていない。

否、更に言えば、詠歌にしてみれば、その反応も全て含めた上で成功への道だと言っているいかもしれない。

何せ凍夜はその対策としての法案をもう既に今朝の段階から詠歌より賜っていたのだから。

「そうですね。取り敢えず、来月の校内戦で無差別級優勝つてことで」

く 厄災・地編く 68 ・宣戦布告？（後書き）

感想は切実に求めています

執筆意欲にも大いに関わってくるので、宜しくお願い致します

69・名が示すもの（前書き）

歌詞掲載についての注意があったので一部内容を変更した箇所があります

内容自体に大きな変化はあしません

69・名が示すもの

魔法学校に在籍する者のみならず、普通科の学徒や一般社会人にも大いに注目を集める魔法界としての、学校イベントが存在する。

それが、『武闘祭』と『競技祭』だ。

優良企業のバツクを元に大々的に催されるそれらは、国内でも有数の集客力を誇るものとなっている。

スポンサー企業を始めその他多くの企業や団体は勿論のこと、一般人にとっても毎年欠かすことの出来ない恒例行事だ。

プロ選手の競技よりも、学徒たちの競技の方が客が賑わうというのは、往々にある話だ。

学徒という立場ならではの懸命さ、未熟であるが故に御しきれない感情、それらはその場その時であるからこそ生まれるもの故に、決して故意に作り上げることが出来る代物でない。故に人々はそれに感動を覚えるのだ。

勿論、これはプロの試合がシーズンという長い期間に行われるのに対して、局所的なイベントというお披露目の場であるということも大いに関わってくるものなので、一概にどちらが人気かということの指標にはならない。

しかし、そこに込められる想いの多様さは歴然と言えるかも知れない。魔法科系高校・大学の全校がその参加資格を有するこれらの大会は、大会に連なる企業や団体の目論見もさることながら、出場する学徒個々の思惑も実に様々である。

プロの競技とは即ちそれこそが成果であり、それそのものに意味がある。しかし、学徒たちにとってはこれらは人生の通過点の一つに過ぎない。彼らにとっての真の目標はその先にあるのだ。

『未来への切符』、人生のウチでその時その場だけでしか手に入ることが出来ないかも知れない可能性への権利。まだ何者でもない彼らは、まだ何者にもなれるということでもある。

その権利を掴むべく、彼ら学徒たちは日々精進しより良き自分の未来を切り開くべく励んでいる。

その成果の一つの指標として代表候補選抜戦、別名を校内ランキング戦、通称『校内戦』が国立魔法科では毎月行われている（各私立もほぼ全校が同じである）。

この代表候補選抜戦というのは、その別称が指す言葉の通りに順位付けである。但し、誰かが評価した結果ではない。対戦の結果という至極単純かつ明瞭なる結果だ。

対戦という言葉の通り、校内戦は戦闘によって決着が付けられる。戦闘というのは全ての基本と応用、その総合力の実践の場である。如何に卓上では優秀な成績を収めていても、実践でそれを披露出来なければ意味がない。授業の様にそのためだけに十分な時間を与えられた状況で実行出来ても、非常時に何も出来ないのであればいざという時には使えない。戦闘というのは、それらを見極めるのに非常に有効な手段なのだ。

魔法に関わる企業は例え事務方や研究職の者であろうとも、非常時には魔法の使用を余儀なくされる場合が想定されている。

そのために、この時の成績というものには非常に大きな意味を持つ。

そして、何よりこの校内戦の重要な点はその正式名称が指し示す通り、そして通称が『ランキング戦』ではなく、『校内戦』であるという通りに、『校外戦』即ち『武闘祭』・『競技祭』への代表候補者の選抜が掛かっている。

勿論、ランキングが上位なら学業成績は無関係ということはない。しかし、進路によってそういったところも大いにある。校内戦ではその道を進むと決めている者たちが大いに張り切るために、代表とは無縁と言える者たちでも普段の実習よりも更に盛り上がりも見せることとなるだ。

だが、それとは別にこの常盤校舎には伝説がある。否、数ヶ月前

にある者によって打ち立てられた。
それ故に、今の二年・三年の士気は非常に高い状態にある。

凍夜の話聞いて香里はゾツとした。そして、ここが学校内でないというところに心底安心した。

香里は寄りにもよってこの年のこの十二校に、“この様な存在”が入って来たことをどこの悪魔の采配なのかと恨みたくなった。

「元来僕は戦闘は得意というわけではないのですが、それくらいのことをしてしないと、皆さんからは認めて頂けないでしょうからね（苦笑）」

「良く言う。仮にも戦神せんしんの名を馳せる貴方が闘うことが苦手だなんてことはないでしょう？」

「苦手では有りませんよ。好きでないですけど……ただ得意では無いというだけです。」

僕のこの眼は人を“倒す”ということには向いてはいませんか？
その台詞に香里がいち早く反応を示した。

「ちよつ！！ ちよつと待って下さいっ！！ 紫司さん、まさかその眼を

「いやいや、流石にそれはありませんよ」

「しゝみゝずゝ、いくら何でもそんなことあり得ないだろ？ 常識的に考えて」

「そうですね……アハハハ……」

「っていうか、“アレ”は使えますか？ “魔法”は使えないのには？」

「正確には魔法が使えないわけではありません。魔術という方法による施行が出来ないというだけです。活性器官イスクに異常があつて活性化が出来ないためにね。

それに、往々にして良くあるこのなのですが、霊障は本来とは別

系統の独自の魔導器官を形成してしまうんです。この眼も同じです。ですから、“凍夜”の発動は可能というわけですよ。

でなければ、僕はもうとつくに“紫司凍夜”ではなくなっています”

凍夜の口調は軽かったが、その台詞に場の空気は一気に重みを増す。そう、紫司凍夜という名は“紫眼”という紫司の誇る才能、凍夜という日本最強の魔法を駆使する者に与えられる名なのであって、只の紫色の瞳をした者に与えられる名ではない。

つまり、その名を冠する彼は未だにその能力は健在であるということを確認していると言える。そしてこの話題に触れるということとは、逆にこの目の前に居る人物が“凍夜”ではなかったら？ ということを暗に言っている様なものでもある。

それは最早、不敬などというレベルではなく最早存在の否定だ。故に普通ならそれに触れられよう筈もないことで、皆が気を重くするのにも当然なのだった。

だが、それは普通ならという話。ここにはその普通でない人物がいる。

「本当に、シツカちゃんがシツカちゃんのまままで良かったわっ！ 別の名字だと、こっちはいかないものね（笑）」

そう、当人たるその凍夜が普通ではない。そして、それを知りまた同時に皆の気持ちも理解出来る沙樹がこの場にいた。

「別に、中島さんに喜んで貰うためにそうであるわけではありませんんけどね。それに、そう呼ぶのは中島さんだけです」

「そーお？ 可愛い呼び名だと思うんだけど、何でみんな呼ばないんだろ？」

沙樹はこの話題を既に中学のときに経験済みだった。

「男にちゃん付けしても気持ち悪いだけです。普通の感性の人なら、まず呼びませんよ」

「うーん……それつまり、あたしの感性が普通じゃないと、そう仰りたいのかしらシツカちゃん？」

凍夜がこの手のことを心底どうでもいいと思っ
ていることを、中学時代に散々思い知らされた経験を生かし、沙樹は皆の回復を図るためにどうでもいいような会話を凍夜と繰り広げる。

そんな沙樹の心遣いに感謝しつつ、それに合わせて応えていたのだが、どうやら自分は彼女の何かのスイッチを押してしまったらしいことに、彼女の顔に溢れる『営業スマイル100%』を見て気づかされた。

こういうときの彼女は危険である。っと、経験が告げている。

中学時代は、友人たちと共に”年に相応しくない”馬鹿なことも幾つかやって来た経験がある。

集団心理というものは恐ろしい……一人では絶対にやらない様なことでも、複数人で集まれば喻え馬鹿げたことだと分かっているも出来てしまう。凍夜はそれを、身をもって体験したのだ。

そして、沙樹はその事を知ってる。それはある意味非常に恐ろしいことであった。

沙樹のお陰である程度弛緩させることに成功されたことにより、各自は自由を取り戻した。

生徒会の話も本題は既に終えているので、香里も毅も再度そのことと話題に挙げることはなく、皆は折角の花見を堪能しながら、また思い思いの話題に華を咲かせていた。

彼女が目を覚ましたときに見たものはいつもの見慣れた自分の部屋ではなかった。

しかし、知らぬ部屋という訳でもなくその純和風の部屋がどこであるかを目覚めたその瞬間からですら理解し、そしてその経緯は分かつともつつすらと自分の置かれている状況というものが理解出来た。

自分ではここ数年踏み入ったことのない、しかし紛う事なき“自分の部屋”だった。

部屋に籠もっていても仕方がないので、用意してあった服へと袖を通し取り敢えずは“家の者”へと声を掛けるために部屋を出る。

特定多数いる内の目的の一人が部屋を出るなり直ぐに見つかり、詰め寄りたい気持ちをグツと堪えて先ずは挨拶から声を掛ける。

「おはようございます。涼夏りょうか姉様」

彼女にしては少し冷たさを感じる堅い声色だったが、それでも今の状況を考えるならば、寧ろ上出来と言えるレベルだ。そのためではないが、声を掛けられた女性は少し驚きを示した。が、直ぐに柔らかい笑みを浮かべ挨拶を返す。

『姉様』とその呼称が示す通りにこの二人が姉妹ということはない。だが、かなり遠縁ではあるが親族だというのは確かな事実としてある。四大柱の使用人は全て縁衆の出自なのだ。

「おはようございます、お嬢様。御加減は如何ですか？」

彼女がこの家に訪れたとき　正しくは、担ぎ込まれたときには既に気を失った状態であった。最もことの細部は兎も角、詠歌から大事があつたわけでないことは聞かされているので、そこまで深刻に捉えての質問ではない。

とは言え、彼女たちの間柄は血縁やら雇用主云々の話は別にして

主従関係にある。そこは社交辞令としても訊いて置かねばなるまい……………最も彼女は、社交辞令というには些か以上に心遣いをしているわけだが、それはこの場合問われた当人には意味をなしていなかった。

「問題ありません。お兄様はこちらに居られるのですか？」

「いえ、残念ながらこちらには……………」

予期された質問。しかしだからと言って、都合の良い答えを用意出来る内容ではなく、有りの儘の事実を告げた。

「体調がよろしいようでしたら、お食事を取って下さい。お嬢様のために、奥様が張り切っていらつしやいました」

奥様という言葉の響きに、今までとは少し異質の緊張が走る。奥様とは即ち、紫司現頭首の第一妻の須美^{すみ}である。

「凍夜様のことも含めて、奥様からお話があると思いますので、先ずは春日の間へどうぞ」

「気に入らなかつたかしら？」

食事の後片付けまでを終えた須美が、緑茶を差し出す祭に浮かぬ表情の彼女にそう声を掛けた。

「いえっ！！ そんなことはありませんっ。とてもおいしかったです」

「そう。それならいいのだけれど……………あなた達が出て行ってしまつてから、自分で作ることも殆どなくなつてしまつて、お料理なんて久々なものだから味に自信が持て無くつて」

勿論これは責めているわけではない。しかし、そう言つて眉を曇らせる目の前の女性の顔を見て罪悪感がより一層強くなる。

須美は優しい女性^{じゆうせい}だった。

須美からしてみれば、二人は夫の子供ではあつても赤の他人ではない。しかし、それでも紫司の本邸に引き取られたその日から、

実の母の様に優しく接し時に厳しく躰けてくれた。ともすれば、魔法医療師という仕事をしていた実母よりも、より母親らしく傍らに居てくれた。

そんな彼女を悲しませたいわけではない。そんなことなど、有ろう筈がない。だが、こればかりは譲れなかった。

「本当に、本当にとてもおいしかったです。私も、お兄様と二人で暮らし始めて、お料理を作るようになって………それで、初めて分かったんです。

母上の作って下さっていたお料理にどれだけ手間暇が掛けられていたか、どれだけ私たちを大切にしてくれていたのか………です。から………本当にごめんなさい………我が儘ばかりで、ごめんなさい」

だからせめて、言葉では語り尽くせなくても、有りつ丈の想いを込めて言葉にした。

「違うのよ。勘違いしないでね………」

須美はそういつて愛しい娘の頭をそのかいなにそっと抱く。

「確かにあなた達が居なくなってしまうって私は寂しさを感じているわ。でもね、それは別に悲しいわけではないの。ん〜うん、それどころかそれはとても喜ばしいことなの。

だってそれはあなた達が、自分で悩み考えて決めて行動したということ何だもの。親はね、子供の成長が何よりも嬉しいものなの。だから、いいのよ。あなた達のしていることは間違いではないの、自分を責めないで。

ただ、ちよつとその成長が私の思っていたよりも早かっただけ………。私が、あなた達を送り出す心の準備が出来る前にあなた達方が先に巣立ちの準備を迎えてしまった。ただそれだけの話よ」

血の繋がりは無い、しかしそれでも須美は確かに自分にとっての母であると、彼女から伝わる暖かさを感じながらその想いを更に強くした。

そして、須美が放った言葉が自分だけに向いたものではないとい

うのも理解している。

須美にとつては、『お兄様』も同様に我が子なのだ。

彼女が、彼の出自を知っているのか知らないのか、それを自分は知らない。しかし、それでも彼女は彼の母親足ろうとした。たった一年程度の付き合いしかなかった筈の彼を……

凍夜が死んだことで、その身代わりを彼に求めたわけではない。彼を有りの儘に彼として受け入れたのだ。それ故に小夜は須美に対して母としてでだけでなく、人としても強い尊敬の念を抱いている。彼女だけは真に信用に値する人であると……

「さてと、それじゃ、そろそろキョウウくんのこともお話しないとね」
暫くそうした後、須美が切り出した。

「はい」
母と慕ってしるつもりではいたが、時間の経過はそれだけで隔たりを生むものだ。血縁の者であつてもそうなのだから、特異な彼女たちの関係ともなれば尚更だろう。

普通に接しようとして、逆にぎこちなさを強めてしまう。食事のときはそんな二人だった。しかし、今はそんな様子など微塵も感じられぬほどにお互いが自然に向き合っていた。

「キョウくんは今蒼縁様の施設に居るわ」
小夜はそれにはいつと頷き続きを促す。この家に居ないと言われるときにそれは予想出来たことだ。

「命に別状はないらしいの、特に酷い怪我とか、そういうことではないらしいの……でも……」

須美の表情は曇り言いよどむ。

「暫くは施設から出られないらしいの」
どうしてかと問いただいたいが、相手が違う。須美に迫っても意味はない。

無意味と分かっていることよりも少しでも展望が開ける可能性を模索する。

「お会いしに行くことは？」

首は横に振られた。

「その他には？」

「ごめんなさい。私はそれだけしか知らないの。でも、キヨウくんからの伝言をエイちゃん伝えて預かってるわ。」

『暫く寂しい想いをさせてごめん』って、それと、『それまで待つててね、妃依里ちゃん』だって

暫くとはいえ凍夜に会うことすらも出来ない。それは彼女にとつては苦痛としか言えない状況だった。

暫くとはいつまで？ どうして私には何も知らされないの？ お兄様は本当に無事なの？

想うことはいくつもある。だがしかしこれだけは確かだと言えるものがある。

（お兄様が私を意味もなく苦しめる筈がない）

それが彼女の中の絶対の真実。ならば今の状況には意味がある。少なくとも、これ以上の悲しみを自分に与えるためではないという確信。絶対的な危機を回避するための最上の選択であると納得する。「それと、私当てにも言伝があるの。『少しの間ですが、お世話になります』だって。」

もうあの子ったら、母上とは呼んでくれてても、そうは感じてくれていなかったのね。他人行儀にお願いだなんて

少し寂しそうな顔になる須美。だが、それも一瞬で別の表情に塗り替えられた。

「でも、あなたのことをお願いしますって、もうあの子にとってあなたは本当に妹なのね」

喜びに満ちあふれた笑顔で紡がれたその言葉に、小夜の心は熱いほどの熱を感じた。

70・絆（後書き）

読者様には関係ありませんが、ちょっとネームを変更しました。
キーワードにちよつとネタバレあり。

ここからは、無駄話。ネタバレあり。

この物語、『こんなラストシーンが書きたい』と思って書き始めました。

始めはこんな長くなる予定はなかったのですが、設定を作っている内に物語りも長編に……………

設定に懲りすぎてしまったというのが反省点。でも、ラストにはどうしても必要な設定だったんです。

物語のラストを輝かせるのは、作品の思い入れだと考えます。

作品の質は当然のこと、時間というものも必要な要素だと僕は思います。作品としての時間軸だけでなく、現実の時間軸に置いても。

そのために、長編でつて思ったわけです。

でも、大誤算発生！！

書き始めはよかったのですが……………執筆ペースが亀……………

しかも、ラストを決めてそれに向かって書き始めた状況だから、脳内では完結済み……………

世に出せば、多少は人に見られるだろうから、他人から見られることで頑張れるかなっと思っところしてネットで書き始めたわけですが、それがどうにも……………

完結しているが故に逆に、それを文字におこしていくという作業が面倒に……………駄目人間でごめんなさい。

主人公もまだ主人公として完全ではないし（ある意味まだ主人公が登場してないレベル）、主人公にとってのヒロインも出て来てない。

主人公を特殊な設定にし過ぎて、非常に書き辛い………適当にテンポ良く書いてくと色々隠していることがポロツと出て来て明け透けな状態になって、物語の深みがなくなる（まあ、読者から見てもそれが感じられるのかは疑問ですがね）

最後のネタバレ時の主人公をこれでもかというくらいに、残酷な状態に持つて行く必要があるので、まあ出来るだけ頑張ります。

途中から、世界観がガラツと分かりますが、ラストはハッピーエンド。っとなるわけですが、はてさてそれはいつのことやら………感想などがあれば、本当に励みになりますので、宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2162/>

優しい月のトリニティクロス ~ My dear elder brother ~

2011年9月30日03時24分発行